大阪府埋蔵文化財調査報告2004－1

招提中町遺跡・Ⅱ

２００５年３月

大阪府教育委員会

招提中町遺跡・Ⅱ

２００５年３月

大阪府教育委員会

はじめに

招提中町遺跡は枚方市東牧野町に所在します。枚方市は、大阪の北東部に位置し、古くから淀川の水運を利用し発展してきた町です。

本遺跡は、枚方台地を流れる穂谷川の下流域の右岸側にあります。

府営住宅建て替えに伴う本格的な発掘調査は、平成10年から始まりました。最初の発掘調査では、弥生時代中期の方形周溝墓や円形竪穴住居、古墳時代初頭と終末頃の方形竪穴住居、平安時代の掘立柱建物などの住居址が見つかりました。

今回の調査では、弥生時代の方形周溝墓の広がりが途絶え、円形竪穴住居と穂谷川に向かって流れている自然流路が見つかりました。また、古墳時代初頭と平安時代の住居址の続きが確認されました。この二つの時代の集落はかなりの範囲で広がっていたことがわかりました。

これらの成果はこの地域の歴史的な流れを考える上で貴重な資料を提供したといえるでしょう。

最後になりましたが、調査にあたっては地元住民の皆様をはじめ関係各位に深く感謝するとともに、今後とも文化財保護行政に関して一層のご理解とご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

平成17年３月

大阪府教育委員会事務局
文化財保護課長　向井正博

例　　言

1．本書は、府営牧野東住宅建て替え工事に伴い大阪府教育委員会が実施した、枚方市東牧野町に所在する招提中町遺跡発掘調査報告・Ⅱである。

2．本調査は、大阪府建築都市部住宅整備課から依頼を受け、大阪府教育委員会が実施した。平成14年度は、文化財保護課調査第一グループ技師井西貴子を担当者として調査を実施し、調査管理グループ技師山田隆一・小浜成を担当者として遺物整理を調査と併行して実施した。平成15年度の調査は、調査第一グループ技師井西貴子を担当者として実施し、整理作業は調査管理グループ林日佐子を担当者として実施した。平成16年度は、調査第一グループ井西貴子と調査管理グループ林日佐子・藤田道子を担当者として整理作業を実施し報告書を作成した。

3．本書の写真測量は、平成14年度株式会社かんこう、平成15年度は（株）中庭測量コンサルタントに委託した。なお、フィルムについては各社において保管している。

4．本書に掲載した石器実測図は、株式会社アルカに委託した。

5．本書に掲載した遺物写真の撮影は、有限会社阿南写真工房に委託した。

6．出土した遺物の保存処理は、（財）元興寺文化財研究所に委託した。

7．本書に用いた標高はすべてT.P.（東京湾標準潮位）による。また座標は国土座標を使用し、挿図中に示す方位は座標北である。

8．調査・遺物整理・報告書作成に要した費用は、全額を大阪府建築都市部が負担した。

9．本書の執筆は全体的には井西が行い、第３章第１項を庵ノ前智博（文化財保護課調査補助員）、第３章第２項と第４章を松尾奈緒子（京都大学大学院修士課程２回生）、第４章を矢倉嘉人（帝塚山大学大学院博士前期課程２回生、現（財）大阪府文化財センター専門調査員）が執筆分担し、文責は文末に記した。

10．調査に際しては、大阪府建築都市部、枚方市教育委員会、（財）枚方市文化財調査研究会、地元自治会をはじめ、多くの方々にご指導、ご助言をいただいた。ここに厚く感謝する次第である。

11．本書は300部印刷し、一部あたりの単価は、3,108円である。

目　　次

例言
第１章　調査経過 …… 1
第２章　地理的環境・歴史的環境 …… 3
第３章　調査成果 …… 5
　第１項　基本層序 …… 5
　第２項　遺構と遺物 ……23
　第３項　試掘 ……76
　第４項　石包丁の使用痕分析 ……79
第４章　まとめ ……85
付　擁壁部等補足調査の記録……9

挿　図　目　次

第１図　調査区地区割り図 …… 2
第２図　周辺遺跡分布図 …… 3
第３図　４区、北東壁土層断面図 …… 6
第４図　４区、西壁土層断面図 …… 6
第５図　１・３区、全体図 …… 9・10
第６図　２区、全体図 ……11・12
第７図　４区、全体図 ……13・14
第８図　５・６区、全体図 ……15・16
第９図　７区、全体図 ……17・18
第10図　８区、全体図 ……19・20
第11図　９・10区、全体図 ……21・22
第12図　４区、１号弥生竪穴住居 平面図・断面図…24
第13図　４区、２・３号弥生竪穴住居遺棄 ……25
第14図　２区、157出土遺物実測図 ……26
第15図　３区、774出土遺物実測図 ……26
第16図　４区、1023平面図・断面図 ……27
第17図　４区、1023出土遺物実測図 ……27
第18図　４区、1704出土遺物実測図 ……27
第19図　４区、1776平面図・断面図 ……28
第20図　４区、1894平面図・断面図 ……28
第21図　４区、2144平面図・断面図 ……28
第22図　４区、2171平面図・断面図 ……28
第23図　４区、2171出土遺物実測図 ……29
第24図　４区、2174出土遺物実測図 ……29
第25図　４区、896・1724平面図・断面図 ……29
第26図　４区、2194平面図・断面図 ……29
第27図　５区、３平面図・断面図 ……30
第28図　５区、３出土遺物実測図 ……30
第29図　５区、78出土遺物実測図 ……30
第30図　６区、205平面図・断面図・遺物出土状況図…31
第31図　６区、205出土遺物実測図 ……31
第32図　６区、293出土遺物実測図 ……32
第33図　２区、４号竪穴住居 平面図・断面図・出土遺物実測図 ……33
第34図　２区、５号竪穴住居 平面図・断面図 ……34
第35図　２区、６号竪穴住居 平面図・断面図 ……36
第36図　４区、７号竪穴住居 平面図・断面図 ……36
第37図　４区、７号竪穴住居内出土遺物実測図 ……36
第38図　４区、８号竪穴住居 平面図・断面図 ……37
第39図　５区、９号竪穴住居 平面図・断面図 ……38

第40図　5区、10号竪穴住居 平面図・断面図 ……39
第41図　5区、10号竪穴住居勾玉実測図 ……40
第42図　5区、11号竪穴住居 平面図・断面図 ……40
第43図　6区、12号竪穴住居 平面図・断面図・
出土遺物実測図 ……41
第44図　6区、12号竪穴住居遺物出土状況図 ……43
第45図　6区、13号竪穴住居 平面図・断面図・
遺物出土状況図・出土遺物実測図 ……44
第46図　6区、14号竪穴住居 平面図・断面図 ……46
第47図　9区、15号竪穴住居 平面図・断面図 ……47
第48図　3区、590平面図・断面図 ……49
第49図　3区、590出土遺物実測図 ……49
第50図　3区、727平面図・断面図・遺物出土
状況図・出土遺物実測図 ……50
第51図　4区、1919平面図・断面図 ……50
第52図　2区、第4～6層出土遺物実測図 ……51
第53図　4区、第3層出土遺物実測図・1 ……52
第54図　4区、第3層出土遺物実測図・2 ……53
第55図　2区、16号掘立柱建物 平面図・断面図 …53
第56図　3区、17号掘立柱建物 平面図・断面図 …54
第57図　3区、18号掘立柱建物 平面図・断面図 …55
第58図　3区、19号掘立柱建物 平面図・断面図 …56
第59図　3区、20号掘立柱建物 平面図・断面図 …56
第60図　3区、21号掘立柱建物 平面図・断面図 …57
第61図　4区、22号掘立柱建物 平面図・断面図 …57
第62図　4区、23号掘立柱建物 平面図・断面図 …58
第63図　4区、24号掘立柱建物 平面図・断面図 …59
第64図　4区、25号掘立柱建物 平面図・断面図 …60
第65図　4区、26号掘立柱建物 平面図・断面図 …61
第66図　4区、27号掘立柱建物 平面図・断面図 …62
第67図　4区、28号掘立柱建物 平面図・断面図 …63
第68図　4区、29号掘立柱建物 平面図・断面図 …64
第69図　4区、30号掘立柱建物 平面図・断面図 …65
第70図　4区、31号掘立柱建物 平面図・断面図 …66
第71図　4区、32号掘立柱建物 平面図・断面図 …67
第72図　4区、33号掘立柱建物 平面図・断面図 …67
第73図　4区、34号掘立柱建物 平面図・断面図 …68
第74図　4区、35号掘立柱建物 平面図・断面図 …69
第75図　5区、36号掘立柱建物 平面図・断面図 …69
第76図　5区、37号掘立柱建物 平面図・断面図 …69
第77図　5区、38号掘立柱建物 平面図・断面図 …70
第78図　5区、39号掘立柱建物 平面図・断面図 …70
第79図　5区、40号掘立柱建物 平面図・断面図 …71
第80図　6区、41号掘立柱建物 平面図・断面図 …72
第81図　6区、42号掘立柱建物 平面図・断面図 …73
第82図　9区、43号掘立柱建物 平面図・断面図 …73
第83図　9区、44号掘立柱建物 平面図・断面図 …74
第84図　9区、45号掘立柱建物 平面図・断面図 …74
第85図　2区、175出土遺物実測図 ……75
第86図　4区、1071出土遺物実測図 ……75
第87図　4区、1232出土遺物実測図 ……75
第88図　4区、1275出土遺物実測図 ……75
第89図　4区、1320平面図・断面図 ……75
第90図　4区、1320出土遺物実測図 ……75
第91図　4区、1415出土遺物実測図 ……76
第92図　4区、1488出土遺物実測図 ……76
第93図　4区、1494出土遺物実測図 ……76
第94図　4区、1582平面図・断面図 ……76
第95図　4区、1582出土遺物実測図 ……77
第96図　4区、2169出土遺物実測図・拓影 ……77
第97図　試掘調査断面模式図 ……77
第98図　試掘調査位置図 ……78
第99図　石器実測図 ……83
第100図　出屋敷遺跡・招提中町遺跡
出土資料実測図 ……89
第101図　掘立柱建物配置図 ……93・94
第102図　擁壁部等調査区配置図 ……97
第103図　擁壁部等調査区平面図図 ……98

第１章　調査経過

①　調査に至る経過

府営「牧野東住宅」が所在する枚方市東牧野町は、招提中町遺跡の範囲内である。住宅整備課は、老朽化した府営「牧野東住宅」の建て替え計画を策定し、文化財保護課との協議が始まったのが、平成７年度である。第１期建て替え対象部分（約18,000㎡）の発掘調査は、平成10～13年度、調査第２係技師山上弘（現；大阪府文化財調査センター主査）を担当者として実施した。第１期建て替え部分の調査成果については、大阪府教育委員会　2002『招提中町遺跡』を参照されたい（以後、第１次調査と呼ぶ。）

第１次調査終了後、住宅整備課は第２期の建て替え工事を計画し、文化財保護課は、遺跡の広がりを確認する目的で（第1次調査の西側に位置）、平成13年度試試掘調査を実施した。担当は、文化財保護課調査第２グループ主査小林義孝である。この試掘調査で遺跡の広がりは第２期建て替え範囲全体に及ぶことが確認された。発掘調査期間と住宅整備の工事期間等の協議を重ねた結果、住宅建設敷地範囲全体を、遺構を破壊しない高さまで盛り土をすることで合意し、発掘調査は、掘削深度が盛り土の範囲におさまらない、住棟部分・新設道路部分・埋管設置部分が調査の対象となった。また平成15年度、第３期建て替え計画のある敷地内が、試掘調査の対象地となった（以後第２次調査と呼ぶ）。

これらの協議に基づき、平成14年４月に建築都市部長から教育委員会教育長あて埋蔵文化財調査の実施について依頼があった。

現地調査は、平成14年６月に着手し平成16年３月に終了した。

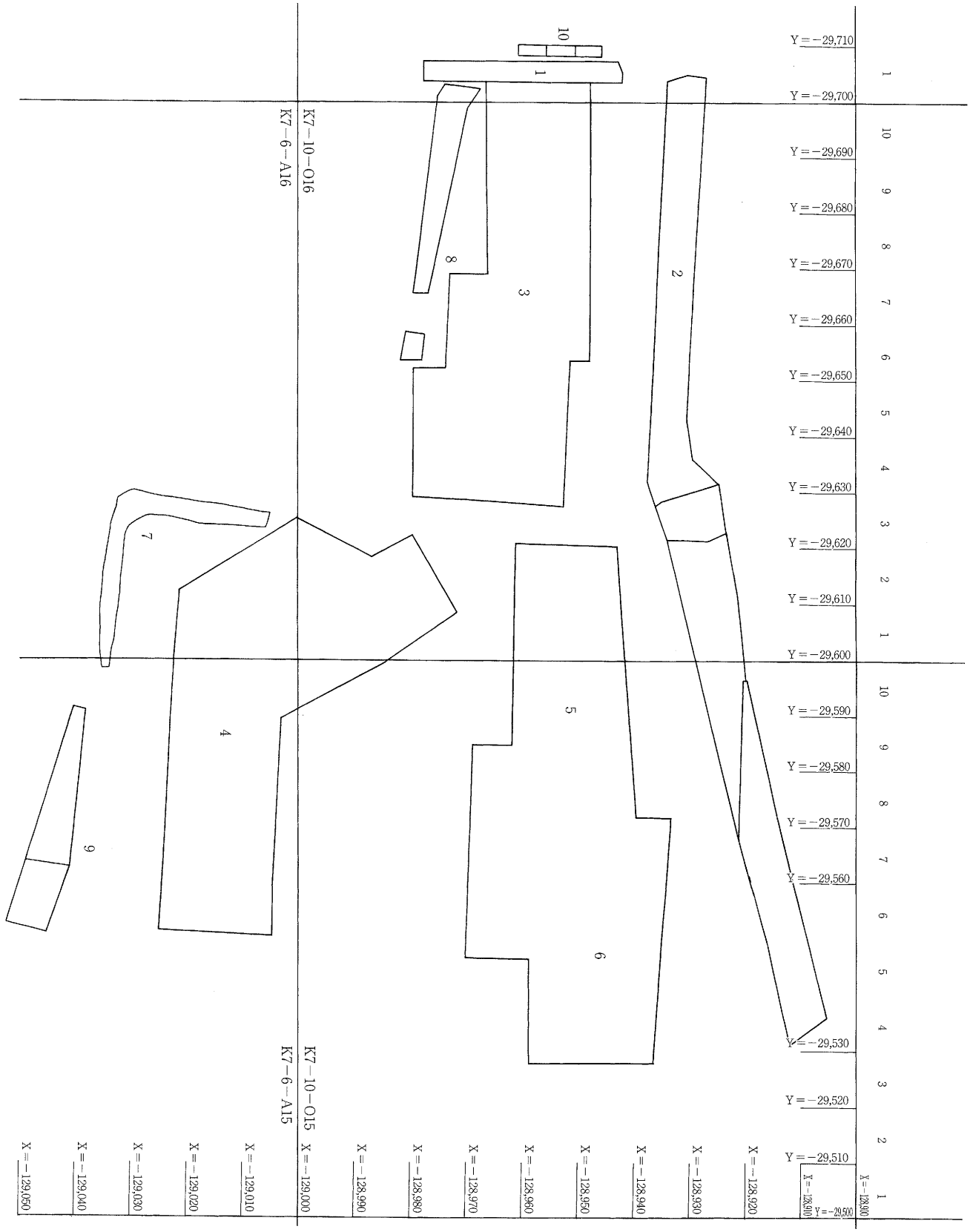
出土遺物の整理は、発掘調査と併行して実施し、本格的には建築都市部長の依頼により平成16年４月から文化財調査事務所で行った。

第２次調査は、まず府営住宅敷地内北側の道路建設が平成14年度に完成する必要があるということから、仮設車道を建設し、道路部分の調査（２区）から実施した。それと並行して埋管部分（１区）の調査、その後順次住棟部分（３、４区）へと進めていった（約5,500㎡）。

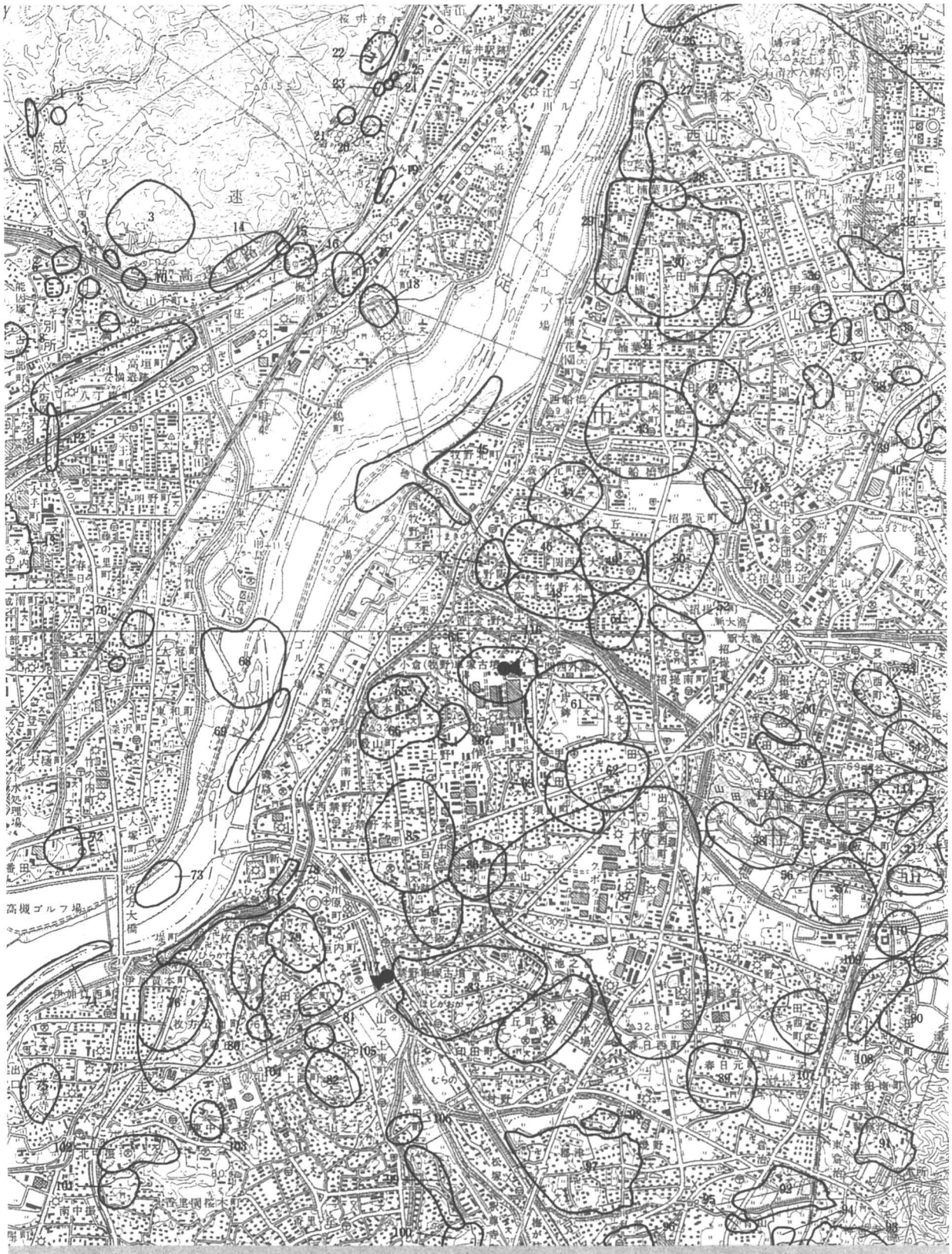
平成15年度の発掘調査（約2,800㎡）は、住棟部分（５、６区）と府営住宅敷地の南側の道路について（７～10区）調査を実施することになった。南側の道路部分については、本体工事との関係から平成15年11月以降での実施となった。

②　地区割り（第１図）

大阪府が独自に採用していた地区割りは、平成14年度国土座標値の基準が、世界測地系への変更により、変更せざる得なくなった。調査段階においては、１万分の１地形図を基本とした第Ⅰ区画の完成が見られなかったので、便宜上従来の第Ⅳ区画（国土座標値による10ｍ方形の最小区画）の座標値で囲われた部分の地区名を新座標値内の地区名として呼称した。表示方法は、第Ⅳ区画のラインについて与えられた、北東端を基点に、南北をａ～ｊ、東西を１～10とし、区画名はラインの北東交差点を使うという方法を踏襲した。



第１図　調査区地区割り図（Ｓ＝1/1,000）



第２図　周辺遺跡分布図（１/50,000）

第２章　地理的・歴史的環境（第２図）

招提中町遺跡は枚方市東牧野町・招提中町町・招提平野町に広がる、弥生時代から中世にかけての複合遺跡である。標高22ｍの台地上に立地しており、約200ｍ南には穂谷川が南西から北東に流れ淀川と合流している。地形学的方法により、枚方市周辺の地形面を区分すると11面に分類され、大きくは山地・丘陵・台地・低地に４区分される。この分類によると枚方市域は、枚方丘陵（生駒山地によって隆起した大阪層群を主体とする丘陵地形）と、比較的低い丘陵の段丘面で構成される。段丘地形が残っている所で標高は35～50ｍである。丘陵地形は穂谷川以北の男山丘陵と天の川下流西方の枚方丘陵に区分され、その丘陵の間に台地があり、本遺跡は穂谷川右岸の中位段丘面に位置する。丘陵の南西部星田付近に寝屋川と天の川分水界がある。

本遺跡周辺では、穂谷川流域の穂谷遺跡で縄紋土器（早期・前期）が出土している。弥生時代については穂谷川の右岸側に広がる本遺跡が弥生の古いところから始まり、現段階では遺跡の広がりは確認できていないが、穂谷川対岸では交北城ノ山遺跡が存在する。この遺跡は竪穴住居・方形周溝墓が検出されており中期後半には続かない。両遺跡から上流に田口山遺跡が存在する。

また、古墳時代になると穂谷川左岸に全長107.5ｍを測る牧野車塚古墳が築造される。古墳時代の集落は庄内期から始まる本遺跡と津田トッパナ遺跡、藤阪南遺跡、田口中島遺跡、津田土井山遺跡が存在する。本遺跡は律令制下では交野郡にあたり、古代の駅家が樟葉（和銅四年）に置かれたとの記載がある。歴史時代の遺跡としては、まず枚方市と八幡市の市界に位置する樟葉・平野山瓦窯があげられる。男山丘陵西麓の標高14～30ｍの傾斜面に登窯を築いており、最も注目された瓦が素弁八葉蓮華紋の四天王寺と同笵の瓦で、本瓦窯は四天王寺の供給瓦であることが判明している。またこの瓦窯では高句麗様式の瓦当紋様をもつものと百済様式の瓦当紋様をもつものの２種類が同じ窯で焼かれているという特徴をもつ。樟葉瓦窯跡からはロストル式平窯が検出されており、西山廃寺・百済寺跡に供給したことが知られている。白鳳時代創建の寺は九頭神廃寺が存在する。従来九頭神廃寺の創建瓦と考えられていたのは素弁八葉の花弁中央に凹線をもつ瓦であるが、遺跡近くから四天王寺と同紋の素弁八葉蓮華紋の瓦が見つかっており、樟葉・平野瓦窯で製作されたものと考えられる。数次の発掘調査によって、基壇跡・回廊跡・掘立柱建物などが検出されている。招提中町遺跡はこの九頭神廃寺と関係した集落ではないかと考えられている。他に白鳳時代の寺跡として香里ヶ丘に所在する中山観音寺があげられる。二塔式で７世紀代の塔心礎が検出されており、軒丸瓦の瓦当紋様に百済寺との類似がみられる。奈良時代になると国指定特別史跡の百済寺が存在する。中門、南門、東・西塔、金堂・講堂・北方建物・東方建物が見つかっており、山城の平川廃寺（平城宮式）と同笵が確認されている。招提中町遺跡では奈

64 牧野車塚古墳群　65 渚遺跡　66 御殿山遺跡　67 渚東遺跡　68 前島遺跡　69 淀川河床遺跡（その2）　70 天川遺跡
71 中寺遺跡　72 大塚西遺跡　73 大塚遺跡　74 淀川河床遺跡（その3）　75 光善寺寺内町遺跡　76 枚方公園遺跡　77 伊加賀遺跡
78 枚方宿跡　79 岡東遺跡　80 枚方上之町遺跡　81 田宮遺跡　82 山ノ上遺跡　83 星丘西遺跡　84 百済寺遺跡
85 禁屋本町遺跡　86 中宮尼寺田遺跡　87 中宮・池の宮古墳群　88 星丘遺跡　89 春日環濠集落遺跡　90 津田城遺跡　91 東倉治遺跡
92 倉治遺跡　93 神宮寺遺跡　94 有池遺跡　95 焼垣内遺跡　96 私部城跡　97 交野郡衙跡　98 群津渋り遺跡
99 藤田山遺跡　100 藤田土井手山遺跡　101 甚跎廃寺　102 中振ドウネンボウ遺跡　103 中振遺跡　104 鷹塚山遺跡　105 山之上天堂遺跡
106 藤田町遺跡　107 津田西遺跡　108 津田エンサキ遺跡　109 津田三ツ池遺跡　110 津田トッパナ遺跡　111 藤阪宮山遺跡　112 長尾病院遺跡
113 ごんぼう山遺跡　114 藤阪東遺跡　115 招提北代遺跡　116 牧野車塚古墳　117 禁野車塚古墳

良時代の遺構は検出されていないが、樟葉野田西遺跡、船橋遺跡、アゼクラ遺跡、禁野本町遺跡で遺構が確認されており、船橋遺跡では、主軸を南北・東西方向にもつ建物群と石帯・墨書土器が検出されたことから、官衙的な様相が指摘されている。

【参考文献】

大阪府教育委員会　2002　『招提中町遺跡』

枚方市史編纂委員会編1986『枚方市史』第12巻

第３章　調査成果

第１項　基本層序（第３、４図）

本調査区は枚方台地北東部の微高地に位置しており、台地中央を西北流する穂谷川の右岸沿いにある。調査以前は府営住宅が建設されており、現地表面の標高は約T.P.＋20.3ｍであった。

今回の調査区は１区から10区まであるが、２区の自然流路上層、３区・K7-10-O16-a10、４区・K7-10-O16-g～j・1～3、K7-10-O17-a～c・1～3、６区・K7-10-O15-c～f、５～７区では比較的良好に第２層（弥生から中世までの包含層）が確認できた。これらの地区以外では、盛土を除去した後、旧耕土・床土が確認され、第２層が部分的に確認できるところもあったが、基本的にはすぐに地山となる。基本層序については、最も残りのよかった４区の北東壁及び西壁土層断面図に基づいて記述する。調査区北方及び東方は、後世の撹乱により、府営住宅建物建設時の盛土層を除去すると地山層となる。調査区の北東部には北東から南西方向に向かう自然流路が形成されている。調査地内の地形は北から南に下がり、比高差は約0.6ｍある。遺構面は最も残りのいいところで4面確認できる。以下に説明を加えることにする。

第０層　盛土層（第３図１・第４図１）

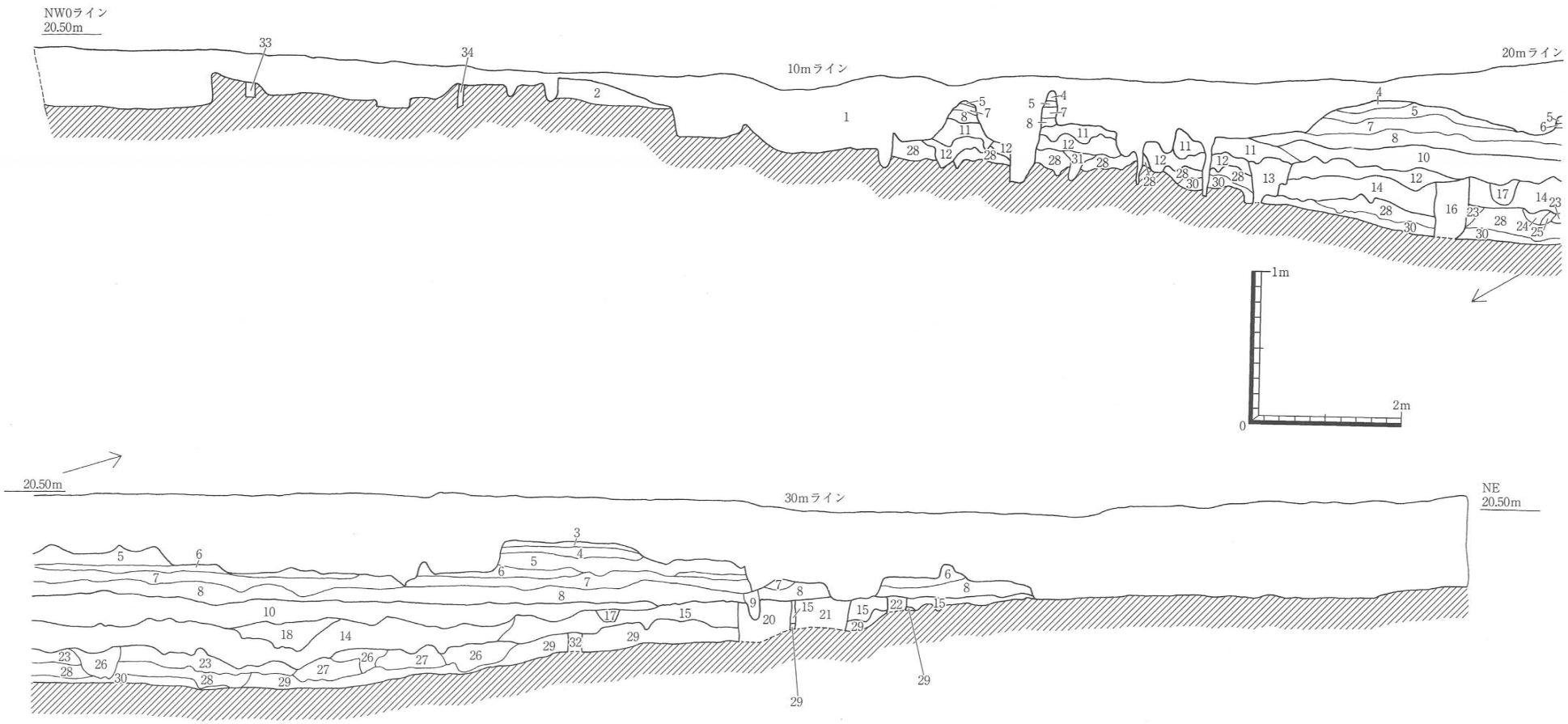
府営住宅建物建設時の整地土層であり、層厚は約10～70㎝である。

第１層　近世耕土・床土層（第３図２～９・第４図２～４）

府営住宅建設以前の耕土・床土層が北東壁断面では６層、西壁断面では３層堆積している。北東壁土層断面図０～12ｍライン・33ｍ～39ｍライン及び調査区最東部では後世の撹乱によって残存していなかったが、１～10区のほぼいずれの調査区でも堆積が確認されている。上面のレベルは北東壁断面でT.P.＋20.2ｍであり、西壁断面ではT.P.＋19.7ｍである。北東壁土層断面について、耕土・床土層の土色・土質・層厚を記すと10YR5/4にぶい黄褐色土～2.5Y4/1黄灰色土で、６層に細分されるが、各層の層厚は、0.04～0.1ｍである。

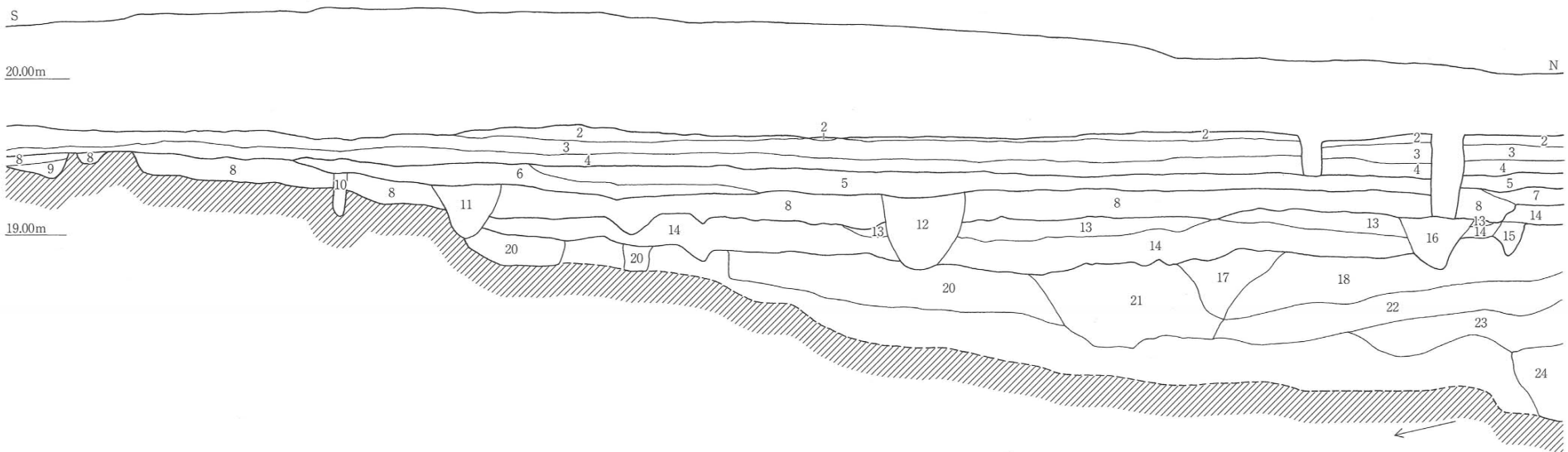
第２層　包含層（第３図10、11・第４図５、６）

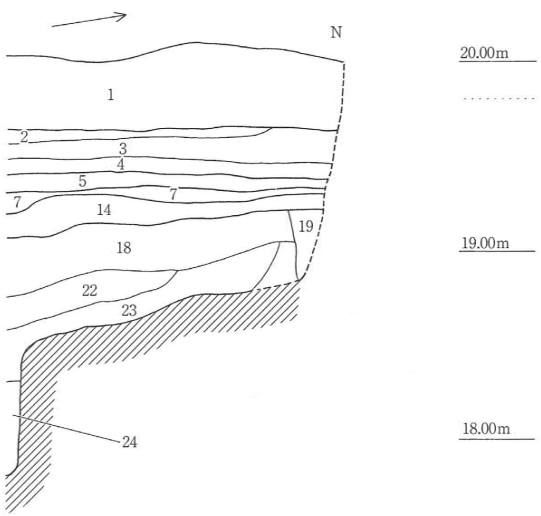
北東壁土層断面図では11.7～28.2ｍライン間と部分的に確認されたが、ほぼ調査区の全体に堆積している。上面のレベルは、北東壁土層断面でT.P.＋19.9ｍ、西壁土層断面でT.P.＋19.4ｍである。土色・土質は、北東土層壁断面では11.7～16.2ｍ付近までは10YR5/2灰黄褐色土で層全

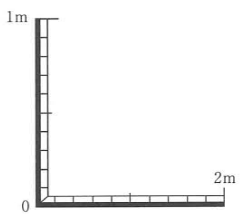


第0層	1	盛土
第1層	2	黄褐色土（2.5Y5/6）
	3	黄灰色土（2.5Y4/1）
	4	黄褐色土（2.5Y5/4）
	5	明黄褐色土（2.5Y6/6）
	6	明黄褐色土（10YR6/8）
	7	にぶい黄褐色土（10YR5/4）
	8	にぶい黄褐色土　下部Fe沈殿（10YR5/3）
	9	暗灰黄色土（2.5Y5/2）
第2層	10	褐色土（10YR4/4）
	11	灰黄褐色土　層全体にMn沈着（10YR5/2）
第3層	12	暗褐色土（10YR3/3）
遺構埋土	13	黒褐色土（2.5Y3/2）
第4層	14	黒褐色粘質土（10YR2/3）
	15	にぶい黄褐色土（10YR4/3）
Pit埋土	16	暗褐色土（10YR3/4）
遺構埋土	17	にぶい黄褐色土（10YR5/3）
遺構埋土	18	褐色土（10YR4/4）
遺構埋土	19	褐色土（10YR4/6）
Pit埋土	20	オリーブ褐色土（2.5Y4/4）
Pit埋土	21	暗褐色土炭混（10YR3/3）
Pit埋土	22	褐色土（10YR4/4）
第5層	23	黒褐色土（10YR3/2）
	24	暗褐色土（10YR3/3）
	25	黒褐色土（10YR2/3）
	26	暗褐色土（10YR3/3）
	27	暗褐色土（10YR3/4）
	28	褐色粘質土（10YR4/4）
	29	褐色土（10YR4/4）
	30	褐色粘質土（10YR4/6）
遺構埋土	31	にぶい黄褐色土（10YR4/3）
Pit埋土	32	極暗褐色土（7.5YR2/3）
Pit839埋土	33	オリーブ褐色土（2.5Y4/3）
Pit831埋土	34	オリーブ褐色土（2.5Y4/3）

第3図　4区、北東壁土層断面図（横：S＝1/40、縦：S＝1/20）







第0層	1	盛土
第1層	2	灰色土（5Y6/1）
	3	灰オリーブ色土（5Y6/2）
	4	にぶい黄褐色土（10YR5/4）
第2層	5	にぶい黄褐色土（10YR4/3）
	6	黒褐色土（7.5YR3/2）
第3層	7	褐色土（7.5YR4/3）
	8	灰褐色土（7.5YR4/2）
	9	褐灰色土（10YR5/1）
遺構埋土	10	灰黄褐色土（10YR3.5/2）
	11	褐灰色土（10YR4.5/1）
	12	褐灰色土少量混（10YR4.5/1）
第4層	13	黒褐色土少量混（10YR2/2）
	14	黒褐色粘質土礫少量混（10YR2/3）
	15	灰色土（N4/0）
遺構埋土	16	灰色土礫少量混（N5/0）
第5層	17	黒褐色土礫少量混（10YR3/2）
	18	にぶい黄褐色土礫少量混（10YR4/3）
	19	黒色土（10YR2/2）
	20	灰黄褐色土（10YR3.5/2）＋にぶい黄色土地山少量混（2.5Y6/3）
	21	暗灰色粘質土植物遺体混（N3/0）
	22	灰黄褐色土礫少量混（10YR4/2）
	23	灰オリーブ色土砂礫混（5Y5.5/2）
	24	灰色粘質土（N4/0）

第4図　4区、西壁土層断面図（横：S＝1/40、縦：S＝1/20）

体にマンガンを含んでいるが、それより南方は10YR4/4褐色土となっている。西壁土層断面図では北方は10YR4/3にぶい黄褐色土で、南方になると7.5YR3/2黒褐色土になる。層厚は約0.1～0.15ｍで、弥生時代から中世にかけての遺物を包含している。

第３層　整地土層（第３図12）**・包含層**（第４図７～９）

調査区北方の一部分（北東壁断面図11.6～18.7ｍライン）に整地土層が、調査区西方には全体的に包含層が堆積している。これらの層の性格は異なるが、いずれの上面からも遺構が切り込んでおり、上面を第1遺構面とした。同一遺構面とした根拠は、どちらも上層の包含層（第２層）と下層の自然流路埋土（第４層）に挟まれて存在するためである。ただし包含層からは中世の遺物が出土しているが、整地土層からは遺物が出土しておらず、時期差が生じる可能性はある。

上面のレベルは北東壁土層断面でＴ.Ｐ.＋19.8ｍ、西壁土層断面でＴ.Ｐ.＋19.3ｍで、比高差は約0.5ｍである。整地土層は10YR3/3暗褐色土、包含層は7.5YR4/3褐色土～7.5YR4/2灰褐色土を呈する。両者とも層厚は約0.1ｍである。

第４層　自然流路埋土（上層）（第３図14、15・第４図13～15）

調査区北東部で北東から南西方向に確認された自然流路の埋土は、大別して２層となる。その上層が第４層にあたり、上面は第２遺構面となる。北東壁土層断面図では16～33.2ｍラインに堆積する。上面のレベルは、北東壁土層断面ではＴ.Ｐ.＋19.7ｍ、西壁土層断面はＴ.Ｐ.＋19.1ｍで、比高差は約0.6ｍである。土色・土質は10YR2/3黒褐色粘質土をベースとしている。層厚は約0.2～0.3ｍである。弥生時代から中世にかけての遺物が出土しているが、弥生時代の遺物の比率が高い。

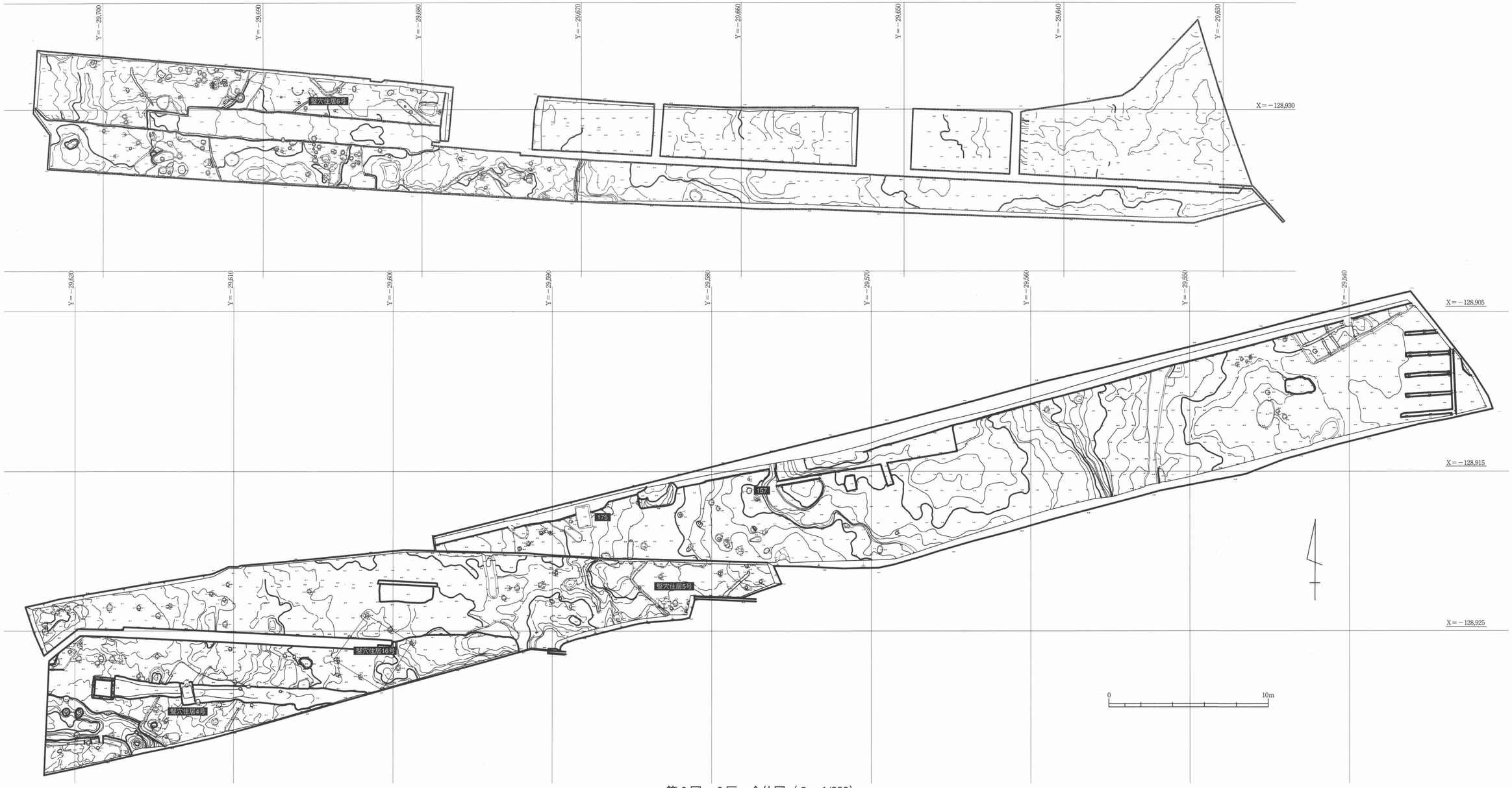
第５層　自然流路埋土（下層）（第３図23～30・第４図17～24）

第５層は自然流路の埋土の下層であり、上面は第３遺構面となる。上面のレベルは、北東壁土層断面でＴ.Ｐ.＋19.4ｍ、西壁土層断面でＴ.Ｐ.＋18.8ｍで、比高差は約0.6ｍである。土色・土質は北東壁土層断面では10YR4/4褐色粘質土を、西壁土層断面では10YR4/2灰黄褐色土をベースとしており、それぞれ地山ブロック土を混入している。層厚は、北東壁土層断面は約0.2ｍであるが西壁土層断面は約0.5ｍ以上あり、北東壁に比べて厚く堆積している。遺物は弥生土器が出土している。

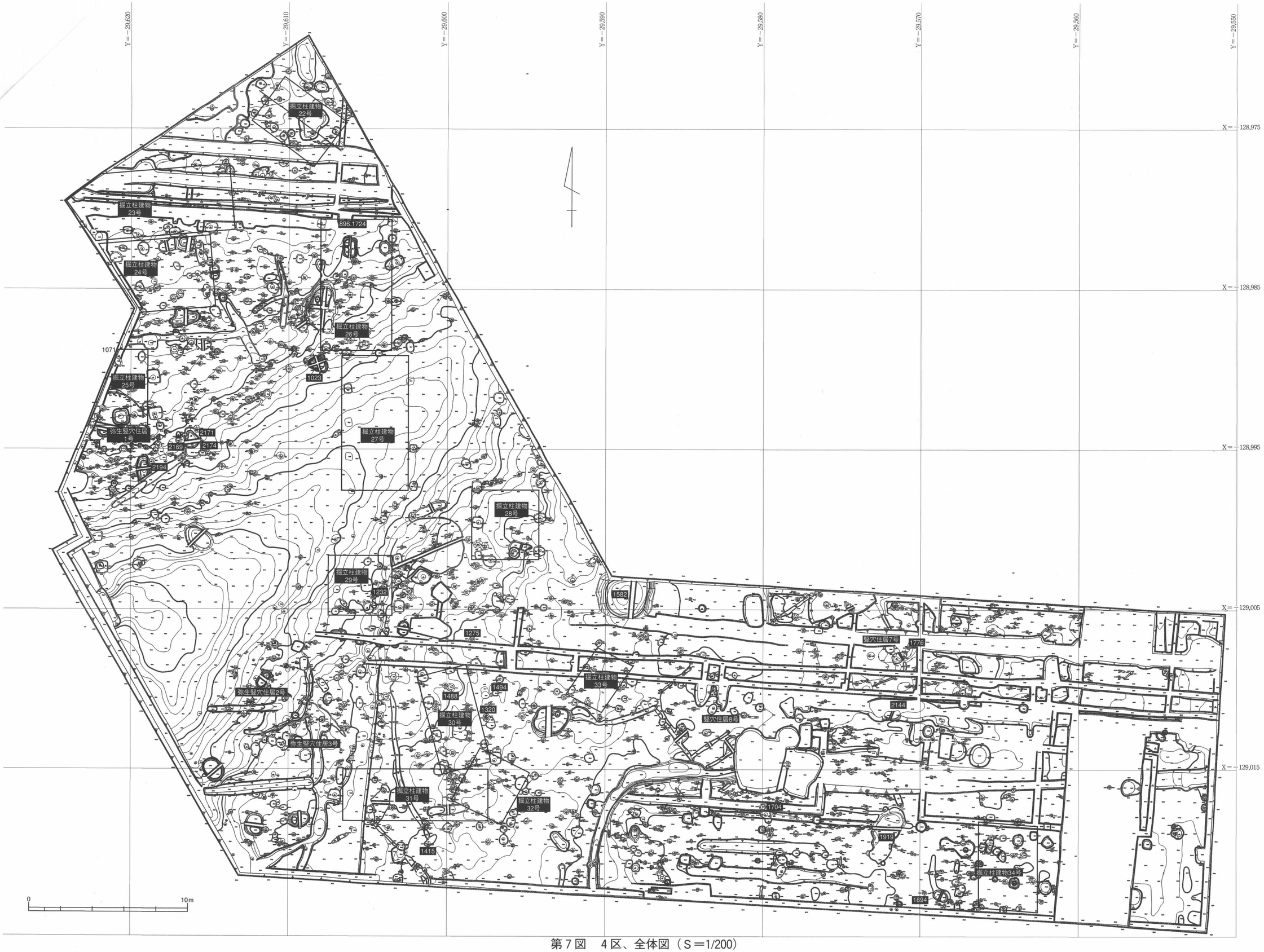
第６層　地山層

上面は第４遺構面である。上面のレベルは、調査区の北方及び東方では後世の撹乱によって削平されている可能性があるが、Ｔ.Ｐ.＋20.2ｍである。調査区を横断する自然流路部では、北東壁土層断面でＴ.Ｐ.＋19.2ｍ、西壁土層断面でＴ.Ｐ.＋17.8ｍ以下（地山未検出であるため詳細不明）となり、その比高差は約1.4ｍ以上となる。　（庵ノ前智博）

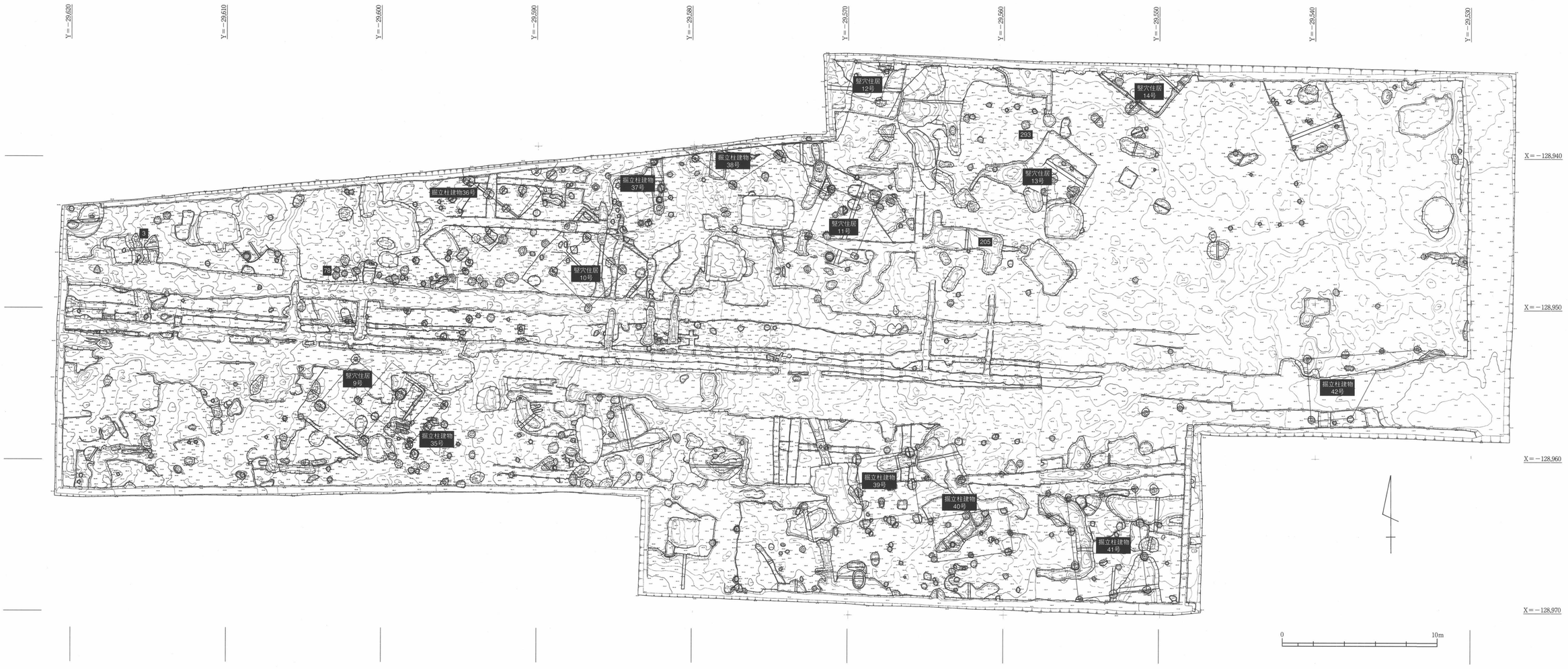
第５図　１・３区、全体図（Ｓ＝1/200）



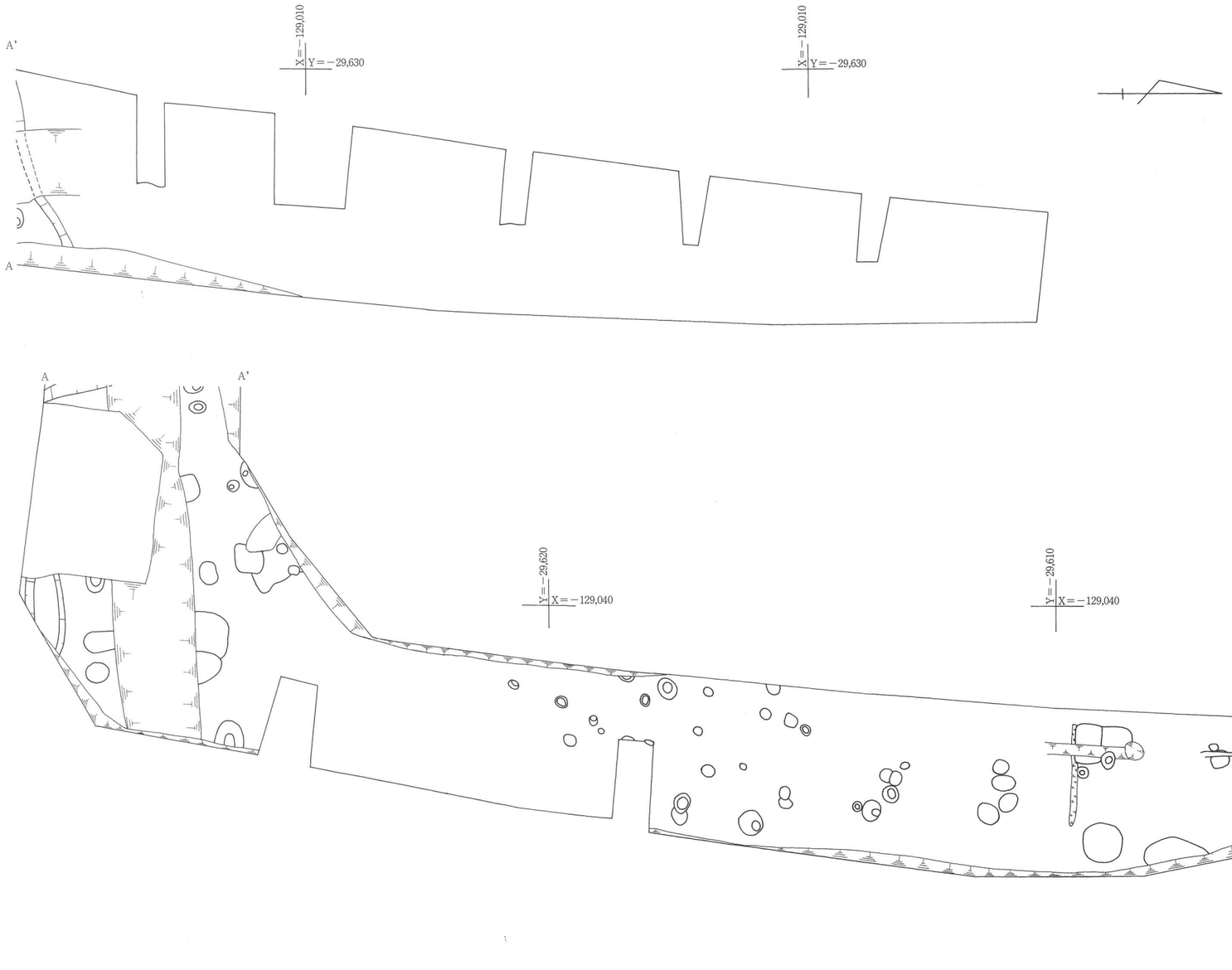
第6図　2区、全体図（S＝1/200）



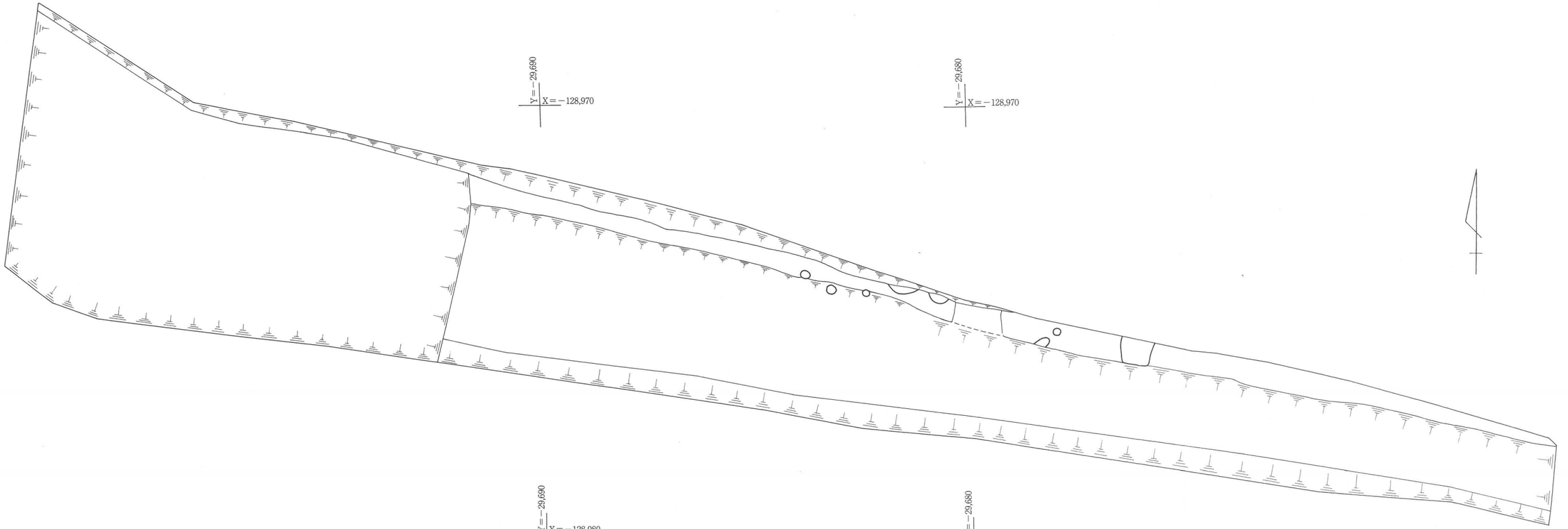
第７図　４区、全体図（Ｓ＝1/200）



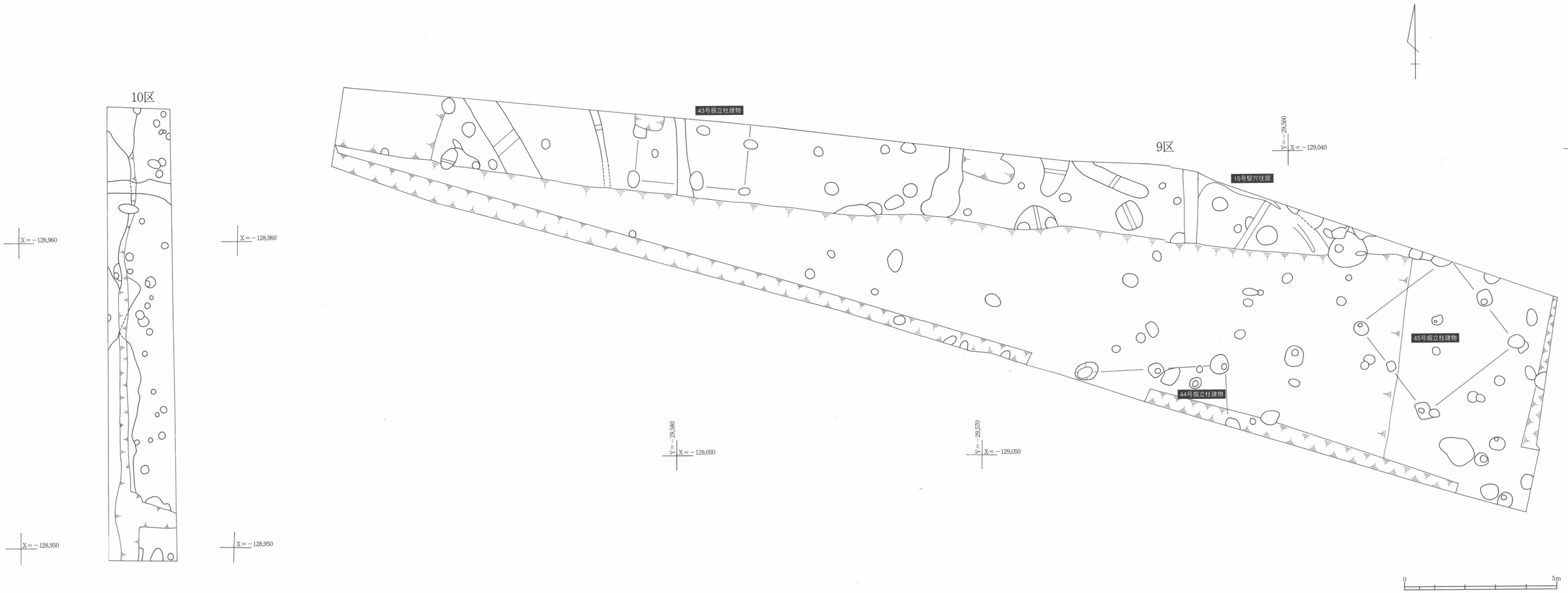
第８図　５・６区、全体図（Ｓ＝1/200）



第９図　７区、全体図（Ｓ＝1/100）



第10図　8区、全体図（S＝1/100）



第11図　9・10区、全体図（S＝1/100）

第２項　遺構と遺物

概観（第５～11図）

遺構番号については、調査時のものをそのまま記載した。年度ごとに１番からの通し番号である。ただし、竪穴住居と掘立柱建物については、調査時においてすべてに建物番号をつけていないので、報告書作成時に新たな番号を付した。

方形周溝墓・竪穴住居・掘立柱建物・土坑などについては後述するので、１、２、７～９区について、その他の遺構や調査区の概観について記述する。

１区　耕土・床土を掘削するとすぐに遺構面となり、遺構面は１面である。遺構面の標高は、19.8ｍである。土坑・小穴・溝等を検出した。建物を構成する小穴は確認できなかった。80は、西側半分近くが調査区外となるが、方形の堀方を呈していると考えられる。しかし壁溝など竪穴住居と認識できる遺構がなかったので、住居址とは認定しなかった。深さは、0.2ｍを測る。他の遺構については、遺構内出土の土器が確認されなかったので、それぞれの遺構の時期は不明。小穴については、他の調査区での遺構埋土から推測すると平安時代以降と考えられる。

２区　耕土・床土を掘削するとすぐに遺構面となり、遺構面は１面である。遺構面の標高は、19.8ｍである。土坑・小穴・溝・竪穴住居・掘立柱建物・自然流路等を検出した。自然流路は、６区、K7-10-O15-b、c・6、7区で南端が確認されており、２区、K7-10-O16-ｂ、c・2～8区にかけて検出した自然流路と同一の流路と考えられる。上層の堆積は４区で示した基本層序とほぼ同一である。地表面から2.0ｍまで掘削したが、調査区の幅が狭かったため、底は確認できなかった。

７区　耕土・床土を掘削するとすぐに遺構面となり、遺構面は1面である。遺構面の標高は、19.4ｍである。K7-10-A16-a～c・3区は４区の自然流路の続きが検出された。調査区の幅が狭かったので、底までは確認できなかった。他に円形の小穴・土坑などを検出した。小穴の中には柱痕跡を残すものもあったが、建物を構成する小穴は確認できなかった。

８区　耕土・床土を掘削するとすぐに遺構面となり、遺構面は１面である。遺構面の標高は、19.8ｍである。調査区のほぼ全域に府営住宅建設前に田圃として利用するため造成されており、遺構面は北側に約40㎝の幅でしか残されていなかった。遺構面が確認できたところでは、小穴が検出されたので、遺構は南側にも広がっていたものと考えられる。東に８ｍほど離れた調査区では、遺構面が残っていた。小穴などを検出した。

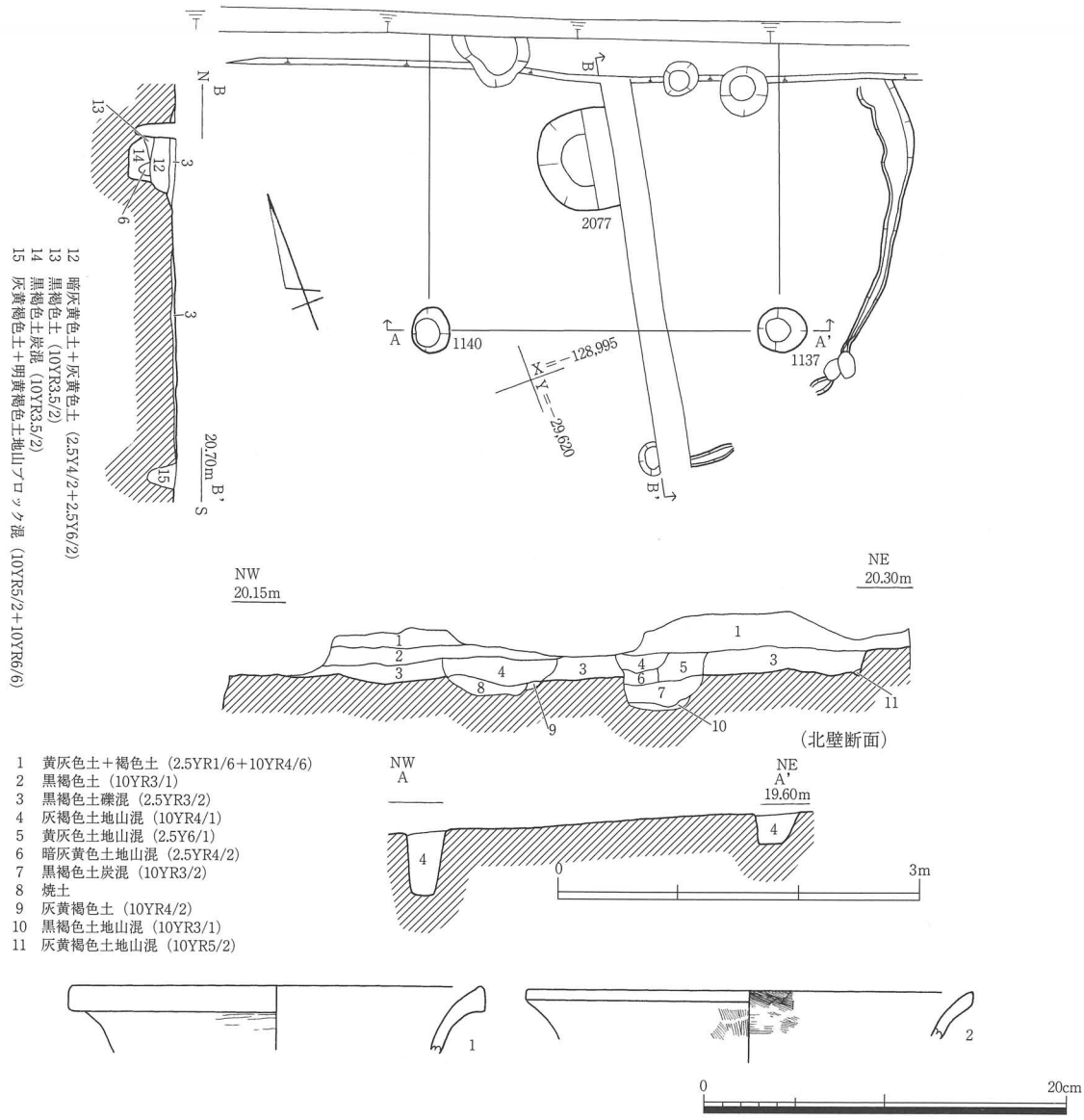
９区　調査区の南側６割ほどが、遺構面から約50㎝の撹乱を受けていた。遺構を検出したが、上面の削平が著しい。上段では、包含層も良好に確認され（第２・３層）、竪穴住居・掘立柱建物などを検出し、詳細は後述する。

10区　遺構面の標高は19.8ｍである。落ちの肩（東方向）を検出した。調査区は、南北に15ｍ、東西５ｍであり、調査区の西端から約0.7ｍの地点で、南北にほぼ直線の肩を確認した。調査区が狭かったため底までは確認していない。（井西）

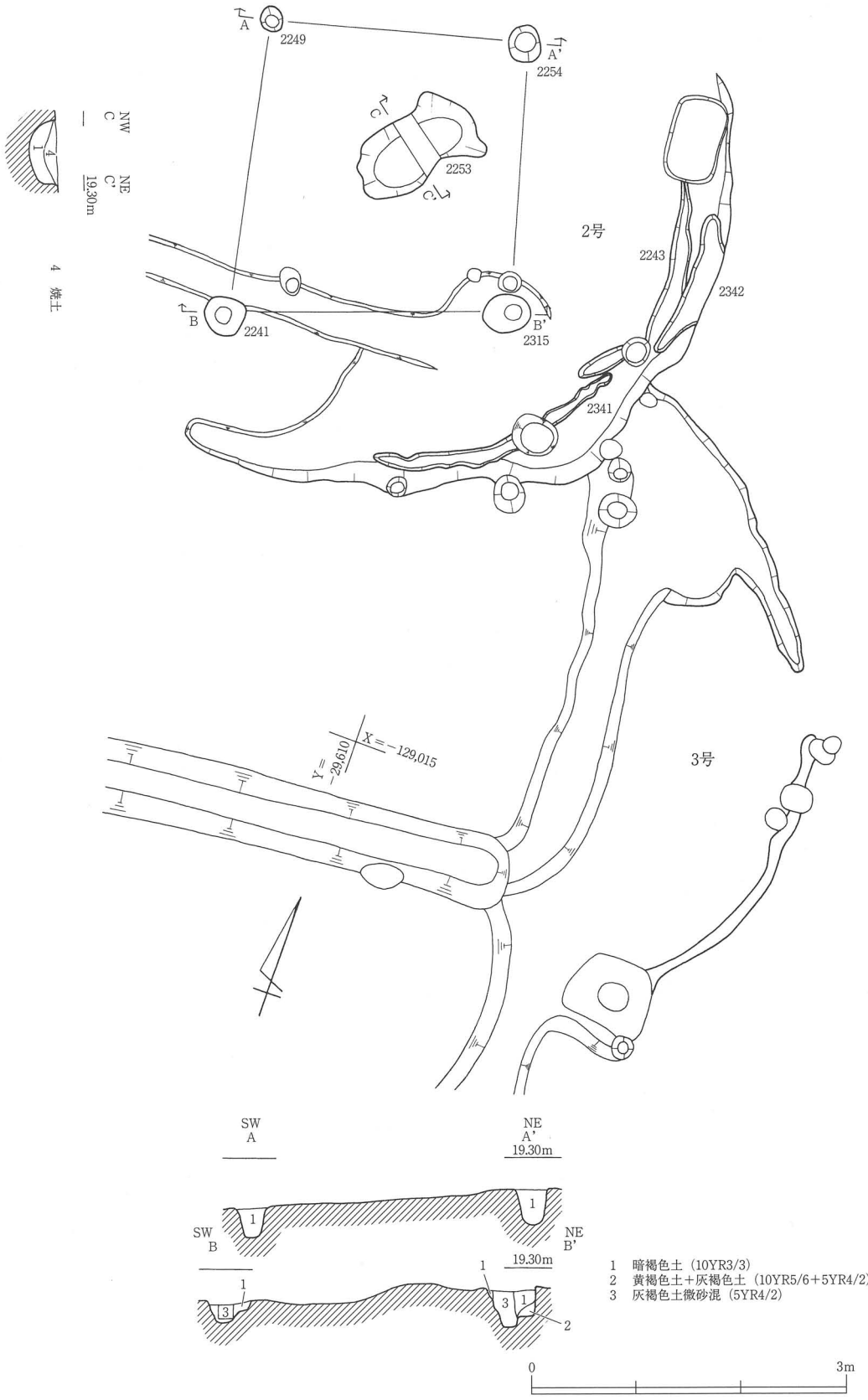
弥生時代

竪穴住居

４区　１号竪穴住居（第12図）　K7-10-O16-j・2、3に位置する竪穴住居である。平面形は復元直径約5.3ｍの円形であり、面積は22㎡と推定される。住居の北西側および西側は、調査区外へと続く。全体に削平が及んでおり、竪穴壁を検出することはできなかった。主軸はN-25°-Eであり、検出面の標高は、南側で19.4ｍ、北側で19.7ｍを測る。床面の標高は、19.5ｍである。壁溝は、南側および南東側では削平のために確認できなかったが、北東側では、1/4程度の約4.16ｍが検出された。幅は0.06～0.28ｍ、深さは0.06～0.08ｍである。柱穴は、東側で1137と1140の２ヶ所が確認されており、残りの２ヶ所は調査区外であると思われる。柱穴の平面形は円形で、直径は0.36～0.37ｍ、深さ0.17～0.26ｍを測る。柱穴間の距離は、2.9ｍである。10YR4/1灰褐色土に地山ブロックが少量混ざる土によって埋まっていた。このほかに住居中央部からは、直径0.8ｍ、深さ0.38ｍの隅丸方形の中心土坑2077が確認できた。中心土坑からは、弥生土器壺（１）と甕



第12図　４区、１号弥生竪穴住居平面図・断面図（Ｓ＝1/60）・出土遺物実測図（Ｓ＝1/4）



第13図　4区、2・3号弥生竪穴住居平面図・断面図（S＝1/60）

（2）、そのほかに弥生土器片が少量出土している。（1）は中心土坑2077から出土した、弥生時代中期の広口壺の口縁片である。口縁部外面の下に工具痕が観察できるが、器面の剥離が激しく調整の詳細は不明である。（2）は同じく中心土坑2077から出土した、弥生時代中期の甕の口縁片である。外面は縦方向のハケ調整、内面には横方向のハケ調整がみられる。

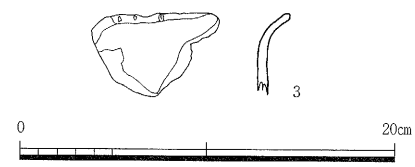
2号竪穴住居（第13図）　K7-6-A16-a、b・1、2で検出した竪穴住居である。平面形は復元直径約6.3mの円形であり、面積は31㎡と推定される。3号竪穴住居の北側をきる。全体的に削平を受けており、とくに住居の北西部は削平が著しく、壁溝などの遺構は確認できなかった。検出面の標高は、北側で18.8m、南側で19.3mである。床面の標高は削平のため、不明である。竪穴壁は削平が激しく残存していない。同様に壁溝も、削平の激しい北西部では確認できなかったが、南西側では1/3程度の約6.5mが検出された。幅は0.2～0.5m、深さは0.03～0.14mである。主柱穴は4ヶ所で確認され、そのうち南側の2241および2315では柱痕跡も検出された。柱穴の平面形は円形で、径0.2～0.45m、深さ0.2～0.35mを測り、柱痕跡の径は0.14～0.18m、検出長0.18～0.34mである。主柱穴の埋土は共通して、10YR3/3暗褐色土である。2243が2343にきられることから、壁溝は少なくとも2回の掘り直しが行われているようだが、主柱穴には掘り直した痕跡はみられず、竪穴住居自体の建て替えが行われたかどうかは不明である。このほかに住居内の遺構としては、住居中央に位置する長軸1.2m、短軸0.6m、深さ0.3mの中心土坑2253がある。この埋土は、上層に焼土がみられるものの、主柱穴と同じである。遺物は、弥生時代中期に属すると思われる土器片が壁溝および柱穴、中心土坑から出土しているが、いずれも細片のため図化しえない。

3号竪穴住居（第13図）　K7-6-A16-a、b・1、2で検出した竪穴住居である。平面形は復元直径約6.2mの円形であり、面積は30㎡と推定される。北側を2号竪穴住居にきられ、また、全体的に削平および撹乱も著しい。検出面の標高は、北側で19.30m、南側で19.51mである。床面の標高は、削平のために不明である。削平と撹乱が全体におよんでおり、竪穴壁、主柱穴は確認できなかった。壁溝だけが、東側に1/3程度の約6.5m残存している。壁溝の幅は0.1～0.24m、深さは0.03～0.04mである。遺物は出土していないが、2号住居に切られていることから、弥生時代の竪穴住居と判断した。

（松尾奈緒子）

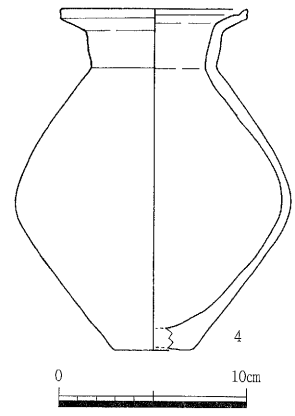
土坑

2区　157（第14図）　K7-10-O16-b・8で検出した。直径0.4mの円形で、深さ0.38mを測る。埋土は10YR5/2灰褐色土層1層である。弥生時代前期の甕（3）が出土した。口縁端部に刻み目を施す。色調は10YR7/2にぶい黄橙色を呈する。



第14図　2区、157出土遺物実測図（S＝1/4）

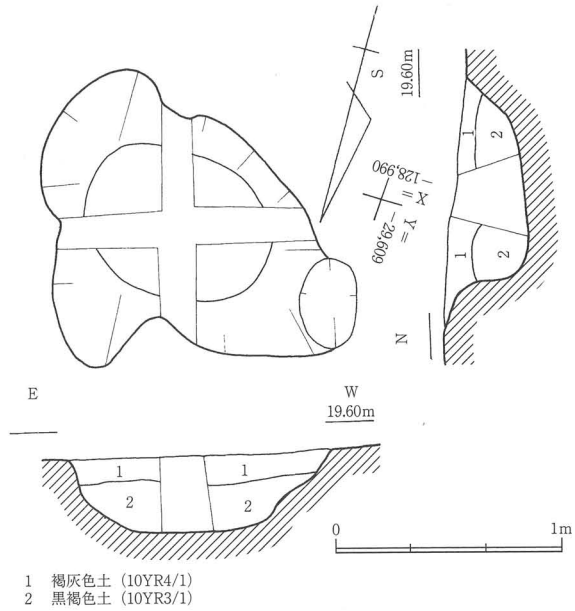
3区　774（第15図）　K7-10-O16-h・5で検出した。直径0.3mの円形で、深さ0.3mを測る。埋土は10YR3/3暗褐色土1層である。（4）は弥



第15図　3区、774出土遺物実測図（S＝1/4）

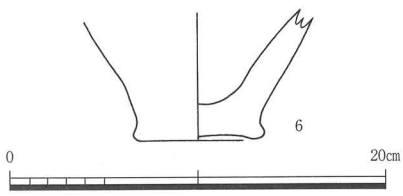
生時代中期後半の壺で、色調は、2.5Y7/2灰黄色を呈し、胎土に長石を含み、焼成は良好である。

4区　1023（第16、17図）　K7-10-O 16-i・1区で検出した土坑である。長軸1.2ｍ、短軸1.0ｍを測り、平面形は不整形で、深さは0.34ｍである。埋土は２層に大別できる。（５）は弥生時代中期の壺で、口縁端部は上下に肥厚し、端面には簾状紋が施される。口頸部下に篦描き刺突紋が一周施され、肩部には直線紋が施されていたようだが摩滅が著しい。体部中央はヘラミガキ、下半にハケメが確認される。色調は、10YR5/3にぶい黄褐色を呈し、胎土に長石・角閃石を含み、焼成は良好である。生駒西麓産の胎土である。

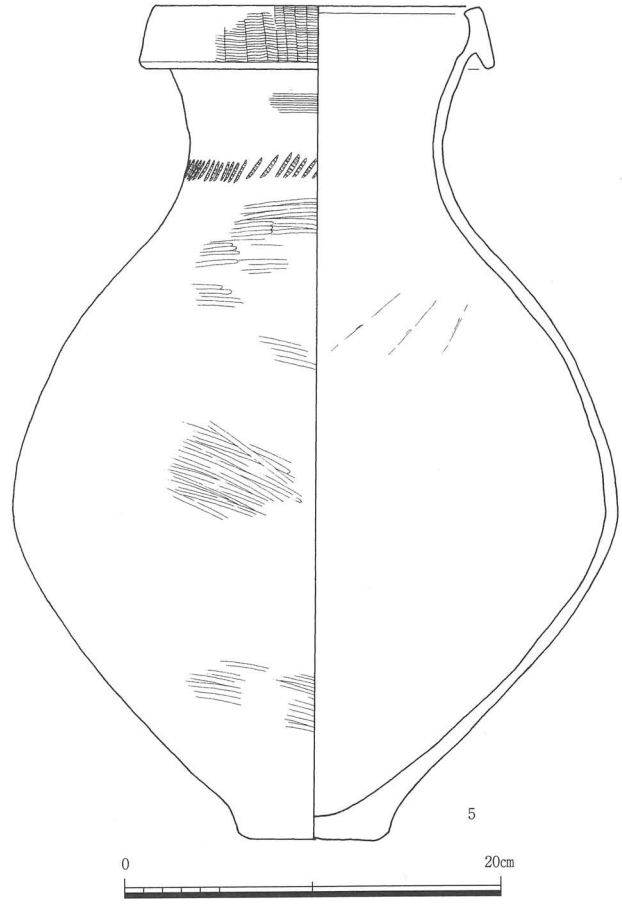


第16図　4区、1023平面図・断面図（S＝1/30）

1704（第18図）　K7-6-A15-ｂ・8で検出した不整円形での小穴である。長軸0.7ｍを測り、北側が撹乱に切られる。深さは0.46ｍを測り、埋土は２層に大別できる。上層が2.5Y5/1黄灰色土で下層が7.5Y3/2黒褐色土である。柱痕跡が確認された。（６）は弥生時代中期の甕の底部である。内外面とも調整は不明である。色調は7.5YR8/4浅黄橙色を呈し、長石・石英・金雲母を含む。

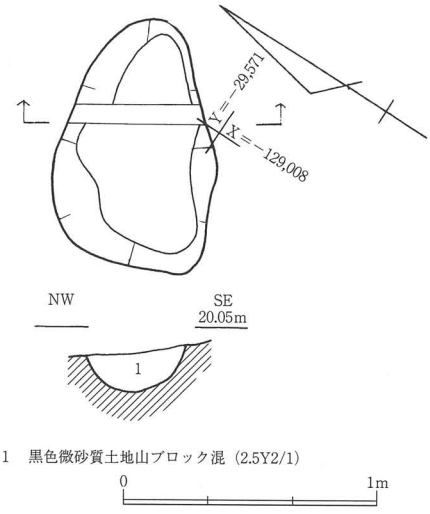


第18図　4区、1704出土遺物実測図（S＝1/4）

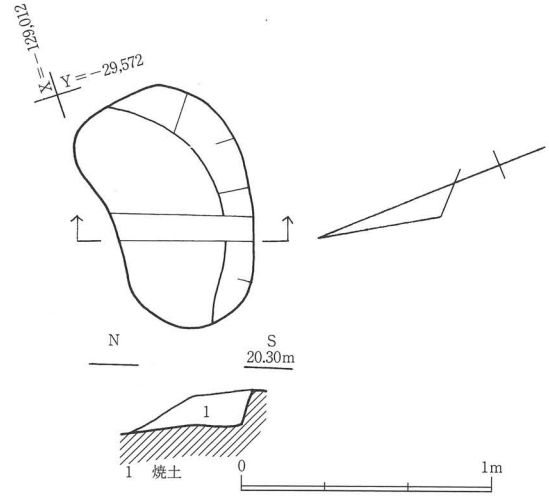


第17図　4区、1023出土遺物実測図（S＝1/4）

1776（第19図）　K7-6-A15-ａ・7で検出した。長軸１ｍ、短軸0.26ｍの不整形である。深さは0.2ｍを測り、埋土は１層である。埋土中に焼土を含む。遺物の出土がなかったので、時期は確定できなかったが、埋土が明らかに古墳時代以降の埋土と相違があるので、弥生時代の遺構と認



第19図　4区、1776平面図・断面図（S＝1/30）

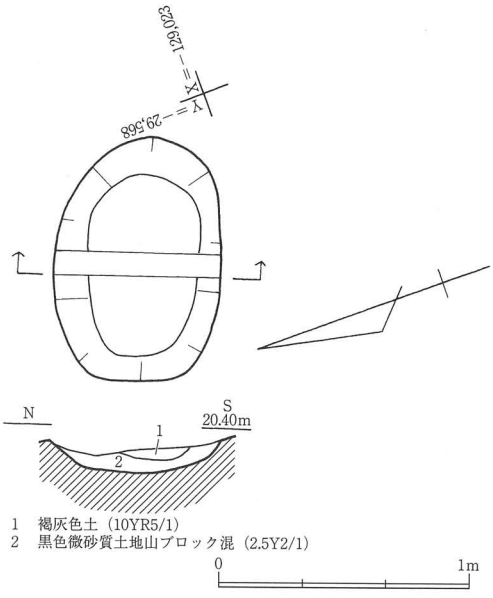


第21図　4区、2144平面図・断面図（S＝1/30）

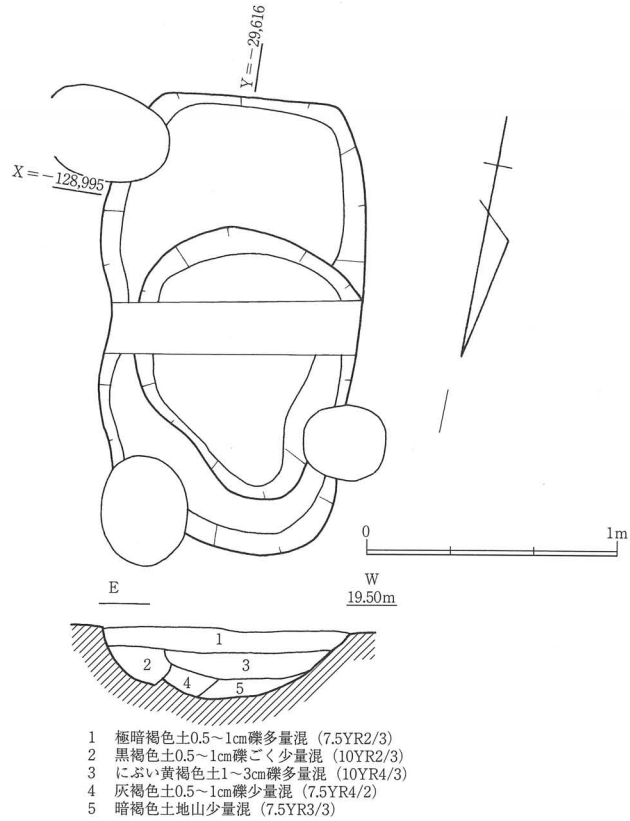
識した。4区の南東地区で3基同様の平面形態・埋土をもつ土坑（1894・2144）が確認された。

1894（第20図）　K7-6-A15-c・7で検出した。長軸1m、短軸0.7mの長円形を呈し、深さは0.1mを測る。埋土は基本的には1層であり上層に10YR5/1褐灰色土（焼土含む）が確認された。

2144（第21図）　K7-6-A15-b・7で検出した。北側の上層は撹乱で切られる。長軸1m、短軸0.6mの長円形を呈し、深さは



第20図　4区、1894平面図・断面図（S＝1/30）

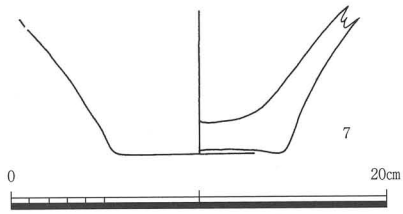


第22図　4区、2171平面図・断面図（S＝1/30）

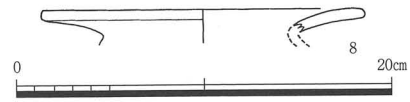
0.18mを測る。埋土は1層で10YR5/1褐灰色土（焼土含む）が確認された。

2171（第22、23図）　K7-10-O16-j・2で検出した。長軸1.8m、短軸1.0mを測る隅丸方形であり、平安時代以降の小穴が3ヶ所切っている。深さは0.3mを測り、埋土は4層に分層される。土坑の中心北よ

りで一段約0.1ｍの不整円形の落ちが確認された。（７）は弥生時代中期の壺の底部である。内外面ともナデを施している。色調は内外面ともに橙色を呈し、胎土中に多量の礫を含む。



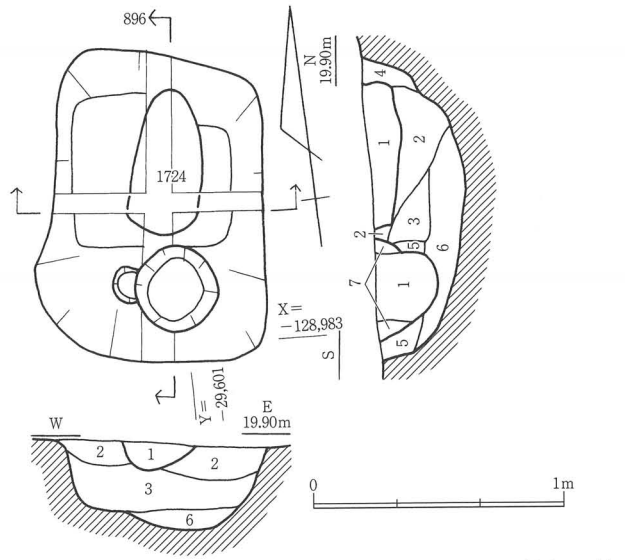
第23図　４区、2171出土遺物実測図（Ｓ＝1/4）



第24図　４区、2174出土遺物実測図（Ｓ＝1/4）

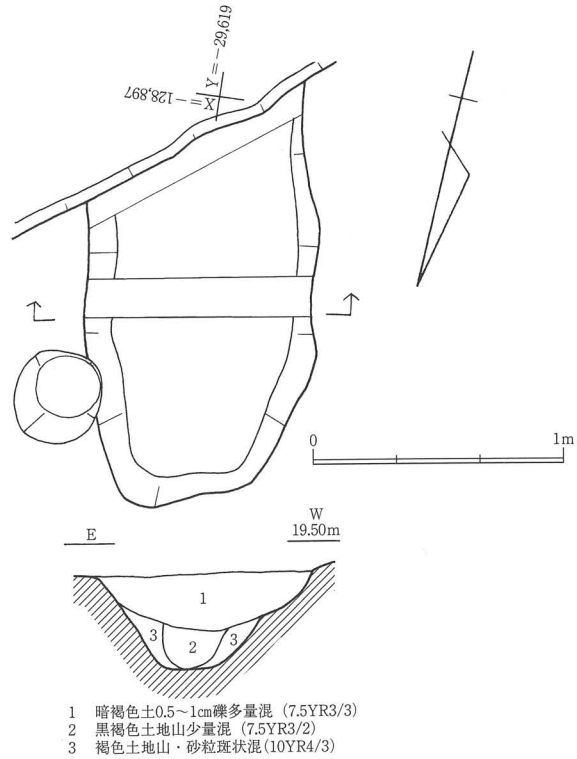
2174（第24図）　Ｋ7-10-Ｏ16-ｊ・2で検出した。直径0.34ｍを測る小穴で、深さは0.36ｍを測り、埋土は10YR3/3暗褐色土1層である。（８）は弥生時代中期の壺の口縁で、色調は10YR6/2灰黄褐色､胎土中に石英・金雲母を含み、焼成は良好である。

896・1724（第25図）　Ｋ7-10-Ｏ16-ｉ・1で検出した。長軸1.3ｍ、短軸0.86ｍの隅丸方形である。上面で3基の遺構が切り込み、1724は、長軸0.6ｍ、短軸0.3ｍの長円形で、深さ0.1ｍを測り、埋土は2.5Y5/2暗黄灰色土１層である。下層で方形の小穴が確認され、埋土は2.5Y4/2暗黄灰色土（地山ブロック含む）である。896の埋土は、最下層が2.5Y5/1黄灰色土（地山ブロック含む）で、最上層土が2.5Y4/2暗黄灰色土である。



第25図　４区、896・1724平面図・断面図（Ｓ＝1/30）

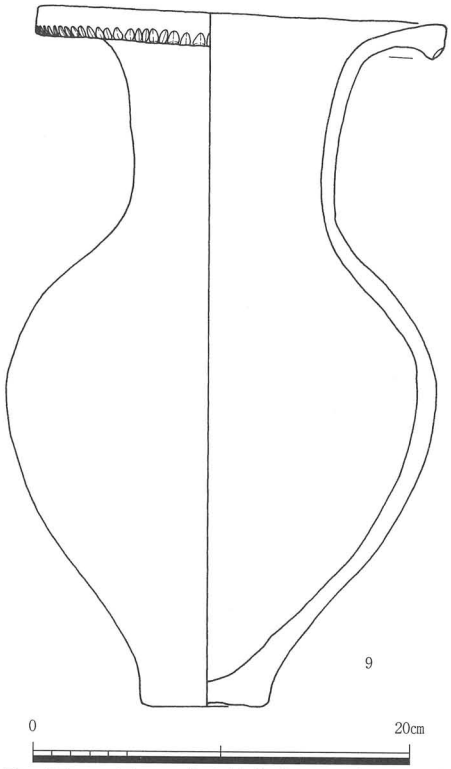
2194（第26図）　Ｋ7-10-Ｏ16-ｊ・2で検出した。南側は中世の溝によって切られる。検出長1.2ｍ、短軸0.9ｍで、隅丸方形である。深さは0.4ｍで、埋土は２層に大別できる。上層は7.5YR3/3暗褐色土で、下層は10YR4/3褐色土、下層で柱痕跡が確認された。



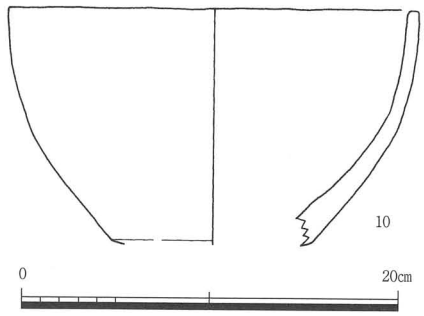
第26図　４区、2194平面図・断面図（Ｓ＝1/30）

５区　３（第27、28図）　Ｋ7-10-Ｏ16-

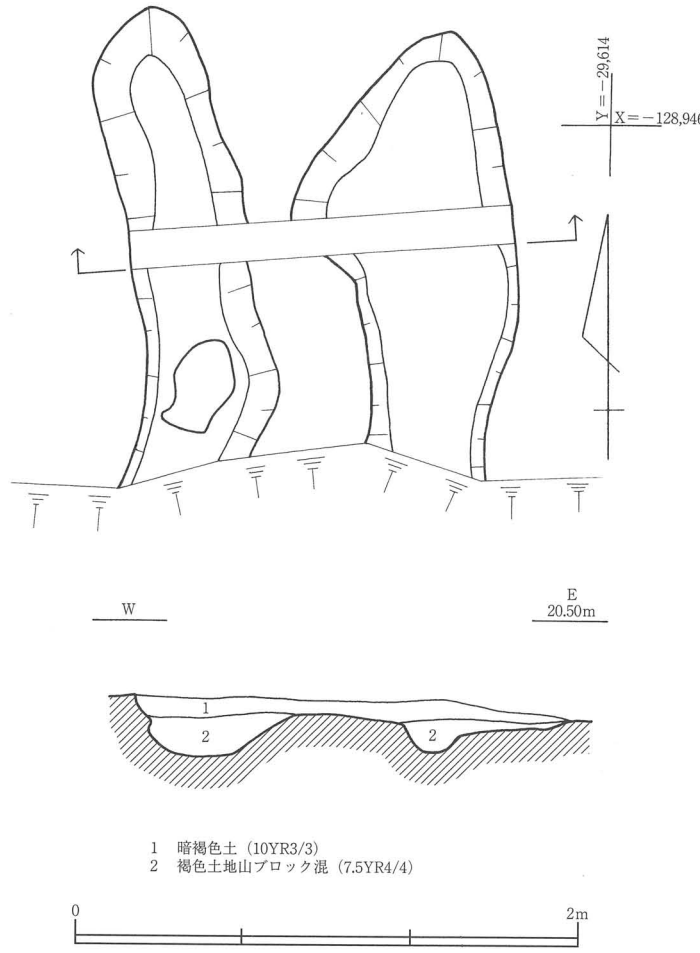
e・2で検出した。南側を撹乱に切られ、南北に2条並行して検出された溝である。深さは0.2ｍを測り、埋土は２層で、上層が10YR3/3暗褐色土、下層が7.5YR4/4褐色土である。３から弥生時代



第28図　５区、３出土遺物実測図（Ｓ＝1/4）



第29図　５区、78出土遺物実測図（Ｓ＝1/4）



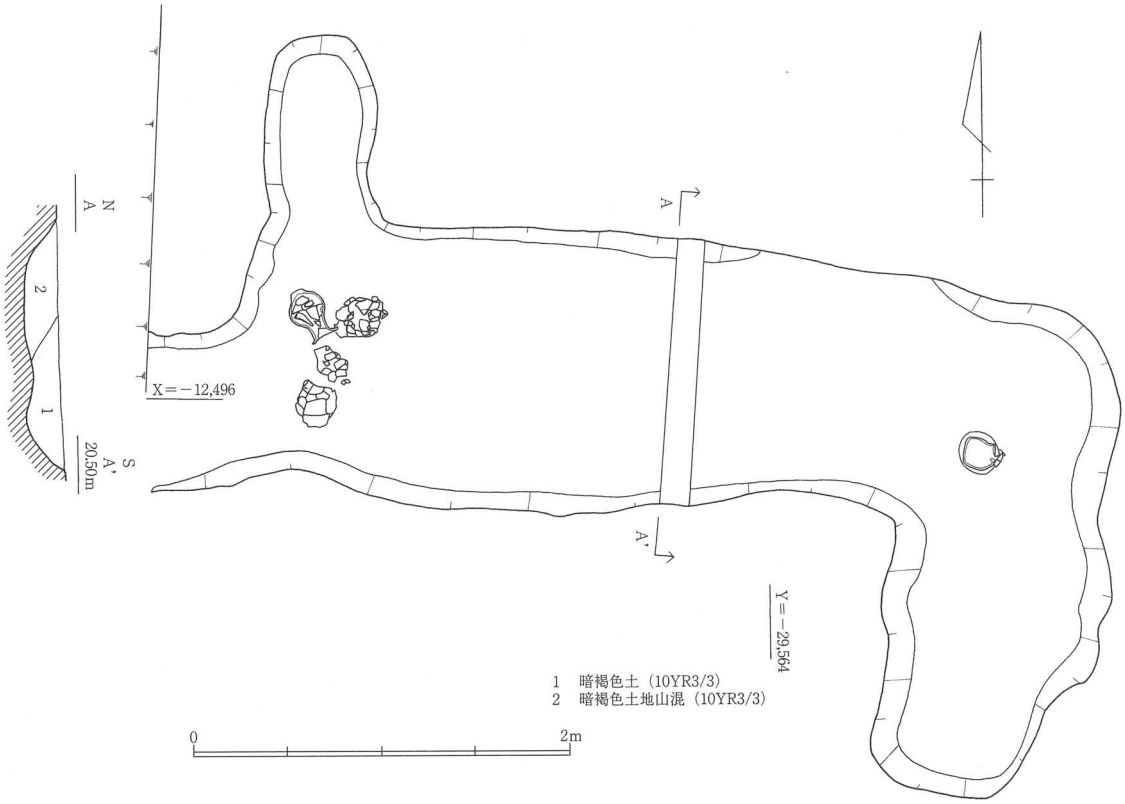
第27図　５区、３平面図・断面図（Ｓ＝1/30）

中期の壺がほぼ完形で検出された（９）。（９）は口縁端部が下方に若干肥厚し、最下端に刻み目が施される。調整は摩滅が著しく不明である。色調は、10YR8/3浅黄橙色を呈し、胎土に長石、小礫を含み、焼成はやや軟質である。

78（第29図）　K7-10-O16-e・6、7で検出した、直径約0.3ｍの円形の小穴である。深さ25㎝を測り、埋土は10YR3/3暗褐色土1層である。（10）は、弥生時代後期から終末の鉢で、調整は摩滅が著しく不明である。色調は、10YR7/4にぶい黄橙色を呈し、胎土に長石、小礫を含み、焼成はやや軟質である。

６区　205（第30、31図）　K7-10-O15-e・7で検出した。西側は撹乱に切られているのと上場が消えてなくなっていたが、東西方向に4.6ｍ直線的にのび、南にほぼ90度屈曲して1.6ｍ延び消える。深さは0.4ｍを測り、埋土は10YR3/3暗褐色土と暗褐色土（地山ブロック混）の２層に分層できる。遺構内の２ヶ所で弥生時代中期の土器が固まって出土した。残存状況が非常に悪かったので図化しえたのは２点である。（11）の壺は、口縁端部に横方向に工具によるナデが強く施さ

れ、口頸部中位から肩部にかけて直線紋と波状紋が施される。10YR7/3にぶい黄橙色を呈し、胎土に長石、小礫を含み、焼成は良好である。(12) の甕は、摩滅が著しく調整は不明である。色調は、10YR8/3浅黄橙色を呈し、胎土に長石、小礫を含み、焼成は軟質である。



第30図　6区、205平面図・断面図・遺物出土状況図（S＝1/40）

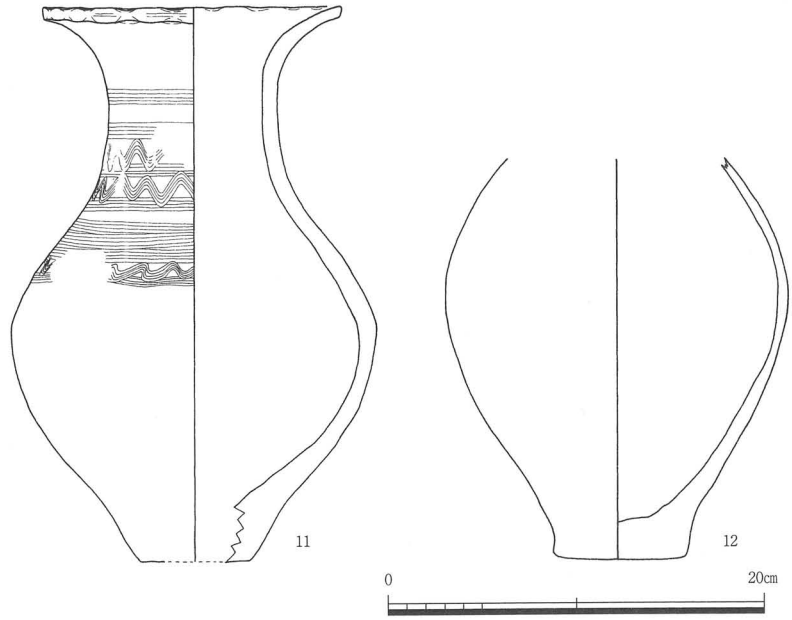
293（第32図）　K7-10-O15-d・6で検出した。直径0.6mの円形で、深さは約50cmを測る。(13) は弥生時代中期の壺で、調整は摩滅が著しく不明である。色調は10YR6/3にぶい黄橙色を呈し、胎土に長石、小礫を含み、焼成はやや軟質である。　(井西)

古墳時代

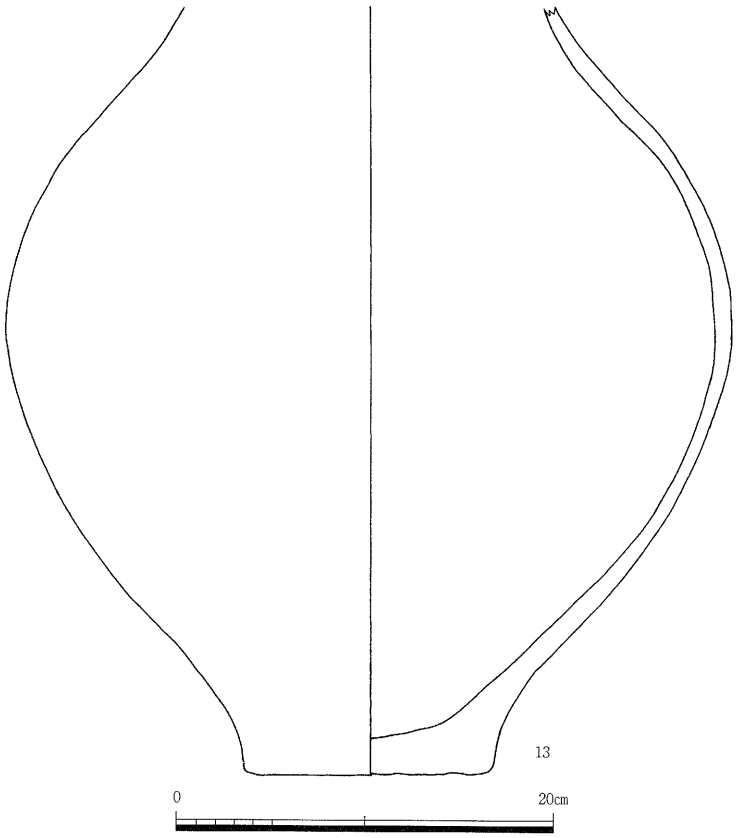
竪穴住居

今回の調査で検出された庄内式併行期の竪穴住居は、1998・99年度に行われた調査の際に検出された同時期の竪穴住居群の北西に位置する。

本調査において検出された庄内式併行期の竪穴住居は、主軸方向と分布によって、大きく北側と南側の2つに分けることが



第31図　6区、205出土遺物実測図（S＝1/4）

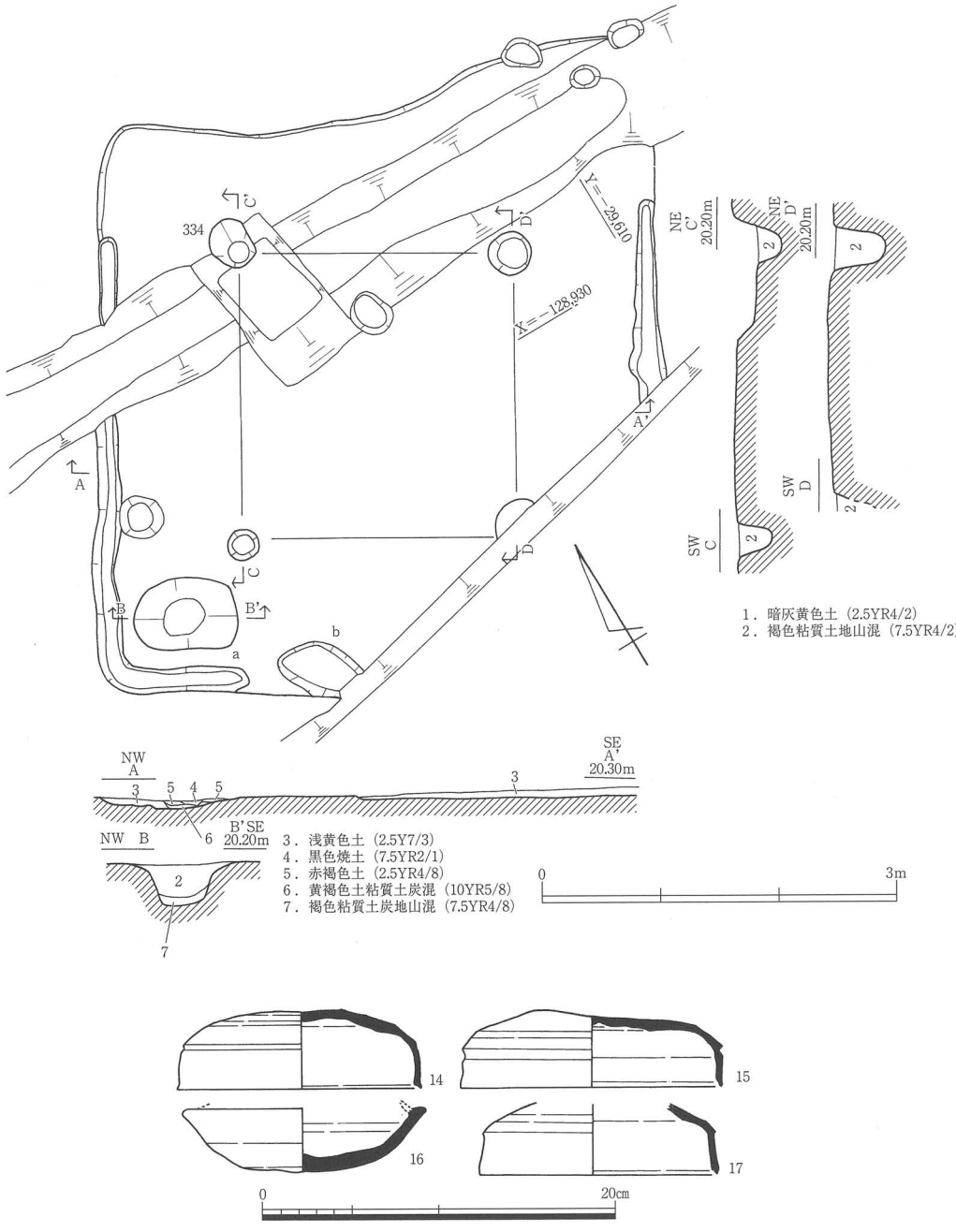


第32図　6区、293出土遺物実測図（S＝1/4）

できる。北側のグループは、東に主軸をふる4～6、9～14号竪穴住居の計9棟であり、南側のグループは、西に主軸をふる7号・8号・15号竪穴住居の計3棟である。とくに、2区では、北側と西側にそれぞれ傾斜して低くなっていく自然地形が看取された。このため、北側のグループの中でも2区西側に位置する6号住居は、他の住居と主軸を同一にとるものの、他の住居から少し離れている。また、6号住居の南側に位置する調査区3区では、庄内式併行期の竪穴住居は検出されていない。したがって、前回調査の状況も考慮すると、庄内式併行期における招提中町遺跡では、竪穴住居は西側に疎であった可能性が高いと考えられる。

また、本調査において検出された竪穴住居は、ほとんどすべてが全体的に削平をうけているのにも関わらず、床面に比較的近い覆土や、壁溝および主柱穴の埋土から須恵器が出土している。これについては、住居が放棄された後、埋没までにある程度の時間を想定しておきたい。

2区　4号竪穴住居（第33図）　K7-10-O16-c、d・1、2で検出した竪穴住居である。平面形は一辺約4.8mを測る方形で、面積は約23㎡である。住居の南端は調査区外で、住居の北半分は、北東から南西方向の溝状の撹乱にきられて、撹乱は基底面以下にまで及んでいる。全体的に削平を受けているが、住居の北辺はとくに削平が激しく、壁溝等の遺構は確認できなかった。主軸の方向はN-32°-Eである。検出面の標高は東側で20.2m、西側で20.1mであり、中央部から南半にかけて薄く覆土が残っており床面は東側で20.14m、西側で20.04mを測る。竪穴壁は、削平のために西隅で僅かに残存するだけである。壁溝は、北西辺で3.8m、南西辺で1.3m、南東辺で1.7mを検出し、北東辺は確認できなかった。壁溝の幅は、0.1～0.3m、深さは0.03～0.13mである。南西辺の壁溝は、中央部でとぎれるが、住居南隅の壁溝の様相は調査区外のため不明である。主柱穴は4ヶ所検出された。主柱穴の平面形は円形、直径0.25～0.36m、深さ0.22～0.54mを測る。埋土は、地山ブロックが混じる2.5YR4/2暗灰黄色土である。主柱穴間は約2.3mである。そのほか、住居内の遺構として、西隅付近で長軸0.9m、短軸0.6mの楕円形の土坑aを検出した。この土坑の埋土は、7.5YR4/3褐色粘質土に地山と炭化物がまだらに混じり、主柱穴の埋土に類似する土質である。性格は不明である。また、南西辺中央部からは、長軸0.68m、短軸0.44m、深さ0.15



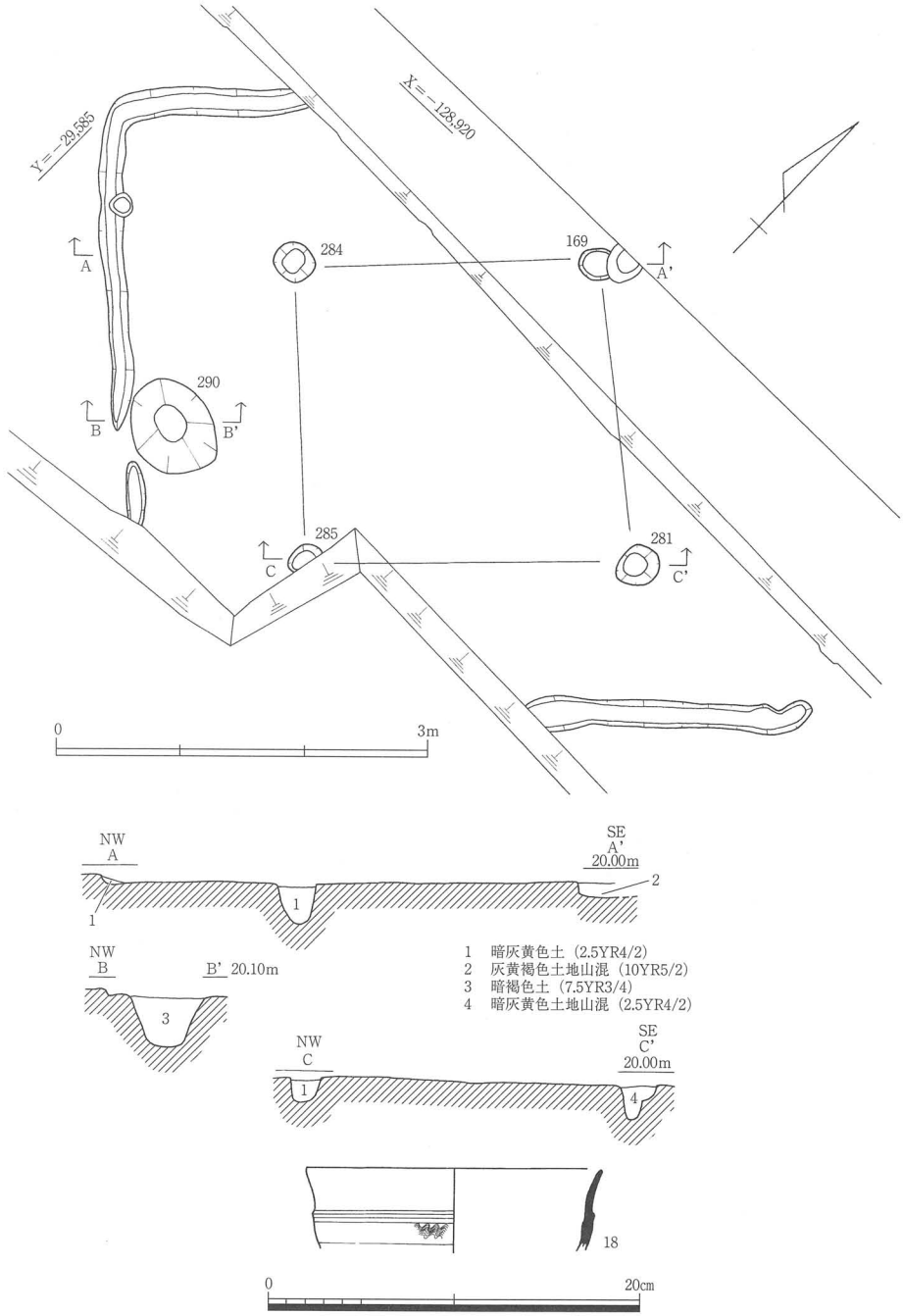
第33図　２区、４号竪穴住居平面図・断面図（Ｓ＝1/60）・出土遺物実測図（Ｓ＝1/4）

mを測る不整形土坑bを検出した。この土坑は貼床上面から切り込み、その上層には貼床に近い土質の堆積が認められた。土坑内からは、極少量の弥生土器もしくは土師器とみられる数点の土器片が検出されたが、細片のため時期の詳細は不明である。遺物は、覆土内から（14、16、17）、壁溝内から（15）の須恵器が出土した。（14）と（16）は、ほぼ同じ地点から出土している。そのほか、土師器、須恵器等も出土しているが、いずれも細片である。（14、15、17）は、ほぼ完形の須恵器坏蓋である。（14）は焼成不良で、天井部と口縁部との境の稜が凹線に近くなっているものの、口縁端部内面の稜線は明確である。（15）は焼成良好で、天井部と口縁部との境界の稜は明瞭であり、口縁端部内面の稜も観察できる。調整は外面ヘラケズリ、他は回転ナデである。（17）は、（14，15）と比べると口径が小さく、天井部と口縁部の境界の稜は（14）と同じく凹線

に近くなっているが、口縁端部内面の稜は比較的明瞭である。(16) は、受け部のかえりが欠損する須恵器坏身である。焼成は (14) と同じく不良で、外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ調整が施される。(14～17) すべて、6世紀前半のものと考えられる。

5号竪穴住居(第34図)

K7-10-O15-c・8、9に位置する竪穴住居である。平面形は復元一辺5.1～5.7mを測る方形で、面積は29㎡と推定される。住居の南隅は調査区外へと続く。住居全体に削平が及んでおり、竪穴壁は残存していない。主軸の方向は、N-46°-Eである。検出面の標高は、住居の東側で20.0m、西側で19.9mであり、床面は標高19.9～20.0mで検出された。壁溝は、南西辺で2.7m、北西辺で1.6m、南東辺で2.3m検出され、幅は0.06～0.21m、深さ0.04～0.08mを測る。壁溝は、不整形土坑290のある南西辺中央部および東隅の2ヶ所で途切れる。主柱穴は、169・281・284・285の4ヶ所で検出されている。主柱穴の平面形は円形で、直径は0.22～0.32m、深さ0.17～0.33m、柱穴間の距離は2.4～2.6mを測る。壁溝および主柱穴の埋土は地山の混じる2.5YR4/2暗灰黄色土である。そのほか、住居内の遺構としては、南西辺中央に長軸0.82m、短軸0.67m、深さ0.39mの不整形土坑290が検出された。埋土は7.5YR3/4暗褐色土である。住居内の位置や検出状況から、4号竪穴住居の不整形土坑と類似のものと考えられるが、性格は不明である。遺物は、主柱穴281から須恵器の無蓋高坏 (18) が出土している。そのほかの主柱穴169・



第34図　2区、5号竪穴住居平面図・断面図 (S=1/60)・出土遺物実測図 (S=1/4)

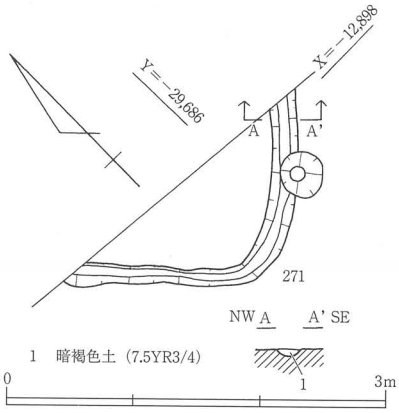
284・285からは極少量の土師器、弥生土器、サヌカイトの細片が、不整形土坑290からは土師器の細片が出土しているが、図化しえない。(18) は、6世紀前半とみられる須恵器の無蓋高坏の口縁である。焼成は良好で、胎土は堅緻である。内面には自然釉がみられ、外面は回転ナデで仕上げられている。口縁部の下には、突帯が巡り、突帯の下には波状紋が施される。

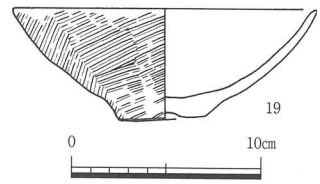
6号竪穴住居（第35図）　K7-10-O16-c・9に位置する竪穴住居である。住居の南隅の壁溝を除く大半が調査区外へと続くため、住居の規模や構造は不明である。平面形は住居南隅の壁溝のラインから、方形であると考えられる。全体に削平を受けており、竪穴壁を検出することはできなかった。主軸はN-44°-Eであり、検出面の標高は19.90ｍである。竪穴壁は削平のため残存していない。検出された壁溝271は、南東辺で1.5ｍ、南西辺で1.5ｍ、検出され、幅は0.13～0.20ｍ、深さは0.04～0.11ｍを測る。住居内の遺構は調査区外に存在すると考えられ、検出されていない。遺物は、壁溝271から須恵器が少量出土しているが、細片のため図化しえない。6号住居は、住居全体の構造があきらかでなく、また遺物も少量しか出土していないが、住居の平面形態から考えて、他の方形竪穴住居同様に庄内式併行期に属する住居と判断した。

4区　7号竪穴住居（第36、37図）　K7-6-A15-a・8に位置する竪穴住居である。平面形は復元一辺6.0～6.5ｍを測る方形で、面積は約42㎡と推定される。住居の北隅は調査区外へと続く。全体に削平が及んでおり、また、住居の中央から南隅は、東西方向に走る溝によって撹乱をうけている。主軸はN-28°-Wであり、検出面の標高は、西側で20.1ｍ、東側で20.3ｍである。床面を検出した標高は、北西側で20.1～20.2ｍである。竪穴壁は、削平が著しく検出することができなかった。壁溝は、北西辺で3.1ｍ、北東辺で1.8ｍ、南東辺で1.2ｍ検出され、幅は0.08～0.28ｍ、深さ0.04～0.16ｍを測る。北東辺の南東側よりでは、壁溝が途切れる。南西辺の壁溝は、削平によって検出することができなかった。主柱穴は、1755・1764・2158・2373の4ヶ所で確認されており、主柱穴の平面形は円形で、直径は0.16～0.48ｍ、深さ0.13～0.37ｍを測る。主柱穴の埋土は砂礫の混じる10YR3/1黒褐色土であり、柱穴間の距離は3.0～3.35ｍである。住居北側と東側で5YR3/1オリーブ黒色土と10YR7/6明黄褐色土の貼床が確認された。しかし、削平が著しいため、検出面が本来の床面であるのかどうかは不明である。この竪穴住居では、他の住居でみられるような不整形土坑が検出されていない。遺物は、主柱穴と壁溝から土師器片と弥生土器片が出土しているが、細片であるため図化しえたのは、1点（19）である。(19) は、庄内式併行時期の鉢で、底部はドーナツ状を呈する。外面の成形はタタキ成形である。色調は、10YR7/4にぶい黄橙色を呈し、胎土に長石・小礫を含み焼成は良好である。

8号竪穴住居（第38図）　K7-6-A15-b・9に位置する竪穴住居である。平面形は復元一辺5.5ｍを測る方形で、面積は30㎡と推定される。住居の北側は、東から西方向の溝状の撹乱などに切られ、詳細は不明である。また、全体的に削平を受けており、特に住居東隅は削平が著しく、壁溝などの遺構は検出されなかった。主軸は、N-39°-Wであり、検出面の標高は、北西側で20.0ｍ、南東側で20.1ｍである。床面の標高は、削平のため不明である。竪穴壁は削平が著しく残存していな

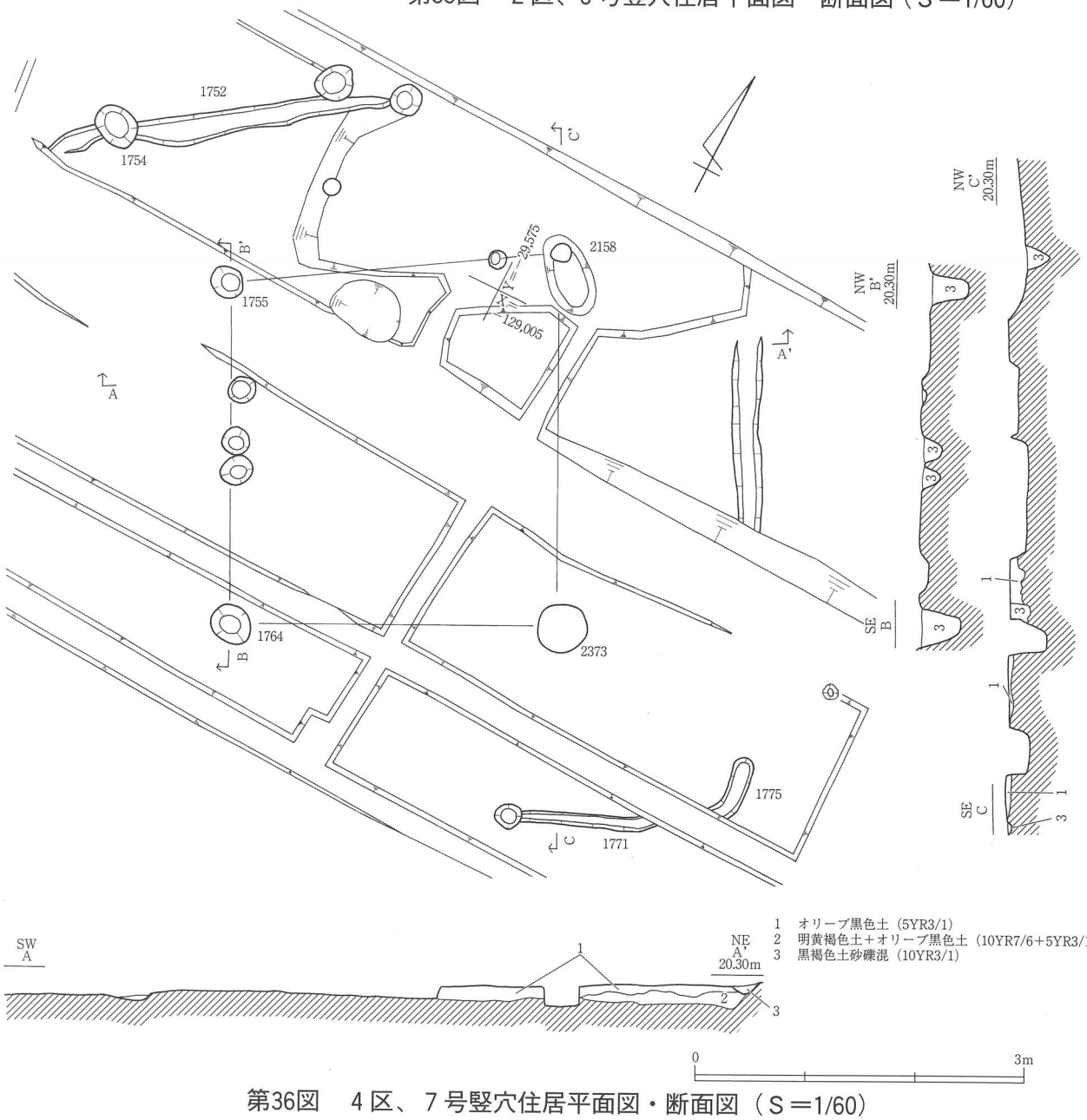
い。壁溝は、北西辺で1.7ｍ、南西辺で3.8ｍ、南東辺で1.9ｍ検出され、幅は0.10～0.22ｍ、深さ0.06～0.1ｍを測る。西隅ではなくなる。また、壁溝2146から住居内北側0.8ｍのところには、2146に平行する長さ3.0ｍの溝が検出されている。この溝は、北東端は途切れるものの、南西端は住居の南西辺壁溝1589につながっている。主柱穴は1595・1597・1599の３ヶ所で検出されてお



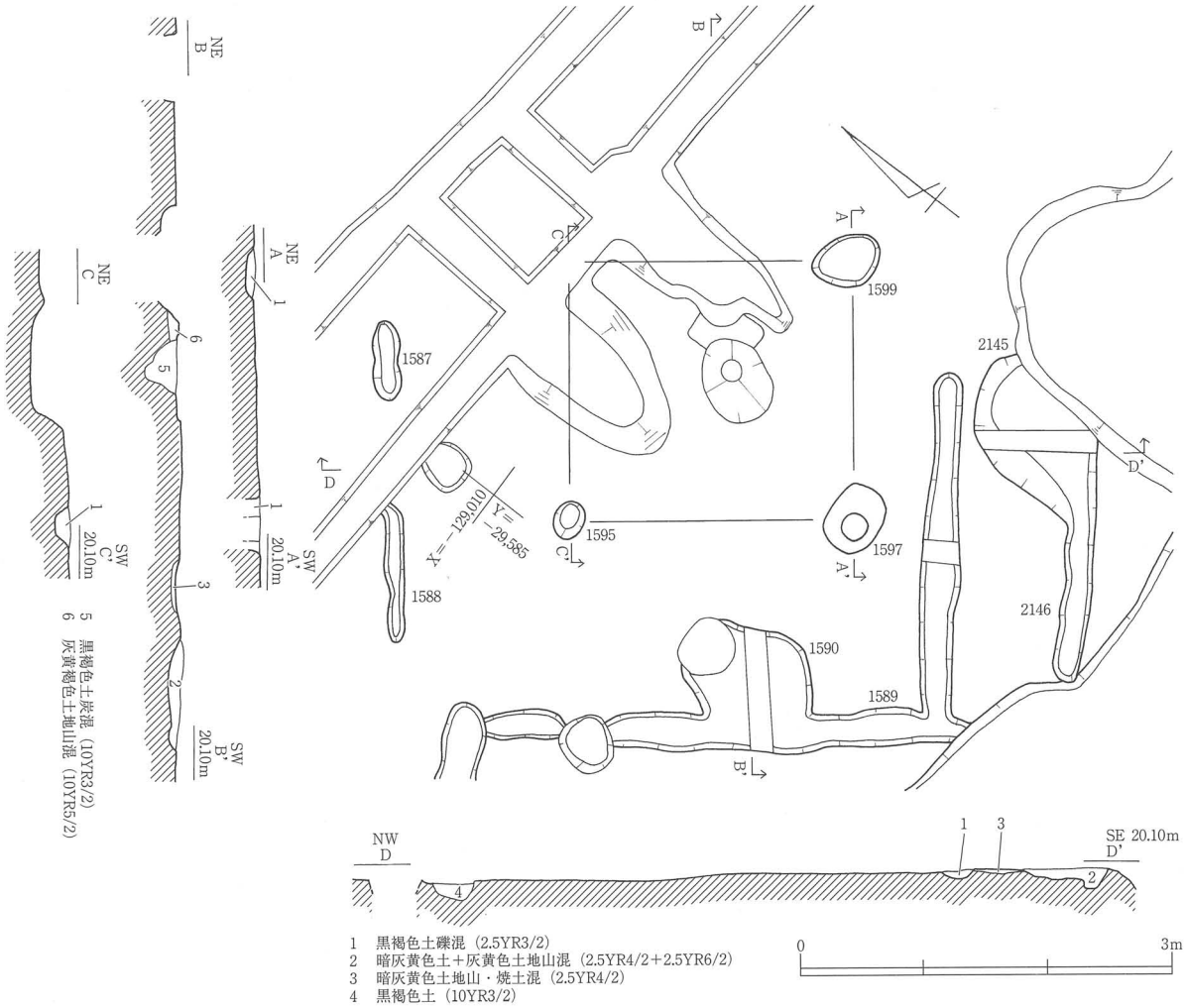


第37図　４区、７号竪穴住居内出土遺物実測図（Ｓ＝1/4）

第35図　２区、６号竪穴住居平面図・断面図（Ｓ＝1/60）



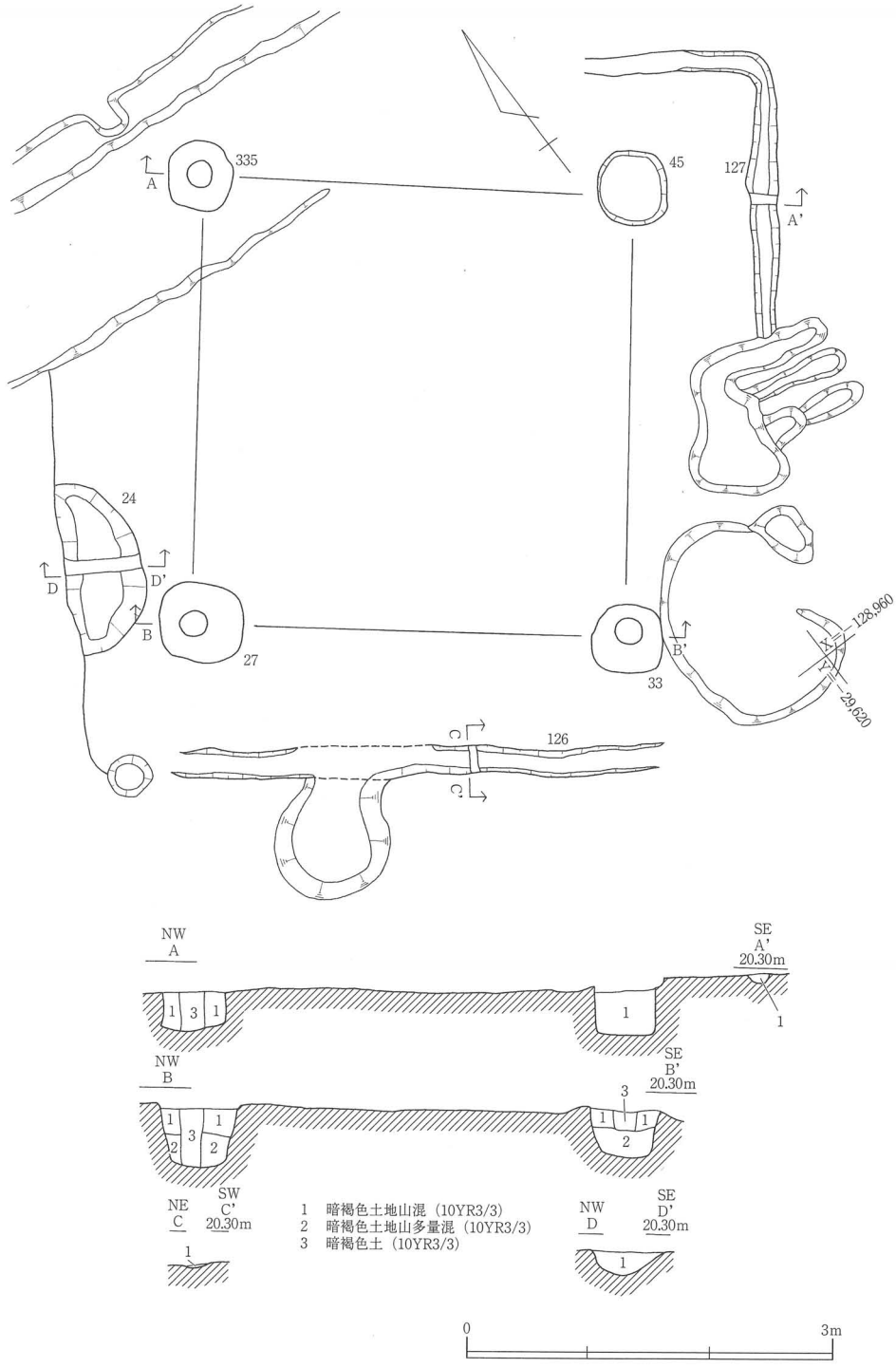
第36図　４区、７号竪穴住居平面図・断面図（Ｓ＝1/60）



第38図　4区、8号竪穴住居平面図・断面図（S＝1/60）

り、北隅のみ撹乱によって確認できなかった。主柱穴の平面形は円形で、直径は0.28～0.50m、深さは0.06～0.10mを測る。3つの主柱穴は、地山ブロックの混じる2.5YR3/2黒褐色土によって埋まっていた。主柱穴間の距離は、約2.2mである。また、南東辺と南西辺の中央で、それぞれ不整形土坑が検出されている。南東辺の2145は長軸0.94m、短軸0.38m、深さ0.06～0.20mを測り、南西辺の1590は長軸1.00m、短軸0.40m、深さ0.04～0.15mを測る。2つの不整形土坑の埋土は、炭化物と地山ブロックが混じる2.5YR4/2暗灰黄色土であり、土坑周辺には、貼床と考えられる2.5YR4/2暗灰黄色土が確認された。住居内での土坑の位置や検出状況などから、これらの不整形土坑は、4号住居で検出された不整形土坑と性質上、同じものと考えられる。この住居では、南東辺において、壁溝と考えられる溝を含めて2条の溝が確認でき、また不整形土坑も2ヶ所で検出されている。このことから、住居の建て直しの可能性を想定できるが、主柱穴などには建て直した痕跡はみられず、詳細は不明である。遺物は、南東辺の不整形土坑2145、主柱穴、壁溝から土師器片が出土しているが、いずれも細片のため図化しえない。

5区　9号竪穴住居（第39図）　K7-10-O15、16-f・1、10に位置する竪穴住居である。平面形は復元一辺6.0mを測る方形で、面積は36㎡と推定される。住居の北隅と南隅が撹乱をうけているほか、全体に削平が及んでおり、竪穴壁を検出することはできなかった。主軸はN-39°-Eであり、

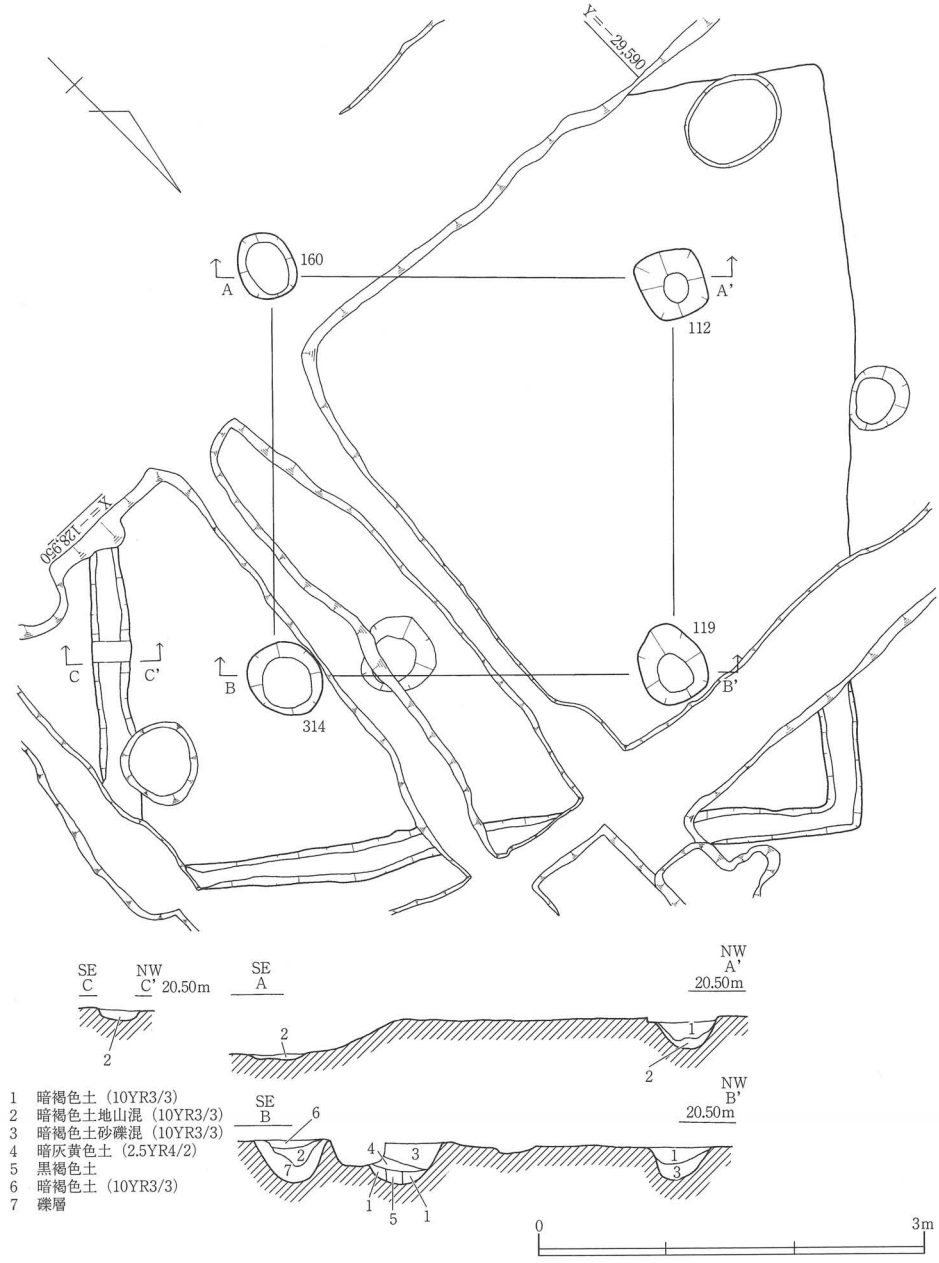


第39図　5区、9号竪穴住居平面図・断面図（S＝1/60）

検出面の標高は、20.1～20.3ｍである。削平のために床面の標高は不明である。壁溝は、撹乱および削平をうけている北辺・西辺・南隅では確認できなかったが、東側127では2.3ｍ、南西側126では4.1ｍが検出された。幅は0.16～0.28ｍで、深さは0.01～0.08ｍである。また、主柱穴は27・33・45・335の４ヶ所で確認されており、主柱穴の平面形は円形で、直径0.54～0.68ｍ、深さ0.32～0.50ｍを測る。柱穴間の距離は約3.7ｍである。さらに円形の柱痕跡も東隅の45を除いて確認されており、直径は0.20～0.21ｍ、検出長は0.16～0.50ｍである。壁溝と主柱穴の埋土は、地山ブロックが混ざる10YR3/3暗褐色土である。このほかの住居にともなう遺構としては、直径1.42

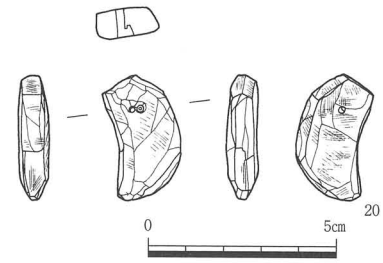
m、深さ0.20mの不整形土坑24が、北辺の南よりに検出された。埋土は柱穴や壁溝の埋土と共通しており、その位置と規模などから、4区の方形住居で確認されたものと同様のものであると考えられる。遺物は、不整形土坑から庄内式併行期に属すると考えられる土師器が出土している。また、壁溝および柱穴からも、弥生土器、土師器が出土しているが、いずれも細片のため図化しえない。

10号竪穴住居（第40、41図）　K7-10-O15-e・9、10に位置する竪穴住居である。平面形は、復元一辺6.1mを測る方形で、面積は37㎡と推定される。住居の南隅が撹乱をうけており、また全体的に削平が著しいため、住居の西側では壁溝などの遺構は検出できなかった。主軸はN-43°-Eであり、検出面の標高は、20.3～20.4mである。削平により、床面の標高は不明である。削平が全体に及んでいるため、竪穴壁は検出されなかった。一方、壁溝は、北東辺で5.4m、南東辺で2.2



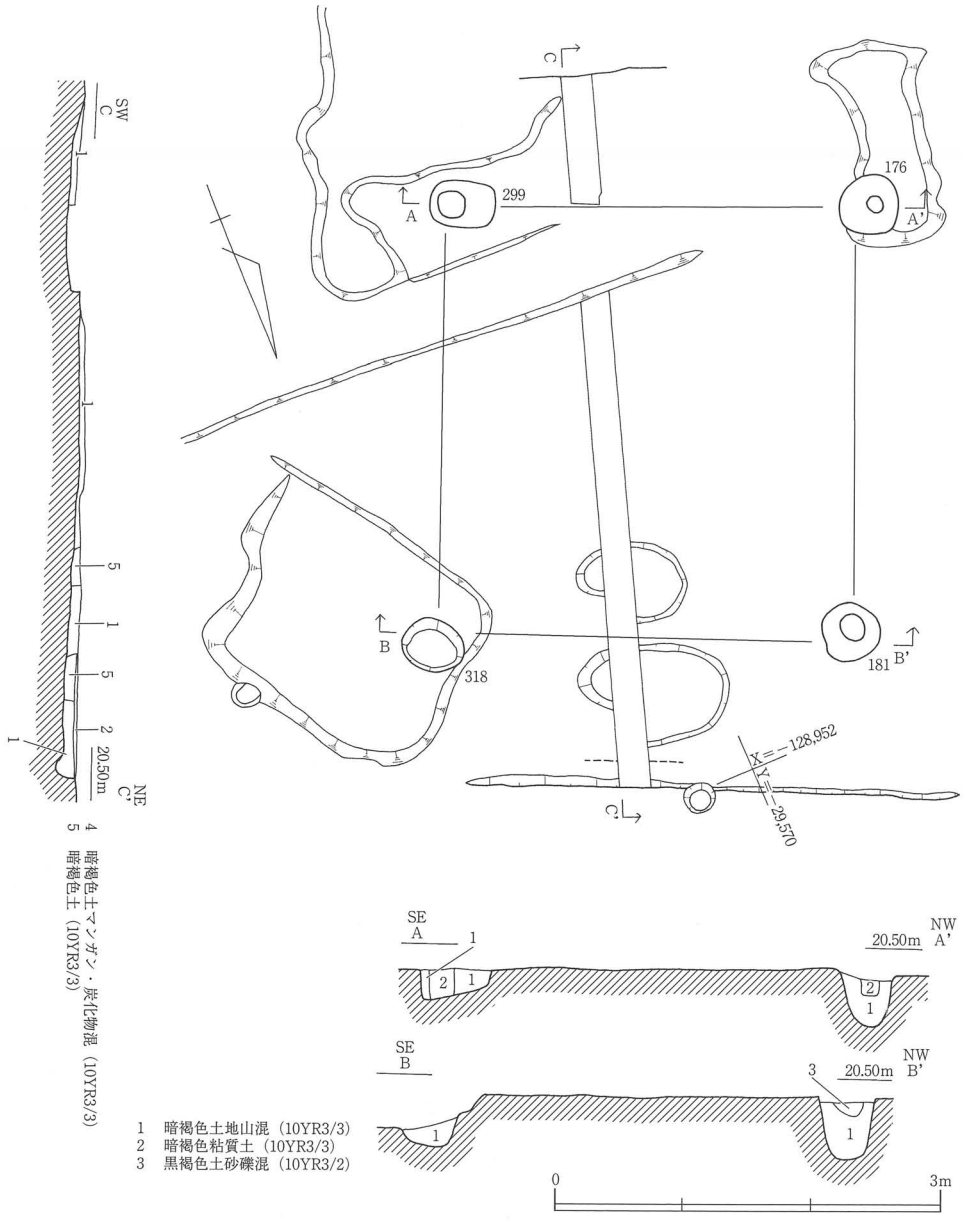
第40図　5区、10号竪穴住居平面図・断面図（S＝1/60）

m、北西辺で1.2mを確認することができた。幅は0.20～0.30m、深さは0.03～0.08mを測る。また、主柱穴も112・119・160・314の4ヶ所で検出され、主柱穴の平面形は円形、直径は0.5～0.52m、深さは0.24～0.34mを測る。柱痕跡は確認されなかった。主柱穴間の距離はおよそ3.2mである。主柱穴の埋土は、10YR3/3暗褐色土に地山ブロックや砂礫がまじるものである。このほかに、住居にともなう遺構はなく、同形で同規模の9号竪穴住居において検出されている不整形土坑は、検出されなかった。遺物は、覆土から5世紀後半の滑石製勾玉(20)とサヌカイト剥片が出土している。



第41図　5区、10号竪穴住居勾玉実測図(S=1/2)

11号竪穴住居（第42図）　K7-10-O15-e・7、8に位置する竪穴住居である。平面形は方形を呈する。中央部を除いて全体に削平がおよび、竪穴壁は検出されなかった。とくに東側と西側では削平が著しく、住居の範囲が確認できたのは、南辺中央部で1.2m、

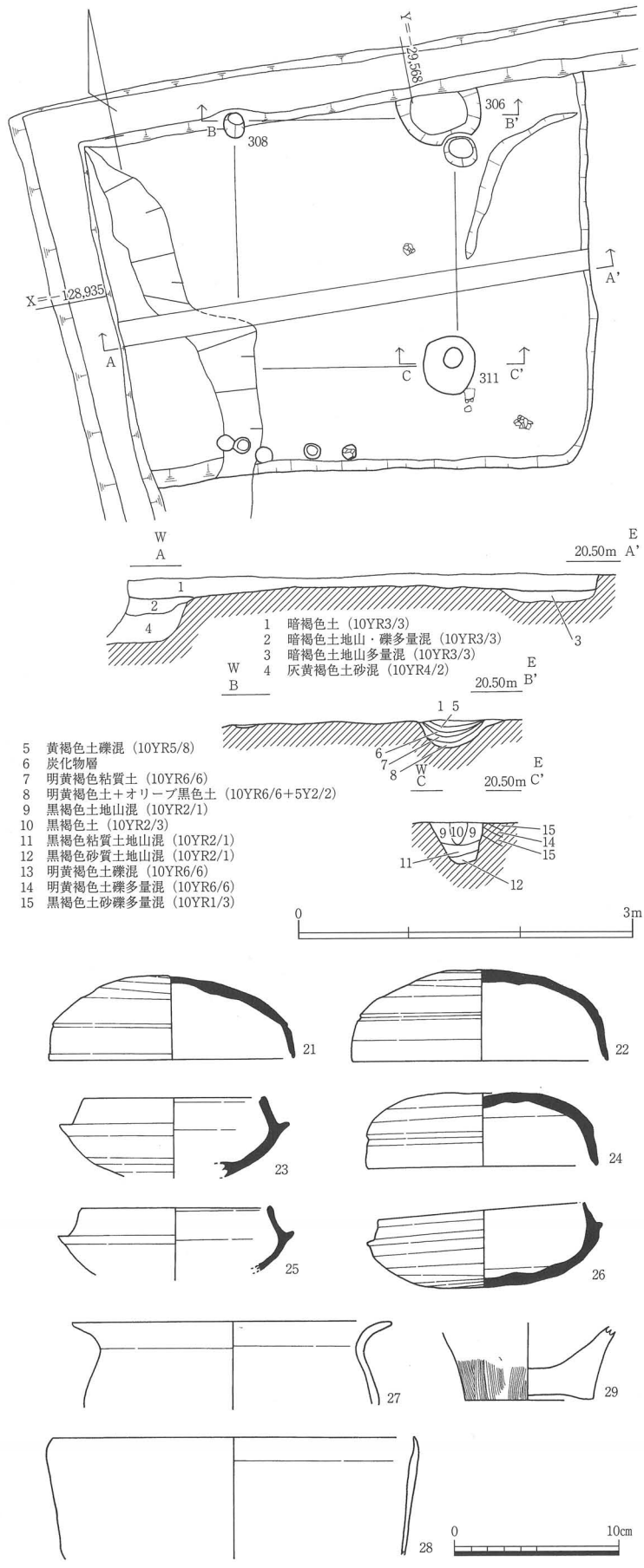


第42図　5区、11号竪穴住居平面図・断面図（S＝1/60）

北辺中央部で3.9ｍにとどまった。このため住居の詳しい規模や面積などは不明である。主軸はN-24°-Eであり、検出面の標高は、20.4ｍである。住居の中央部に覆土が残っており、この覆土を除去した後の床面の標高は20.3ｍである。竪穴住居に伴う遺構としては、壁溝が北辺中央部にわずかに検出することができた。幅は0.18ｍ、深さ0.06ｍを測る。そのほかに、主柱穴が176・181・299・318の４ヶ所で確認されている。主柱穴の平面形は円形で、直径は0.42～0.56ｍ、深さは0.40～0.48ｍである。柱痕跡も176・181・299の３ヶ所で検出されており、その直径は0.14～0.22ｍで、検出長は0.14～0.16ｍを測る。主柱穴は、覆土と同じ、地山ブロックが混じる10YR3/3暗褐色土によって埋まっていた。柱穴間の距離は、およそ3.3ｍである。このほかに住居に伴う遺構は確認されず、他の方形竪穴住居にみられる不整形土坑も検出されなかった。遺物は、主柱穴や覆土から、土師器片や須恵器片が出土しているが、いずれも細片のため図化しえない。

６区　12号竪穴住居（第43、44図）

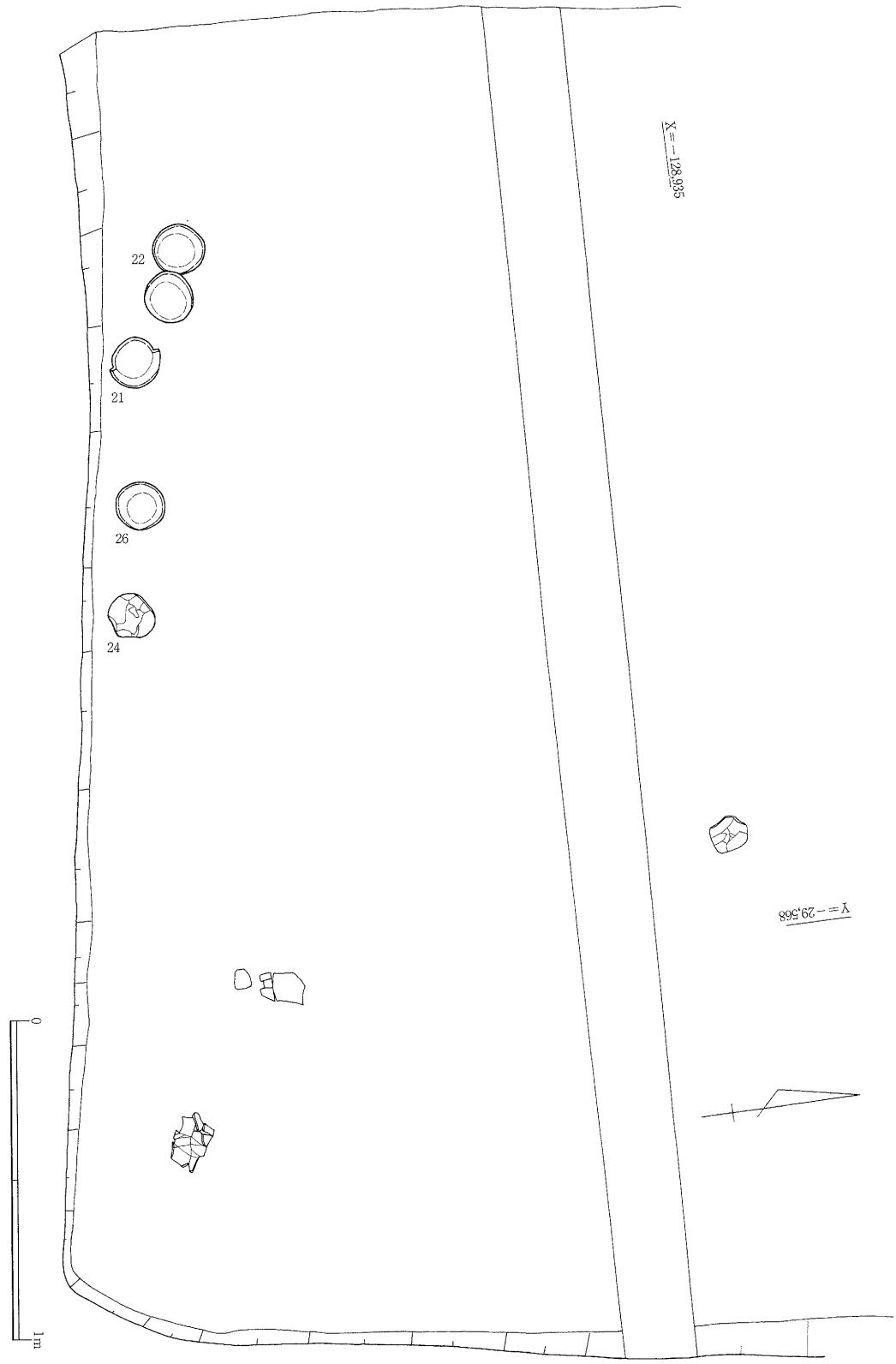
K7-10-O15-d・7、8に位置する竪穴住居である。住居西側で、弥生時代の落ち込みをきって築かれており、平面形は方形を呈する。住居の北辺と西辺は調査区外へと続く。したがって、住居の範囲は南辺で3.9ｍ、



第43図　６区、12号竪穴住居平面図・断面図（Ｓ＝1/60）・出土遺物実測図（Ｓ＝1/4）

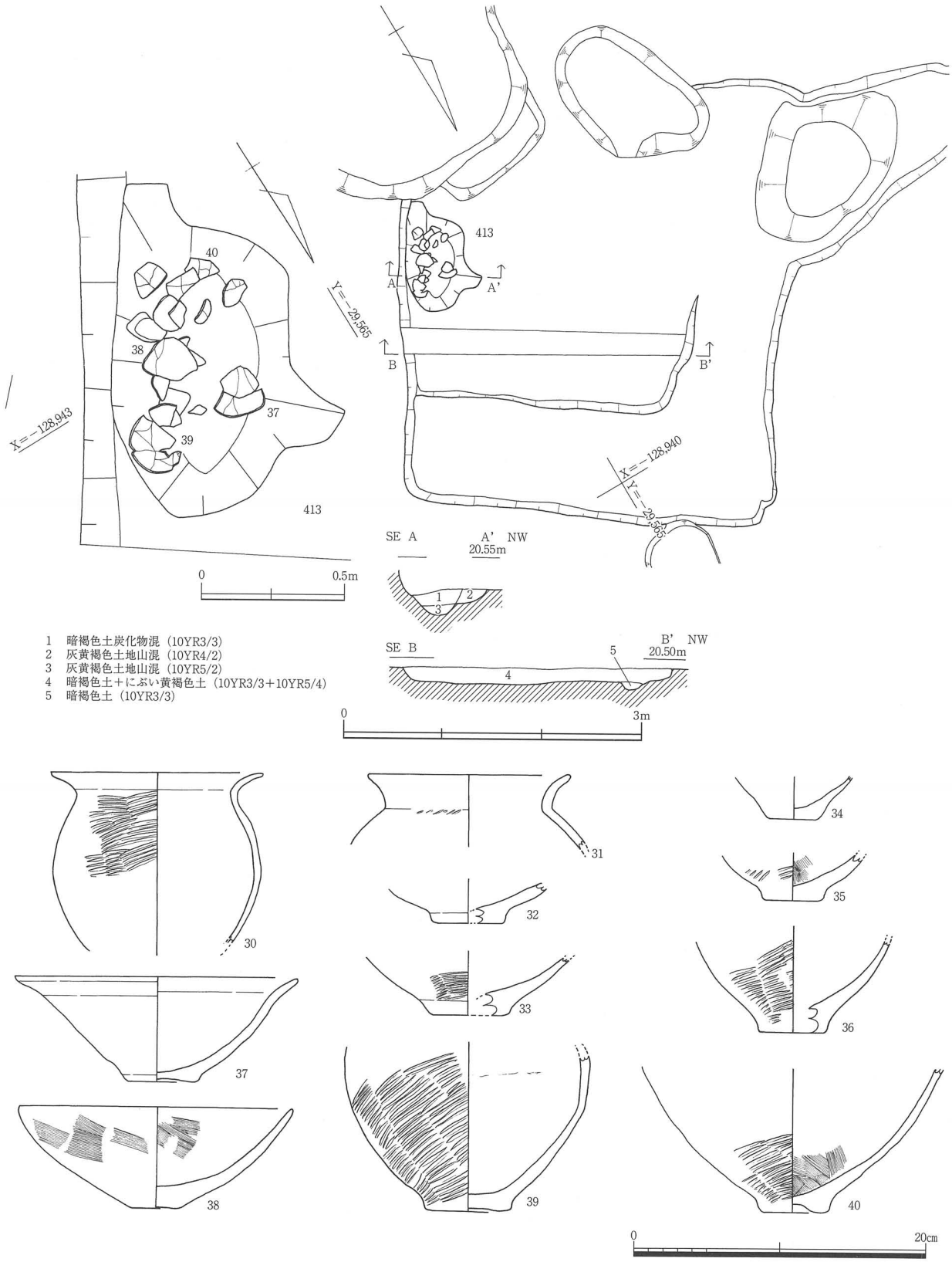
東辺で3.6ｍを確認するにとどまり、住居の規模等の詳細は不明である。主軸はN-34°-Eであり、検出面の標高は、20.4ｍであり、覆土を除去した床面の標高は、20.20～20.30ｍである。削平が全体に及んでいるものの、住居南東では竪穴壁を検出することができた。主柱穴は、306・308・311の3ヶ所で確認されている。柱穴の平面形は円形であり、直径は0.5～0.78ｍ、深さは0.26～0.39ｍを測る。柱痕跡も１ヶ所で確認されており、その直径は0.14ｍ、検出長は0.21ｍである。主柱穴間の距離はおよそ2.1ｍを測る。また、住居の北東部において、地山が混じる10YR3/3暗褐色土を用いた貼床が検出されている。一方、他の方形竪穴住居にみられる不整形土坑は検出されず、壁溝も確認できなかった。壁溝は、覆土の状態や貼床のあり方から考えると、当初から存在していなかった可能性が考えられる。遺物は、覆土から須恵器（21～26）、土師器（27、28）、弥生土器（29）が出土している。出土状況は、第44図に示している。(21）はほぼ完形の須恵器坏蓋である。外面には回転ヘラケズリ、内面には回転ナデ、内面天井部には一定方向ナデが施される。外面の天井部と口縁部の境には鋭い稜線が巡り、口縁端部内面にも稜線がめぐる。(22）もほぼ完形の須恵器坏蓋である。焼成不良のために軟質である。外面は回転ヘラケズリ、内面天井部は不定方向ナデ、他は回転ナデで仕上げられる。外面の天井部と口縁部の境の稜は凹線状になっており、口縁端部内面の稜も同様に緩くなっている。(23）は底部が欠損する須恵器坏身である。外面には回転ヘラケズリ、他は回転ナデが施される。かえりは長めで端部に稜が巡る。(24）は完形に近い須恵器坏蓋である。口縁部から天井部の外面に自然釉が付着している。外面は回転ヘラケズリ、内面は不定方向ナデ、その他は回転ナデで仕上げられている。外面の口縁部と天井部の境には、凹線状になった稜が巡り、口縁端部内面にめぐる稜線もやや緩くなっている。(25）は底部が欠損する須恵器坏身である。焼成は不良で、内外面には回転ナデが施される。(23）と同様に、かえりは長めで端部に稜が巡る特徴をもつ。(26）もほぼ完形の須恵器坏身である。受け部と天井部に自然釉がみられるが、外面内面ともに摩滅が著しいため、本来は全体に付着していた可能性がある。(23）や（25）と異なり、かえりが比較的短く端部内面にも稜は巡らない。以上述べた特徴から、これらの須恵器は６世紀前半とものと考えられる。(27）は庄内式併行期のＶ様式系甕の口縁部である。口縁部内面に緩い稜をもち、口縁部つまみあげなどを行わない。内外面ともに摩滅が著しく調整は不明である。胎土は直径１～２㎜の石英・長石・チャート等を含む在地のものと推測できるものである。(28）は口縁部内面がゆるく内彎する土師器甑の口縁部である。内外面ともに摩滅のため調整は不明である。7世紀に比定される。(29）は弥生時代中期の壺底部である。内面はナデ調整、外面は縦方向のハケ調整が施される。

13号竪穴住居（第45図）　K7-10-O15-d、e・6に位置する竪穴住居である。平面形は、北東辺で3.6ｍ、北西辺で4.5ｍを測る方形で、面積は約16㎡と推定される。これは同時代と考えられる他の方形竪穴住居と比較すると、小規模なものと位置づけられる。住居の南西側半分は撹乱をうけており、遺構を検出することはできなかった。主軸はN-37°-Eであり、検出面の標高は20.4ｍで、覆土を除去した後の床面の標高は20.2～20.3ｍである。竪穴住居に伴う遺構として、住居の北東



第44図　6区、12号竪穴住居遺物出土状況図（部分）（S＝1/20）

辺から北西辺にかけて、幅1.1ｍのベッド状遺構が検出されている。ベッド状遺構の検出面標高は、20.3ｍであり、床面との比高差は0.09～0.14ｍほどになる。また、住居南西辺中央部に長軸1.12ｍ、短軸0.58ｍ、深さ0.26ｍの不整形土坑413が検出された。その規模や住居内での位置などから考えて、他の竪穴住居の不整形土坑と同様の施設と考えられる。ここからは、庄内式併行期

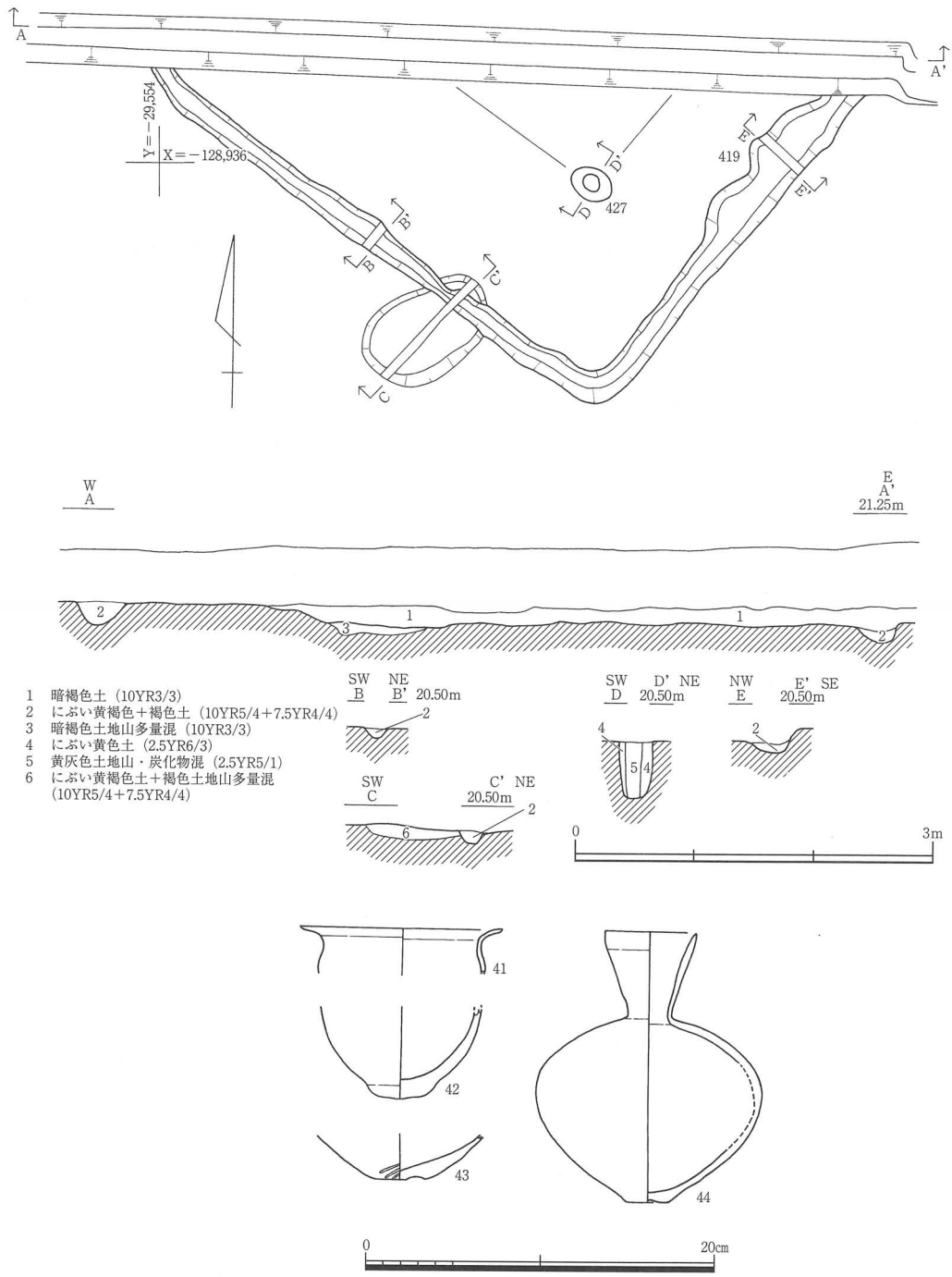


第45図　6区、13号竪穴住居平面図・断面図（S＝1/60）・遺物出土状況図（S＝1/20）・出土遺物実測図（S＝1/4）

に属するとおもわれる土師器37～40が出土している。一方、比較的残りはいいものの、主柱穴や壁溝は検出されなかった。覆土やベッド状遺構のあり方から考えると、主柱穴や壁溝は当初から存在していなかった可能性が考えられる。遺物は、住居覆土から、土師器（30～36）が、不整形土坑413から土師器（37～40）が出土している。（31）は底部を欠損する庄内式併行期のⅤ様式系

甕である。右上がりのタタキが施されており、口縁部は緩く外反し、端部のつまみあげなどをおこなわず横ナデ調整が施される。口縁部外面にタタキはみられない。内面はナデで仕上げられる。(31) は、庄内式併行期のV様式系甕である。口縁は稜をもたずに緩やかに外反し、端部をつまみあげも行われない。外面は右上がりのタタキで仕上げられているが、口縁部にタタキの痕跡はみられない。内面は摩滅が著しく調整は不明である。(32) は弥生土器の壺底部である。外面内面ともに摩滅が著しく調整は不明である。(33) は、庄内式併行期の甕底部である。内面は摩滅のために調整が不明瞭であるが、外面は右上がりのタタキ調整で仕上げられている。タタキ調整の痕跡は外面底部下端に及んでいない。(34) は庄内式併行期の甕底部である。外面内面ともに摩滅のため調整不明である。(35) は庄内式併行期の甕底部である。外面は右上がりのタタキが施されるが底部下端までには及んでいない。内面は不定方向のハケ調整が行われる。(36) は、庄内式併行期の甕底部である。外面には若干右上がりのタタキ調整、内面には不定方向のハケ調整が施される。外面底部下端までタタキの痕跡は及んでいない。(37) は、口縁部が緩やかに外反する庄内式の鉢である。外面内面ともに摩滅が著しく調整は不明である。(38) は、ほぼ完形の庄内式併行期の鉢である。外面は斜め方向のハケ調整、内面も斜め方向のハケ調整で仕上げられるが、底部付近は摩滅のために調整が不明である。(39) は、庄内式併行期の甕の胴下半部から底部である。外面は右上がりのタタキ調整、内面はナデ調整が行われる。内面胴部最大径には粘土紐接合痕がみられる。底部は下端までタタキ調整が行われており、底部輪台技法によって製作された可能性がある。(40) は、庄内式併行期の甕の底部である。外面は右上がりのタタキが施され、内面は斜め方向のハケ調整後ナデ調整によって仕上げられている。外面底部下端には、タタキの痕跡が明瞭に残っていることから、底部輪台技法によって製作された可能性がある。

14号竪穴住居（第46図）　K7-10-O15-d・5、6に位置する方形の竪穴住居である。住居の北半分は調査区外へ続く。したがって、住居南西辺が4.8m、南東辺が3.4m確認できるだけであり、住居の詳細な規模は不明である。主軸はN-10°-Eであり、検出面の標高は、20.4mであり、覆土を除去した後の床面の標高は、20.30mである。竪穴住居に伴う遺構として、主柱穴427が1ヶ所のみ確認されている。主柱穴の平面形は円形で、直径は0.28m、深さは0.82mである。これには柱痕跡も確認されており、その直径は0.13mで、検出長は0.82mを測る。他の3ヶ所の柱穴は、調査区外にあると考えられるため、主柱穴間の距離は不明である。また、壁溝は、確認されている住居の範囲をすべて巡る形で検出され、幅は0.18～0.26m、深さ0.04～0.08mを測る。さらに、住居南東辺には、短軸0.46m、長軸1.48m、深さ0.13mの不整形土坑419が確認された。その規模や住居内での位置などから考えると、他の竪穴住居の不整形土坑と同様の性格をもった施設と考えられる。この不整形土坑からは、土師器鉢または甕（42）が出土している。遺物としては、住居覆土から土師器（43、44）、主柱穴427から土師器（41）が出土している。(41) は、庄内式併行期のV様式系甕口縁部である。口縁屈曲部は緩いカーブを描き、器壁が比較的薄い。外面内面共に摩滅が著しく調整は不明である。(42) は、庄内式併行期の鉢または甕の底部である。外面は、

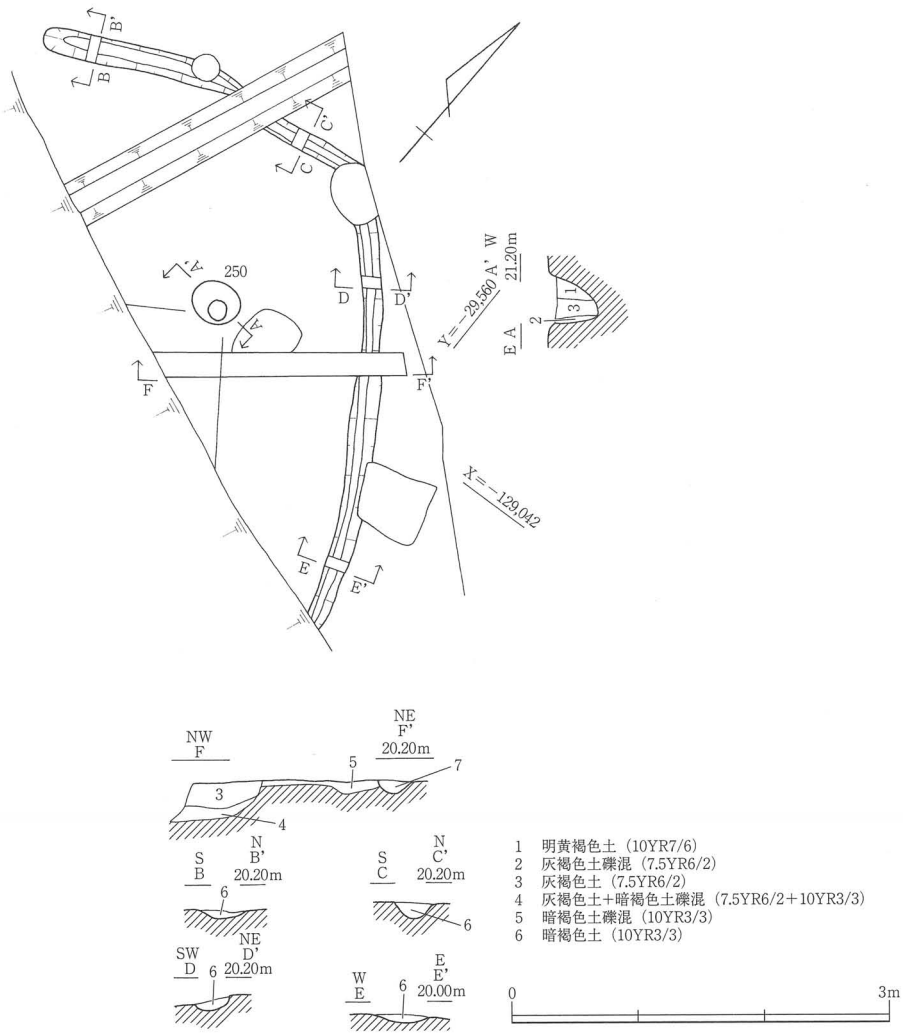


第46図　6区、14号竪穴住居平面図・断面図（S＝1/60）・出土遺物実測図（S＝1/4）

水平方向のタタキを施した後、縦方向のナデ調整を行っている。内面はナデ調整である。また、底部が平坦ではなく若干膨らんでおり、底部外面にもタタキの痕跡がみられる。内面に明確な痕跡などはみられないが、底部輪台技法を用いている可能性がある。（43）は庄内式併行期の甕底部である。内外面ともに摩滅が著しいが、外面は右上がりのタタキが施されている。（44）は、庄内式の直口壺である。内面はナデ調整、外面は摩滅のため調整が不明である。底部内面にはハケ調整が底部中央から外側へむかって螺旋状にハケが施されている。

9区　15号竪穴住居（第47図）　K7-6-A15-e・6、7に位置する方形の竪穴住居である。住居の南半分以上が、基底面までおよぶ撹乱をうけて失われている。したがって、東辺3.7m、北辺2.8m

確認できるだけであり、住居の詳細な規模は不明である。主軸はN-36°-Wであり、検出面の標高は、20.0ｍである。覆土が削平のため残存していないことから、床面の検出標高は不明である。竪穴住居に伴う遺構として、主柱穴250が１ヶ所のみ確認されている。主柱穴の平面形は円形で、直径は0.38ｍ、深さは0.38ｍであり、柱痕跡が残存していた。柱痕跡は円形で直径0.14ｍ、検出長0.38ｍを測る。主柱穴の埋土は10YR7/6明黄褐色土である。また、壁溝は、確認された住居の範囲において途切れることなく検出され、幅0.11～0.20ｍ、深さ0.06～0.11ｍを測る。壁溝の埋土は10YR3/3暗褐色土である。そのほかに、主柱穴250の周辺で10YR3/3暗褐色土に地山の混じる土による貼り床を確認することができた。遺物は、主柱穴250および壁溝から弥生土器、土師器須恵器などが少量出土しているが、いずれも細片のため図化しえない。（松尾）



第47図　９区、15号竪穴住居平面図・断面図（Ｓ＝1/60）

土坑

3区　590（第48、49図）　K7-10-O16-e、f・7で検出した。東側は消えてなくなる。検出長5m、短軸2.5mの不整形である。深さは北側で深く0.3m、南に向かって浅くなっている。埋土は10YR4/2灰黄褐色土1層である。須恵器の坏身（45、46）、甕（47）、壺（48）が出土した。（48）の色調は、N6/0灰色で胎土中に長石・砂礫を含む。6世紀前半に比定される。

727（第50図）K7-10-O16-d、e・7で検出した。南側を撹乱で切られる。復元直径1mの円形の土坑である。深さが0.6mを測り、埋土は2層に分層される。上層の層厚は約0.5mで灰黄褐色土、下層の層厚は約0.1mでN3/0暗灰色土である。埋土からほぼ完形の須恵器の坏身（49）と土師器の甕（50）等が出土した。（50）は平底を呈し、外面にハケメ、内面にユビ押さえが確認される。色調は10YR5/6黄褐色で、胎土に金雲母、角閃石、長石を含み、焼成は良好である。

4区　1919（第51図）　K7-6-A15-b・8で検出した。長軸3.4m、短軸1.8mを測り、平面形は不整形である。深さは0.1mで埋土は10YR2/1黒色土と黒色土に地山ブロック土混の2層に分層できるが境界は明瞭に判別できない。埋土中に多量の土器の小破片が混じっていた。

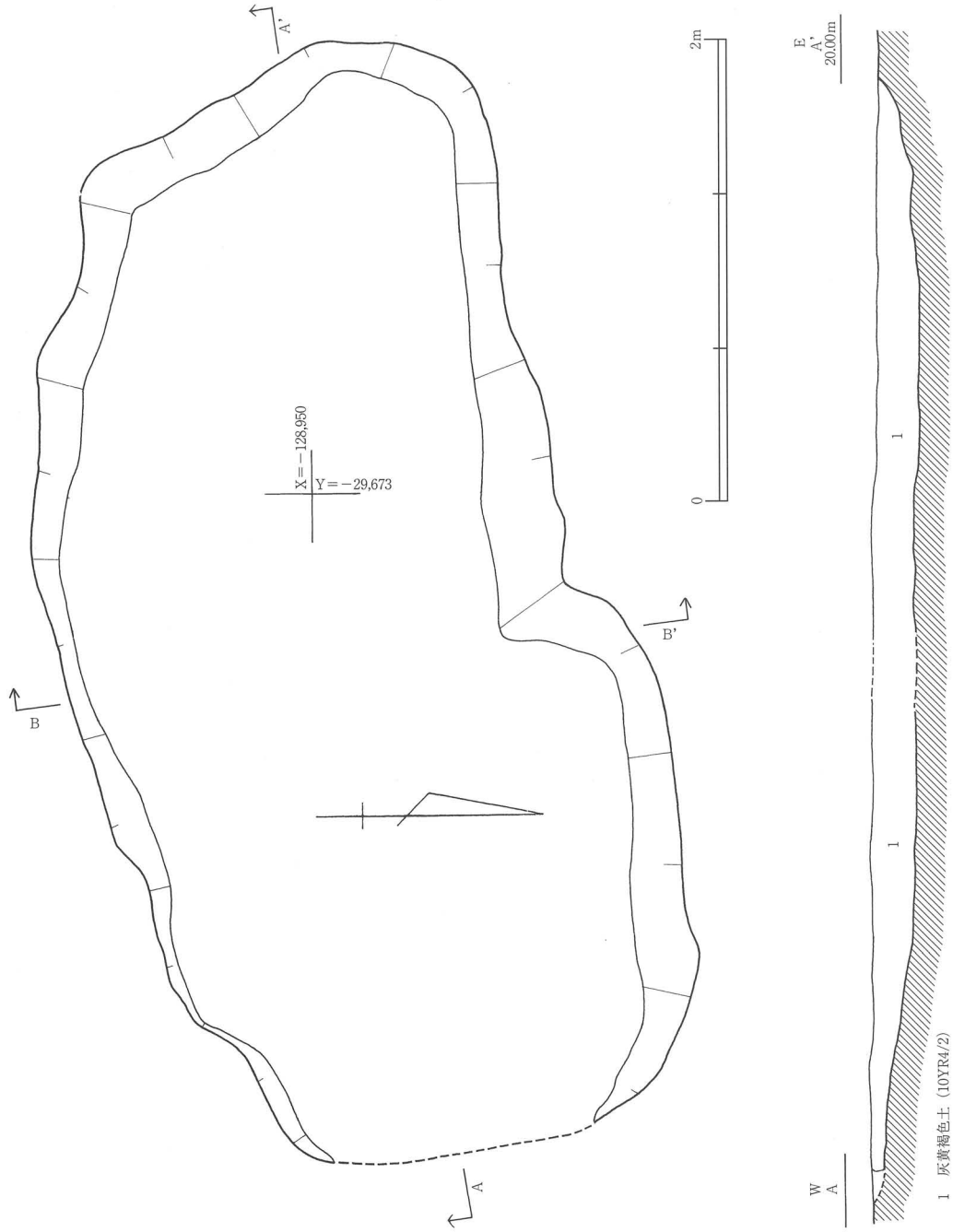
2区　4～6層出土遺物（第52図）　自然流路内出土遺物である。自然流路の堆積は、4区と同じ様相をしており、基本層序（第3章1項）で記述している。（51）は須恵器の坏蓋、（52、53）は弥生時代中期の壺底部である。

4区　第3層出土遺物（第53、54図）　4区の自然流路の堆積層のうち、第3層から多量に土器が出土した。時期は下層で弥生時代前期から中期、上層で庄内式併行期から中世までを包含する。比率的には弥生時代の中期の土器が多い。（54）は壺の蓋、（55～57、59、61）は、壺ないし甕である。（55、59）は口縁端部に刻み目が施されている。色調はにぶい黄橙から茶褐色を呈し、胎土中には、長石、石英を多く含み、焼成は良好である。（58、60、62～82）は中期の壺である。（65）は口頸部に直線紋7条が施され、（68）は直線紋と波状紋が施されている。（66、70）は口縁端部下端に刻み目が施され、（69）は口縁端部下端に工具で強く、切り合いをもちながら刻み目が施される。色調はにぶい黄橙から茶褐色を呈し、胎土中には、長石、石英、小礫を多く含み、焼成はやや軟質のものが多い。生駒西麓山の胎土をもつものも見受けられる。（83）は須恵器の坏蓋、（84、85）は須恵器の坏身、（87）は須恵器の台部で、奈良時代に属する。（86）は土師器の坏身、（89）は土師器の甕である。平安時代に属する。（88）は土師器の甑で、外面のハケメは丁寧である。（井西）

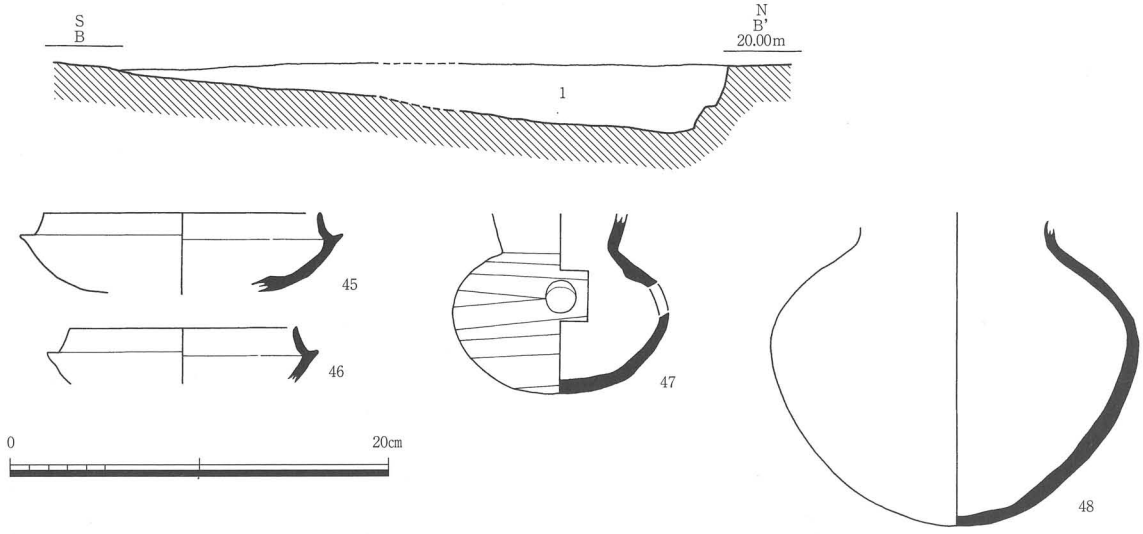
古代から中世

掘立柱建物

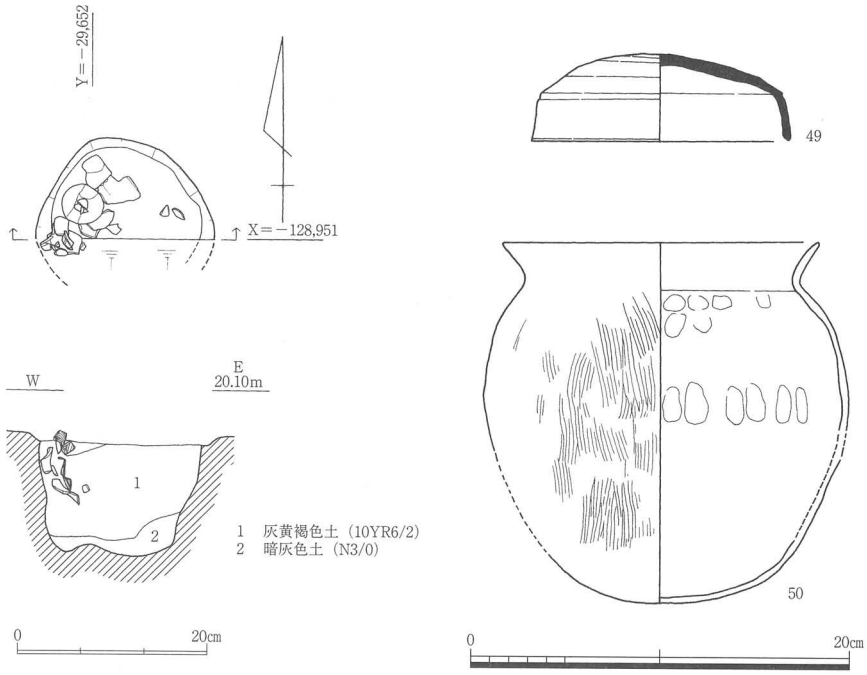
2区　16号掘立柱建物（第55図）　K7-10-O15、16-c・1で検出した桁行2間、梁間2間の方形の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行、梁間とも1.7mで、桁行、梁間長とも3.4mを測る。床面積は約12㎡である。主軸の方向はN-33°-Wで、検出面の標高は20.3mを測る。柱穴は、径0.2～0.3



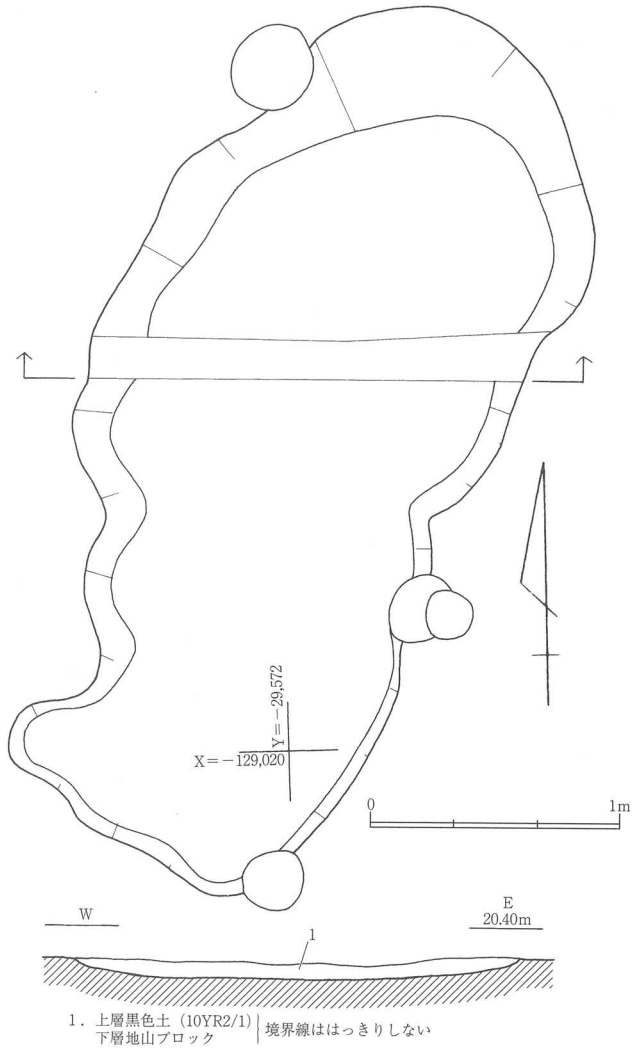
第48図　3区、590平面図・断面図（S＝1/30）



第49図　3区、590出土遺物実測図（S＝1/4）



第50図　3区、727平面図・断面図・遺物出土状況図（S＝1/20）・出土遺物実測図（S＝1/4）



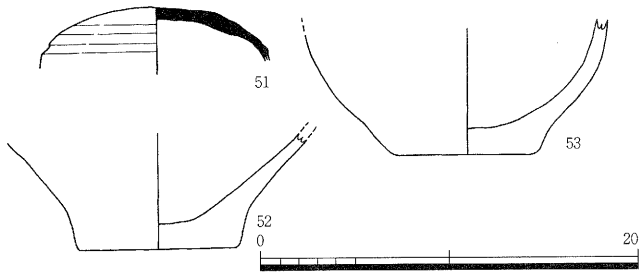
第51図　4区、1919平面図・断面図（S＝1/30）

mの円形の掘方を呈し、316で径0.1mの柱痕跡を検出した。深さは0.2～0.25mを測る。遺物は出土しなかった。

3区　17号掘立柱建物（第56図）　K7-10-O16-e、f・10で検出した桁行2間、梁間2間の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行2.3～2.4m、梁間1.3～1.5mで、桁行長は4.7m・4.9m、梁間長は3.0mを測る。床面積は約14㎡である。主軸の方向はN-5°-Eで、検出面の標高は19.8mを測る。

柱穴は、径0.2～0.4mの円形の掘方を呈し、521・527・545で径0.1mの柱痕跡を検出した。深さは0.2～0.3mを測る。遺物は533・544から土師器が出土したが細片のため図化しえなかった。

18号掘立柱建物（第57図）　K7-10-O16-f、g・10で検出した桁行2間、梁間2間の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行梁間とも2.3m～2.4mで、桁行長4.9m、梁間長4.8mを測り、床面積は約24㎡である。主軸の方向はN-22°-Wで、検出面の標高は19.8mを測る。柱穴は、長辺0.4～0.6mの楕円形の掘方を呈し、476・478・505から径約0.2mの柱痕跡を検出した。深さは0.3～0.4mを測る。遺物は493からサヌカイト片が出土したほか、475・478・481・505から土師器、須恵器などが出土したが、いずれも小片で図化しえなかった。



第52図　2区、第4～6層出土遺物実測図（S＝1/4）

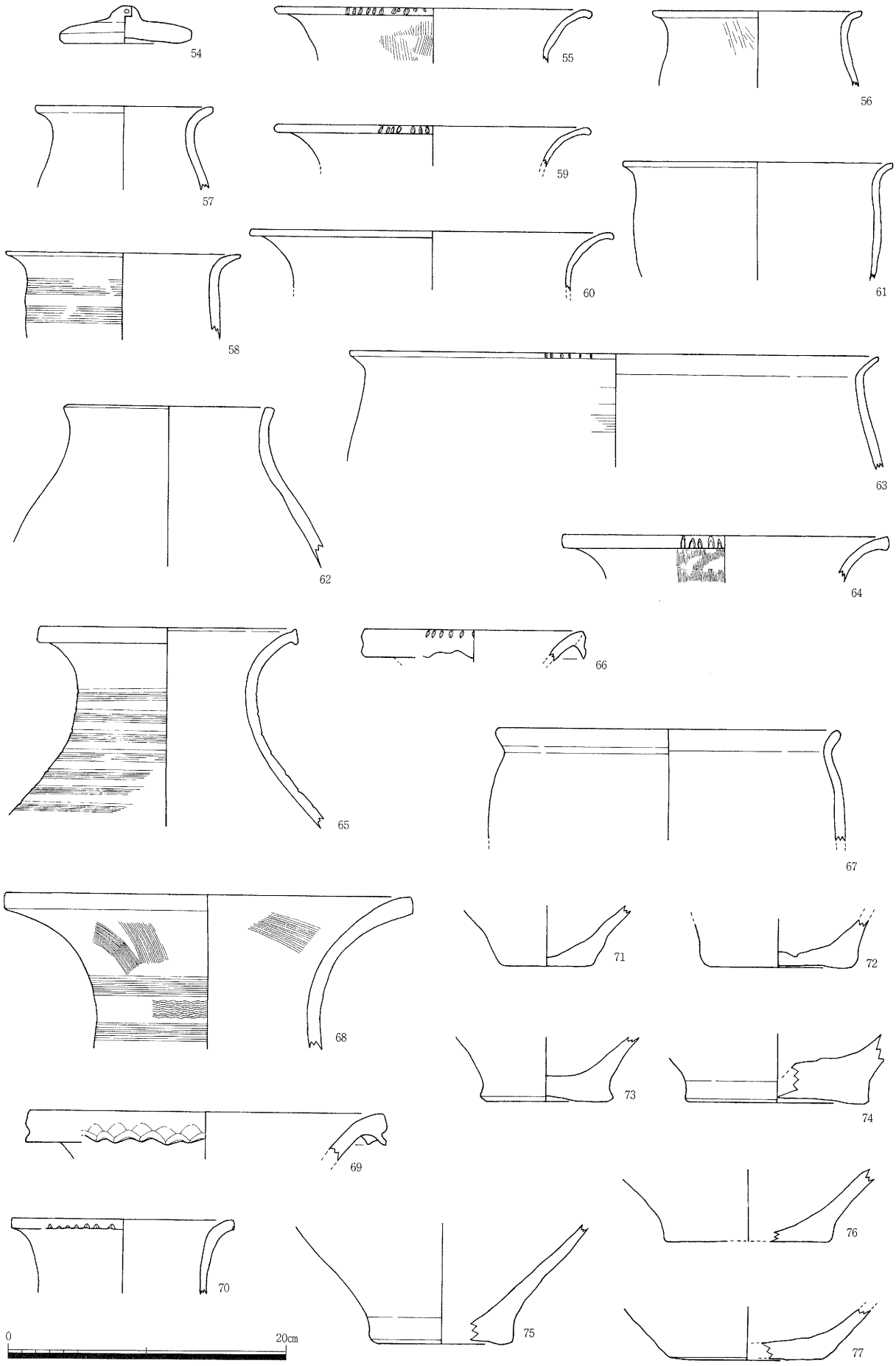
19号掘立柱建物（第58図）　K7-10-O16-f・10で検出した桁行2間、梁行2間の総柱建物である。柱間寸法は桁行梁間とも1.6mで、桁行長3.2m、梁間長3.2mを測り、床面積は10.2㎡である。主軸の方向はN-1°-Eで、検出面の標高は19.8mを測る。柱穴は、1辺0.5～0.6mの隅丸方形の掘方を呈し、483・490・496・498・502・504から径0.2～0.3mの柱痕跡を検出した。深さは0.2～0.3mを測る。遺物は498からサヌカイト片が出土したほか、483・490・496・498・502・504から弥生土器、土師器、須恵器などが出土したが、いずれも小片で図化しえなかった。

20号掘立柱建物（第59図）　K7-10-O16-f・6、7で検出した。桁行2間以上、梁間1間の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行梁間とも2.1～2.2mで、桁行長は4.6m、梁間長2.2mを測る。床面積は約10㎡である。主軸の方向はN-81°-Wで、検出面の標高は19.6mを測る。柱穴は、1辺0.3m～0.6mの隅丸方形の掘方を呈し、682から径0.2mの柱痕跡を検出した。深さは0.2mを測る。遺物は584から土師器が出土したが、小片のため図化しえなかった。

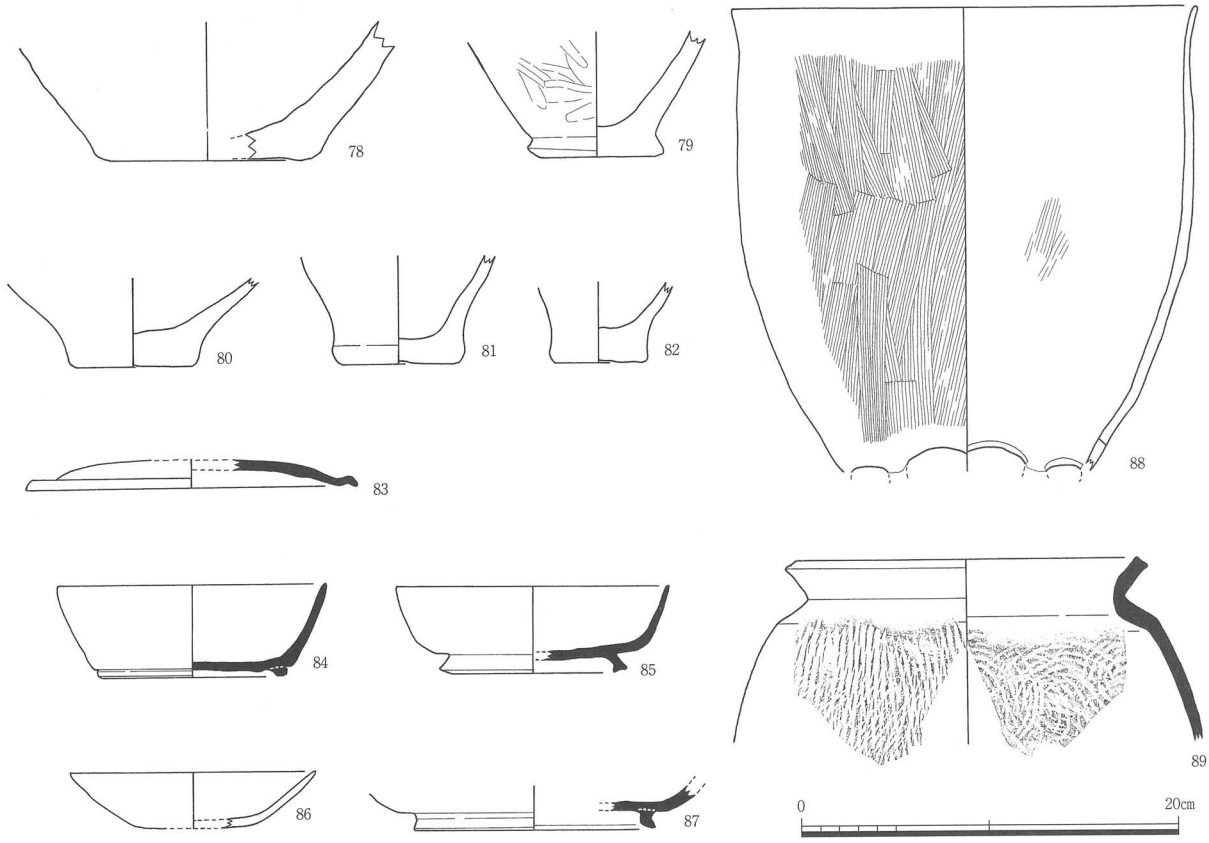
21号掘立柱建物（第60図）　K7-10-O16-f・6、7で検出した桁行不明、梁間2間の掘立柱建物である。柱間寸法は2.0～2.1mで梁間長4.1mを測る。主軸の方向はN-6°-Eで、検出面の標高は20.0mを測る。柱穴は、0.6～0.8mの円形の掘方を呈し、737・744から径0.2～0.25mの柱痕跡を検出した。深さは0.2～0.35mを測る。遺物は737から丸瓦片と瓦器が、733からサヌカイト片出土したほか、737・744から土師器・須恵器などが出土したが、いずれも小片で図化しえなかった。

4区　22号掘立柱建物（第61図）　K7-10-O16-h・1、2で検出した桁行3間、梁間3間の独立棟持柱を持つ掘立柱建物である。柱間寸法は桁行1.5～1.6m、梁間1.1～1.2mで、桁行長4.7m、梁間長3.3m・3.4mを測り、床面積は約16㎡である。主軸の方向はN-52°-Wで、検出面の標高は20.0mを測る。柱穴は、1辺0.4～0.6mの隅丸方形の掘方もしくは円形を呈し、823～826・829・830・837から径0.2～0.25mの柱痕跡を検出した。深さは0.3mを測る。829・830・834・835は、いずれも柱穴を切っており、切られている柱穴は同じ土質であった。遺物は830から奈良時代と思われる土師器高杯脚部が出土したほか、823・826・828～835から弥生土器、土師器などが出土したが、いずれも小片のため図化しえなかった。

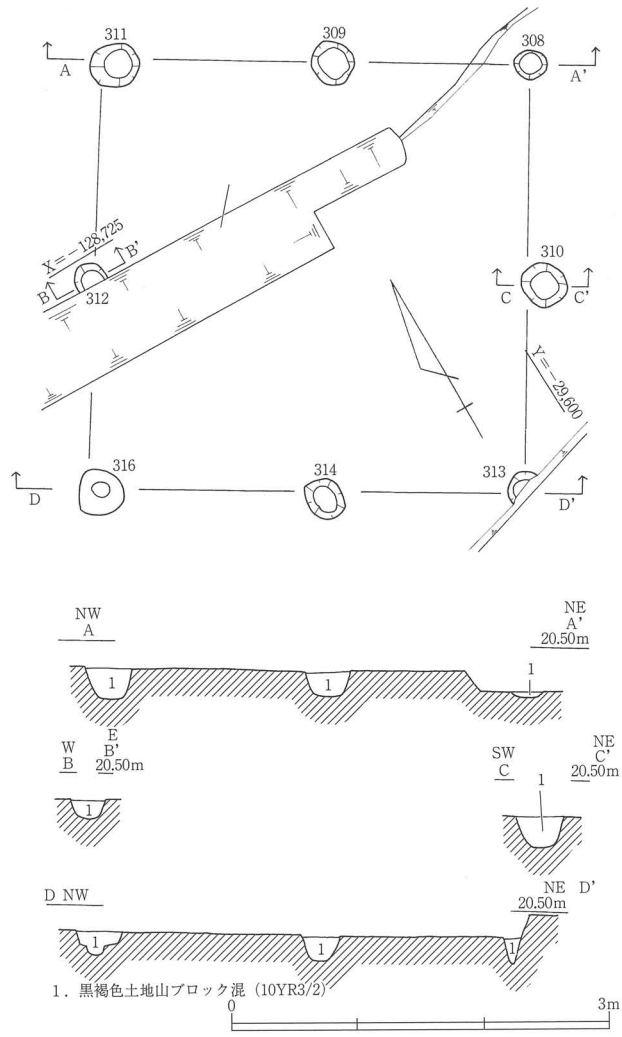
23号掘立柱建物（第62図）　K7-10-O16-h、i・2で検出した桁行4間以上の掘立柱建物である。本調査区内における他の建物の、梁間寸法は長くて2.5mなので、梁間の中央部分は撹乱を受けている可能性が高い。柱間寸法は桁行で2.2～2.4m、桁行を4間と仮定すれば、桁行長約9.0mとなり、梁間長は3.9mを測る。床面積は約36㎡である。主軸の方向はN-3°-Eで、検出面の標高は20.0mを測る。柱穴は、1辺0.2～0.6mの隅丸方形、もしくは円形の掘方を呈し、870・889から径0.2mの柱痕跡を検出した。深さは0.1～0.2mを測る。遺物は出土しなかった。



第53図　4区、第3層出土遺物実測図・1（S＝1/4）



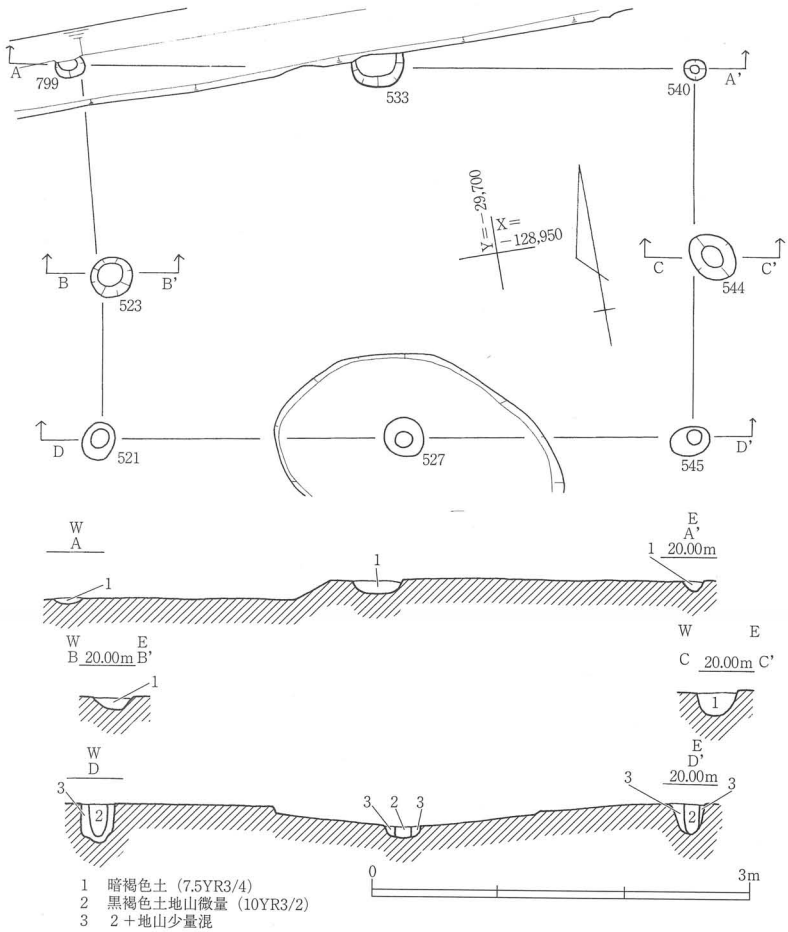
第54図　4区、第3層出土遺物実測図・2（S＝1/4）



第55図　2区、16号掘立柱建物平面図・断面図（S＝1/60）

24号掘立柱建物（第63図）　K7-10-O16-i・2で検出した桁行3間以上、梁行2間の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行2.3～2.4m、梁間2.4～2.5mで、梁間長は5.0mを測る。建物西側が調査区外へ広がるため桁行、床面積は不明である。主軸の方向はN-5°-Wで、検出面の標高は19.9mを測る。柱穴は、1辺0.6～0.7mの隅丸方形の掘方を呈し、890・891・957から径0.2～0.25mの柱痕跡を検出した。深さは0.1～0.2mを測る。遺物は890・891・957からから弥生土器、土師器、須恵器などが出土したが、いずれも小片のため図化しえなかった。

25号掘立柱建物（第64図）　K7-10-A16-j・2、3で検出した桁行2間以上、梁行2間の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行梁間とも2.1～2.2mで、梁間長は4.5mを測る。建物西側が調査区外へ広がるため桁行、床面積は不明



第56図　3区、17号掘立柱建物平面図・断面図（S＝1/60）

である。主軸の方向はN-3°-Wである。検出面の標高は19.7mを測る。柱穴は、1辺0.8～0.9mの隅丸方形の掘方を呈し、1061～1063から径0.3mの柱痕跡を検出した。深さは0.3～0.5mを測る。遺物は1061・1062・1064・1067から、弥生土器、須恵器などが出土したが、いずれも小片のため図化しえなかった。

26号掘立柱建物（第65図）　K7-10-O16-i・1で検出した桁行3間、梁間2間の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行2.4～2.6m、梁間2.2mで、桁行長は西側7.6m・東側7.5m、梁間長は4.4mを測り、床面積は約42㎡である。主軸の方向はN-2°-Wで、検出面の標高は19.8mを測る。柱穴は、1辺0.5～0.7mの隅丸方形の掘方を呈する。柱痕跡は検出できなかった。深さは0.3～0.5mを測る。遺物は887・888・903・983・992・996・1020・1022・から、弥生土器甕口縁部、須恵器、土師器、サヌカイトなどが出土したが、いずれも小片のため図化しえなかった。

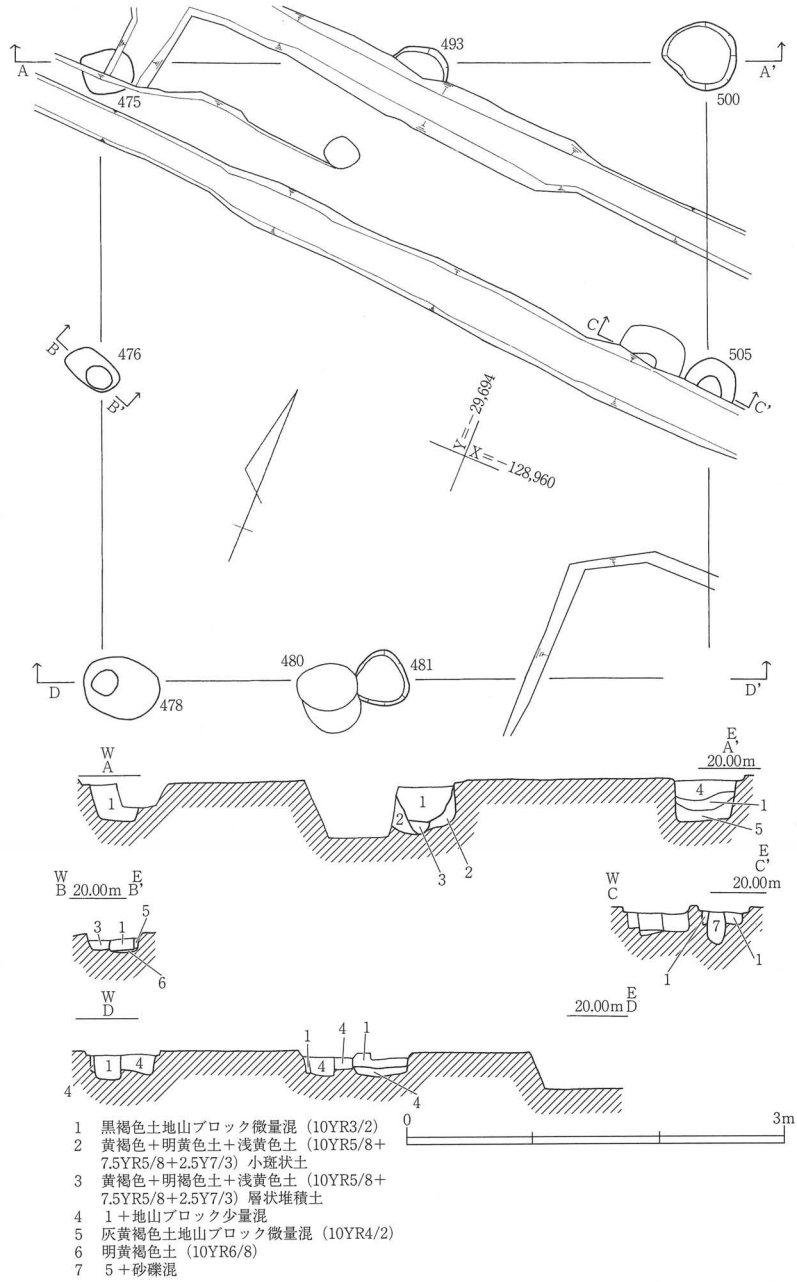
27号掘立柱建物（第66図）　K7-10-O16-j・1で検出した桁行4間、梁間2間の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行2.0～2.2m、梁間2.0mで、桁行長8.3m、梁間長3.9mを測り、床面積は約32㎡である。主軸の方向はN-3°-Wで、検出面の標高は19.3mを測る。柱穴は、1辺0.5～0.7mの隅丸方形の掘方を呈し、柱痕跡は検出できなかった。深さは0.15～0.3mを測る。遺物は1021から丸瓦が出土したほか、994・999・1021・1164・1165から、弥生土器、須恵器、土師器などが出土したが、いずれも小片のため図化しえなかった。

28号掘立柱建物（第67図）　K7-10-O15-j・10、K7-6-A15-a・10で検出した桁行2間、梁間2間の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行2.1m、梁間1.7～2.1mで、桁行長4.1m、梁間長3.9mを測り、床面積は約16㎡である。主軸の方向はN-2°-Wで、検出面の標高は20.6mを測る。柱穴は、1辺0.6～0.7mの隅丸方形の掘方を呈し、1209から径0.2mの柱痕跡を検出した。深さは径0.2～0.3mを測る。遺物は1203・1210・1729から弥生土器、須恵器、土師器などが出土したが、いずれも小

片のため図化しえなかった。

29号掘立柱建物（第68図）　K7-6-A16-a・1で検出した桁行２間、梁行２間の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行1.7～2.0ｍ、梁間1.5ｍで、桁行長4.0ｍ、梁間長3.0ｍを測り、床面積は約12.0㎡である。主軸の方向はＮ-85°-Ｅで、検出面の標高は19.4ｍを測る。柱穴は、１辺が0.5ｍ～0.7ｍの隅丸方形もしくは円形の掘方を呈し、柱痕跡は検出できなかった。深さは0.2～0.3ｍを測る。遺物は出土しなかった。

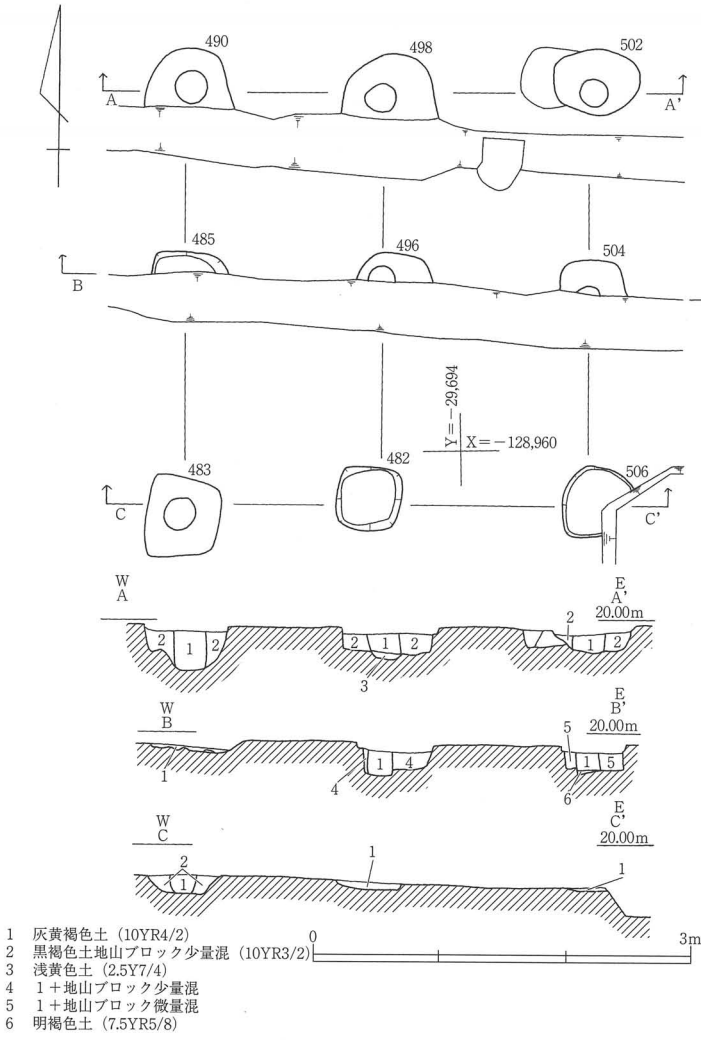
30号掘立柱建物（第69図）　K7-6-A15-b・10で検出した桁行３間、梁間２間の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行1.7～2.1ｍ、梁間1.6～1.7ｍで、桁行長6.1ｍ、梁間長北側3.2ｍ・南側3.4ｍを測り、床面積は約20.㎡である。主軸の方向はＮ-13°-Ｗで、検出面の標高は19.5ｍを測る。柱穴は、１辺0.7ｍの隅丸方形の掘方を呈し、1311から径0.15ｍの柱痕跡を検出した。深さは0.2～0.35ｍを測る。遺物は1313・1315・1316から弥生土器底部、土師器、須恵器などが出土したが、いずれも小片のため図化しえなかった。



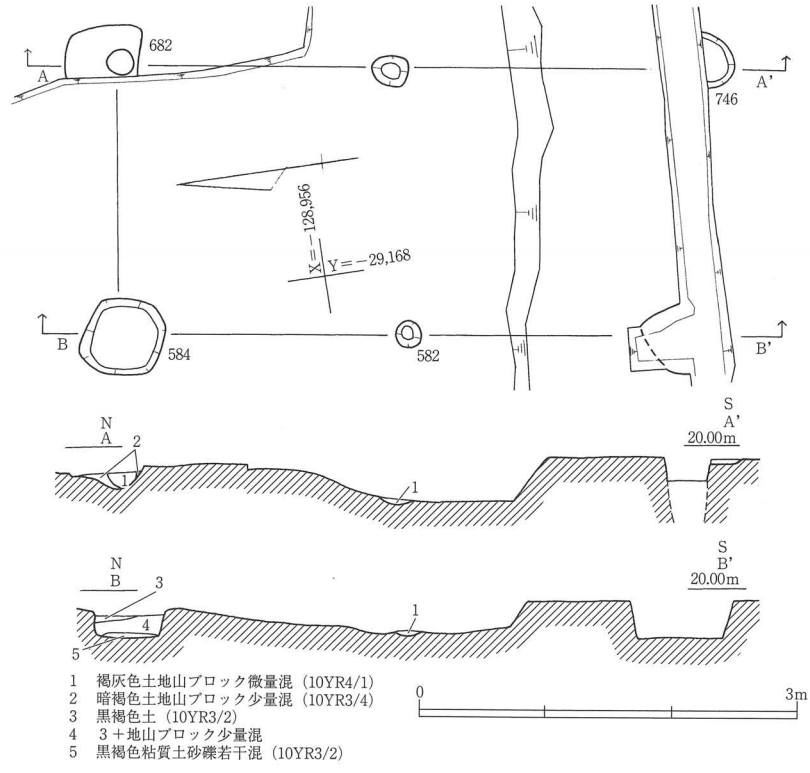
第57図　３区、18号掘立柱建物平面図・断面図（Ｓ＝1/60）

31号掘立柱建物（第70図）　K7-6-A16-b・1、K7-6-A15-b・10で検出した桁行４間、梁行２間の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行1.7～2.5ｍ、梁間2.0～2.3ｍで、桁行長8.5ｍ、梁間長4.3ｍを測り、床面積は約37㎡である。主軸の方向はＮ-86°-Ｅで、検出面の標高は19.8ｍを測る。柱穴は、径0.3～0.4ｍの掘方を検出したが柱痕跡は確認できなかった。深さは0.2～0.4ｍを測る。遺物は第70図に示す土器が出土した。（90）は2401から出土した土師器小皿である。平安時代に属すると考えられる。（91）は1455から出土した、10世紀に属すると考えられる土師器杯である。口径は推定で14.8㎝を測り、色調は外面、7.5YR8/4浅黄橙色を呈し、焼成は良好であった。（92）は

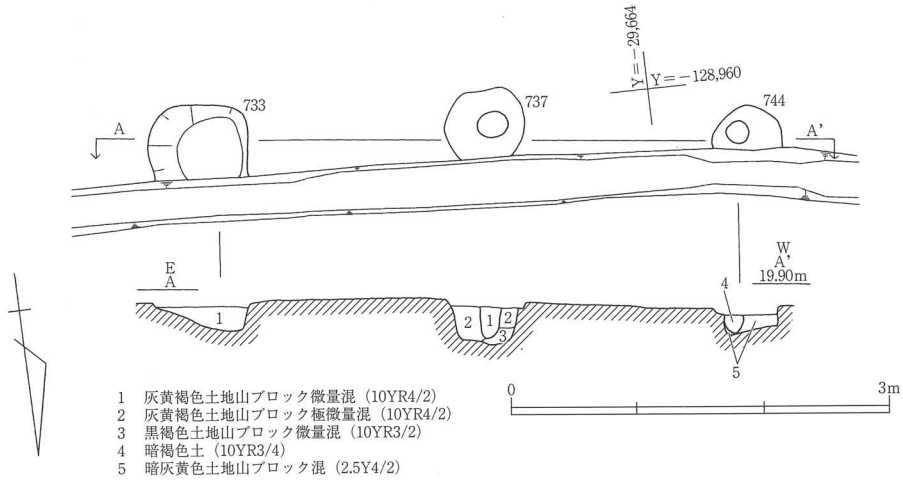
2401から出土した瓦器椀である。破片のため、口径、器高は不明である。色調は内、外面ともN8/0灰白色を呈し、焼成はやや軟質であった。13世紀に属すると考えられる。



第58図　3区、19号掘立柱建物平面図・断面図（S＝1/60）

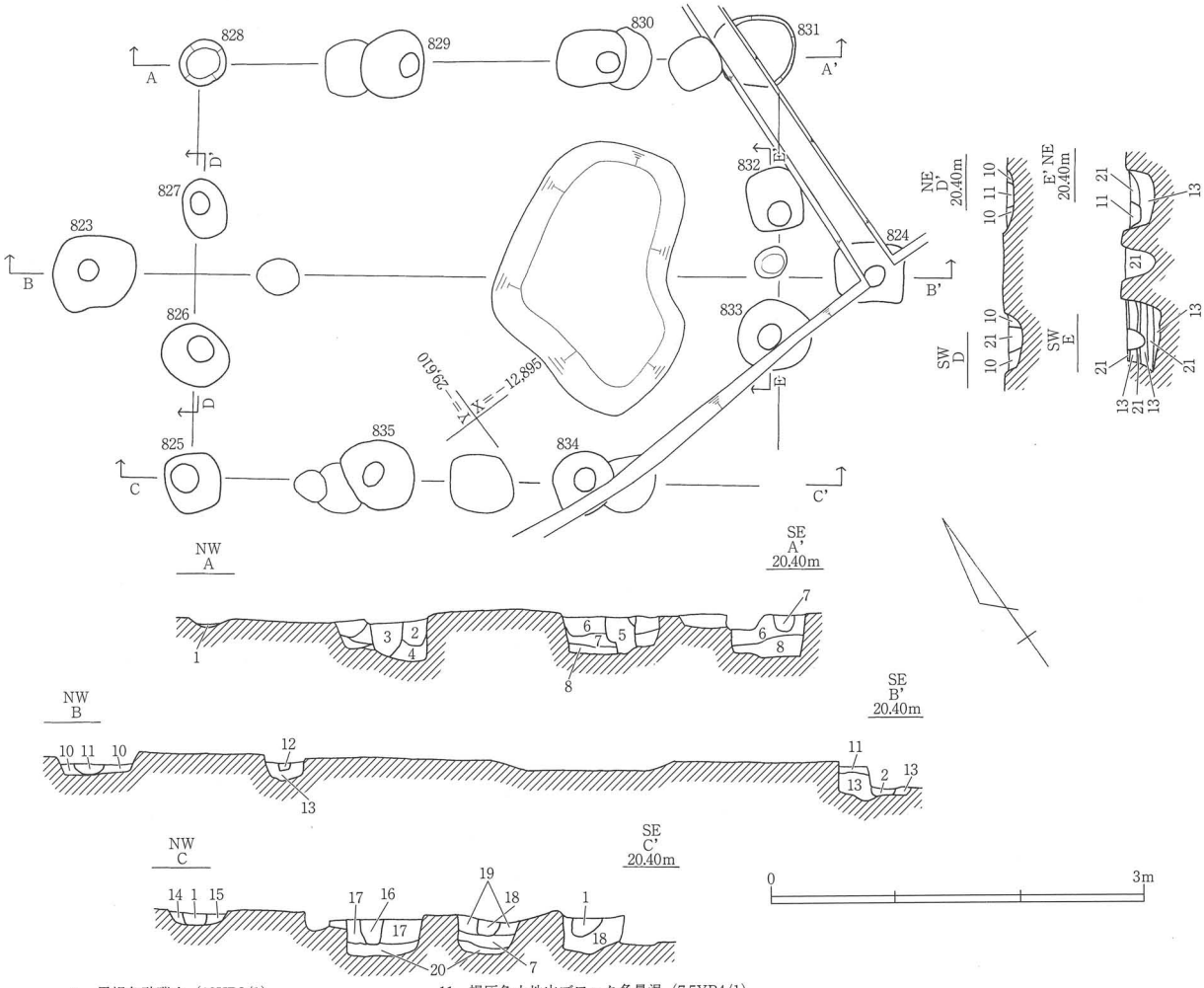


第59図　3区、20号掘立柱建物平面図・断面図（S＝1/60）



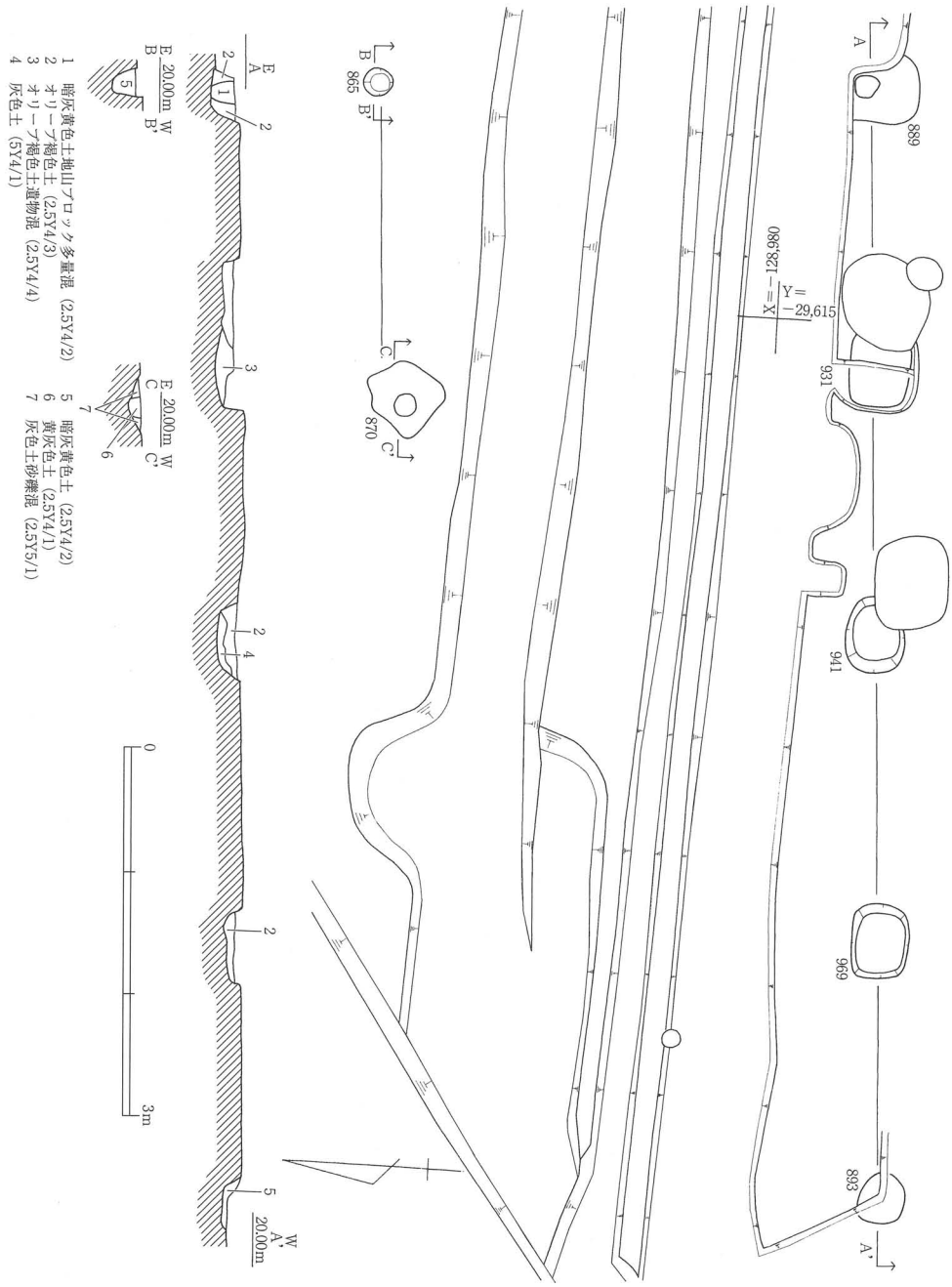
1　灰黄褐色土地山ブロック微量混（10YR4/2）
2　灰黄褐色土地山ブロック極微量混（10YR4/2）
3　黒褐色土地山ブロック微量混（10YR3/2）
4　暗褐色土（10YR3/4）
5　暗灰黄色土地山ブロック混（2.5Y4/2）

第60図　3区、21号掘立柱建物平面図・断面図（S＝1/60）

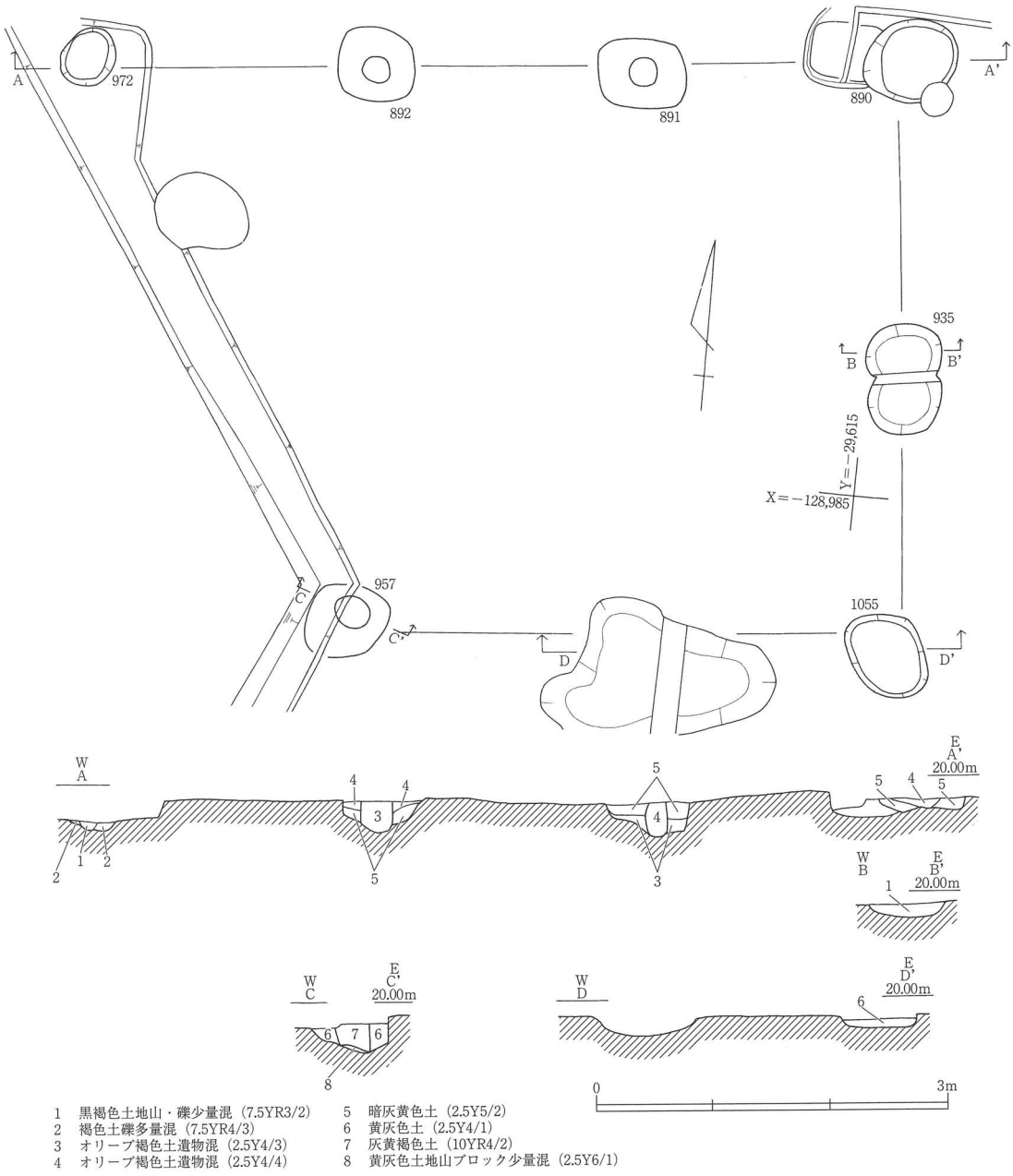


1　黒褐色砂礫土（10YR3/1）
2　黒褐色土（2.5Y3/1）
3　黒褐色土地山ブロック混（10YR3/1）
4　黒褐色土地山ブロック多量混（10YR3/1）
5　黒褐色土（5YR2/1）
6　黄橙色土（7.5YR7/8）
7　黒褐色土＋黄橙色土（5YR3/1＋7.5YR7/8）
8　黒褐色土（5YR3/1）
9　明褐色土＋灰オリーブ色土（7.5YR5/6＋5Y6/2）
10　灰色土礫混（5Y5/1）
11　褐灰色土地山ブロック多量混（7.5YR4/1）
12　褐灰色土地山ブロック少量混（7.5YR4/1）
13　黄灰色土（2.5YR4/1）
14　明褐色土Mn多量混（7.5YR5/6）
15　黄灰色土地山ブロック多量混（2.5Y4/1）
16　褐灰色土地山ブロック多量混（10YR4/1）
17　19＋灰白色砂質土（2.5Y7/1）
18　褐灰色土＋明褐色土（10YR4/1＋7.5YR5/8）
19　7＋砂混
20　褐灰色Mn土礫混（7.5YR4/1）

第61図　4区、22号掘立柱建物平面図・断面図（S＝1/60）

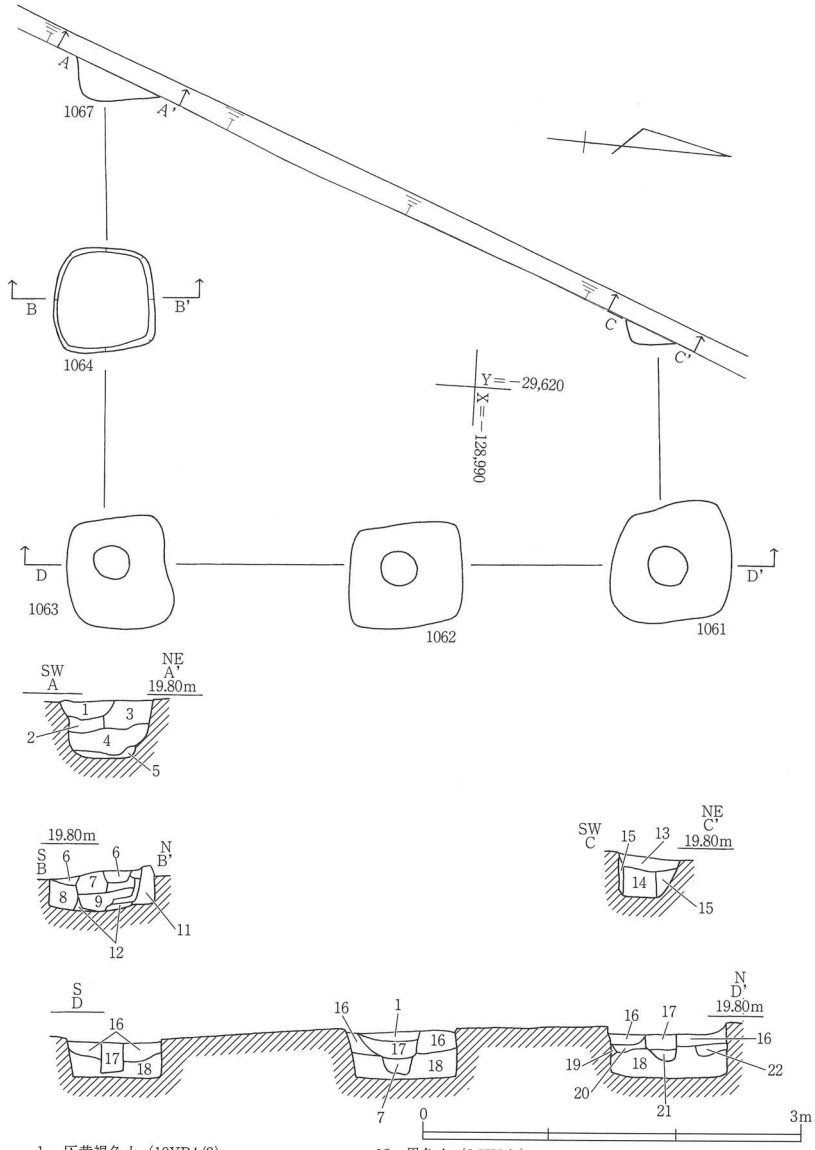


第62図　4区、23号掘立柱建物平面図・断面図（S＝1/60）



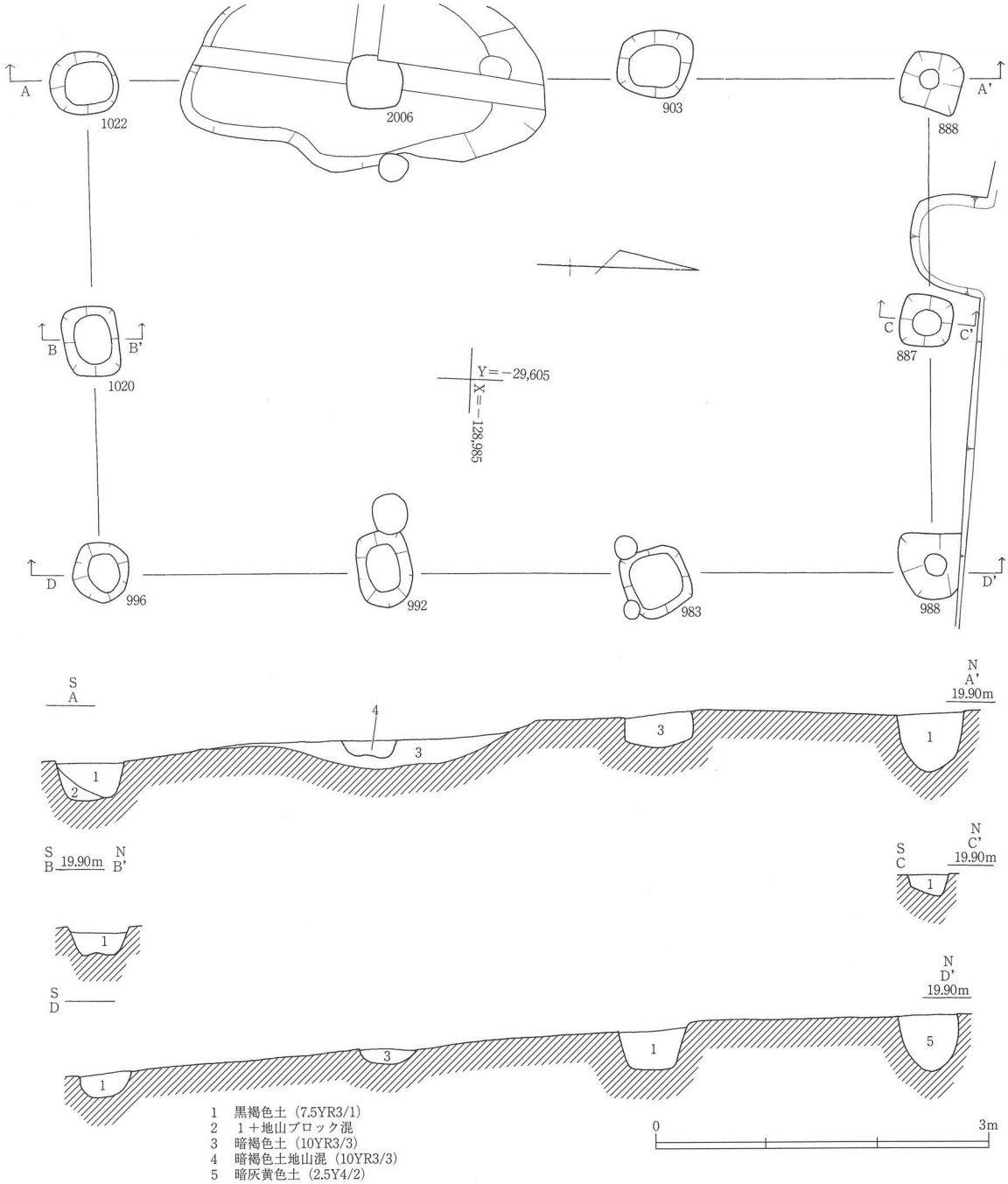
1　黒褐色土地山・礫少量混（7.5YR3/2）
2　褐色土礫多量混（7.5YR4/3）
3　オリーブ褐色土遺物混（2.5Y4/3）
4　オリーブ褐色土遺物混（2.5Y4/4）
5　暗灰黄色土（2.5Y5/2）
6　黄灰色土（2.5Y4/1）
7　灰黄褐色土（10YR4/2）
8　黄灰色土地山ブロック少量混（2.5Y6/1）

第63図　4区、24号掘立柱建物平面図・断面図（S＝1/60）

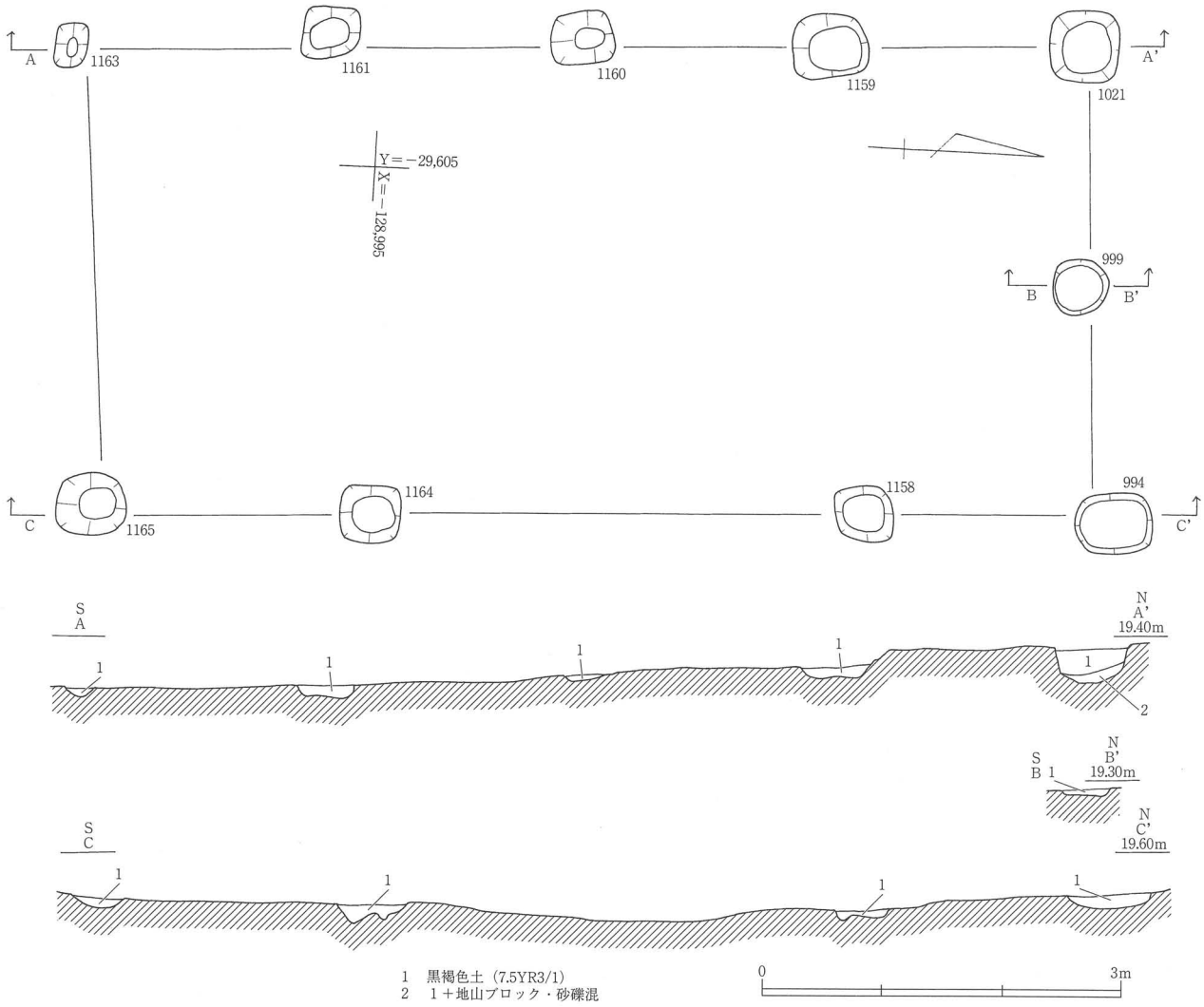


1 灰黄褐色土（10YR4/2）
2 黄褐色土地山ブロック多量混（2.5Y4/1）
3 黄褐色地山ブロック混（2.5Y6/1）
4 黒褐色土礫少量混（10YR3/1）
5 黒褐色＋地山ブロック混（10YR3/1）
6 明黄色褐色土地山ブロック混（10YR6/8）
7 黄灰色土（2.5Y4/1）
8 黒褐色土（2.5Y3/1）
9 黒褐色土（2.5Y3/2）
10 褐灰色土（10YR4/1）
11 黒褐色土（10YR3/1）
12 黒色土（2.5Y2/1）
13 黄灰色土地山ブロック微量混（2.5Y4/1）
14 暗灰黄色土地山ブロック混（2.5Y5/2）
15 暗灰黄色土地山ブロック少量混（2.5Y5/2）
16 灰色土（5Y6/1）
17 灰色土（5Y5/1）
18 黒色土（10YR2/1）
19 黄灰色土（2.5Y6/1）
20 黄灰色土地山ブロック混（2.5Y5/1）
21 灰色土（5Y4/1）
22 黄橙色土地山ブロック混（10YR8/6）

第64図　4区、25号掘立柱建物平面図・断面図（S＝1/60）



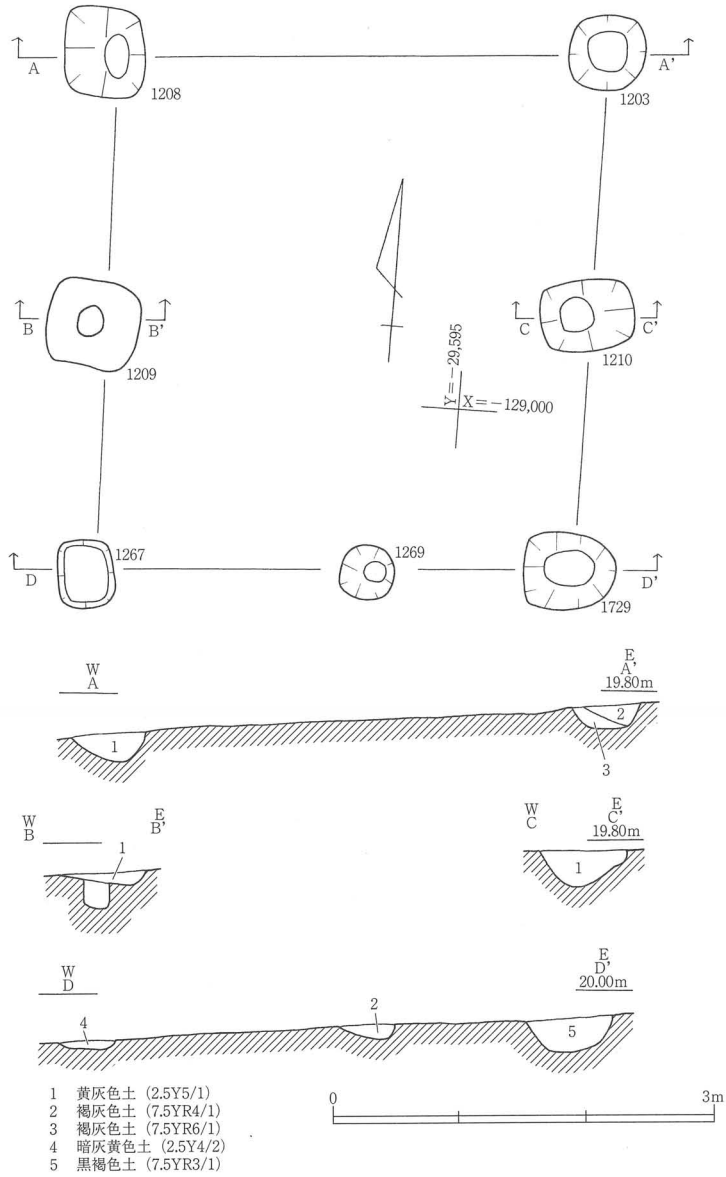
第65図　4区、26号掘立柱建物平面図・断面図（S＝1/60）



第66図　4区、27号掘立柱建物平面図・断面図（S＝1/60）

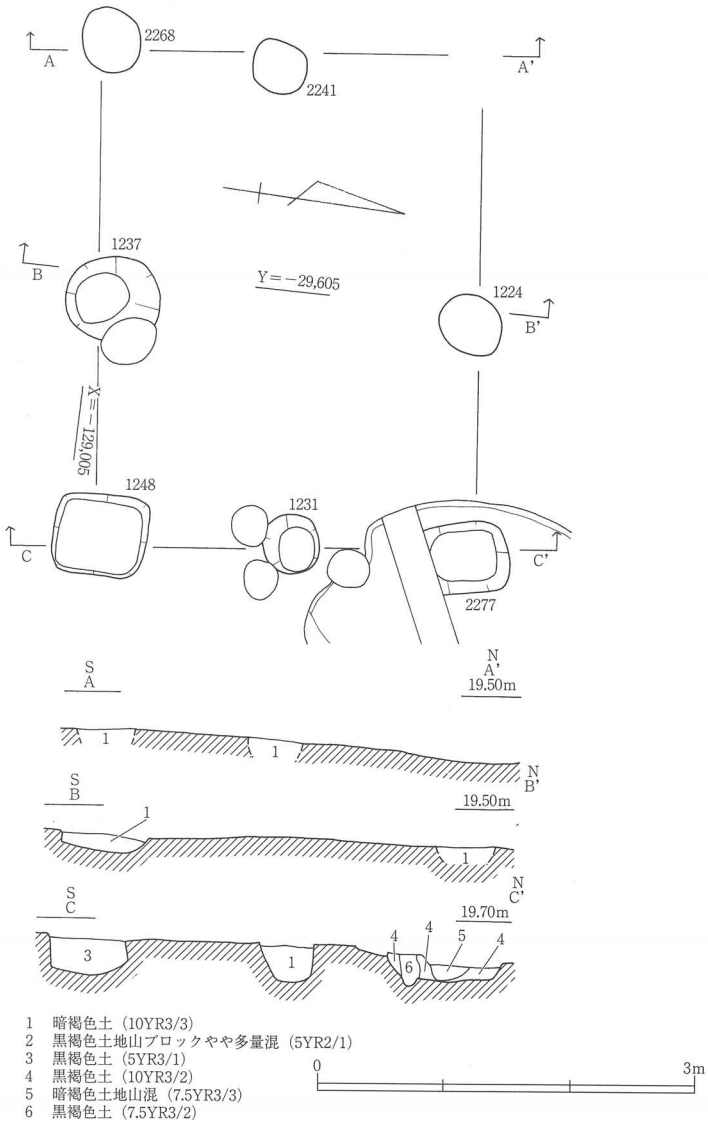
32号掘立柱建物（第71図）
K7-6-A15-b・10で検出した桁行3間、梁間2間の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行1.2～1.4m、梁間1.8mで、桁行長4.0m、梁間長3.8mを測り、床面積は15.2㎡である。主軸の方向はN-31°-Eで、検出面の標高は19.9mを測る。柱穴は、1辺0.4～0.5mの隅丸方形もしくは円形の掘方を呈し、1405・1407・1423・1434・1444・1446・から径0.2mの柱痕跡を検出した。深さは0.2～0.3mを測る。遺物は、建物を構成する柱穴ではないが、1410から土師器皿、黒色土器が出土したが、いずれも小片のため図化しえなかった。

33号掘立柱建物（第72図）
K7-6-A15-a・9、a10で検出した桁行2間、梁行2間の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行1.7～1.8m、梁間1.0～1.4mで、桁行長3.5m、梁間長2.5mを測り、床面積は約9㎡である。主軸の方向はN-26°-Eで、検出面の標高は19.9mを測る。柱穴は、径0.4～0.5mの円形の掘方を呈し、1505・1563・1567から径0.15～0.2mの柱痕跡を検出した。深さは0.2～0.25mを測る。遺物は1579から、須恵器、土師器などが出土したが、いずれも小片のため図化しえなかった。



第67図　4区、28号掘立柱建物平面図・断面図（S＝1/60）

34号掘立柱建物（第73図）　K7-6-A15-c・7で検出した桁行3間、梁行2間の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行1.6～2.0m、梁間1.7～2.0mで、桁行長5.3m、梁間長3.8mを測り、床面積は約20㎡である。主軸の方向はN-6°-Eで、検出面の標高は20.2mを測る。柱穴は、1辺0.15～0.4mの隅丸方形もしくは円形の掘方を呈し、1849・1860・1887から径0.15～0.2mの柱痕跡を検出した。深さは0.1～0.3mを測る。遺物は1849・1884から、弥生土器口縁部と底部が出土したが、いずれも小片のため図化しえなかった。



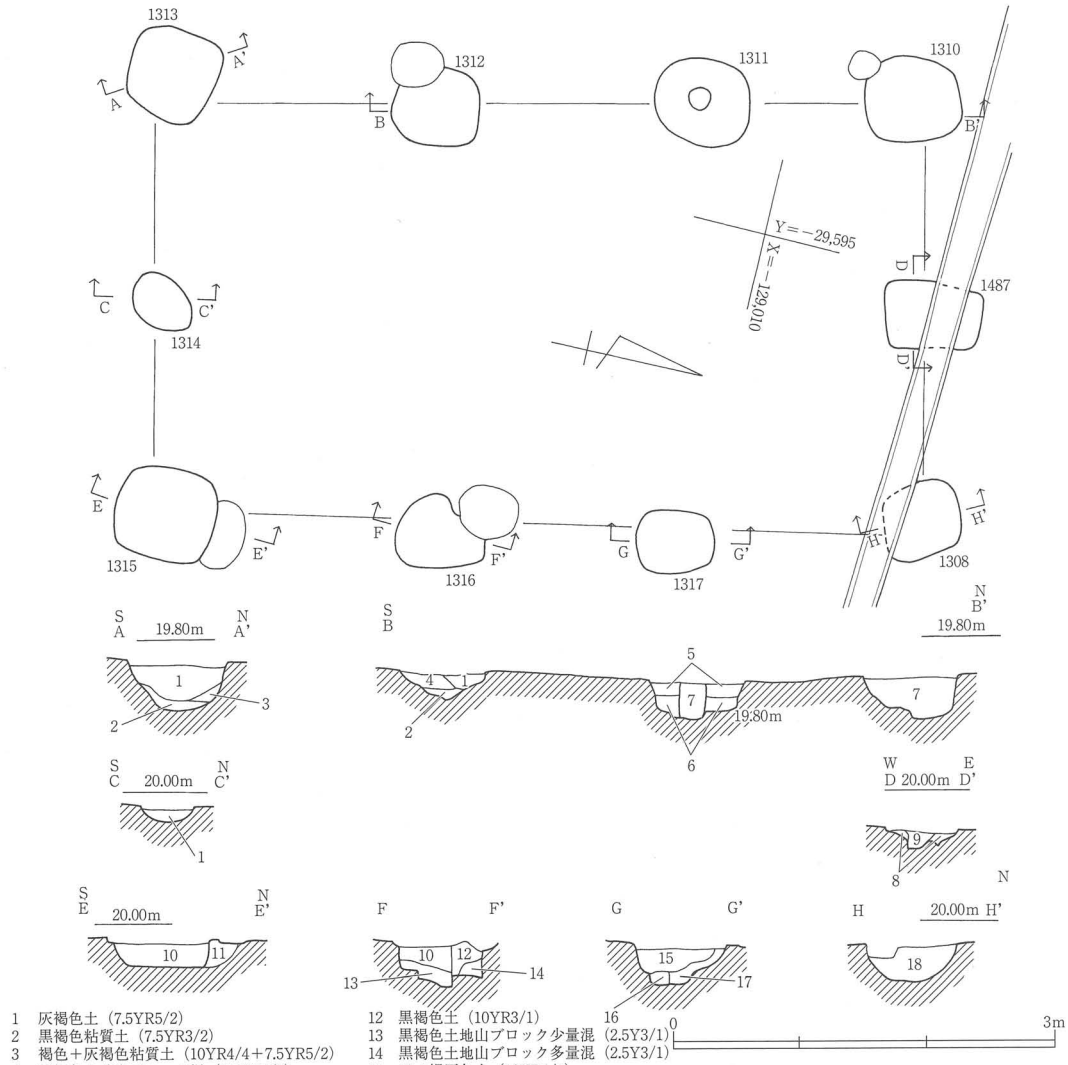
第68図　4区、29号掘立柱建物平面図・断面図（S＝1/60）

5区　35号掘立柱建物（第74図）　K7-10-O15-ｆ・10、K7-10-O16-ｆ・1で検出した桁行3間、梁間2間の掘立柱建物である。柱穴47と38の間の柱穴は、撹乱に切られている。柱間寸法は桁行1.4～1.5ｍ、梁間1.7ｍで、桁行長4.4ｍ、梁間長3.4ｍを測り、床面積は約15㎡である。主軸の方向はN-53°-Wで、検出面の標高は20.2ｍを測る。柱穴は、径0.5ｍの円形の掘方を呈し、47・55・63から径0.2ｍの柱痕跡を検出した。深さは0.1～0.2ｍを測る。遺物は47・55から弥生土器、土師器、須恵器などが出土したがいずれも小片のため図化しえなかった。

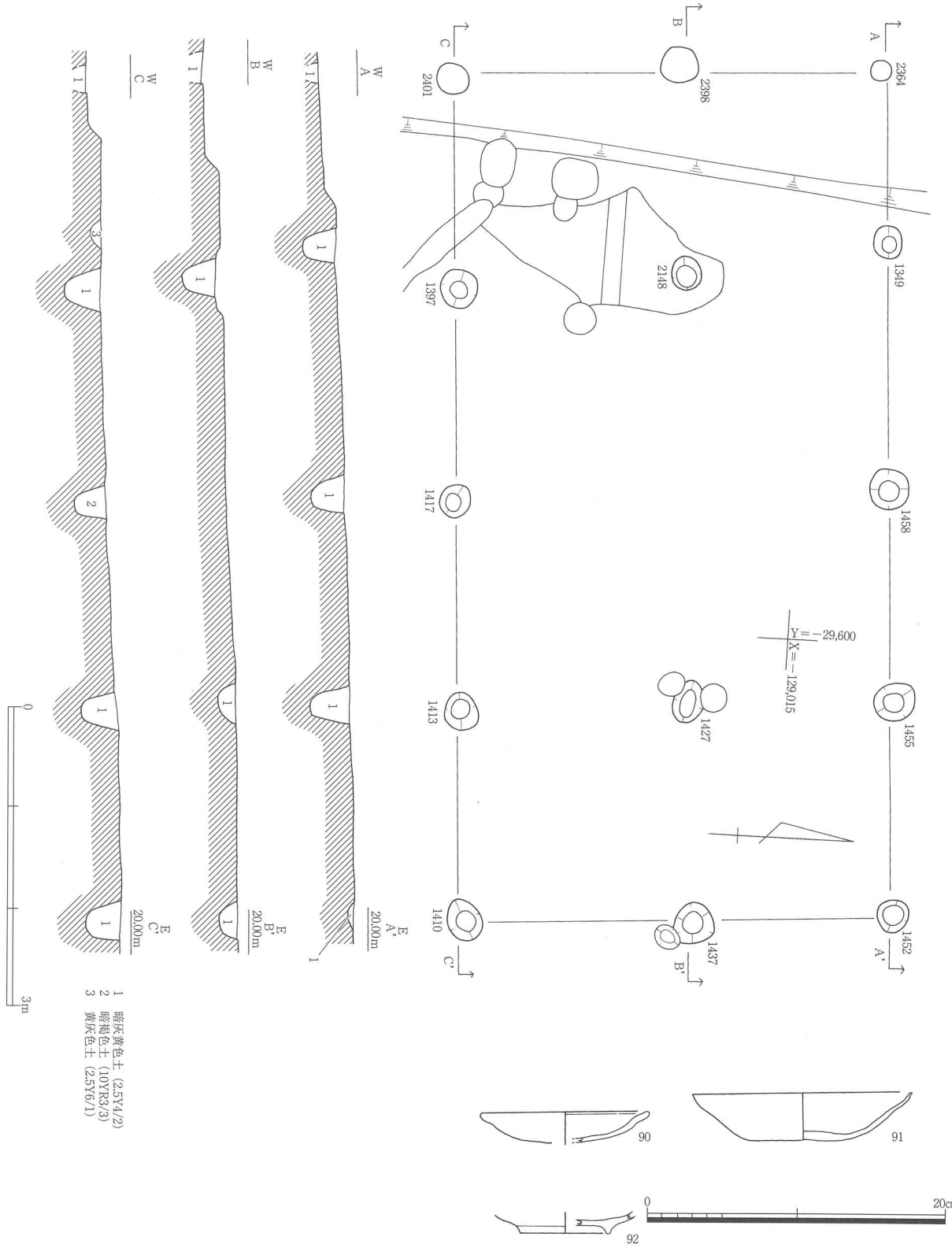
36号掘立柱建物（第75図）　K7-10-O15-e・10で検出した桁行2間以上、梁間2間以上の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行梁間とも1.5～1.7ｍであった。主軸の方向はN-37°-Eである。検出面の標高は20.3ｍを測る。柱穴は、1辺0.4～0.5ｍの隅丸方形の掘方を呈し、75・326・329から径0.15～0.2ｍの柱痕跡を検出した。深さは0.2～0.4ｍを測る。遺物は326から瓦器などが出土したほか、323・328・329から弥生土器、土師器などが出土したが、いずれも小片のため図化しえなかった。

37号掘立柱建物（第76図）　K7-10-O15-e・9で検出した桁行2間以上、梁間2間の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行梁間とも1.7～1.8ｍで、梁間長は3.2ｍを測る。建物が調査区外へ広がるため桁行、床面積は不明である。主軸の方向はN-16°-Wで、検出面の標高は20.3ｍを測る。柱穴は、1辺0.3～0.4ｍの隅丸方形の掘方を呈し、146・151から径0.2～0.25ｍの柱痕跡を検出した。深さは0.1～0.15ｍを測る。遺物は出土しなかった。

38号掘立柱建物（第77図）　K7-10-O15-ｄ・9、e・8で検出した桁行3間以上、梁間2間の掘立柱建物である。柱穴152・153の間の柱穴は撹乱に切られているものと考えられる。柱間寸法は桁行1.4ｍ、梁間1.5～1.6ｍで、桁行を3間とすれば4.3ｍ、梁間3.2ｍを測り、床面積は約14㎡となる。



第69図　4区、30号掘立柱建物平面図・断面図（S＝1/60）



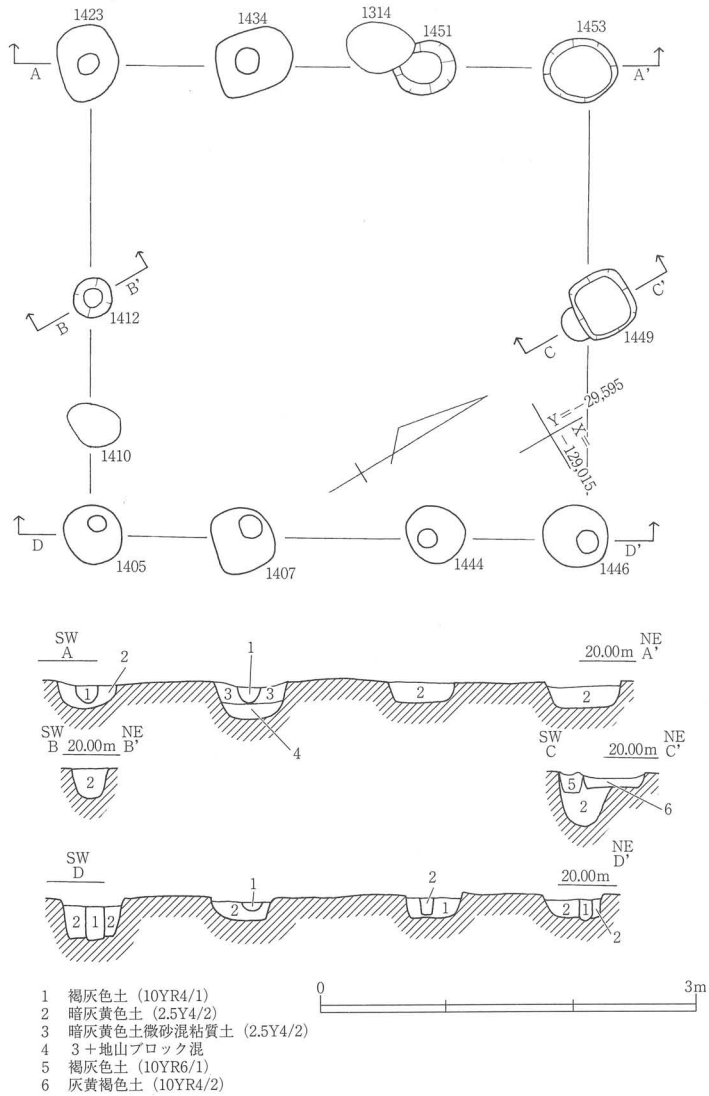
第70図　4区、31号掘立柱建物平面図・断面図（S＝1/60）・出土遺物実測図（S＝1/4）

主軸の方向はN-53°-Wである。検出面の標高は20.4ｍを測る。柱穴は、1辺0.5ｍの隅丸方形もしくは円形の掘方を呈し、152・153・154・155から0.1～0.18ｍの柱痕跡を検出した。深さは0.2ｍを測る。遺物は152・153から土師器が156から弥生土器、土師器などが出土したがいずれも小片のため図化しえなかった。

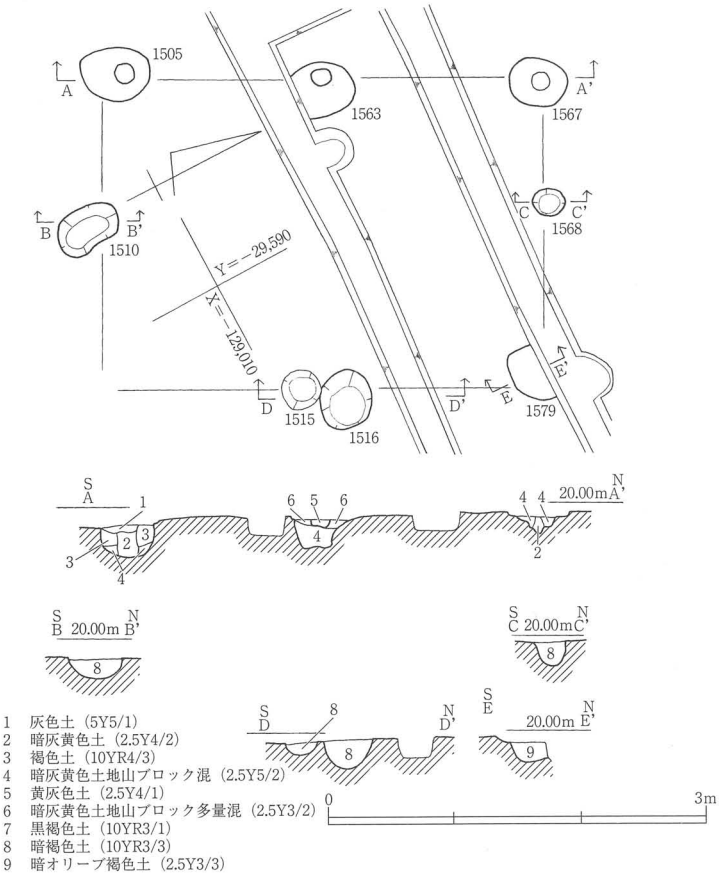
39号掘立柱建物（第78図）　K7-10-O15-ｆ、ｇ・7、8で検出した桁行２間、梁間２間の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行2.0～2.2ｍ、梁間1.7～1.8ｍで、桁行長4.4ｍ、梁間長3.5ｍを測り、床面積は約15㎡である。主軸の方向はN-6°-Wで、検出面の標高は20.4ｍを測る。

柱穴は、径0.5～0.6ｍの円形の掘方を呈し、233～237・240から径0.15～0.2ｍの柱痕跡を検出した。深さは0.1～0.25ｍを測る。遺物は234・235・237～240から弥生土器、土師器、須恵器などが出土したが、いずれも小片のため図化しえなかった。

40号掘立柱建物（第79図）　K7-10-O15-ｆ・7で検出した桁行２間、梁行１間の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行2.2～2.4ｍで、桁行長4.7ｍ、梁間長2.5ｍ・2.6ｍを測り、床面積は約12㎡である。主軸の方向はN-84°-Eで、検出面の



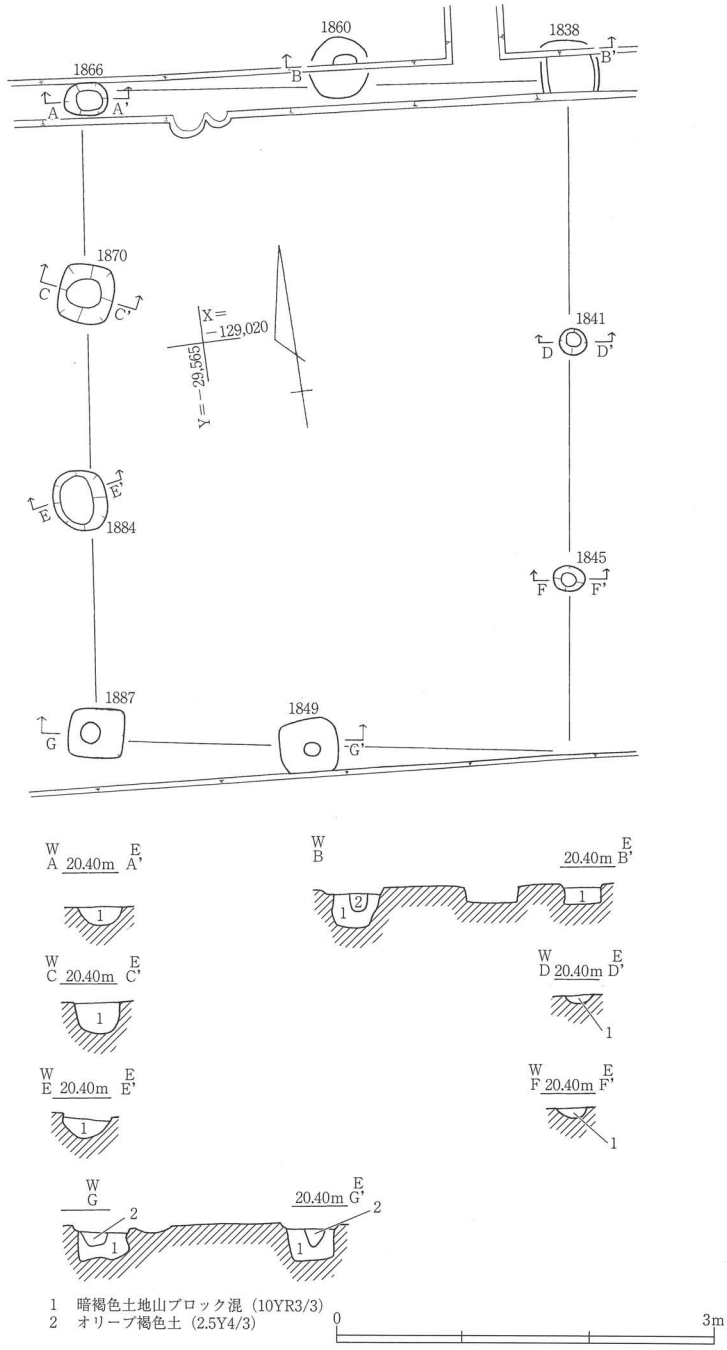
第71図　４区、32号掘立柱建物平面図・断面図（Ｓ＝1/60）



第72図　４区、33号掘立柱建物平面図・断面図（Ｓ＝1/60）

標高は20.3ｍを測る。柱穴は、１辺0.4～0.5ｍの隅丸方形の掘方を呈し、254～257・263から径0.1～0.15ｍの柱痕跡を検出した。深さは0.15～0.35ｍを測る。遺物は255・263から黒色土器が出土したほか、254・256・257・296から弥生土器、土師器が出土したが、いずれも小片のため図化しえなかった。

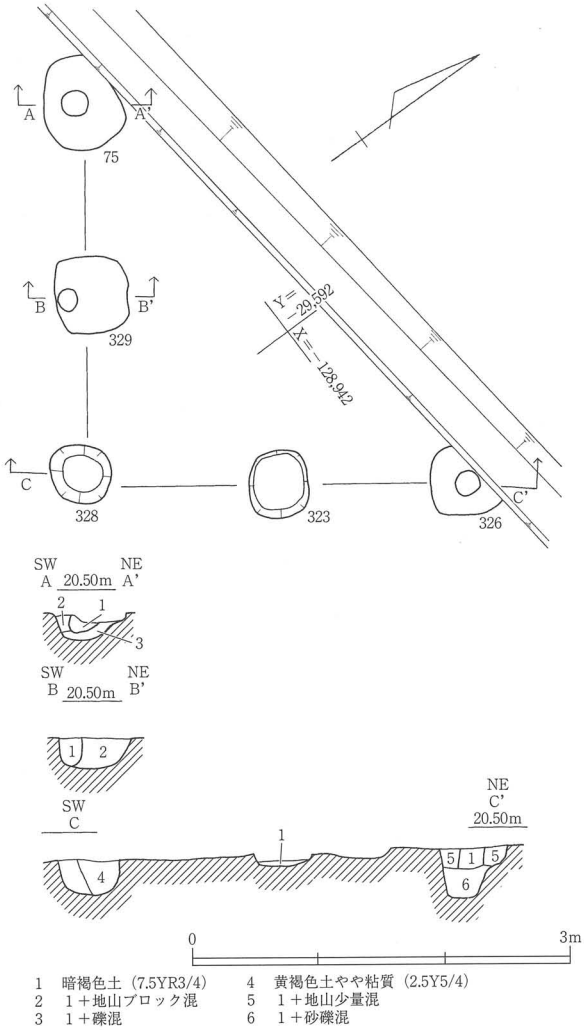
６区　41号掘立柱建物（第80図）　K7-10-O15-g・6で検出した桁行3間、梁間2間の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行梁間とも2.0～2.2ｍで、桁行6.6ｍ、梁間4.3ｍを測り、床面積は約28㎡である。主軸の方向はN-7°-Wで、検出面の標高は20.3ｍを測る。柱穴は、径0.3～0.5ｍの円形の掘方を呈し、370・392～394・404・406・407から径0.15～0.2ｍの柱痕跡を検出した。深さは0.2～0.35ｍを測る。遺物は、392から中世に属する甕の口縁部、404から瓦器などが出土しているほか、388・389・390・391・393・394・407から弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器などが出土しているが、いずれも小片のため図化しえなかった。



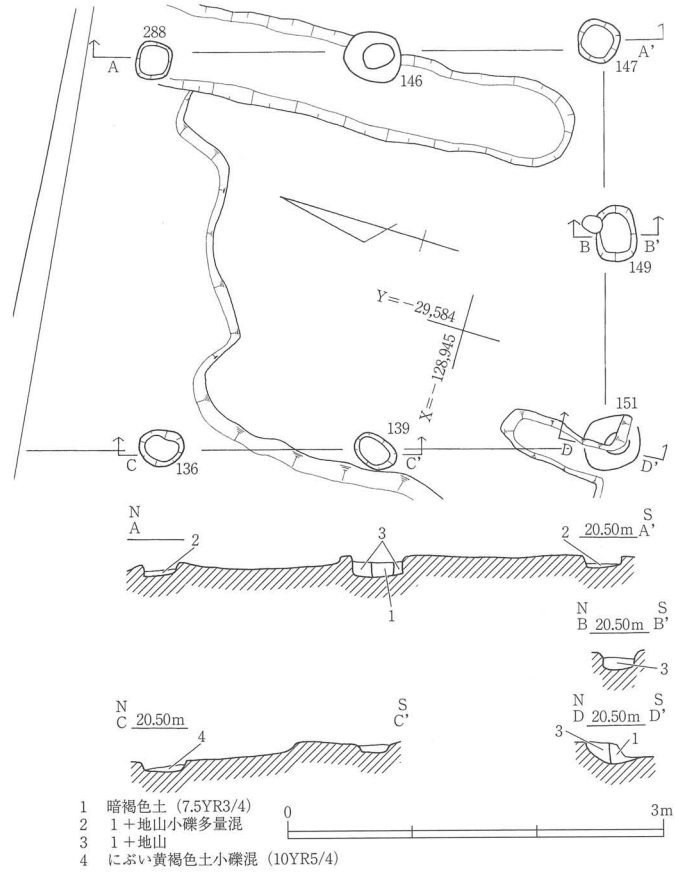
第73図　４区、34号掘立柱建物平面図・断面図（Ｓ＝1/60）

42号掘立柱建物（第81図）　K7-10-O15-f・4で検出した桁行３間、梁行２間の掘立柱建物である。416・418の間の柱穴は撹乱に切られている。柱間寸法は桁行2.2～2.4ｍで、桁行長7.0ｍ、梁間長4.0ｍを測り、床面積は約28㎡である。主軸の方向はN-85°-Eで、検出面の標高は20.4ｍを測る。柱穴は、径0.3～0.5ｍの円形の掘方を呈し、375・377・416・418から径0.15～0.2ｍの柱痕跡を検出した。深さは0.1～0.2ｍを測る。遺物は377・418から土師器、須恵器などが出土しているが、いずれも小片のため図化しえなかった。

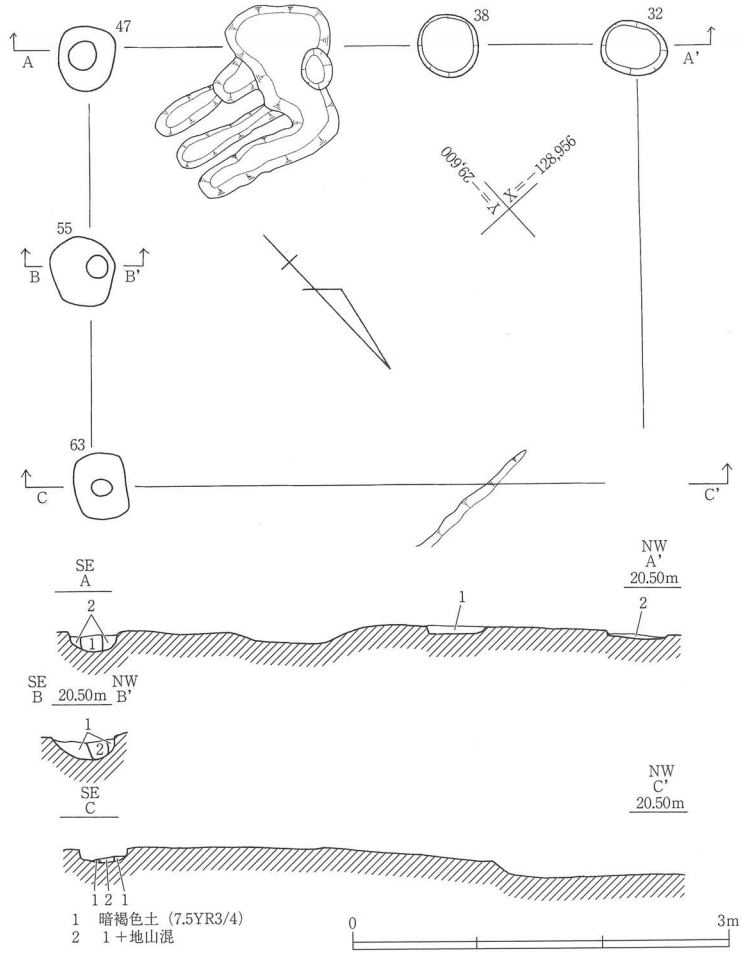
９区　43号掘立柱建物（第82図）　K7-6-A15-ｄ、ｅ・7、8で検出した桁行１間以上、梁行２間



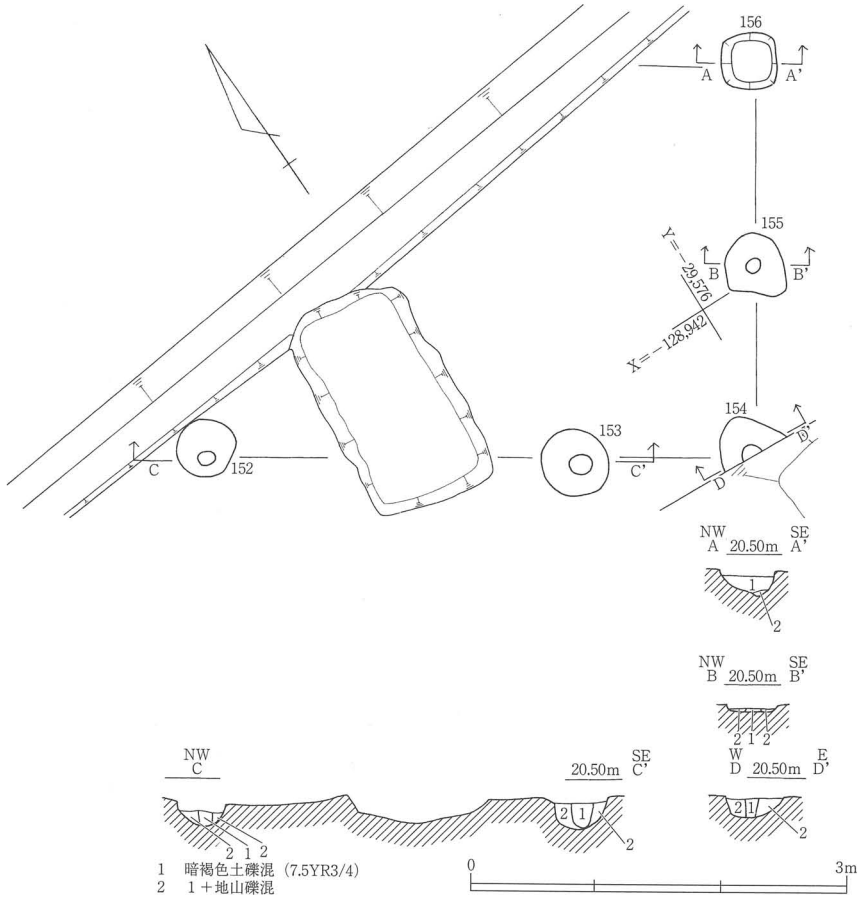
第75図　5区、36号掘立柱建物平面図・断面図（S＝1/60）



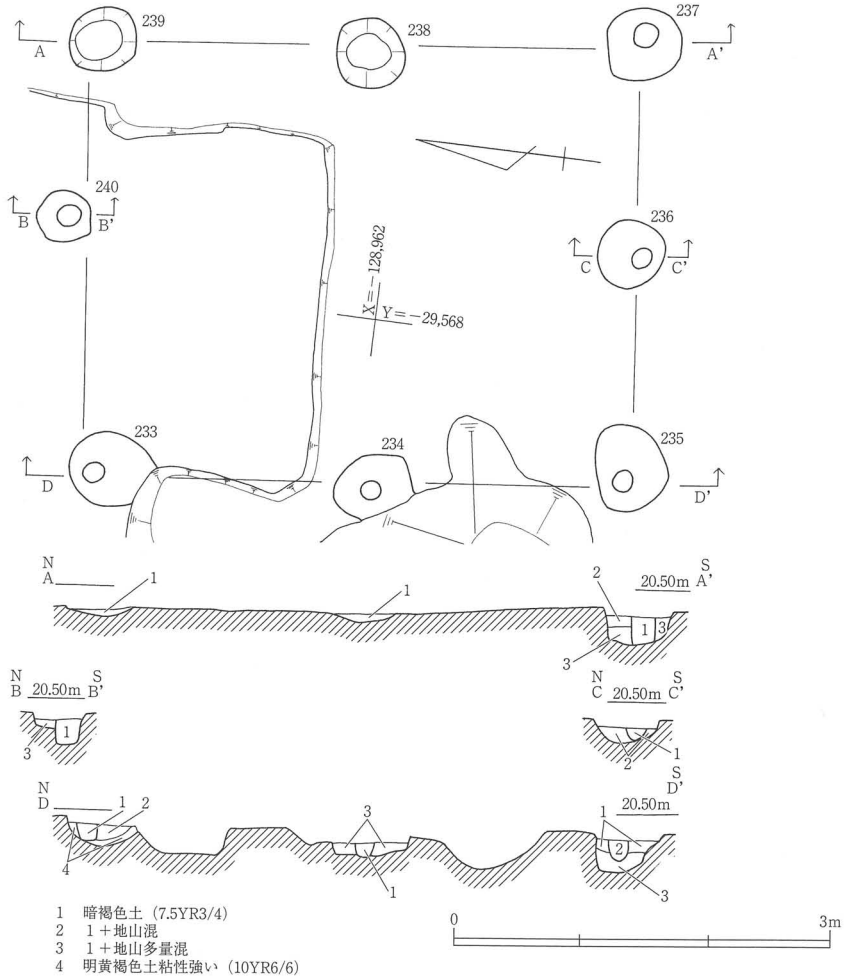
第76図　5区、37号掘立柱建物平面図・断面図（S＝1/60）



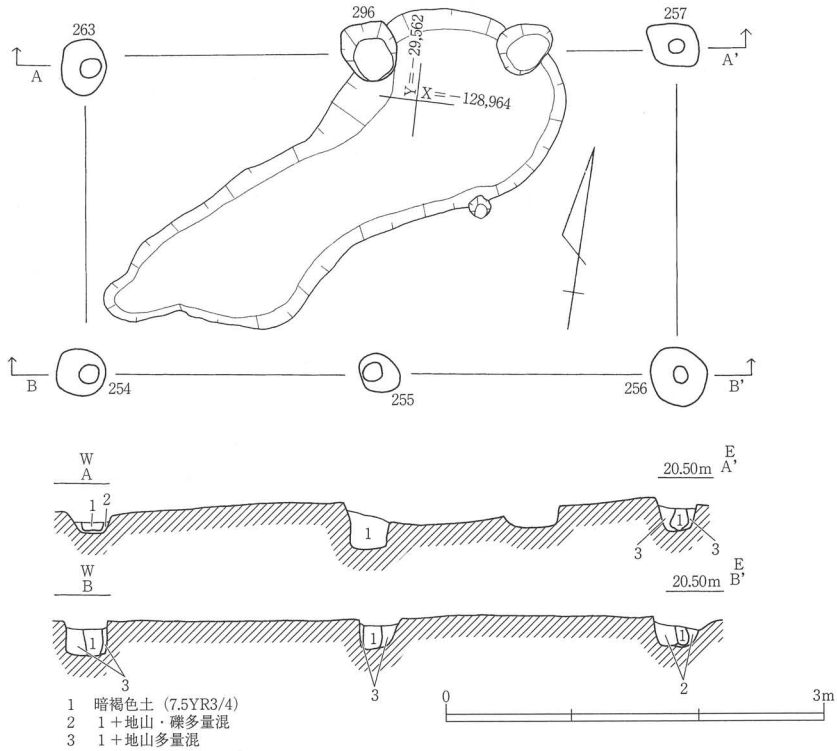
第74図　5区、35号掘立柱建物平面図・断面図（S＝1/60）



第77図　5区、38号掘立柱建物平面図・断面図（S＝1/60）



第78図　5区、39号掘立柱建物平面図・断面図（S＝1/60）



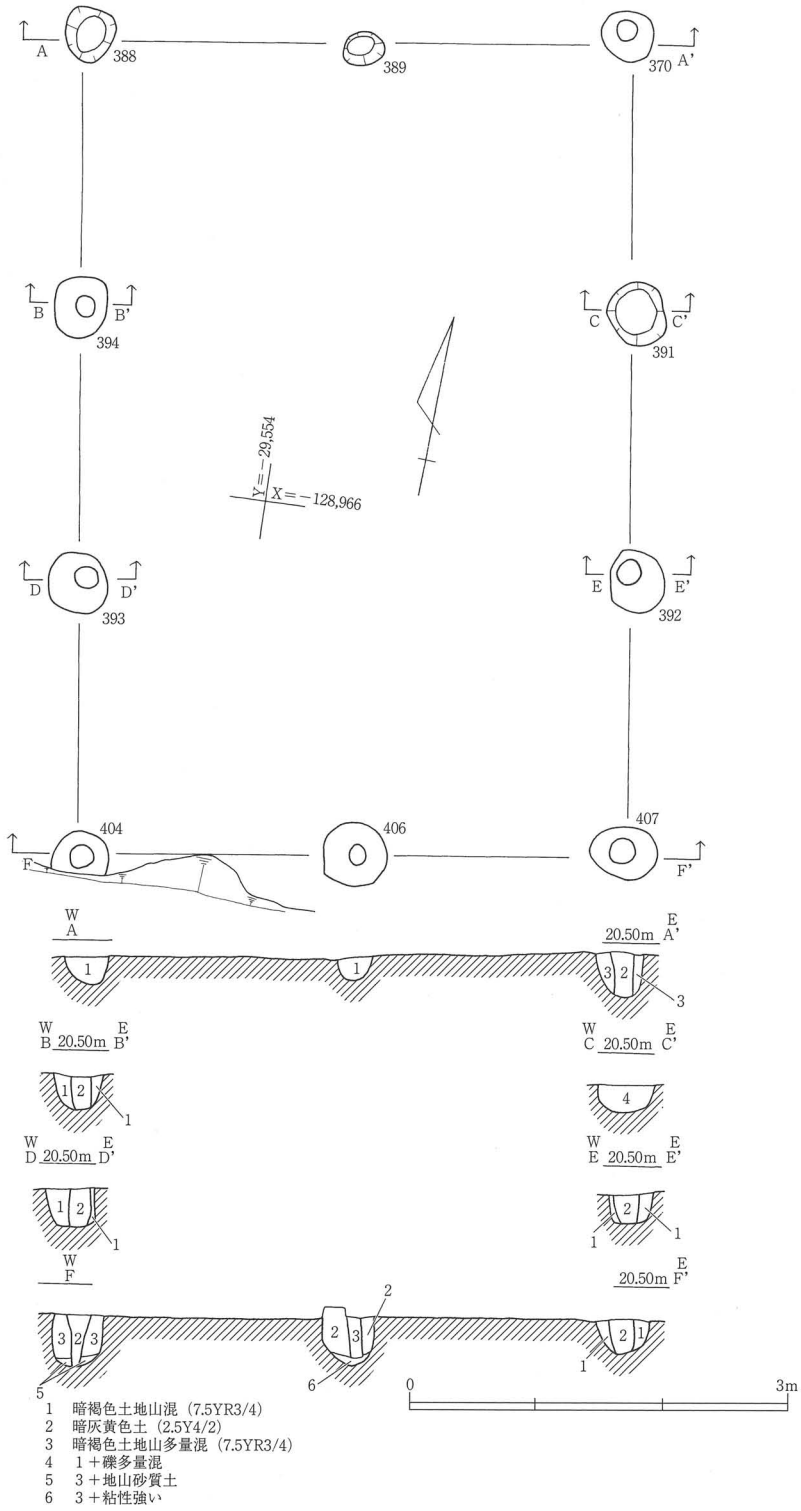
第79図　5区、40号掘立柱建物平面図・断面図（S＝1/60）

での掘立柱建物で総柱建物になる可能性が高い。柱間寸法は桁行1.5～1.6m、梁間1.7～2.0mで、梁間3.8mを測る。建物が調査区外へ広がるため桁行、床面積は不明である。主軸の方向はN-84°-Wで、検出面の標高は19.9mを測る。柱穴は、一辺が0.3～0.5mの隅丸方形もしくは円形の掘方を呈し、すべての掘方から径0.2mの柱痕跡を検出した。深さは0.2～0.4mを測る。

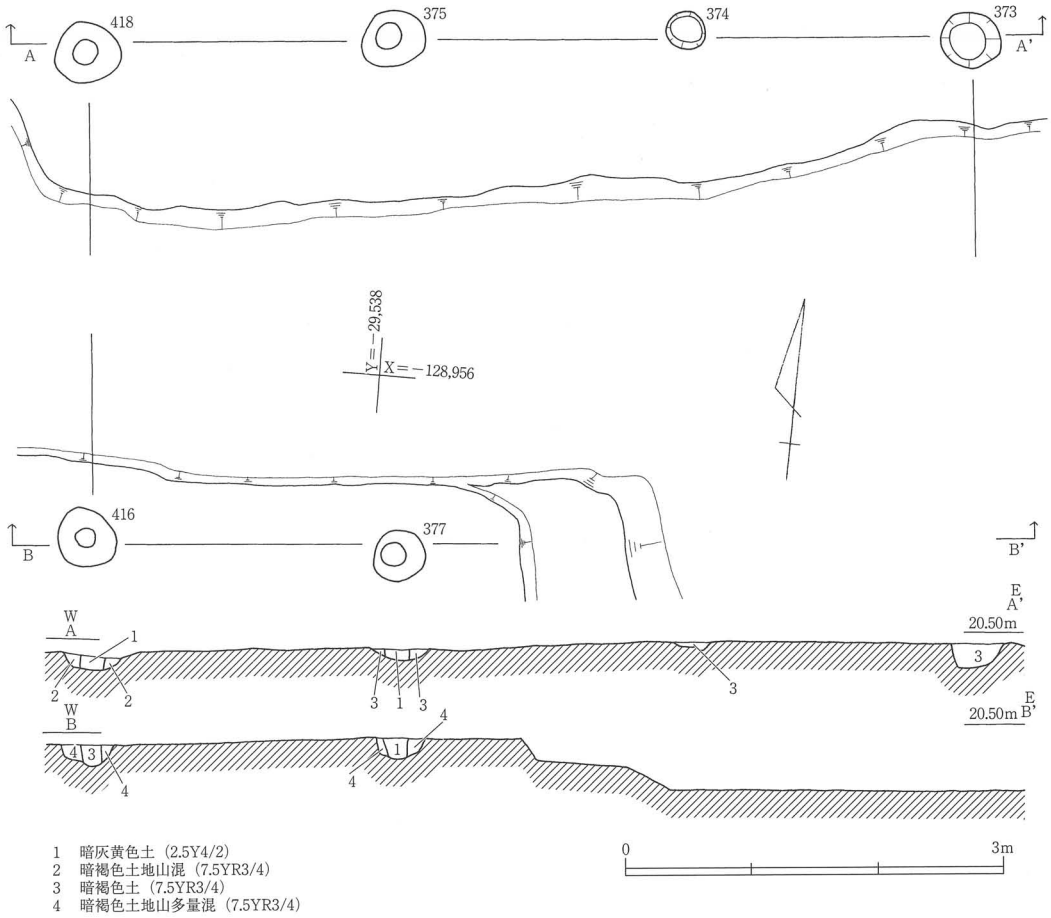
遺物は107から黒色土器などが出土したほか、105・106・108から土師器、須恵器が出土したが、いずれも小片で図化しえなかった。

44号掘立柱建物（第83図）　K7-6-A15-e・7で検出した2間、1間以上の掘立柱建物である。柱間寸法は東西2.2～2.3m、南北1.8mで、建物の南側が調査区外に広がるため建物規模は不明である。主軸の方向はN-89°-Eで、検出面の標高は19.5mを測る。柱穴は、一辺0.5～0.6mの隅丸方形の掘方を呈し、227・230から径0.2～0.25mの柱痕跡を検出した。深さは0.15m～0.25mを測る。遺物は230から奈良時代以降に属する、須恵器が出土したが、いずれも小片で図化しえなかった。

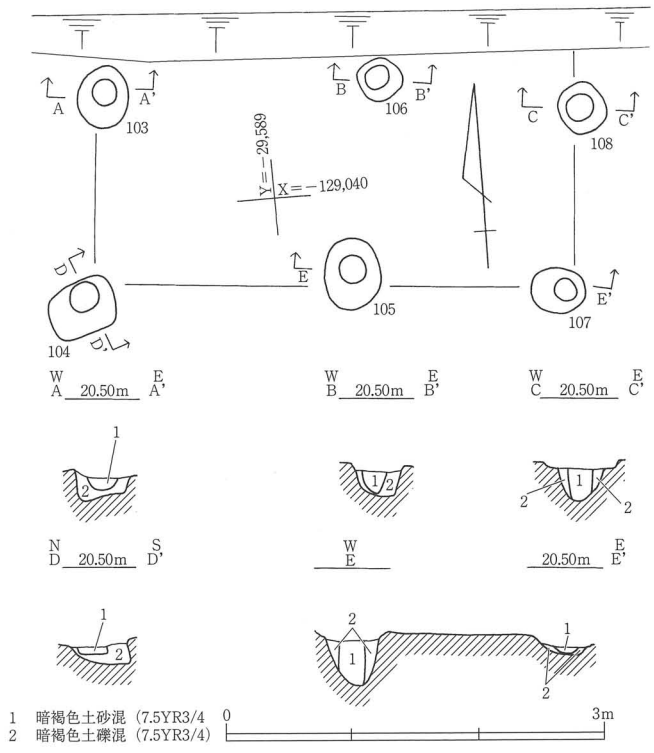
45号掘立柱建物（第84図）　K7-6-A15-e・6で検出した桁行2間、梁間1間の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行1.6～1.7m、梁間3.6m、で桁行長は3.4mを測る。床面積は約12㎡である。主軸の方向はN-52°-Eである。検出面の標高は東側では、撹乱がはいっているが、西側では19.5mを測る。柱穴は、一辺0.5～0.6mの隅丸方形の掘方を呈し、196・198・211・214・217から径0.2～0.25mの柱痕跡を検出した。深さは0.15m～0.25mを測る。遺物は194・196・198・211から弥生土器、土師器などが出土したが、いずれも小片で図化しえなかった。　（矢倉嘉人）



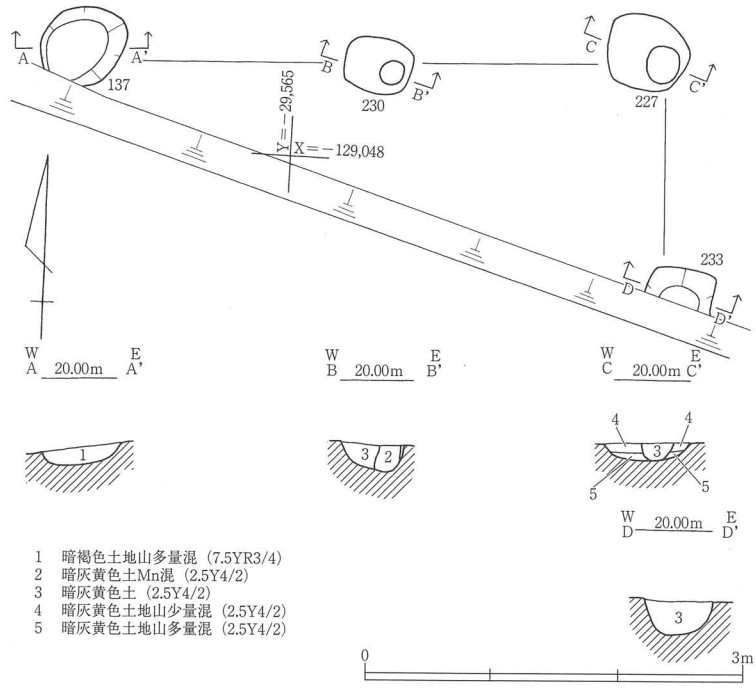
第80図　6区、41号掘立柱建物平面図・断面図（S＝1/60）



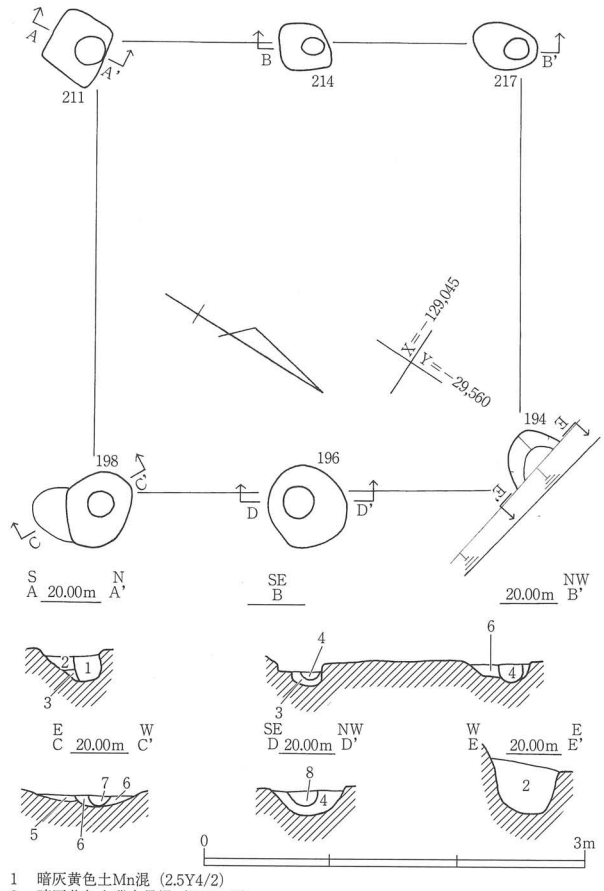
第81図　6区、42号掘立柱建物平面図・断面図（S＝1/60）



第82図　6区、43号掘立柱建物平面図・断面図（S＝1/60）



第83図　9区、44号掘立柱建物平面図・断面図（S＝1/60）



第84図　9区、45号掘立柱建物平面図・断面図（S＝1/60）

土坑

2区　175（第85図）　K7-10-O15-b・9で検出した。長軸1.4m、短軸1.0mの長方形を呈し、深さは0.1mを測り、埋土は2.5Y6/2灰黄色土1層である。埋土から平安時代の土師器の皿（93）がほぼ完形で出土した。

4区　1071(第86図)　K7-10-O16-i・2で検出した。東側は調査区外である。深さは0.45mを測り、埋土は7.5YR5/2灰褐色土（地山ブロック混）1層である。埋土から土師器の小皿（94、95）、瓦器碗（96）が出土した。(95）は口縁端部を折り曲げている。

1232（第87図）　K7-6-A16-a・1で検出した。直径0.3mのほぼ円形の小穴である。深さは0.1mを測り、埋土は10YR3/3暗褐色土1層である。埋土から瓦器碗(97）が出土した。

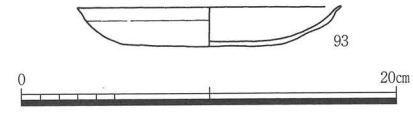
1275（第88図）　K7-6-A15-a・10で検出した。南側は撹乱に切られる。深さは0.4mを測り、埋土は7.5YR5/2灰褐色土1層である。埋土から瓦器碗（98）と土師器の台付きの坏（99）が出土した。

1320（第89、90図）　K7-6-A15-b・10で検出した。直径0.4mのほぼ円形を呈し、深さは0.15m、埋土は2.5Y4/2暗灰黄色1層である。埋土から平安時代のほぼ完形の土師器の皿（100）が出土した。

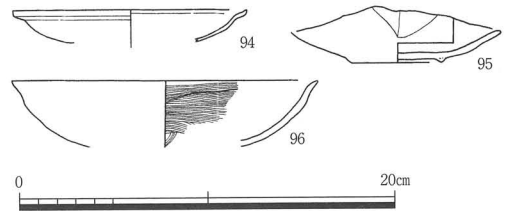
1415（第91図）　K7-6-A16-c・1で検出した。直径約0.4mのほぼ円形の小穴で、深さは0.4mを測り、埋土は7.5YR5/2灰褐色土1層である。埋土から瓦器碗(101）が出土した。

1488（第92図）　K7-6-A15-a・10で検出した。直径0.3mのほぼ円形の小穴で、深さは0.3mを測り、埋土は7.5YR5/2灰褐色土1層である。埋土から土師器の碗(102)、白磁碗（103）が出土した。

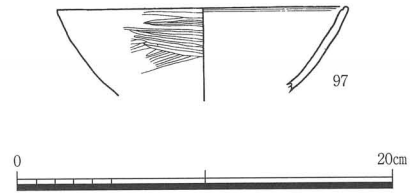
1494（第93図）　K7-6-A15-b・10で検出した。直径0.3mのほぼ円形の小穴で、深さは0.1mを測り、埋土は7.5YR5/2灰褐色土1層である。埋土から瓦器小皿



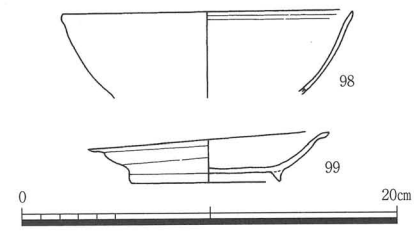
第85図　2区、175出土遺物実測図（S＝1/4）



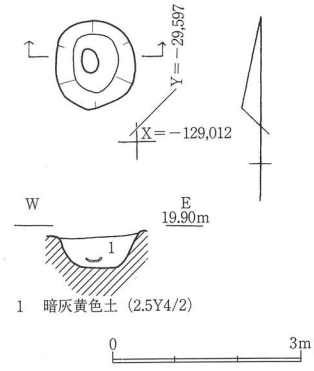
第86図　4区、1071出土遺物実測図（S＝



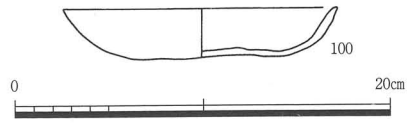
第87図　4区、1232出土遺物実測図（S＝1/4）



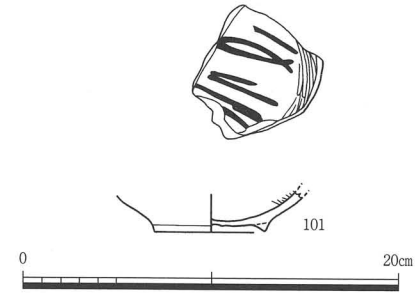
第88図　4区、1275出土遺物実測図（S＝1/4）



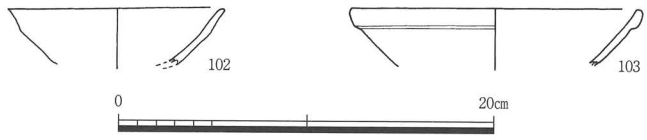
第89図　4区、1320平面図・断面図（S＝1/30）



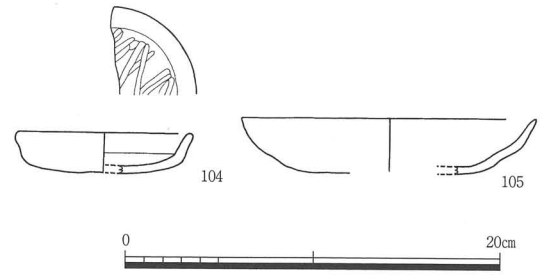
第90図　4区、1320出土遺物実測図（S＝1/4）



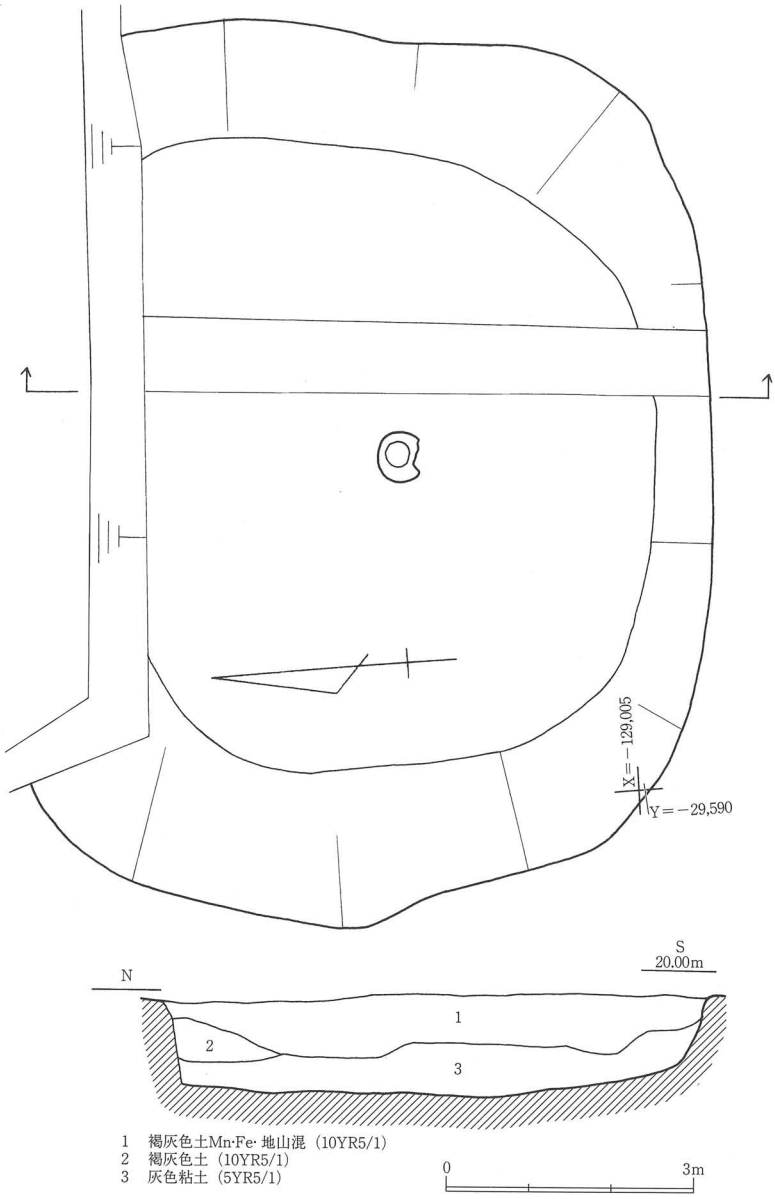
第91図　4区、1415出土遺物実測図（S＝1/4）



第92図　4区、1488出土遺物実測図（S＝1/4）



第93図　4区、1494出土遺物実測図（S＝1/4）



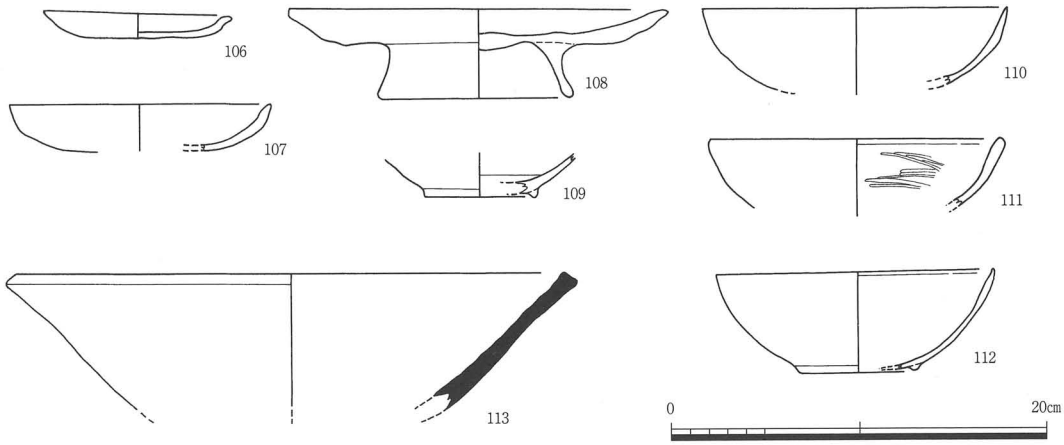
第94図　4区、1582平面図・断面図（S＝1/30）

（104）と、平安時代の土師器の皿（105）が出土した。

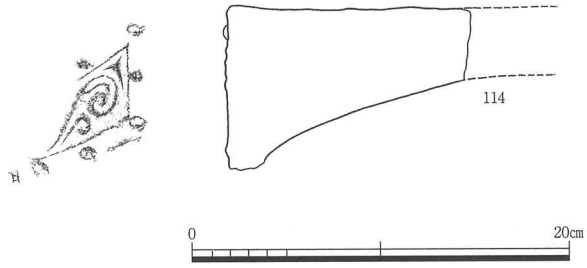
1582（第94、95図）　K7-6-A15-a・9で検出した。北側は調査区外である。検出長3.6mの隅丸方形で、埋土は2層に大別でき、3層に細分される。上層が10YR5/1褐灰色土、下層が5YR5/1灰色粘土である。埋土から土師器の小皿（106）、皿（107）、ほぼ完形の台付き皿（108）、瓦器碗（109～112）、須恵器の鉢（113）が出土した。瓦器碗から12世紀半ばから13世紀代に相当すると考えられる。

2169（第96図）　K7-10-O16-j・2で検出した。長軸0.7m、短軸0.3mの長円形である。深さ0.1mを測り、埋土は7.5YR5/2灰褐色土1層である。軒平瓦（114）が出土した。

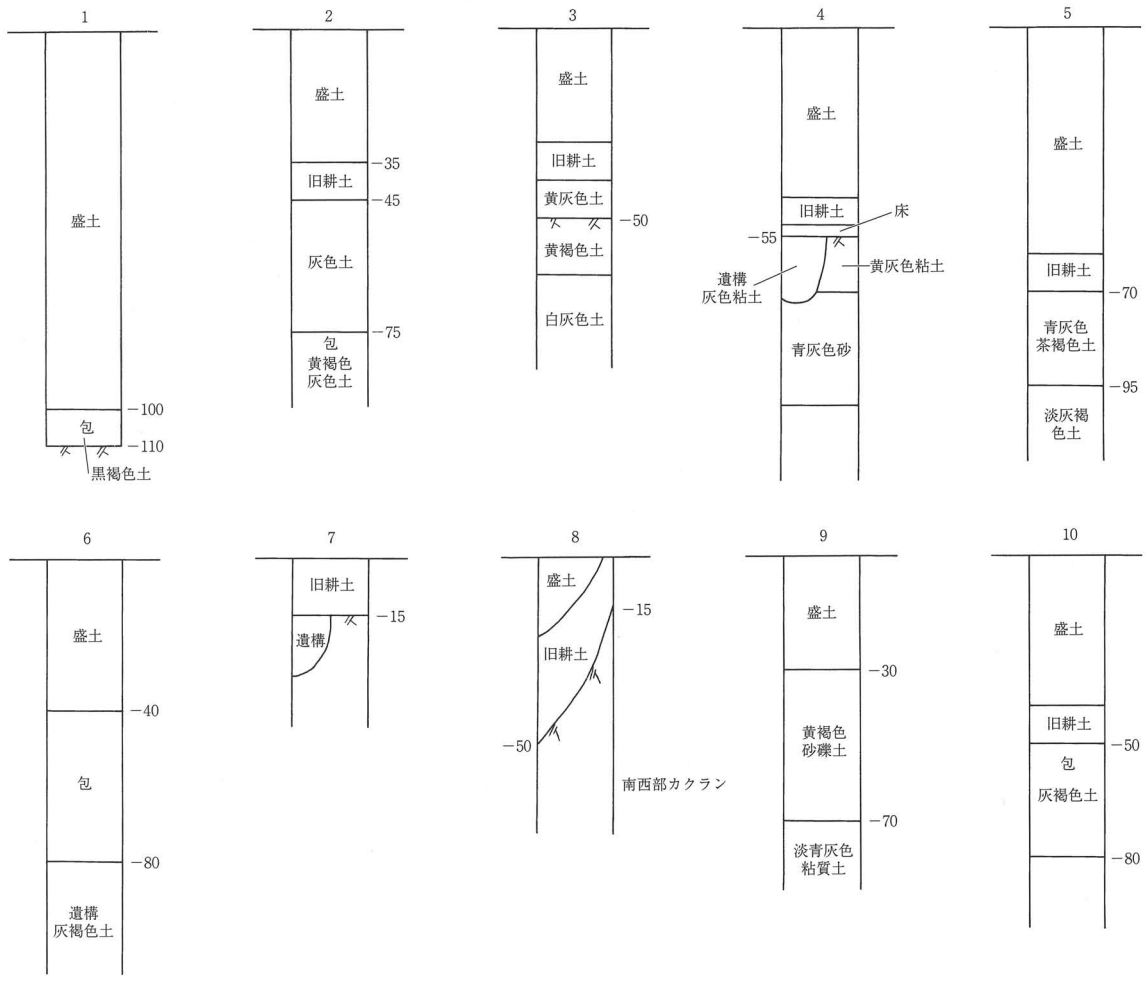
（井西）



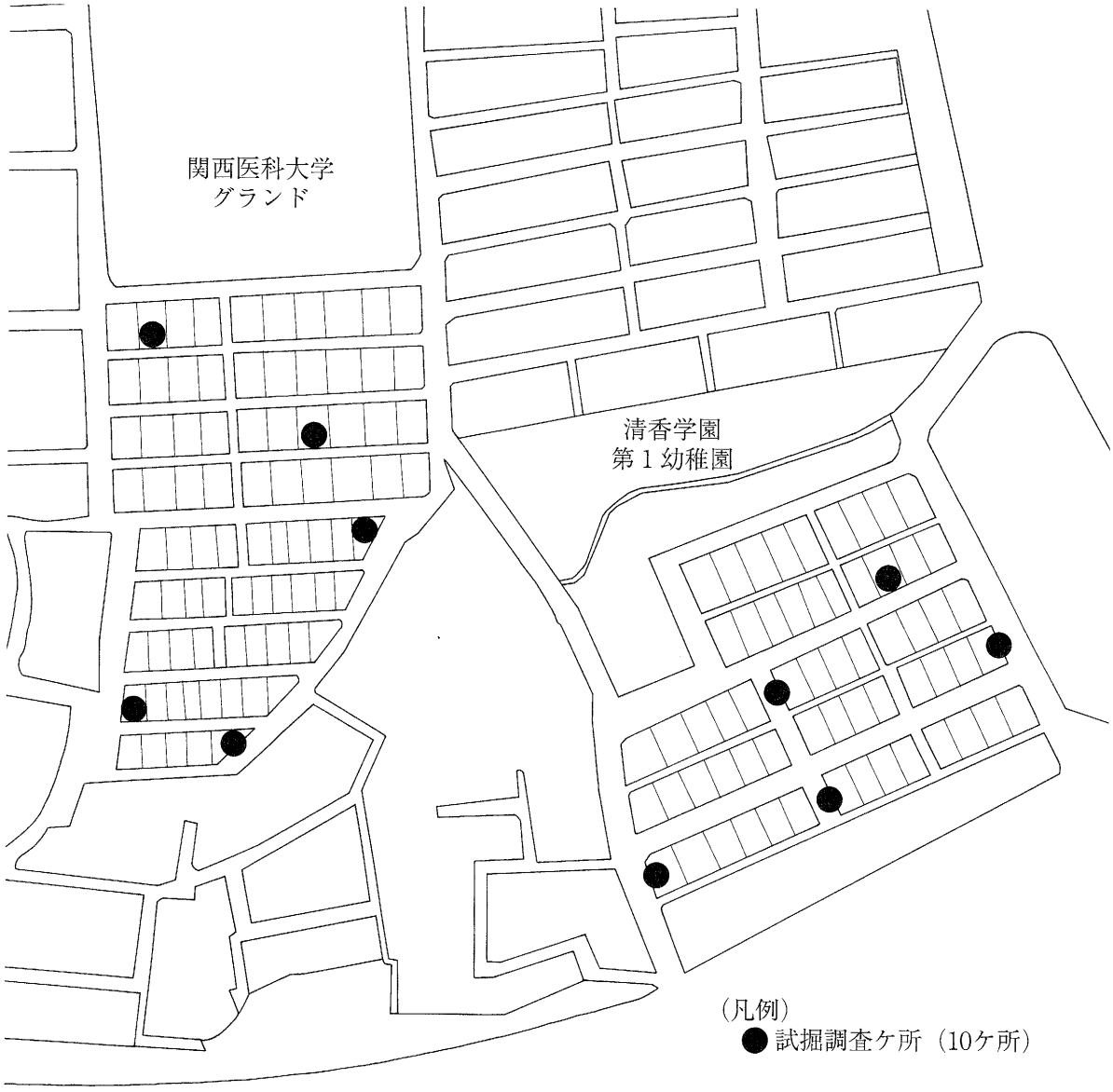
第95図　4区、1582出土遺物実測図（S＝1/4）



第96図　4区、2169出土遺物実測図・拓影（S＝1/4）



第97図　試掘調査断面模式図



第98図　試掘調査位置図

第３項　試掘（第101、102図）

トレンチ調査である。

１、２、５、６、９、10では、包含層が確認された。遺物の出土がなかったので、時期は不明。

３は、盛り土を除去すると、旧耕土・床土が確認され、その下はすぐに地山層である。

４では、包含層上面から切り込む遺構が確認された。

７では、旧耕土の下がすぐに地山となり、地山面で遺構が確認された。

８では、地形が南に向かって傾斜していた。

第４項　招提中町遺跡出土の石包丁の使用痕分析

（株式会社アルカ）　　山田しょう

１．試料

大阪府招提中町遺跡の７点の石包丁のうち、全体の1/2以上が残る大形の破片５点（Nos.９、10、11、12、13）について、高倍率法（Keeley1980）による使用痕分析を行った。石材はNos.９、10が緑色片岩、No．142が頁岩、Nos.143、146が黒色粘板岩である。このうち２点（Nos.140、143）にのみ、確実な使用痕光沢面が認められた。

２．方法

試料表面をエタノールで拭き取り、手の脂などによる汚れを除去した後、まず落射型金属顕微鏡（Olympus　BX30M－BD）の100倍と200倍で試料の表面全体を観察した。刃部およびそのすぐ内側については、全ての部分を検査したが、縁辺から離れた石器の内側については、試料の軸に平行もしくは直交する方向のいずれかを表面の起伏に応じて選び、約１㎝の間隔で走査した。次いでキーエンス社のデジタルマイクロスコープVHX100で細部の観察と写真撮影を行った。図１の１～４の高倍率写真は、VHX100の新しい機能である深度合成により、異なる焦点深度で撮影した写真を合成し、従来に比べ焦点深度格段に深い写真を作成したものである。

３．観察結果

資料の表面状態：緑色片岩製の144の表面が風化によりやや荒れているものの、全試料について使用痕光沢面の分析が可能な状態であった。

光沢面タイプ：試料140と143に植物の作業で最も典型的に作成されるＢタイプの光沢面（梶原・阿子島1981、芹沢他1982）が、これまでの他地域での石包丁の使用痕分析例の多くに見られるように、（須藤・阿子島1984、1985；阿子島・須藤1984等）、主に「パッチ状」に点在して形成されているのが観察された（図１）。この「パッチ状」の光沢面形成は、石包丁の素材に使われる岩種が、チャートや珪質頁岩等と異なり、斑晶と石基による構造を持つことに起因する。相対的に大きな結晶（斑晶）が、初めから大きな平坦面を持っているためにまず摩耗し、目につく光沢面を形成するため、それがパッチ状に点在して見えるのである（Yamada1992）。線状痕は明瞭でなく、それ自体では、石器の運動方向を決定しがたい。しかし、筆者のこれまでの実験の経験や考古資料の分析では（山田1990；山田・山田1992）、穂摘みに使われた石器は、光沢面が顕著な線状痕を示さないことが多い。これは、穂摘みの動作では石器の動きが少なく、光沢面が、主に穂の茎が指によって石器表面に押し付けられることによって形成されるため、と考えられる。この点から見れば、試料140と143における明確な線状痕の欠如は、使用痕は穂摘みの作業を示してい

るということもできる。

光沢面の分布パターン：光沢面の分布状況を、図1に示す。図に示された光沢面強度の違いは、試料上における相対的な差異で、定量的な基準は無い。140、143の2点とも、確実な使用痕光沢面は刃部に限られ、特に「裏側」（実測図の右側に置かれた面で、刃の部分に鏑のある側を地面に向ける）のが最も効率的であったと考えられる。片刃の石包丁は、その刃部の断面形から、穂を摘み取る場合、鏑の無い側（＝裏側）を上に向ける（すなわち鏑のある側を地面に向ける）のが最も効率的であったと考えられる。したがって、裏側において穂が指で押さえつけられることから、裏側に、より光沢面が形成されるのは自然と考えられる。また、片刃の石包丁を研ぎ直す場合、鏑のある側（「表側」）から研いで、片刃の断面形を作り出すのが自然なので、その点でも、表側の使用痕光沢面が失われやすく、裏側に光沢面が集積しやすいと考えられる。

池谷（2001）による和歌山県荒田遺跡の3点の石包丁の例では、招提中町と同様片刃であるが、うち2点は両面において、石包丁の上部にまで光沢面が及んでおり、東北地方など、他の地域の穂摘み具と概ね同様な光沢面の分布パターンを示している。近畿地方の有孔磨製石包丁では他に、松山（1992、1995）、高木（2000）による分析報告があるが、ほとんどの例で光沢面が刃部を越えて石包丁の上部に達している。これに対し、招提中町では、140と144の両面において、刃からの距離が紐穴とほぼ同じレベルのところで、Bタイプに似た光沢面がごく稀に点在するものの、あまりにも少ないので、積極的に使用痕光沢面とは断定できない。これらが使用痕光沢面とすれば、光沢面が石包丁上部に及ぶことになるから、140と144の試料が他遺跡の例同様、穂摘みに使われたことの証拠のひとつとなり、全体に光沢面が少ないことは、表面の再研磨により、かつて形成されていた光沢面が失われたためと解釈できるだろう。また、144の試料表面全体に、Bタイプに似た丸みを帯びる光沢面がパッチ状にとどまらず、かなり大きくなる場合があるので、これは、植物の作業以外の、石器の研磨や保持、その他の原因によって生じたものである可能性が高い。

研磨痕：上記のように招提中町の石包丁では使用痕光沢面の検出率が低く、研磨によって光沢面が失われた可能性があるため、研磨痕の状態についても、肉眼および低倍率（実体顕微鏡の20倍以下）で観察した。使用痕光沢面が観察されなかった146は全面に粗い研磨痕が残され、特に刃部の表側で顕著である。刃端も研磨により潰され、面が形成されている。この試料は石包丁制作中の研磨もしくは使用中の再研磨の過程で放棄されたと考えられる。Nos.140、144も刃部の表面側で研磨痕が顕著であり、142は両面とも刃部の研磨痕が顕著である。Nos.144、142は、使用痕光沢面は検出されていないものの、次に見るように紐ズレ痕があることから、かなりの期間試用されたものと考えられ、使用痕光沢面は再研磨の過程で失われ、その後これらの石器はあまり使用されなかった（実験により、穂摘みの光沢面の形成は非常にゆっくりしていることが知られる）

ものと推定される。

全体として表側刃部で研磨面が顕著であるという上記の観察は、先に述べた片刃では、その形態から表側で研磨がより集中的になされるであろうという推定、およびNos.140、143において裏側で光沢面が発達している事実とよく合致する。また、池谷（2001）による荒田遺跡の例でも試料表側に研磨痕が集中して観察されるという事実とも合う。

紐ズレ痕：紐ズレの痕と思われる摩耗痕が紐孔の縁辺に肉眼で観察される。顕微鏡下では、この部分に固有な光沢面は観察されない。この摩耗痕は、Nos.140、144、142においていずれも、裏側の孔上辺に認められ、かつ左孔の摩耗痕はわずかに右上方に向かい、右孔の摩耗痕はわずかに左上方に向かう。また、144の表側では、右孔の左辺に、ちょうど左孔に向けて紐が通されたことを示すような位置に摩耗痕が認められる。以上の観察は、荒田遺跡の３点の試料の観察から池谷（2001）が推定した、石包丁は裏側（鏑のない側）を使用者に向けて保持して、裏側で紐に通した（おそらく）中指を石器の上辺から表側にかけたという保持方法を指示するものである。

まとめ：

大阪府招提中町遺跡の７点の石包丁の使用痕分析により、次のような結果が得られた。

１．７点中２点に明確な使用痕光沢面が認められた。

２．使用痕光沢面の形態的特徴・分布のパターン、石器の形態、および紐ズレ痕と推定される摩耗痕の存在から、上記２点の石包丁は稲などの穂摘みの作業に用いられた可能性が高い。

３．石器表面に残された研磨痕・紐ズレ痕の状態から、使用痕光沢面の欠如している試料の大部分では、使用の過程のおける石器の再研磨によって光沢面が失われた可能性が高い。

４．使用痕光沢面の石器裏側での発達、紐ズレ痕の位置、表側における研磨痕の発達と鏑の存在は、石包丁が、裏側を使用者に向け、裏側で紐に通した中指等を石器の上辺を越えて表側にかけて保持されたことを示唆し、光沢面・鏑・研磨痕・紐ズレ痕の位置・分布の間に有機的な関係があり、それは穂摘みの動作と強く結びついていることを示す。

引用文献：

阿子島香・須藤隆　1984　「富沢水田遺跡泉崎前地区出土石包丁の使用痕」『富沢水田遺跡Ⅰ』PP.213－216．仙台市教育委員会

池谷勝典　2001　「荒田遺跡における石包丁の使用痕分析」『尼が辻遺跡・荒田遺跡発掘調査報告書－県道佐野岩出線道路改良工事に伴う発掘調査－』PP.157－163．和歌山県文化財センター

梶原洋・阿子島香　1981　「頁岩製石器の実験使用痕研究－ポリッシュを中心とした機能推定の試み－」『考古学雑誌』67（１）：１－36

須藤隆・阿子島香　1984　「下ノ内浦遺跡ＳＫ２土壙出土の石包丁」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅲ』　PP.59－66.　仙台市教育委員会

須藤隆・阿子島香　1985　「東北地方の石包丁について」『日本考古学協会第51回総会研究発表要旨』　p.19

芹沢長介・梶原洋・阿子島香　1982　「実験使用痕研究とその可能性（東北大学使用痕研究チームによる研究報告　その４）」　『考古学と自然科学』　14：67－87

高木芳史　2000　「亀田遺跡出土石包丁の使用痕分析」　『亀田遺跡（第２分冊）－亀田遺跡Ⅰ地点の調査』　PP.263－266.　兵庫県教育委員会

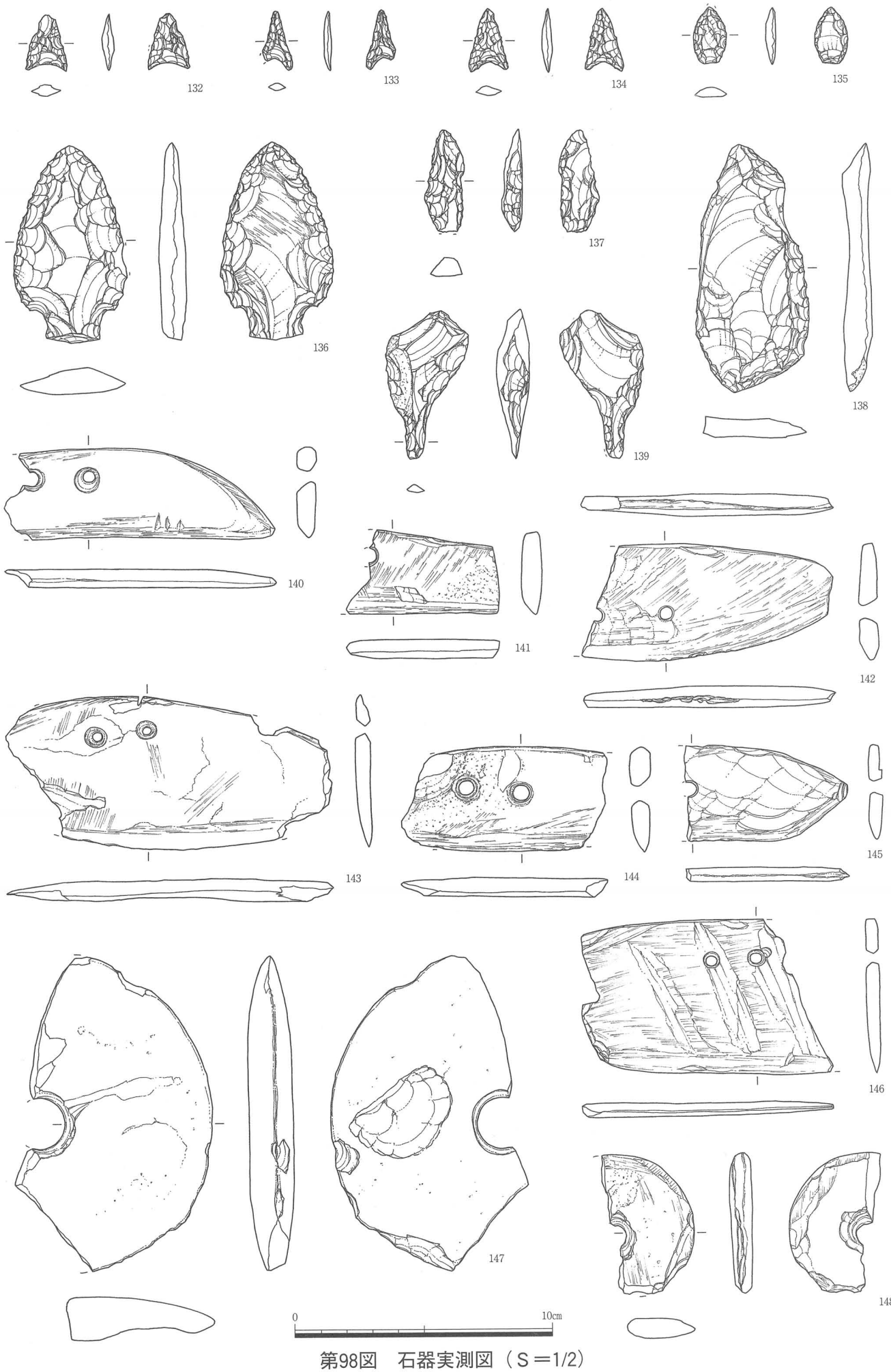
松山聡　1992　「石包丁の使用痕」　『大阪文化財研究』３：１－10.（財）大阪文化財センター

山田しょう　1990　「仙台市郡山遺跡（第85次調査Ｂ区）出土の石包丁の使用痕分析」　『郡山遺跡第84次・第85次発掘調査報告書』　PP.113－115.　仙台市教育委員会

山田しょう・山田成洋　1992　「静岡県内出土の「石包丁」の使用痕分析」　『川合遺跡』遺物編２：109－147.　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

Keeley,L.H.　1980　*Experimental Determination of Stone Tool Uses：A Microwear Analysis.* University of Chicago Press,Chicago and London.

Yamada,S.　1992　A Basic Study of Use-Wear "Polish" on Early Paddy Farming Tools. In Vandiver,P.B., Druzik,J. and Wheeler,G.S. eds.,*Materials issues in Art and Archaeology* Ⅲ：805－816.　Material Research Society,Pittsburgh.



第98図　石器実測図（S＝1/2）

番号	出土位置（遺構）	器種	石材	拡大写真の有無	刃部属性	形態形成加工	二次加工の位置（素材剥片の軸に対し）	剥離の方向	素材剥離技術	素材形態	刃先角	備考	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重量（g）
132	–	凹基鏃	サヌカイト	なし	SP/平坦	SP/平坦	全辺	正反	不明	剥片	適用外		21.8	16.3	4.9	1.1
133	184	凹基鏃	サヌカイト	なし	SP/平坦	SP/平坦	全辺	正反	不明	剥片	適用外		23.1	11.5	3.2	0.5
135	1023	平基鏃	サヌカイト	なし	SP	SP	全辺	正反	不明	剥片	適用外		22.3	12.9	4	1.2
134	316	凹基鏃	サヌカイト	なし	SP/平坦	SP/平坦	全辺	正反	不明	剥片	適用外		24.5	15.1	4.2	1
139	–	石錐	サヌカイト	なし	D	D	右辺+左辺	正反	不明	横長剥片	適用外		57.7	32.2	12.8	16.5
136	–	尖頭器	サヌカイト	あり	SD+SP/平坦	SD+SP/平坦+研磨	右辺+末端辺	正反	不明	剥片	適用外	尖頭部に押圧剥離痕あり。器体中央に研磨整形痕あり。	76.8	43.8	10.8	34.7
137	攪乱	石鏃	サヌカイト	なし	D/急角度	D/急角度	基辺+末端辺	正反	不明	横長剥片	適用外		39.7	15.7	8.4	4.9
138	2171（北）	槍先形石器未成品	サヌカイト	あり	SD/平坦	SD/平坦	不明	正反	不明	剥片	適用外		96.6	43.9	11.4	49.3
140	–	弧背凹刃型磨製石庖丁	緑色片岩	なし	研磨	研磨	適用外	適用外	不明	剥片	66	裏面の紐ずれ痕あり。	36.3	104.4	7.6	51.4
144	自然河道流路	弧背直線刃型磨製石庖丁	緑色片岩	なし	研磨	研磨・敲打	適用外	適用外	不明	剥片	57	裏面の紐ずれ痕あり。	41.1	79.4	7.8	42.9
142	227	直背弱凸刃型磨製石庖丁	頁岩	なし	研磨	研磨	適用外	適用外	不明	剥片	63		45.9	96.9	8.8	55.9
143	–	弧背弱凸刃型磨製石庖丁	黒色粘板岩	なし	研磨	研磨	適用外	適用外	不明	剥片	40		60	125.3	9.4	80.6
146	–	直背直線刃型磨製石庖丁	黒色粘板岩	なし	研磨	研磨	適用外	適用外	不明	剥片	面取り		60.2	96.7	6.1	56.3
141	106	直線刃型磨製石庖丁	頁岩	なし	研磨	研磨・敲打	適用外	適用外	不明	剥片	69		33.1	59.3	7.8	23.5
145	924（西半分）	弱弧背凸刃型磨製石庖丁	頁岩	なし	研磨	研磨	適用外	適用外	不明	剥片	34		37.8	63.4	5.9	21.4
147	流路	環状石斧	安山岩	なし	研磨	研磨	適用外	適用外	不明	不明	適用外		122.2	76.3	18	190.7
148	383	紡錘車	流紋岩	なし	研磨	研磨	適用外	適用外	不明	不明	適用外		54.5	35.8	9.2	23.3

第4章　まとめ

今回の調査では、第1次調査から続く古墳時代の竪穴住居、平安時代から中世の掘立柱建物と南・北・西側に下がる自然地形跡としての自然流路を検出するとともに、方形周溝墓群が、ほぼ第1次調査区周辺で、完結することが確認された。本遺跡は、東から張り出してくる舌状台地上に広がっているが、どの時期も比較的集落が形成される期間は、短いと考えられる。明らかな弥生時代前期に遺構は確認されていないが、自然流路からは前期の土器が出土しており、集落の存在を伺うことができる。中期には第1次調査で確認された方形周溝墓群とその西側（本報告の調査区4）では、竪穴住居が確認されている。集落と墓域を区切る施設は現段階では見つかっていない。その後古墳時代になると庄内式併行期の竪穴住居が確認された。切り合いも少ないことから、短命な集落であったと思われる。なお、第1次調査区では、後期の竪穴住居が確認されている。今回の調査区への広がりは確認できなかった。本調査区で新たに集落が営まれるのは平安時代になってからである。平安時代以降の掘立柱建物は、調査区全体に広がっており、切り合いも多く、古墳時代に比して長く存続したと考えられる。しかし調査区全体を通して上面の削平が著しく、遺物の出土量が極めてすくないため、時期の詳細や変遷を考えるのは困難であった。今後の調査に期待したい。（井西）

1．庄内式併行期における招提中町遺跡

松尾奈緒子

ここでは、当該期の枚方市域における集落動態の中に招提中町遺跡を位置づけ、枚方市域の竪穴住居の特徴および枚方市域の庄内式土器の特徴に触れ、簡単なまとめに代えたい。

（1）弥生時代後期から古墳時代前期における枚方市域の状況と招提中町遺跡

枚方市域では、穂谷川流域では交北城ノ山遺跡、天野川流域では村野遺跡が、弥生時代中期前半以降台地上に集落を形成するものの中期後半になると一度廃絶する（表1）。一方、これと入れ替わるように中期後半になると、穂谷川流域では田口山遺跡、津田城遺跡古城地区、天野川流域では星丘西遺跡、藤田山遺跡などの集落が、丘陵上に出現する。これに遅れて後期になると、藤阪東、ごんぼうやま、御殿山、長尾西、出屋敷などの多くの遺跡が丘陵上に散在するようになる。弥生時代後期を中心に丘陵上に分布するこれらの遺跡には、V字環濠が掘削されている田口山遺跡・星丘西遺跡や藤田山遺跡、津田城遺跡古城地区など、従来、高地性集落と捉えられているものが含まれており、これらの集落の多くは、津田城古城地区や長尾西、出屋敷などの一部の遺跡を除いて、古墳時代の開始とともに消滅していく。やがて弥生時代終末期から古墳時代前期になると、再び台地上に集落が進出するようになる。穂谷川流域では、交北城ノ山、九頭神、渚、小倉東、藤阪南、津田トッパナ、田口中島などの遺跡、天野川流域では、村野、山之上天堂、鷹塚山、星丘、茄子作などの遺跡が、このような集落に該当する。とくに、弥生時代中期後半に一

度廃絶した交北城ノ山遺跡や村野遺跡に、弥生代後期をへて再び集落が形成されることは、高地性集落との関連性が従来から指摘されているところである。

以上のことから、枚方市域の弥生時代から古墳時代への移行期における集落動態の特徴として次の３点が挙げられる。①弥生時代中期後半には、台地上に形成された比較的大きな集落が一旦廃絶される。②弥生時代中期後半から後期にかけて、集落は台地上から丘陵上へと移動する。③弥生時代終末期から古墳時代前期にかけて、集落は再び台地上に営まれるようになる。

招提中町遺跡は、男山丘陵と枚方丘陵の間にある台地の中位段丘上に立地する。また、弥生時代中期の土器および庄内式土器は出土するものの、弥生時代後期の土器はみられない。したがって、招提中町遺跡は、弥生時代後期に何らかの理由で一度廃絶され、古墳時代前期になり人が台地上に戻っていくると再び集落が営まれるようになった遺跡と考えられる。招提中町遺跡は、交北城ノ山遺跡や村野遺跡と同じ特徴をもった遺跡といえよう。

（２）枚方市域の竪穴住居の状況と招提中町遺跡の竪穴住居

枚方市域で検出されている弥生時代後期から古墳時代前期の住居址を集成したものが、表２である。基本的に『枚方市史』第12巻（１）および『枚方市史』別巻（２）に基づいて資料を収集した。

当該期の竪穴住居は、弥生時代中期には円形を呈していたものが、古墳時代になると平面形が方形で柱はなしまたは4本が多くなるものへ変化して、地域差が希薄化することが、共通認識となっている。また、大阪府下では、周溝が約8割の住居にめぐること、壁溝よりの中央に不整形土坑が設置されること、ベッド状遺構が全体の1割弱の住居にみられることなどが指摘されている（３）。表３から、枚方市域では、弥生時代後期には直径５ｍ～８ｍ程の円形住居が混じるものの古墳時代前期には４ｍ～７ｍ四方の方形のみとなり、柱も４本が主流でありないものが少数みられるという状況が看取できる。一方、住居内施設の特徴としては、周溝がみられないこと、炉として報告されている住居中心に土坑が設置されること、および住居南辺または南東辺の壁溝に接する形で不整形土坑が掘り込まれること、ベッド状遺構が設置されることなどが特徴としてあげられる。以上のことから、当該期の遺跡のほとんどが丘陵上および台地上に分布する枚方市域の竪穴住居は、排水用の周溝が必要なかったと考えれば、大阪府下資料のから大きく逸脱しないものであるといえる。

一方、招提中町遺跡では、今回の調査で合計10棟の竪穴住居を検出することができた（表３）。すべて、一辺が４ｍ～６ｍ前後の方形を呈しており、主柱穴が４つのものとないものの２つのタイプがみられる。４つもつものは10棟中７棟で圧倒的多数を占めており、主柱穴の痕跡が検出されなかったのは15号住居1棟のみである。また、この15号住居には、隣合う２辺にベッド状遺構が検出されている。ベッド状遺構を確認できたのは、この1棟のみである。壁溝はすべての住居において検出できたものの、周溝は検出されなかった。そのほか、住居内の遺構として、南辺または南東辺の中央部に壁に接するような状態で設置された不整形土坑が、10棟中５棟に確認でき

た。

当遺跡では、1998年および1999年にも大阪府教育委員会が調査を行っており、すでに報告書が刊行されている（4）。この調査は、本調査区の南東で行われており、古墳時代前期に属する14棟の竪穴住居が検出された。そのすべてが方形住居であり、規模の大小に多少のばらつきはあるものの（18号・19号・8号住居）、ほとんどの住居の規模は一辺4ｍ～6ｍほどである。これらの住居には、主柱穴が4本のもの、2本のもの、ないものの3タイプがみられ、その内訳は、それぞれ、4本のものが7棟、2本およびなしのものが各1棟となっている。壁溝は、3棟をのぞくすべての住居に確認され、本調査と同様に周溝は検出されていない。そのほか、住居内の遺構としては、南辺または南東辺の中央部に、本調査とおなじような形状の不整形土坑が14棟中12棟に確認されており、加えて、コ字状に3辺に高床部を設けるベッド状遺構が、14棟中5棟に設置されている。さらに、本調査における竪穴住居では確認できなかったが、報告書によれば、14棟中9棟に中央土坑が確認されている。

本調査と1998・99年度調査を総合して考えると、招提中町遺跡における古墳時代前期に属する竪穴住居の特徴は以下の3点にまとめることができる。①一辺4ｍ～6ｍの方形を呈し、4本の柱と四方に壁を持つが、周溝は持たない。②南辺または南東辺中央部に壁に接するような形で不整形土坑が設置され、住居の中心に土坑がある。③コ字状に3辺に高床部を設けるベッド状遺構が一部の住居にみられる。したがってこれらの特徴より、招提中町遺跡の古墳時代前期の竪穴住居は、大阪府下および枚方市域に標準的な竪穴住居と位置づけられる。

以上のことから、枚方市域および招提中町遺跡の当該期竪穴住居の特徴をふまえ、南あるいは南東壁に接する位置に設置される不整形土坑に関して、2つの問題点を指摘しておきたい。第1点目は、このような住居内の不整形土坑は、すでに石野博信によって、「琵琶湖南岸地域の弥生時代末から古墳時代初頭の地域色とみることができるかもしれない」と言及されており（5）、他地域でもよくみられる特徴であるということである。すなわち、地域性としてこのような住居の特徴がどの範囲に成立するのかということがいまだ明確でないことが、第1点目の問題点として挙げられる。次に、この不整形土坑の性格がわからないことが、第2点目の問題点としてあげられる。つまり、枚方市域における報告書では入口と報告されている場合が多いが、滋賀県では貯蔵穴と認識されたり、単に「住居内土坑」と呼称されたりするのである（6）。入口と呼称される場合は、不整形土坑の位置すなわち、南あるいは南東辺の中央という住居内の中での立地条件から判断しているようである。一方、琵琶湖南岸地域の遺跡においては、竈が住居内に導入されるようになると、導入以前に不整形土坑が設置されていた東～南辺中央に竈が敷設され、その右方向の壁コーナーに住居内土坑を設置するように定型化する傾向にあることが指摘されており(7)、このことから貯蔵穴と判断しているようである。今後遺構の性格が推定できるような状況で検出されることを期待したい。

(3) 枚方市域における庄内式土器併行期の様相

弥生時代後期第Ⅴ様式の後、弥生土器は古式土師器へと変遷し、河内では庄内式土器・布留式土器が出現する。しかし、河内から外れる周辺地域では、古墳時代前期初頭と比定される時期にⅤ様式系甕が主流を占め、典型的な庄内系甕があまりみられないことが従来から指摘されている。このような状況は北河内に位置する枚方市域にも該当し、枚方市域では典型的な庄内系甕がほとんどみられず、このようなⅤ様式甕が主流を占める。さらに枚方市域では、Ⅴ様式甕が尖底あるいは丸底となる時期となっても、Ⅴ様式甕が丸底化せず平底のまま残存するようである。

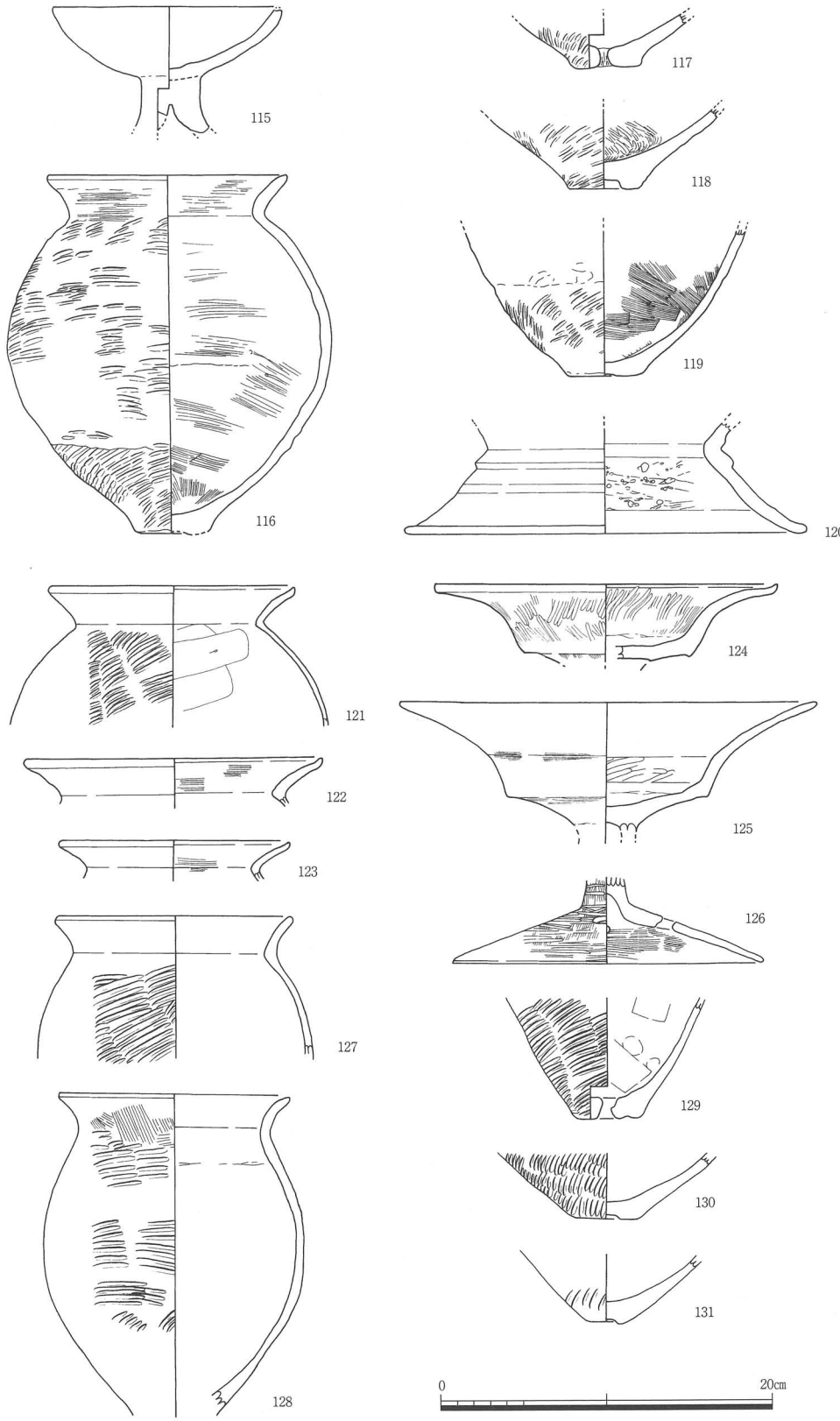
このことをよく示す資料が、出屋敷遺跡3次調査SH-3出土資料である（第97図）（8）。(115)は庄内系椀形高坏の坏部である。緩やかな彎曲をもつ椀形の坏部をもつ。また、(120)は山陰系の鼓形器台であり、河内では庄内式に伴うものとして認識されている。一方、これらの資料に伴うものとして、(116)～(119)のような平底の甕がある。(116)では、外面胴部下半は右上がり、体部は水平のタタキが施される。内面はケズリではなくハケによって調整される。口縁部は外反し端部はまるくおさめており、庄内式に特徴的な端部のつまみあげもみられず、もちろん口縁部叩き出し手法を窺わせるようなタタキは見られない。形態的には体部が球状を呈していることから、Ⅴ様式系甕でも、比較的新しい様相のものと思われる。報告では、この資料にともなう庄内式甕は皆無である。同様に、招提中町遺跡1998・99年度調査SD4888出土資料にも、同様の特徴をもつⅤ様式甕が伴う（127～131）。この資料には、(126)のような搬入品の椀形高坏脚部や、同じく搬入品の内外面に縦ヘラミガキが施される有段高坏（124）、および石英やチャート、長石などを含む在地産の胎土と思われる有段高坏（125）などの他に、米田分類C類の庄内3式に位置づけられるような生駒西麓産の庄内式甕が含まれている（121～123）（9）。これらの甕は、口縁部の屈曲が鋭く口縁端部をつまみ上げるという庄内式甕の口縁部の特徴を備え、とくに(121)は、胴部上半外面に右上がりのタタキが施され、内面はケズリで仕上げられている。これらの庄内式土器に、(127)～(131)のようなⅤ様式系甕が伴われる。出屋敷遺跡SH-3の(116)～(119)と同様に、底部は小さいものの平底で、口縁が緩やかに外反し端部は丸くおさめ、外面には右上がりあるいは水平のタタキを施し、内面はハケあるいはナデ調整で仕上げられるという特徴をもつ。本調査で出土した庄内式甕も、口縁部や底部にこれらと共通の特徴を持っている。本調査では、搬入品とみられるものや、庄内式甕とみられるものもなかった。

以上のことから、枚方市域では、①甕以外の器種から庄内併行期でも比較的新しいと考えられる資料に、このようなⅤ様式的特徴をもつ甕が伴い、かつ庄内式甕はごく少量しか流入しない、②河内においてⅤ様式甕も丸底化するような庄内式新相においても、枚方市域においてⅤ様式甕は以前平底を保ったまま甕組成の主流をしめる、以上の2点が特徴として指摘できよう。

＜註＞

（1）枚方市史編纂委員会編1986『枚方市史』第12巻

（2）枚方市史編纂委員会編1995『枚方市史』別巻



第100図　出屋敷遺跡ＳＨ３（115～120）招堤中町遺跡ＳＤ4888（121～131）出土資料実測図（Ｓ＝1/4）再トレース

（３）宮元長二郎1996『日本原始古代の住居建築』中央公論美術出版社

（４）山上弘2002『招提中町遺跡』大阪府埋蔵文化財調査報告2000-1　大阪府教育委員会

（５）石野博信1981「住居型の地域性」（『三世紀の考古学』中巻　学生社）

（６）近藤広1993「住居内土坑についての検討」（『滋賀考古』第9号　滋賀県考古学研究会）

表1　枚方市域における遺跡変遷表

	遺跡	地形	標高	弥生時代						古墳時代					文献
				Ⅱ	Ⅲ古	Ⅲ新	Ⅳ	Ⅴ古	Ⅴ新	庄内古	庄内新	布留古	布留新	中期	
穂谷川流域	交北城ノ山	台地上	約22m	■	■	■			■	■	■	■	■		1・2・3・4
	招提中町	台地上	約20m	■	■	■			■	■	■	■			1・2・3・6・16
	田口山	丘陵上	約60m		■	■	■	■	■						1・2・3・6・17・18・19
	津田城古城	丘陵上	約75～90m		■	■	■	■	■	■	■				1・2・3・8・20
	藤阪東	丘陵上	約50m					■	■						1・2・3・17
	御殿山	丘陵上	約33m					■	■						1・2・3
	ごんぼう山	丘陵上	約50m					■	■						1・2・3
	長尾西	丘陵上	約60m					■	■	■	■	■			1・2・3・5・8・17
	出屋敷	丘陵上	約40～50m					■	■	■	■	■			1・2・3・5・7・11・12
	九頭神	台地上	約22m						■	■	■	■			1・2・3
	渚	丘陵上	約10m						■	■	■	■			1・2・3・21
	小倉東	台地上	約20m							■	■	■	■		1・2・3・22
	藤阪南	丘陵裾	約45m							■	■	■	■		1・2・3・6
	津田トッパナ	丘陵裾	約55m							■	■	■			1・2・3・11
	田口中島	台地上	約25m							■	■	■			1・2・3
天野川流域	村野	台地上	約30m	■	■	■			■	■	■	■			1・2・3・5・6
	星ヶ丘西	丘陵上	約30m		■	■	■	■	■						1・2・3
	藤田山	丘陵上	約20～40m			■	■	■	■						1・2・3・5・23
	鷹塚山	丘陵上	約50～67m						■	■	■				1・2・3・17・24・25
	山之上天堂	丘陵裾	約25m						■	■	■				1・2・3
	星ヶ丘	台地上	約30m						■	■	■	■	■		1・2・3・5・8
	茄子作	台地上	約30m						■	■	■	■	■		1・2・3・5

No 報告書名
1 枚方市史編纂委員会1986『枚方市史』第12巻　枚方市
2 枚方市史編纂委員会1995『枚方市史』別巻　枚方市
3 枚方市教育委員会1985『文化財ハンドブック　枚方の遺跡と文化財』
4 瀬川芳則他1983「淀川左岸の複合遺跡－枚方市交北城ノ山遺跡－」(『ヒストリア』第97号)
5 財団法人枚方市文化財研究調査会1980『枚方市文化財年報』Ⅰ
6 財団法人枚方市文化財研究調査会1981『枚方市文化財年報』Ⅱ
7 財団法人枚方市文化財研究調査会1982『枚方市文化財年報』Ⅲ
8 財団法人枚方市文化財研究調査会1983『枚方市文化財年報』Ⅳ
9 財団法人枚方市文化財研究調査会1984『枚方市文化財年報』Ⅴ
10 財団法人枚方市文化財研究調査会1985『枚方市文化財年報』Ⅵ
11 財団法人枚方市文化財研究調査会1986『枚方市文化財年報』Ⅶ
12 財団法人枚方市文化財研究調査会・大阪府東部公園事務所1986『出屋敷遺跡Ⅱ調査概要報告』枚方市文化財調査報告第19集
13 財団法人枚方市教育委員会1997『九頭神遺跡－九頭神廃寺－』枚方市文化財調査報告第32集
14 鷹塚山遺跡発掘調査団1968『大阪府枚方市鷹塚山弥生遺跡調査概要報告』
15 枚方市教育委員会2001『枚方市埋蔵文化財調査概要2000』枚方市文化財調査報告書第37集
16 大阪府教育委員会2002『招提中町遺跡－府営枚方牧野東住宅建て替えに伴う弥生時代墓域の調査－』大阪府埋蔵財発掘調査報告2000-1
17 財団法人枚方市文化財調査会1976『枚方市における遺跡調査概況1968～1976』
18 枚方市教育委員会・田口山遺跡発掘調査団1974『田口山弥生時代遺跡調査概要報告』
19 大阪府教育委員会1962『文化財保護法施行十周年記念大阪府の文化財』
20 財団法人枚方市文化財調査会1976『大阪府住宅供給公社津田団地内遺跡発掘調査概要報告』
21 枚方市教育委員会・財団法人文化財調査研究調査会1982『渚院跡遺跡調査概要報告』枚方市文化財調査報告第16集
22 財団法人文化財調査研究会1985『小倉東遺跡－関西外語大学テニスコート建設に伴う調査－』枚方市文化財調査報告第18集
23 藤田山遺跡調査団1976『藤田山遺跡学術調査報告書－日本住宅公団釈尊寺団地用地内』
24 鷹塚山遺跡発掘調査団1968『鷹塚山弥生遺跡調査概要報告』
25 財団法人枚方市文化財調査団1980『鷹塚山遺跡調査概要報告Ⅲ」

表3 招提中町遺跡竪穴住居

住居No		地区		形態	主軸	規模	立替え	主柱穴	壁溝	中央土坑	ベッド状遺構	不整形土坑
98・99年度調査	1号住居	98-1区	K7-6-C13-d3	方	N30W	5.25×5.50		4	○	○	コ字状	南東辺中央
	3号住居	98-1区	K7-6-C13-f4・f5・g4・g5	方	N17W	4.85×5.25	○	4	○	○	コ字状	南辺中央
	5号住居	98-1区	K7-6-C13-g5	方	N8W	5.15×4.95		4				南辺中央
	7号住居	98-1区	K7-6-C13-h6	方	N8W	6.05×5.60	○	4	○	○	コ字状	南辺中央
	8号住居	98-1区	K7-6-C13-e6	方	N36W	7.70×不明		不明	○	不明	有	不明
	11号住居	99-1区	K7-6-D13-e5・e6	方	N38W	5.60×5.75		4	○	○		南東辺中央
	13号住居	99-1区	K7-6-D13-c5・e5	方	N29W	6.25×5.05		2	○	○		南東辺中央
	15号住居	99-3区	K7-6-D13-j3・j4	方	N33W	5.00×5.20		不明	○	不明		南東辺中央
	18号住居	99-4区	K7-6-D13-b2	方	N18W	3.85×3.45		不明	○	○		南東辺中央
	19号住居	99-4区	K7-6-D13-c2	方	N	2.90×不明		不明	○	不明		南辺中央部
	2号住居	98-1区	K7-6-C13-d3	方	N41E	4.55×4.25		なし	○	○		
	4号住居	98-1区	K7-6-C13-g5	方	N32E	4.15×4.20		4				南西辺東寄
	6号住居	98-1区	K7-6-C13-h5	方	N2E	4.45×4.30		4		○		南辺中央
	12号住居	99-1区	K7-6-D13-e7・e8・f7・f8	方	N27E	6.20×5.80		不明	○	○	コ字状	南辺中央
02・03年度調査	7号住居	02-4区	K7-6-A15-a8	方	N28W	6.00×6.50		4	○			
	8号住居	02-4区	K7-6-A15-b9	方	N39W	5.45×5.30		4	○			南西・東辺中央
	15号住居	03-9区	K7-6-A15-e6・e7	方	N36W	不明×不明		不明	○	不明	不明	不明
	4号住居	02-2区	K7-10-O16-c1・c2・d1・d2	方	N32E	4.95×4.65		4	○			南西辺中央
	5号住居	02-2区	K7-10-O15-c8・c9	方	N46E	5.70×5.10		4	○			南西辺中央
	6号住居	02-2区	K7-10-O16-c9	方	N44E	不明×不明		不明	○	不明	不明	不明
	9号住居	03-5区	K7-10-O16-f1	方	N39E	5.80×6.00		4	○			北西辺中央
	10号住居	03-5区	K7-10-O15-e9・e10	方	N43E	6.05×6.00		4	○			不明
	11号住居	03-5区	K7-10-O15-e7・e8	方	N24E	不明×不明		4	○			不明
	12号住居	03-6区	K7-10-O15-d8・d7	方	N34E	3.80×4.25		なし			カギ状	南東辺中央
	13号住居	03-6区	K7-10-O15-d6・e6	方	N37E	不明×不明		不明	○	不明	不明	南東辺中央
	14号住居	03-6区	K7-10-O15-d5・d6	方	N10E	(3.90×3.60)		4	○			不明

（7）山崎秀二1986「まとめ」(『吉身北遺跡発掘調査報告』守山市文化財調査報告第24冊　守山市教育委員会)
（8）宇治田和生・桑原武志1986『出屋敷遺跡Ⅱ調査概要報告』枚方市文化財調査報告第19集　財団法人枚方市文化財研究調査会・大阪府東部公園事務所
（9）米田文孝1994「河内における庄内式土器の編年」(『庄内式土器研究』庄内式土器研究会)

2．平安時代から中世の掘立柱建物

矢倉嘉人

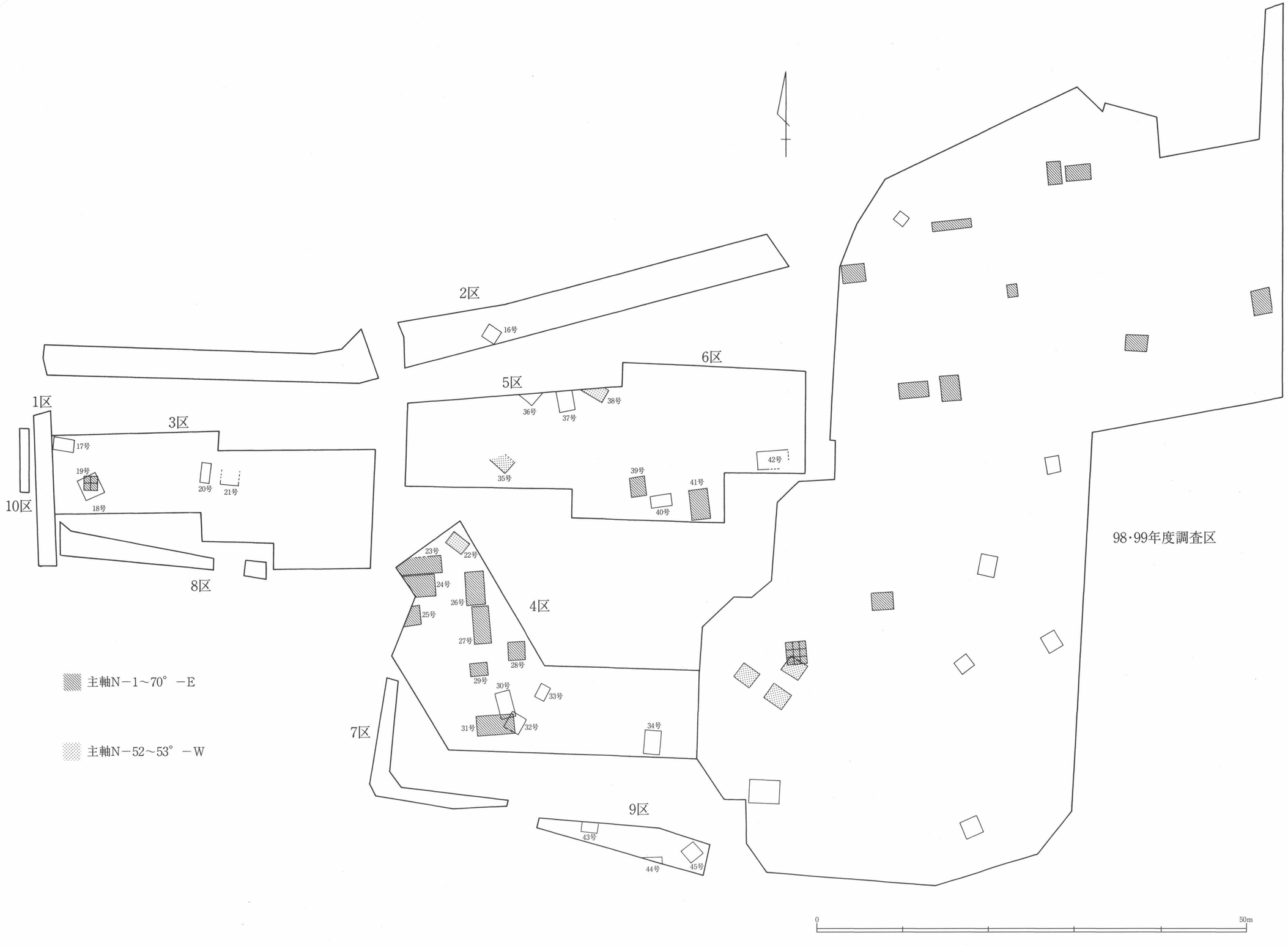
今回の調査では30棟の掘立柱建物を検出した。しかし柱穴の掘形内から出土する遺物は少ないうえ、ほとんどが小片であったため、建物の時期を確定できるものはわずかであった。しかし、建物の主軸方向、柱間寸法などを元に4つ以上のグループに分類することができた。

その結果、最も多くの建物が属するのは東西、南北の方位にそって主軸をもつ建物群である。調査区全域に分布するが特に4区において顕著にみられた。4区北側でみられたこれら掘立柱建物群は床面積が30～40㎡あり他の建物にくらべても大きく、直交する建物で構成されている事、25号は掘方が0.8m～0.9mあり他の建物より大きいことなどから本遺跡内においても特別な一画であったと考えられる。しかしこれらの建物群もすべてが同時期に存在してはいないようである。23号掘立柱建物と24号掘立柱建物は切り合い関係から23号掘立柱建物が先行する事はあきらかで、26号掘立柱建物と27号掘立柱建物は近接しているため同時期に存在していたとは考えられない。

これら建物群の時期は、小片であるが27号掘立柱建物で黒色土器が出土しており、平安時代以降に属することは明らかであり、31号掘立柱建物では瓦器が出土している事から中世以降と考えられる。またこれら建物群と同じ主軸をもつ6区、41号掘立柱建物では中世と考えられる甕が出土している。本調査区東側で98・99年度行われた調査でも、平安時代前期に属する、東西南北の方位にそって主軸をおいた建物が検出されている。以前、本調査区の200m東、平野小学校で行われた調査でも、平安時代前期に属する、10数棟の掘立柱建物が検出されるとともに大量の瓦が出土している。今回検出した建物群には確実に中世まで下る建物があるが、これまでの調査成果から多くは平安時代に属すものと考えられる。

他に特記すべき建物に、4区北端で検出された独立棟持柱を持つ22号掘立柱建物がある。3間×3間で床面積は15.6㎡の建物である。98・99年度調査区においても主軸をともにする建物が検出されている。しかし、これらの建物からは時期を特定できる遺物は出土していないが、今回の調査において、柱穴から小片ではあるが、奈良時代と考えられる土器が出土しており、この建物は奈良時代以降に属すると思われる。また、招提中町遺跡や周辺遺跡においても当該期で独立棟持柱を持つ建物は確認されておらず、特別な建物であったと考えることができるであろう。

この他には、柱穴の切り合い関係から30号掘立柱建物は32号掘立柱建物より古くなることが明らかであるが、時期の特定できる遺物は出土していない。また、36号掘立柱建物からは瓦器が出



第101図　掘立柱建物配置図

土しており中世の建物と言える。

つぎに、招提中町遺跡周辺の遺跡で奈良時代後半から中世にかけての掘立柱建物が検出されている遺跡をいくつかあげてみたい。

本調査区の約400ｍ西に白鳳時代に創建され10世紀前葉に廃絶した九頭神廃寺がある。本遺跡から出土する平安時代前期と考えられる軒瓦と同笵関係がある事などから、本遺跡と深い結びつきが想定できる。また、九頭神廃寺を含む九頭神遺跡からは、8世紀以降主軸を南北方向にとる掘立柱建物がみられるようになる。鎌倉時代の掘立柱建物や土坑墓が多数検出されている。

禁野本町遺跡からは奈良時代後期から平安時代前期に属する掘立柱建物が40棟以上確認されており、その多くは主軸を東西、南北方向にもつものである。床面積20㎡を越える大型の建物が多く、梁間が2間のもが多いようである。柱穴の掘方は0.5ｍ～0.7ｍ、柱痕0.2～0.4のもが多い。招提中町遺跡の掘立柱建物にくらべ、平面規模、掘方の大きさとも、大きい建物であると言える。出土遺物には墨書土器や瓦が出土している点は招提中町遺跡に共通する。

村野南遺跡では、７世紀前半から９世紀前半の掘立柱建物が多数確認されており、その中には整然と規則的に配置された大型掘立柱建物群があり、官衙的な施設であったと考えられている。

交北城ノ山遺跡では、平安時代末～鎌倉時代にかけての掘立柱建物が確認されている。各々の建物には溝が巡るようである。津田トッパナ遺跡でも平安時代末期から鎌倉時代前半に属する溝で囲まれた掘立柱建物群が検出されており、館跡と考えられている。

このように平安時代末から鎌倉時代にかけての掘立柱建物は建物を巡る溝が伴う場合が多いが、招提中町遺跡においては、平野小学校における調査で建物と方位を同じにする大溝が確認されているが、本調査区においては、確認する事はできなかった。

招提中町遺跡では平安時代・中世にかけての集落があった事は明らかで、これまでの調査で大量の瓦、墨書土器、が出土している事などから官衙的な要素も考えられる。また、有力氏族の集落と考える場合、九頭神廃寺、九頭神遺跡との関係を考えることが重要であろう。

今回の調査においても建物の時期や性格を考え得る遺物の少なさから、これらの掘立柱建物の時期や性格を明らかにする事はできないが、これまで検出された掘立柱建物数が50棟を超えるなど、この地域における主要な集落であった事は、間違いなく、これらの集落の性格を考える上で今後の調査の成果を期待したい。

【参考文献】

・大阪府教育委員会　『招提中町遺跡』　2002年

・枚方市教育委員会　『九頭神遺跡-九頭神廃寺-』　1997年

・（財）枚方市文化財研究調査会　『新版　図録・枚方の遺跡』　1998年

・（財）枚方市文化財研究調査会　『禁野本町遺跡Ⅱ』　2003年

・枚方市史編纂委員会　『枚方市史』第２巻　1972年

・枚方市史編纂委員会　『枚方市史』第12巻　1986

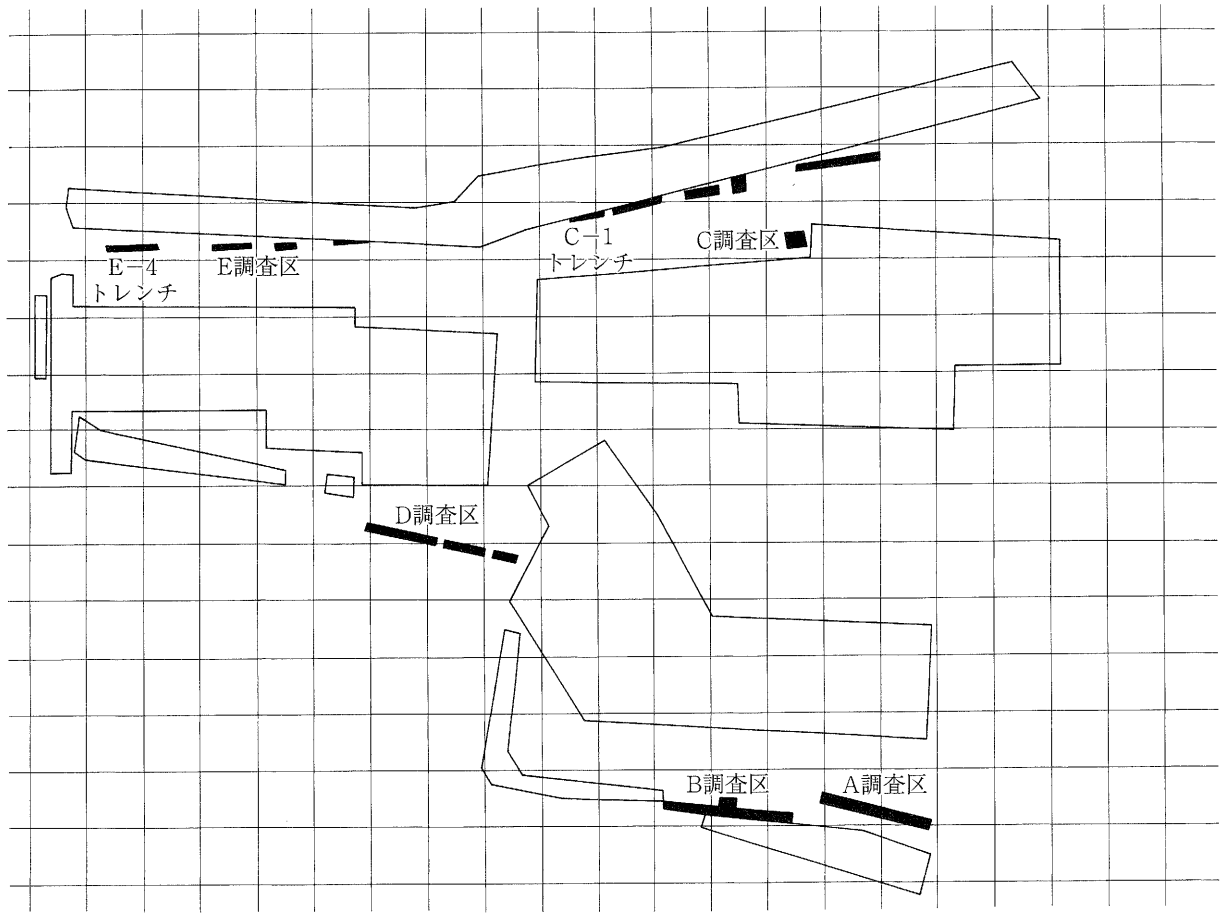
	調査区	規模	主軸方向	掘方	形態	桁	梁	床面積	出土遺物	備考
16	2区	2×2	33W	20～30	円	3.4	3.4	11.6	—	
17	3区	②×2	5E	20～50	円	—	5.7	—	土師	
18	3区	2×2	22W	40～60	楕円	4.9	4.8	23.5	土師・須恵	
19	3区	2×2	1E	50～60	隅丸	3.2	3.2	10.4	弥生・土師・須恵	総柱
20	3区	①×2	81W	60	隅丸	—	4.6	—	土師	
21	3区	？×2	6E	60～80	隅丸	—	4.1	—	土師・須恵	
22	4区	3×3	52W	40～60	隅丸	4.7	3.3・3.4	15.6	弥生・土師（奈良？）	独立棟持柱
23	4区	④×2	3E	40～60	隅丸	—	3.9	—	—	
24	4区	③×2	5W	60～70	隅丸	—	4.1	—	弥生・須恵・土師・石器	
25	4区	②×2	3W	80～90	隅丸	—	4.5	—	弥生・須恵	
26	4区	3×2	2W	50～70	隅丸	7.6・7.5	5.5	41.5	弥生・須恵・土師	
27	4区	4×2	3W	50～60	隅丸	8.3	3.9	32.4	弥生・須恵・土師・丸瓦	
28	4区	2×2	2W	60～70	隅丸	4.1	3.9	16	弥生・須恵・土師	
29	4区	2×2	85E	50～70	円・隅丸	4	3	12	—	総柱
30	4区	3×2	13W	70	隅丸	6.1	3.2・3.4	20.1	弥生・須恵・土師	
31	4区	4×2	86E	30～40	円	8.5	4.3	36.6	土師（平安）・瓦器	
32	4区	3×2	31E	40～50	隅丸	4	3.8	15.2	土師・黒色	
33	4区	2×2	26E	40～50	隅丸	3.5	2.5	8.8	土師・須恵	
34	4区	3×2	6E	50	隅丸	5.3	3.8	20.1	弥生	
35	5区	3×2	53W	50	円	4.4	3.4	15	弥生・土師・須恵	
36	5区	②×②	37E	40～50	隅丸	—	—	—	弥生・土師	
37	5区	②×2	16W	30～40	隅丸	—	3.2	—	土師	
38	5区	③×2	53W	50	円・隅丸	—	3.2	—	弥生・土師	
39	5区	2×2	6W	50～60	円	4.4	3.5	15.4	弥生・土師・須恵	
40	5区	2×1	84E	40～50	隅丸	4.7	2.5・2.6	11.99	弥生・土師	
41	6区	3×2	7W	30～50	円	6.6	4.3	28.4	弥生・土師・須恵・黒色	
42	6区	3×2	85E	30～50	円	7	4	28	土師・須恵	
43	9区	①×2	84W	30～50	円・隅丸	—	3.8	—	土師・須恵	総柱の可能性
44	9区	②×①	89E	50～60	隅丸	—	—	—	土師・須恵（奈良）	
45	9区	1×2	52E	50～60	隅丸	3.6	3.4	12.4	弥生・土師	

付　擁壁部等補足調査の記録

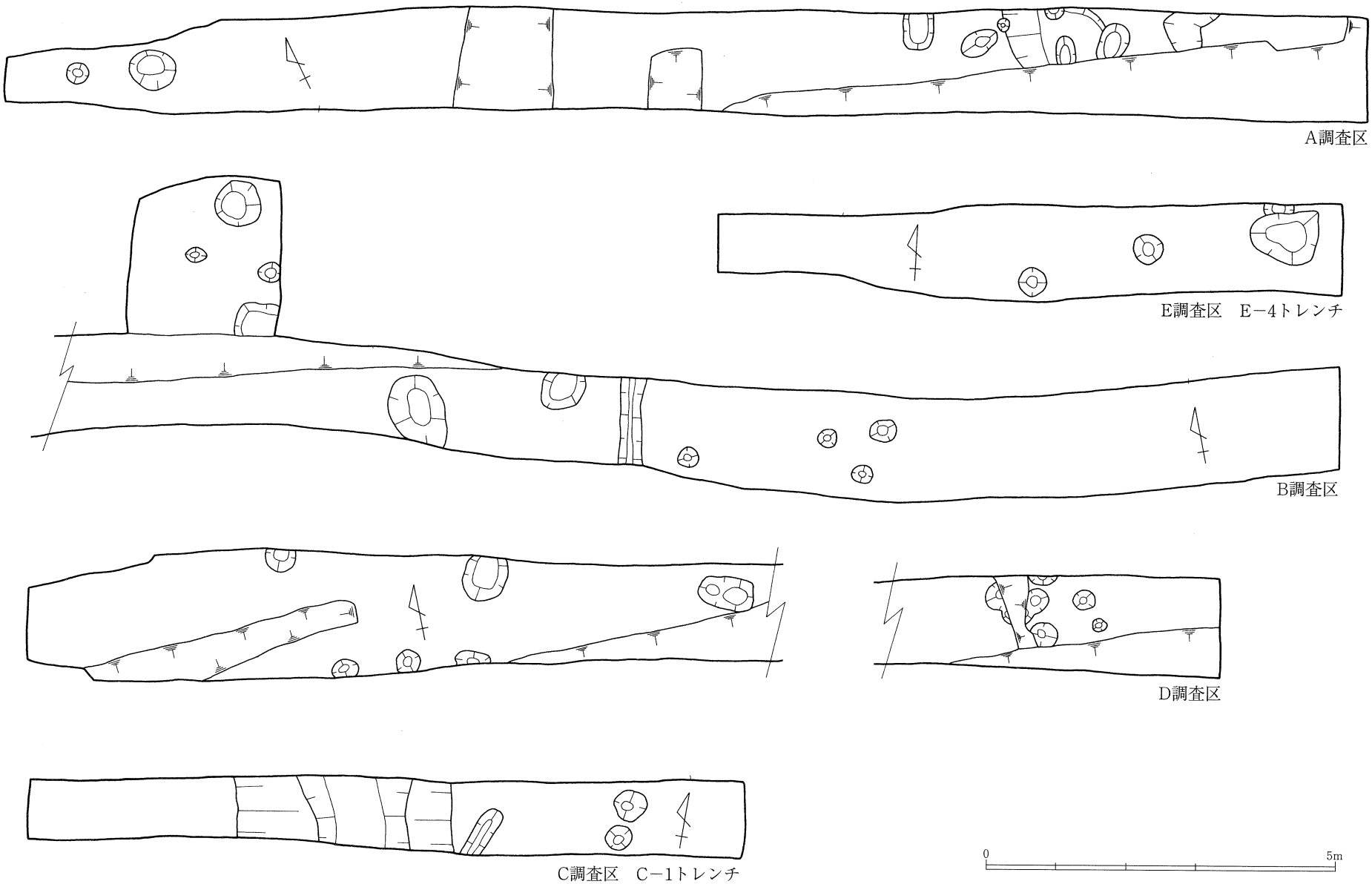
①経過

府営東牧野住宅立替に伴う招提中町遺跡の発掘調査は、平成10～13年度に第１期調査を、平成14・15年度に第２期調査を実施した。住宅の建替え範囲における確認調査において、遺構面までの掘削深度が著しく小さいことが確認され、建物の基礎部分のみでなく、敷地内の設置される管路や付帯施設、さらには施工中の重機による踏み荒らし等を考慮して敷地全面の発掘調査が必要であると判断された。それに結果にもとづいて、第１期調査においては敷地全面の調査を行い、多大な成果をあげることができた（『招提中町遺跡』大阪府教育委員会2002年）。

第２期調査については、事業者との協議の結果、切迫した建設の工程と発掘調査を整合させるために、やむを得ず建物建設範囲等工事によって地下の埋蔵文化財が破壊される部分と地下埋設物が多く設置される周回道路部分に調査を留めることとなった。調査方法の変更に伴い生じる問題に対応するために、事業者との間で発掘調査と建設を実施するに当たって次ぎのふたつの条件を確認した上で、第２期発掘調査を実施した。（１）調査範囲は建物建設範囲に加えて周囲に幅５ｍ程度の範囲の発掘調査を実施する。これは建設位置の施工誤差や建物に引き込む管路設定に対応するものである。（２）第２期調査区全体に厚さ70㎝程度の盛土を施し、地下埋設物等の設



第102図　擁壁部等調査区配置図



第103図　擁壁部等調査区平面図

置に伴う掘削は盛土内に納める。

しかしこの条件の内（２）にいて、事業者がほとんど遵守しなかったことは誠に遺憾である。建設工事の実施に当たって、事業者内部の調整が不足し、管路の設定深度が十分に考慮されず、掘削幅は狭いもののかなりの面積の埋蔵文化財が破壊されることとなった。さらに盛土を施すに当たって敷地周囲に擁壁を設置することが必要となり、その部分の発掘調査も新たに生じたのである。

2004年10・11月に新たに擁壁部の調査と管路等の設置の伴う立会調査を実施した。

②調査の成果

擁壁部等の調査はＡ～Ｄまでの四つの調査区にわけて実施した。かなりの調査部分が、第２期発掘調査で実施した周回道路部の調査区に近接しており、部分的に重複した部分もあった。

Ａ調査区は、東端部分で直径20～30㎝前後を測るピット等が検出された。埋土は暗茶褐色の粘質土であり、土師器の小片が出土した。

Ｂ調査区は、中央部で直径20～30㎝前後を測るピット、直径50㎝前後を測る土坑等が検出された。埋土は暗茶褐色の粘質土であり、土師器の小片が出土した。また擁壁部に設置してケーブル設置のための竪坑部の調査も実施した。

Ｃ調査区では、擁壁部に４本のトレンチを設置し、併せて２箇所のケーブル設置のための竪坑部の調査を実施した。顕著な遺構は西端のＣ－１トレンチで検出された。幅３ｍ前後、深さ40㎝前後の溝や直径20～30㎝前後を測るピット等が検出された。埋土は暗茶褐色の粘質土であり、土師器の小片が出土した。

Ｄ調査区では、調査区の両端部分で直径20～30㎝前後を測るピット等が多数検出された。埋土は暗茶褐色の粘質土であり、土師器の小片が出土した。

Ｅ調査区では、擁壁部に４本のトレンチを設置し調査を実施した。顕著な遺構は西端のＥ－４トレンチで検出された。直径20～30㎝前後を測るピット、直径50㎝前後を測る土坑等が検出された。埋土は暗茶褐色の粘質土であり、土師器の小片が出土した。

（小林義孝）

報告書抄録

ふりがな	しょだいなかまちいせき・に
書　　名	招提中町遺跡・Ⅱ
副書名	
巻　次	
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	2004-1
編著者名	井西貴子　小林義孝　庵ノ前智博　松尾奈緒子　矢倉嘉人
編集機関	大阪府教育委員会　文化財保護課
所在地	〒540 - 8571　大阪府大阪市中央区大手前2丁目　TEL　06 - 6941 - 0351
発行年月日	2005年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	面積 (㎡)	調査原因
しょだいなかまちいせき 招提中町遺跡	ひらかたし 枚方市	27210	29	34	135	平成14年 7月～15 年3月	5500	府営住宅 建て替え 工事
	ひがしまきのちょう 東牧野町			50 53	40 49	平成15年 6月～16 年3月	2800	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
招提中町遺跡	集落	弥生時代			
		（前期）	ピット・土坑	土器、石器	
		（中期）	円形竪穴状遺構	土器、石器	
			溝、土坑		
		古墳時代	方形竪穴住居	土師器、須恵器	
			溝、土坑		
		古代～中世	掘立柱建物	瓦器	
			土坑	土師質土器	

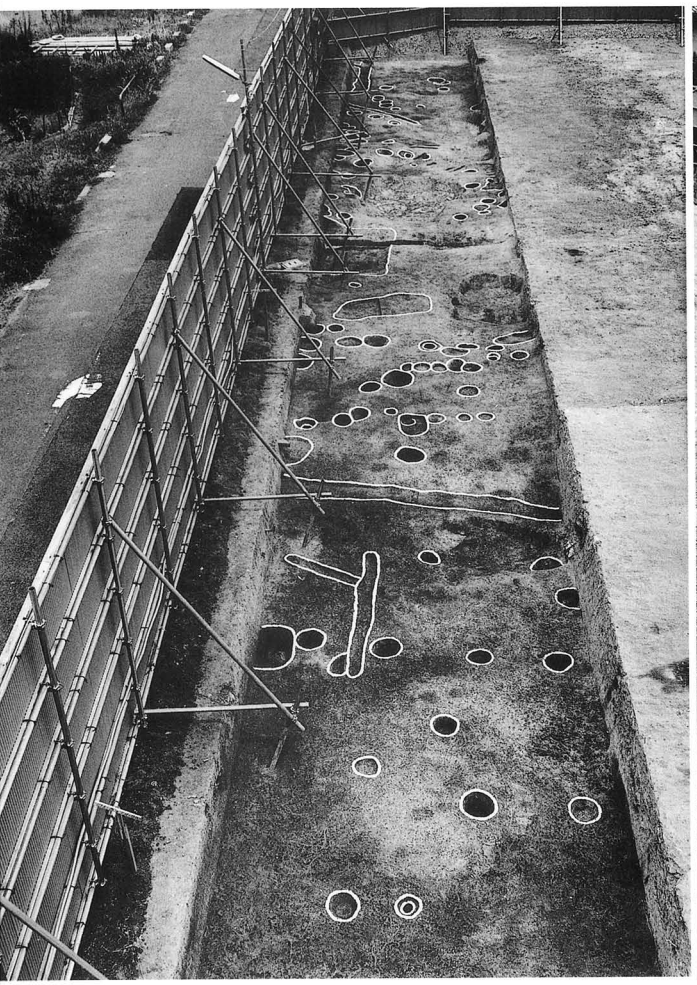
図　　版

図版一　調査区遠景

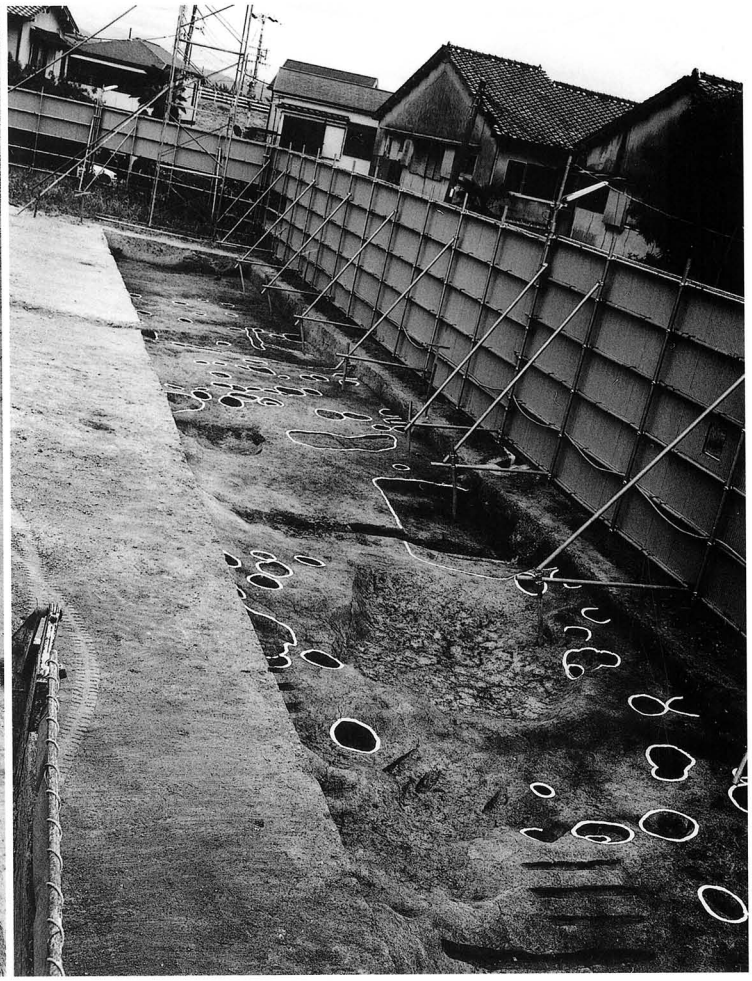
（北東から）

（南東から）

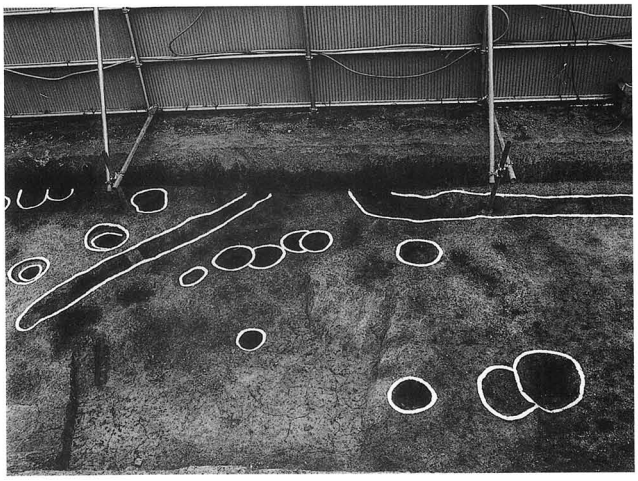
図版二　1区全景



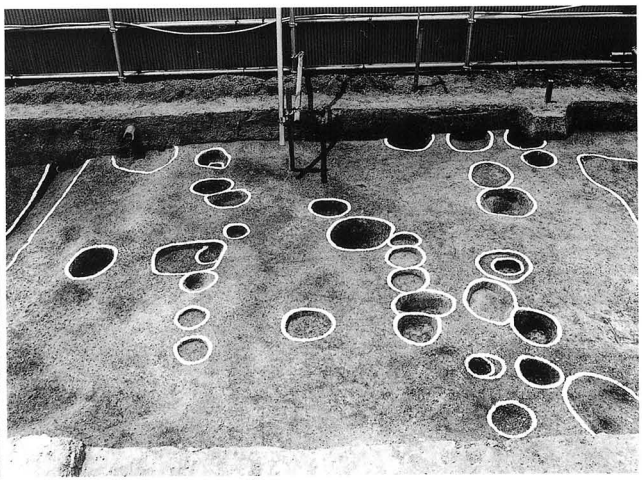
（南から）



（北から）



（東から）

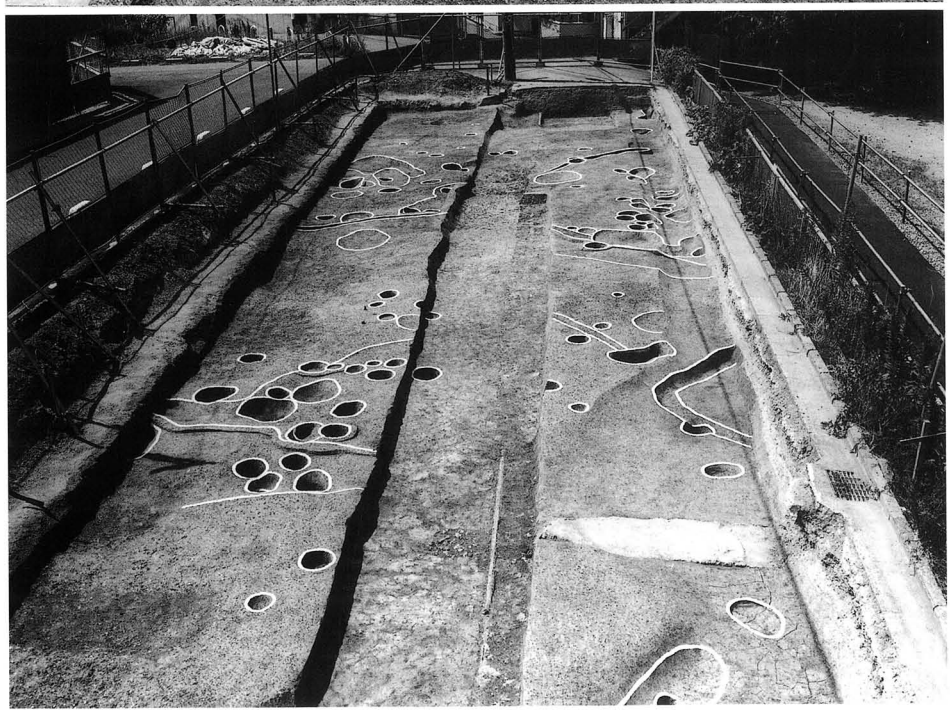


（東から）

図版三　2区全景

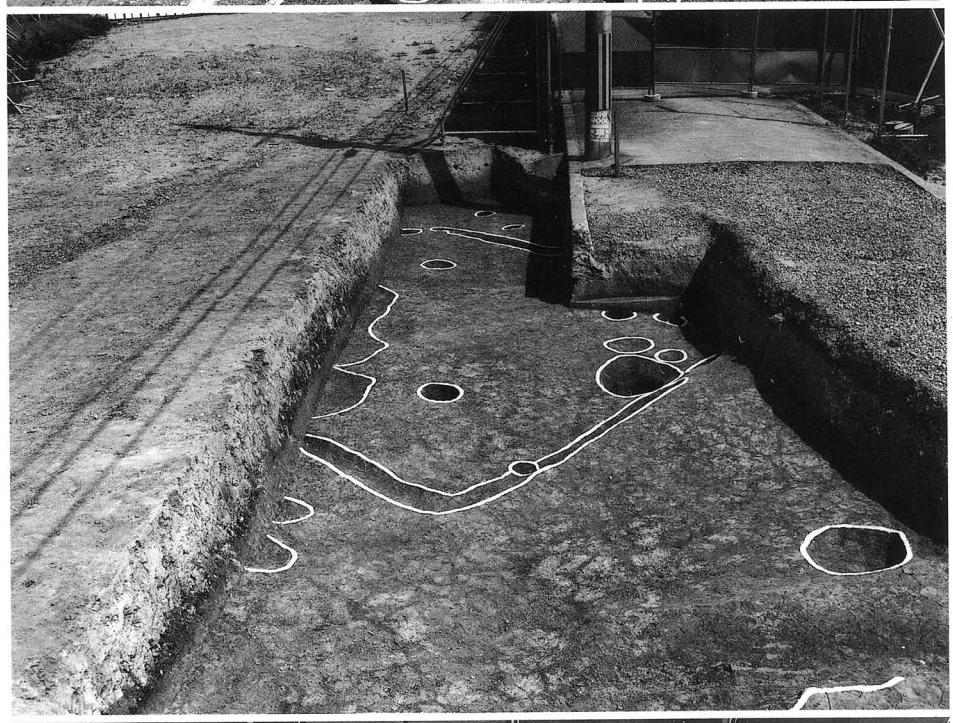
（西から）

（東から）

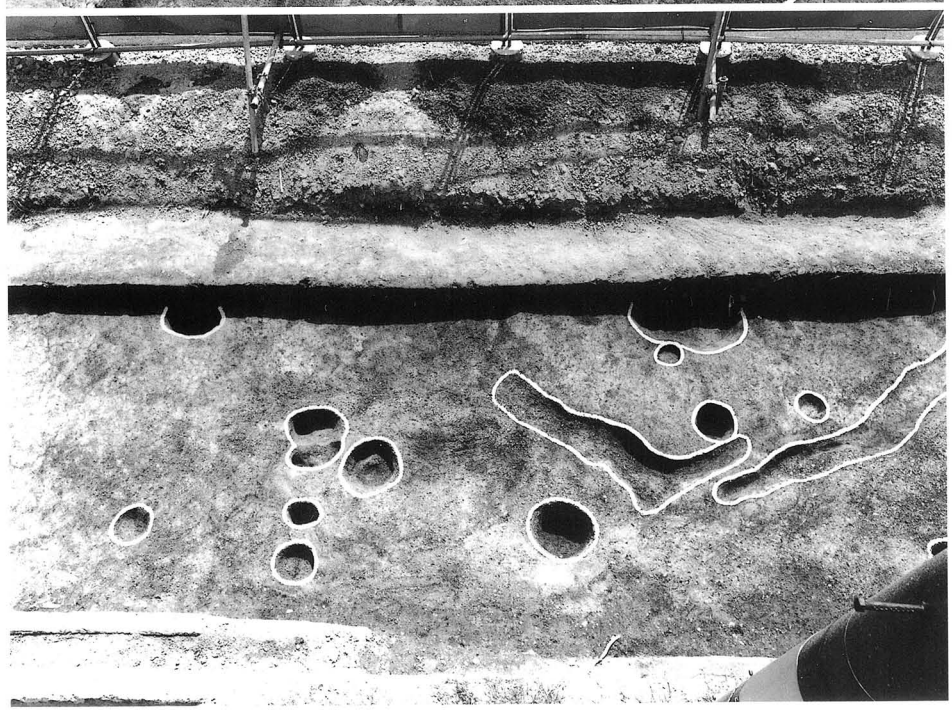


竪穴住居６号（南から）

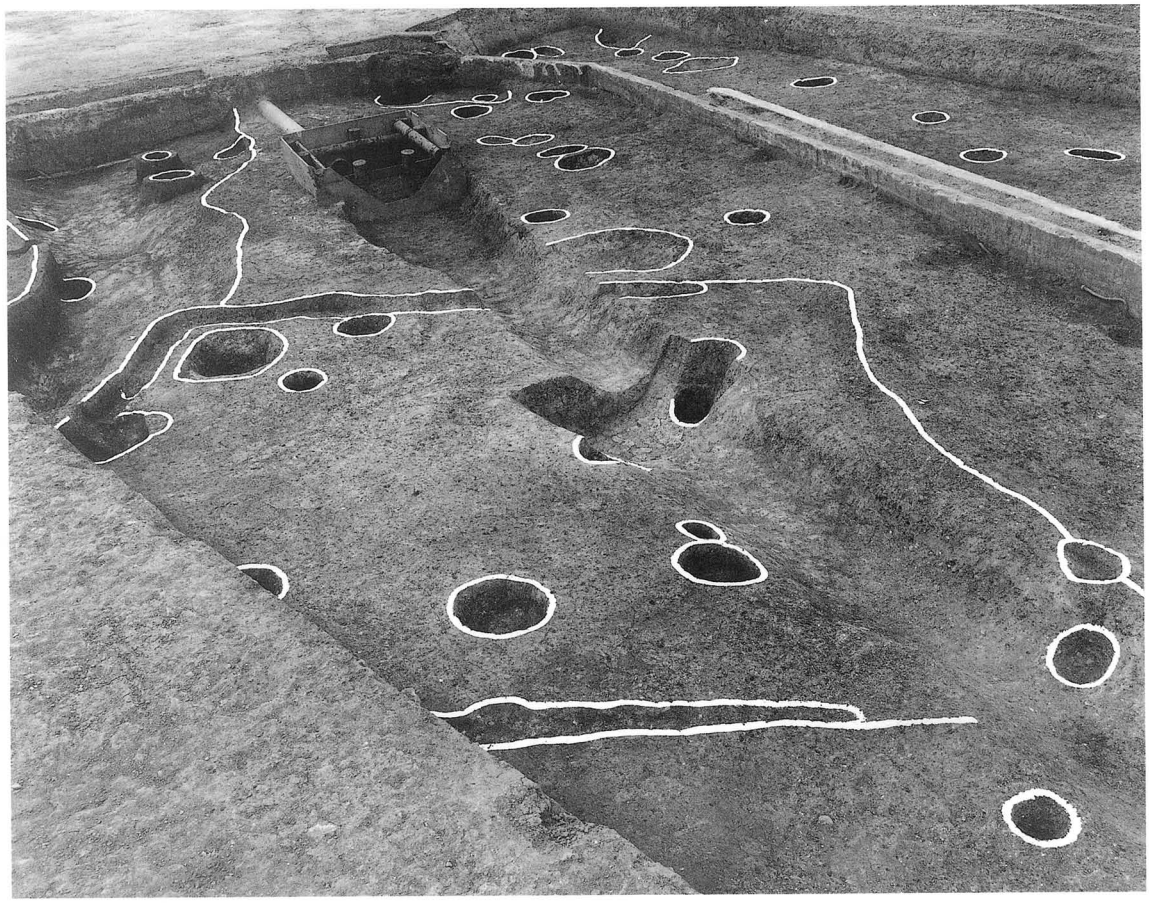
竪穴住居４号（西から）



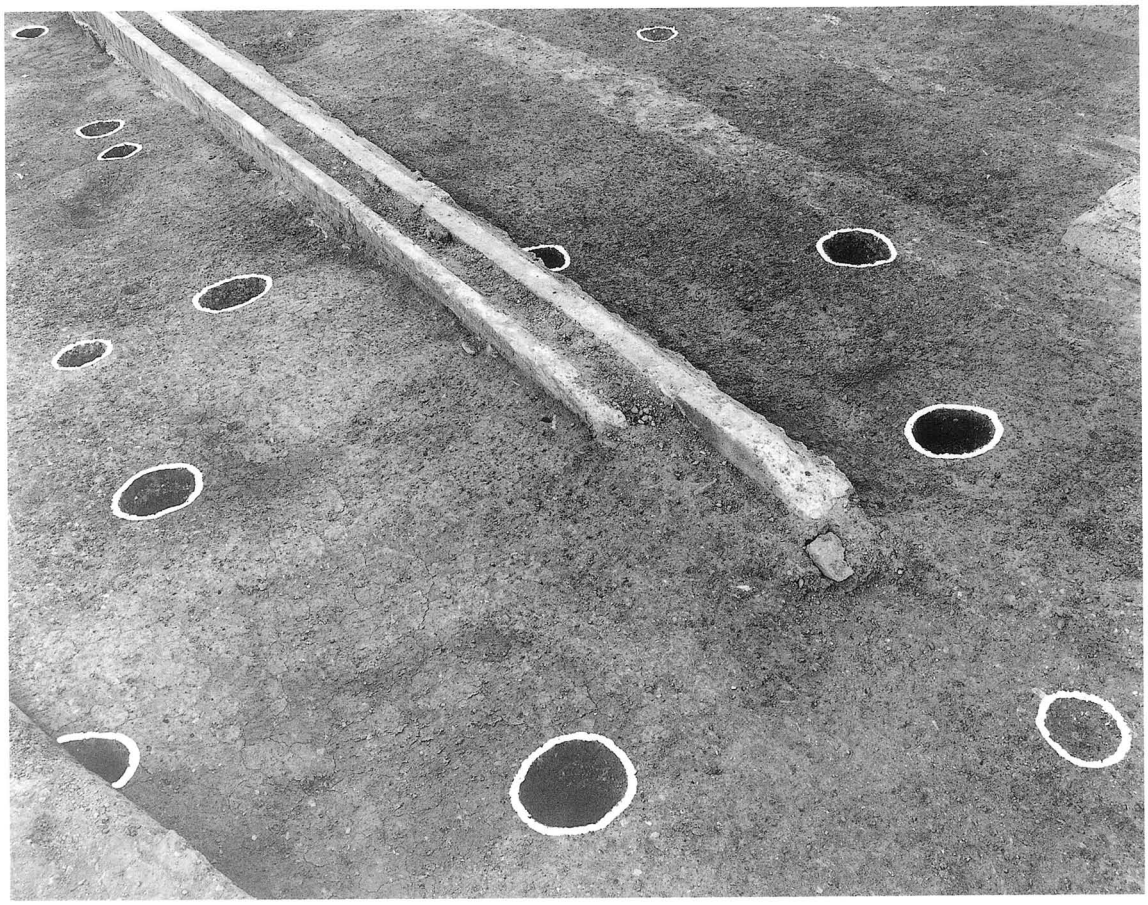
竪穴住居５号（西から）



（北から）



竪穴住居４号（北から）

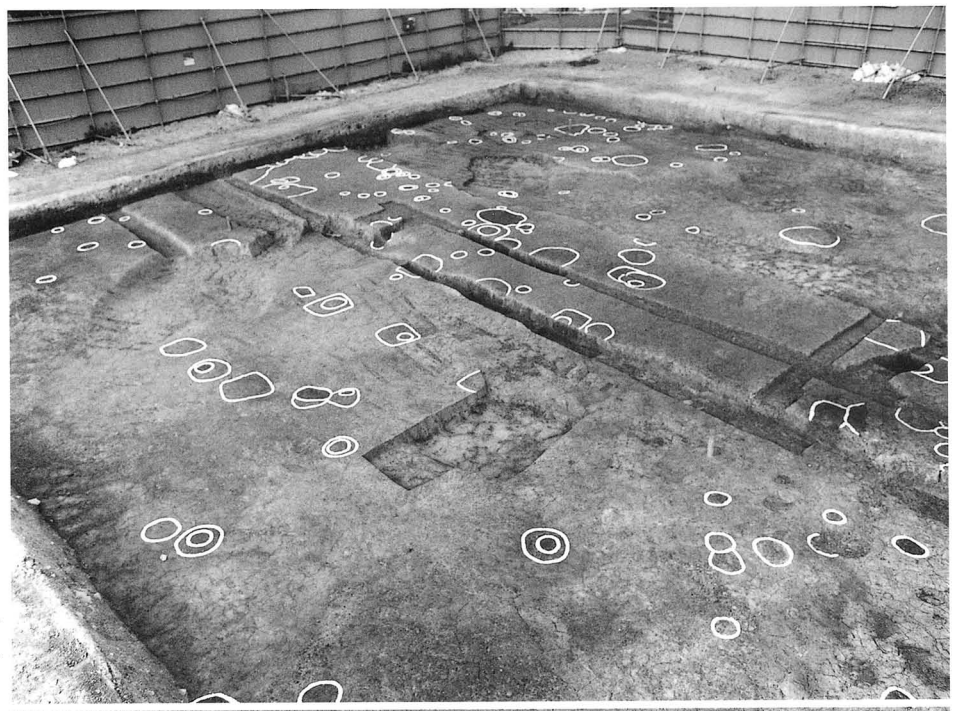


掘立柱建物16号（南から）

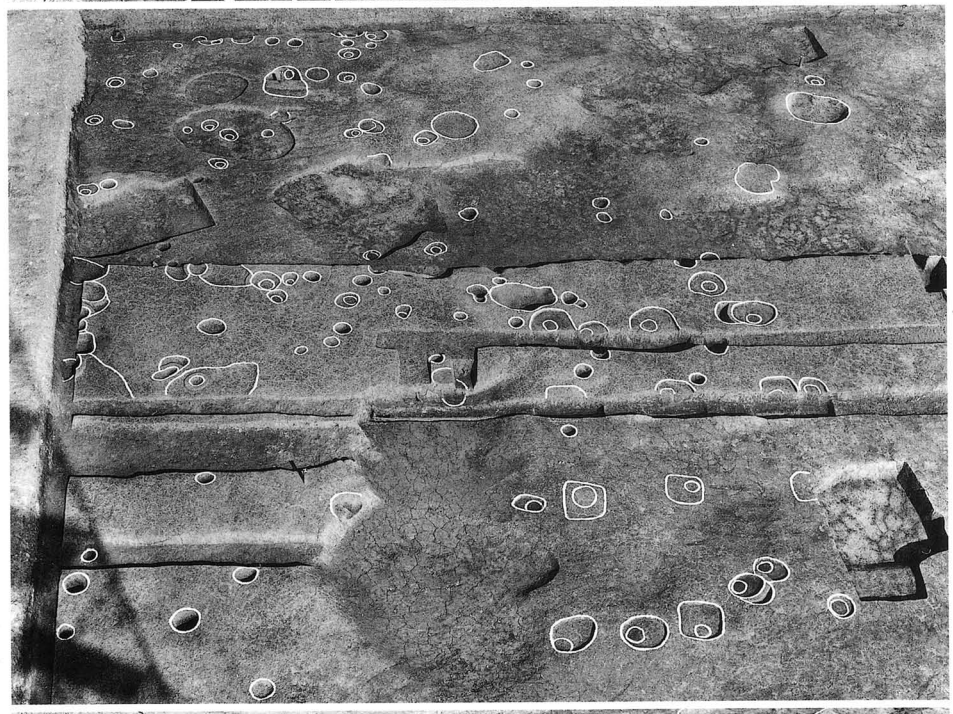
図版六　3区全景

（東から）

（西から）

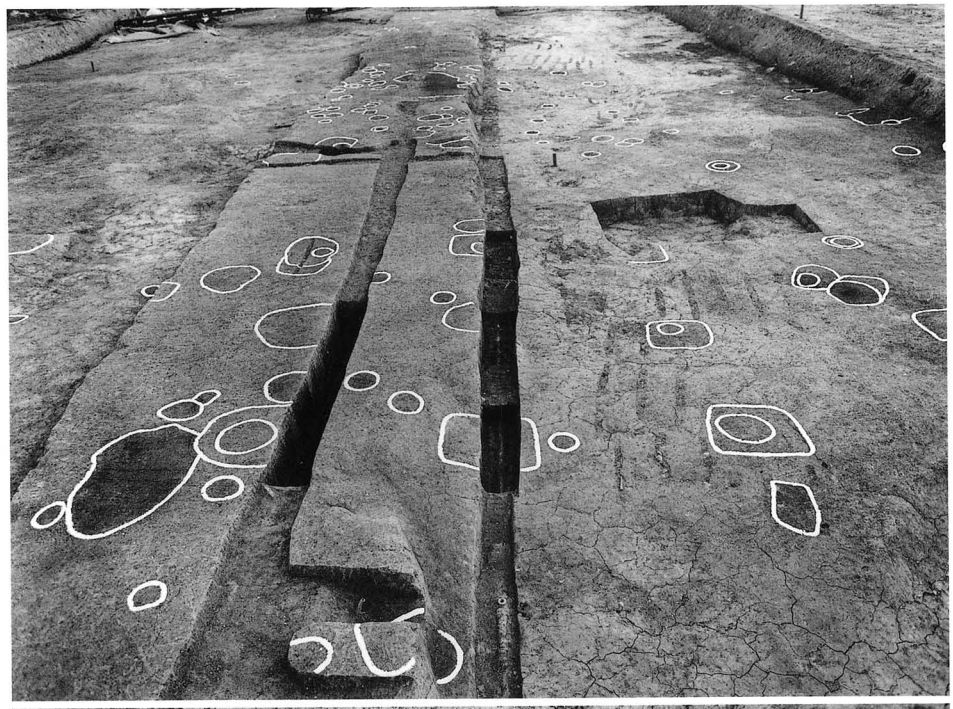


掘立柱建物18号
掘立柱建物19号
（東から）



掘立柱建物18号
掘立柱建物19号
（南から）

（南から）



掘立柱建物19号（西から）

727（上が北）

727（南から）

図版九　4区全景

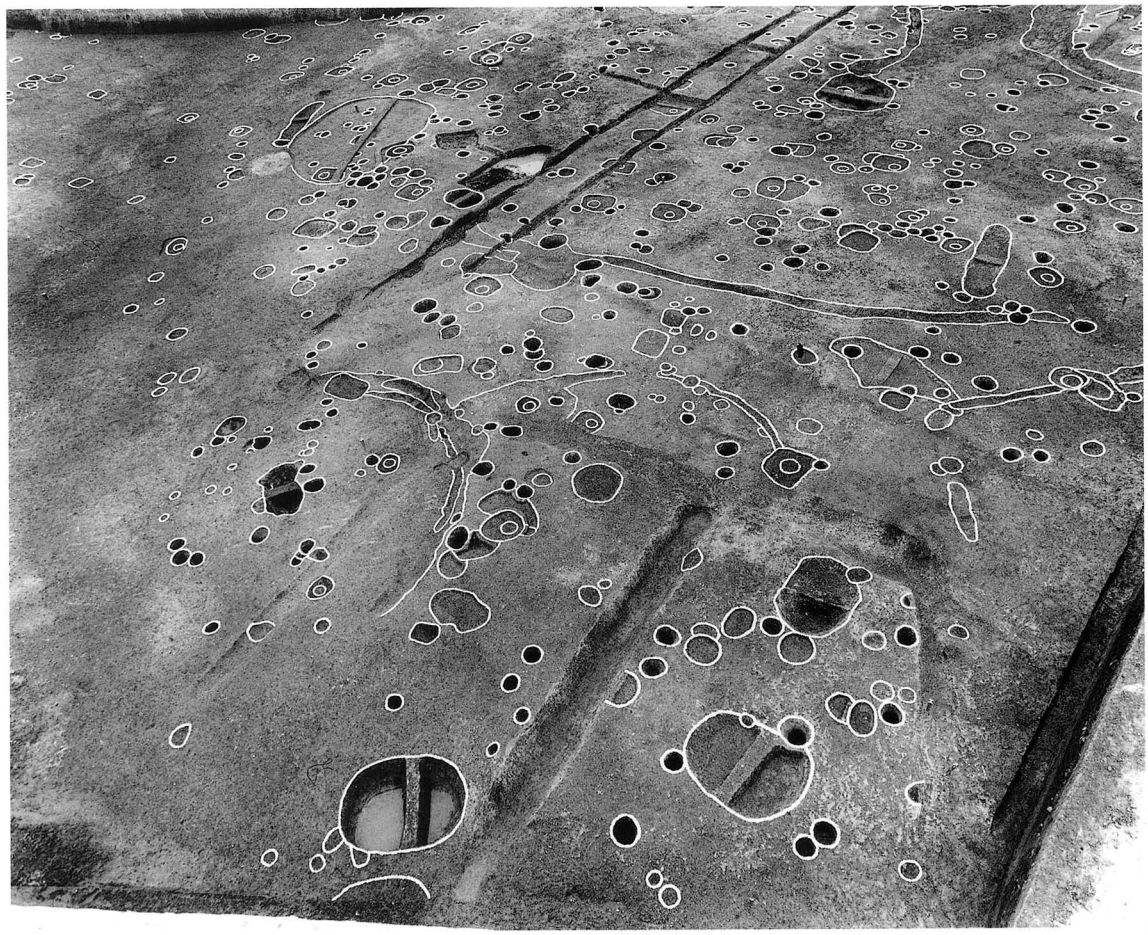
（北から）

（北から）

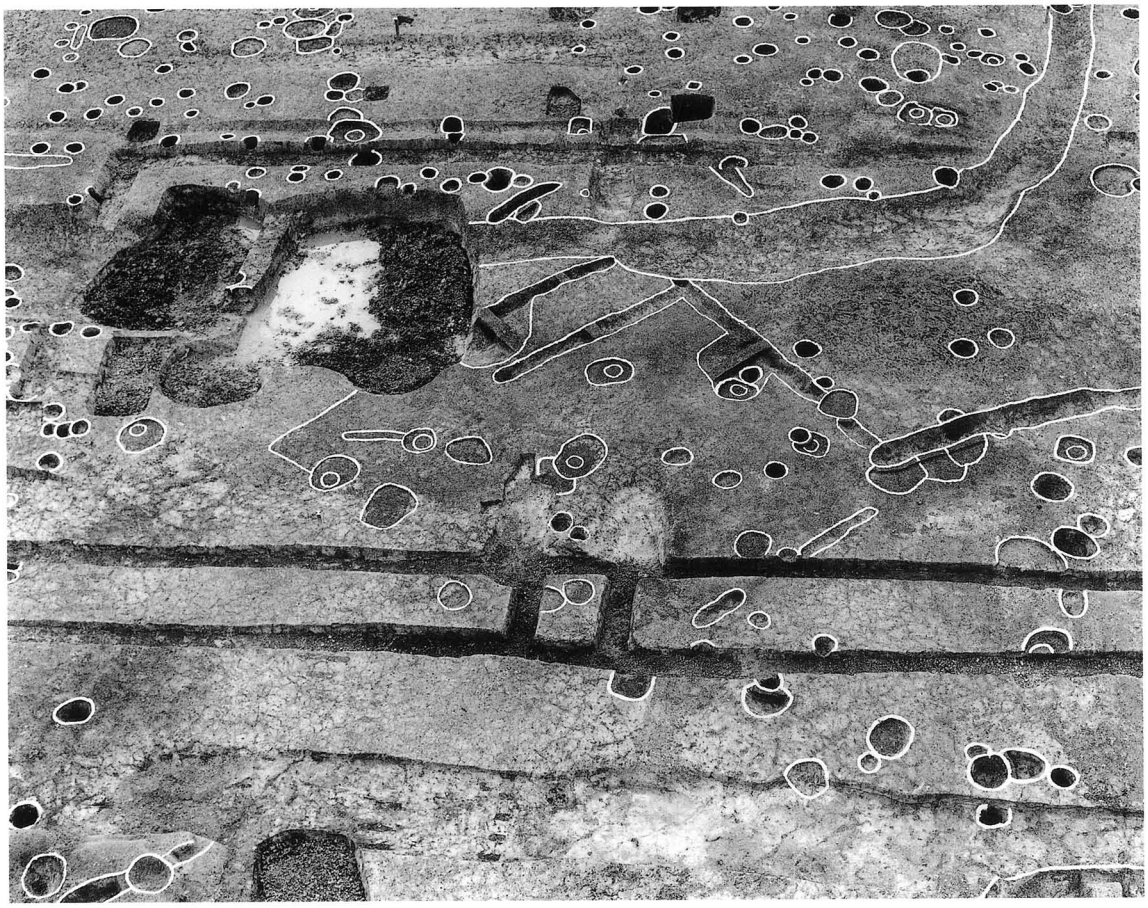
自然流路（北東から）

自然流路（北から）

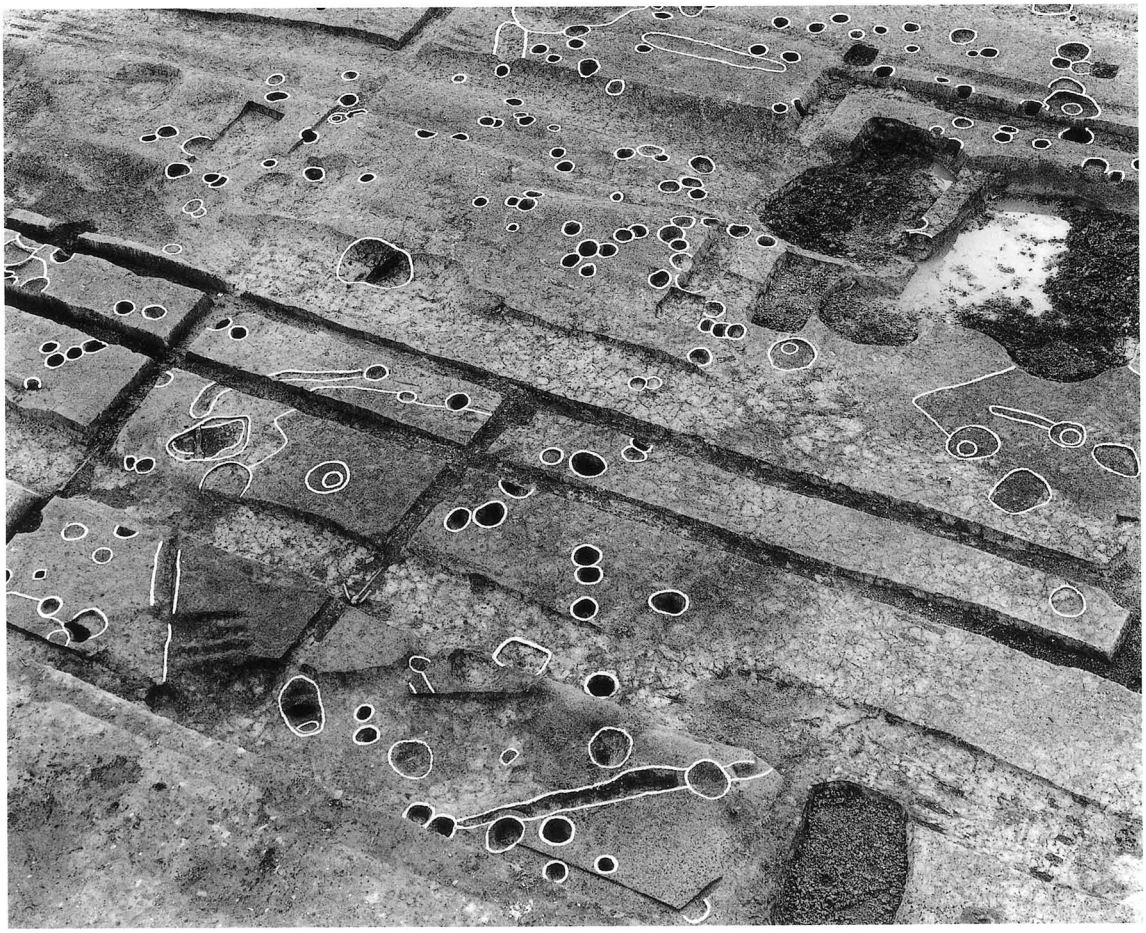
竪穴住居１号（東から）



竪穴住居２号・竪穴住居３号（西から）

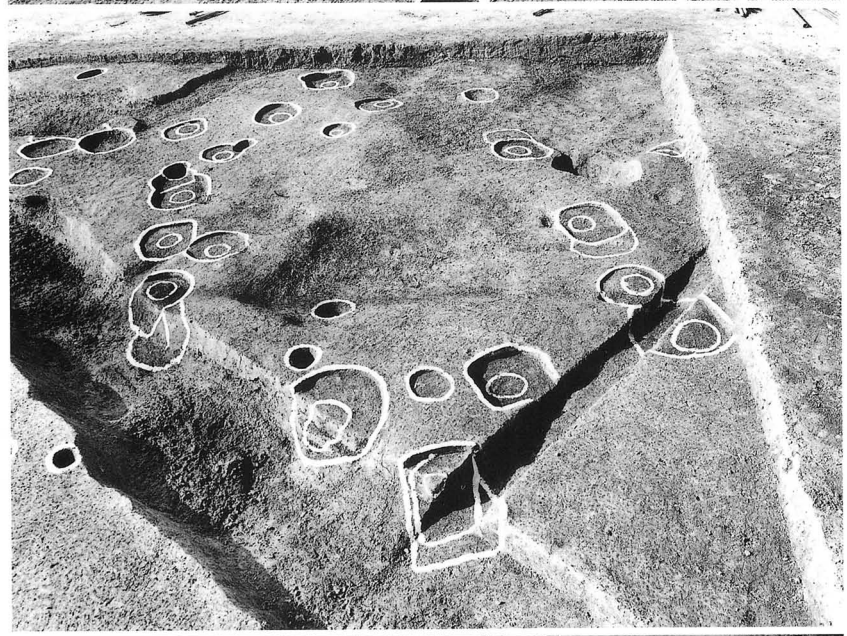


竪穴住居８号（北から）



竪穴住居９号（北から）

掘立柱建物25号（東から）



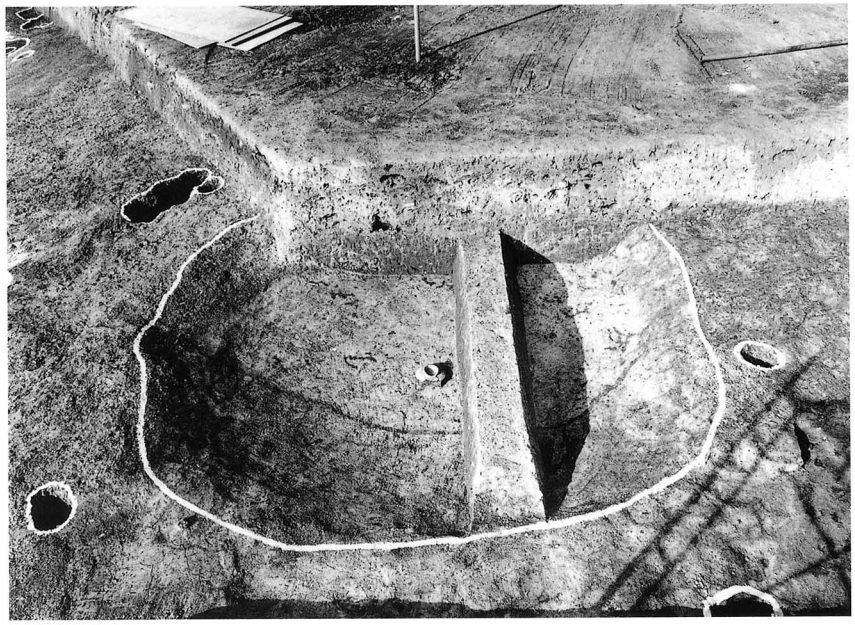
掘立柱建物22号（南から）

掘立柱建物26号（北から）

掘立柱建物30号（北から）

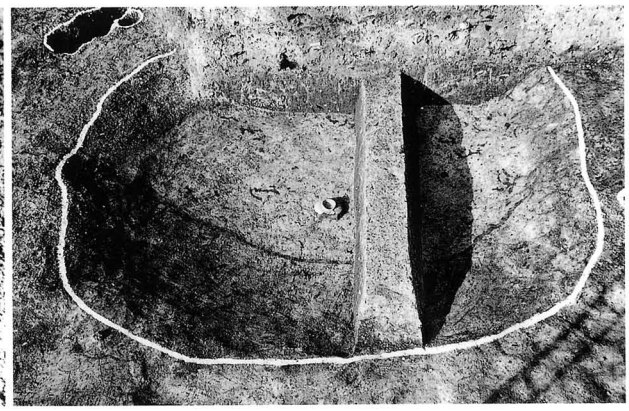
掘立柱建物28号（南から）

掘立柱建物27号（北から）

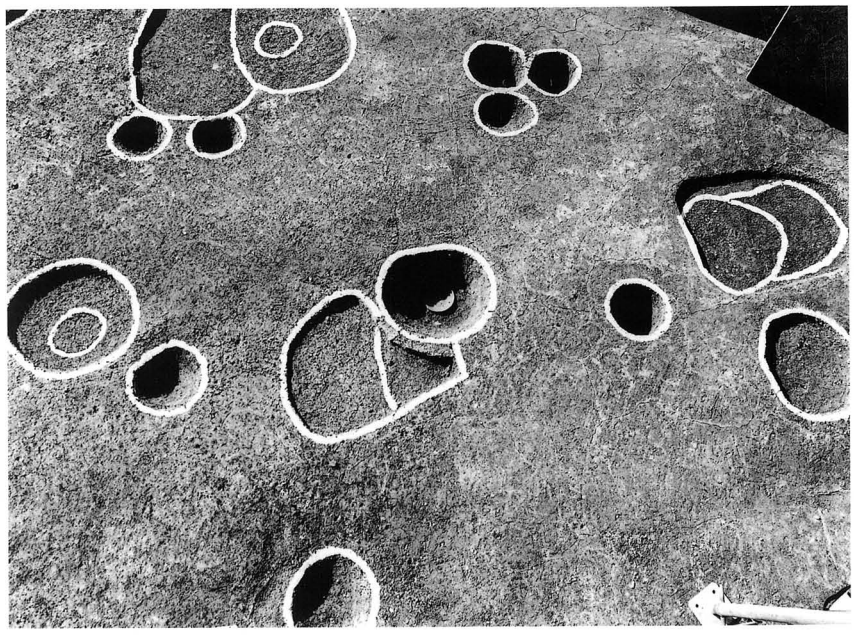


1582（南から）

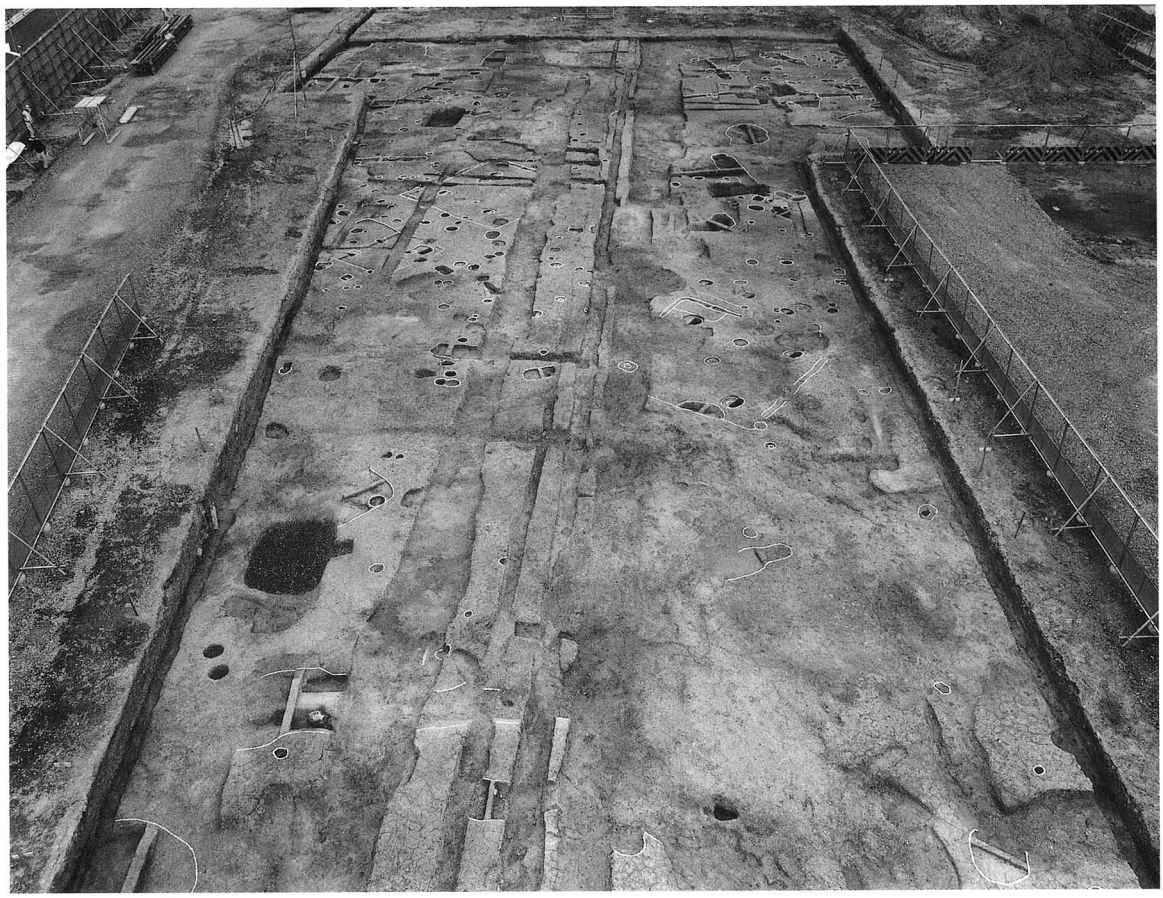
1582遺物出土状況



1582（南から）

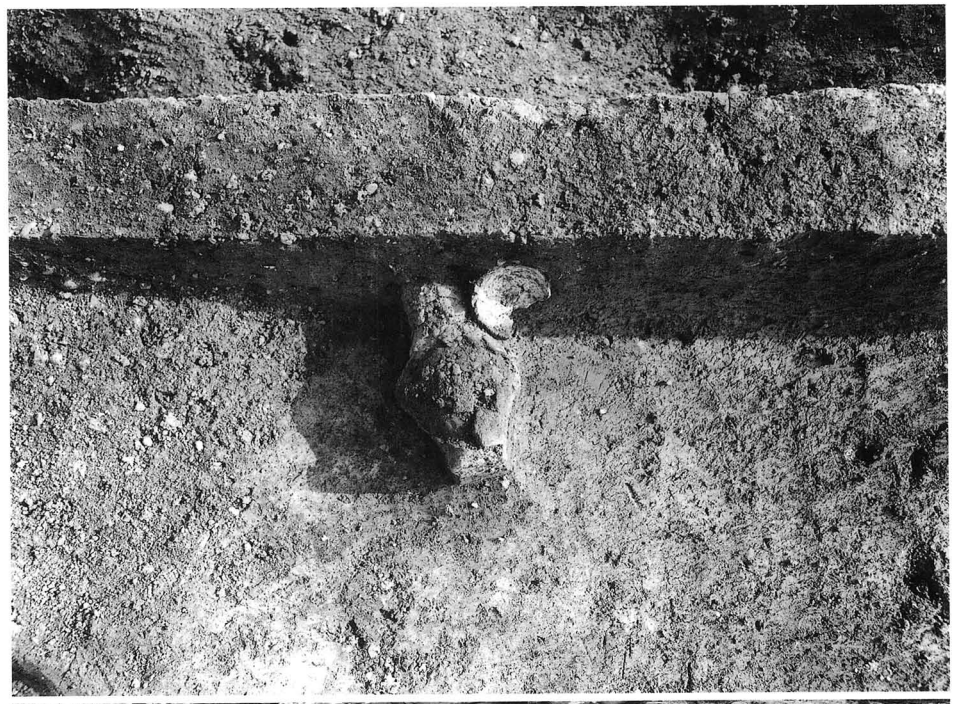


1320（上が西）



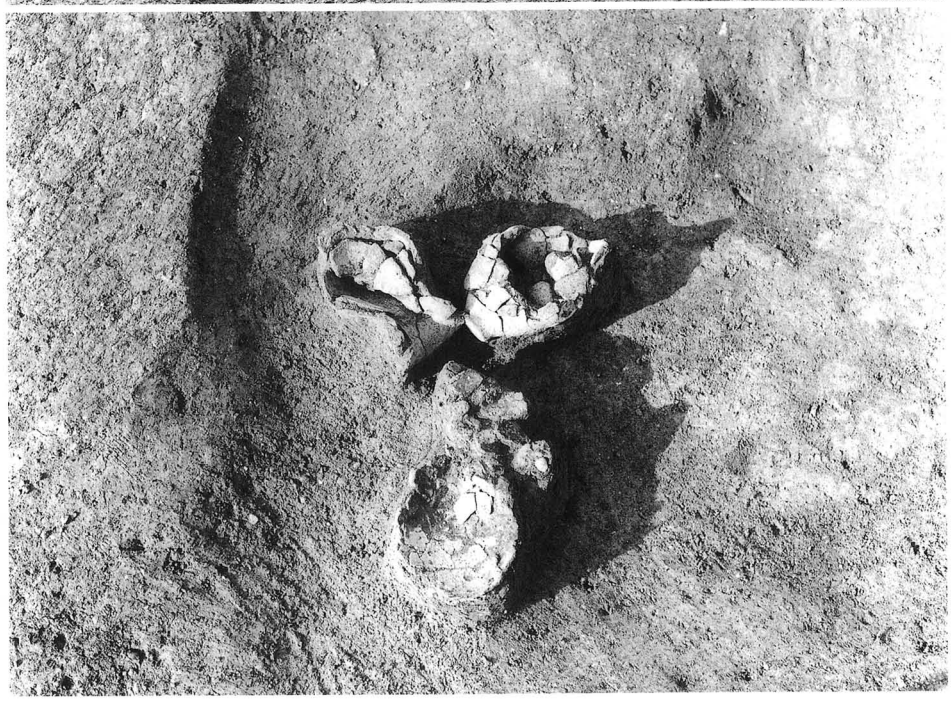
5区全景（西から）

6区全景（西から）



3（上が北）

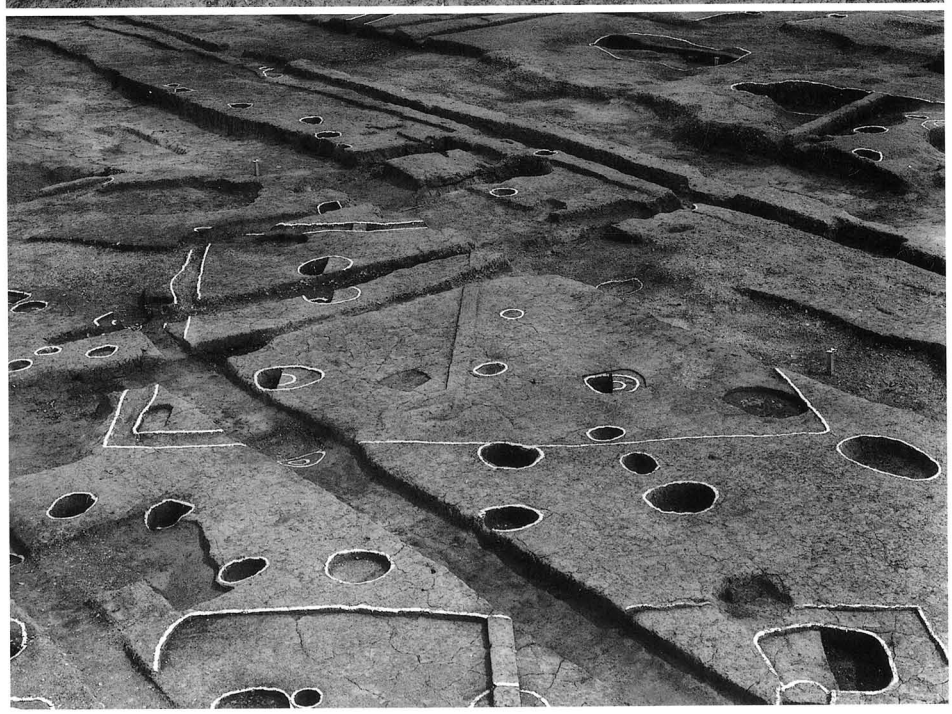
205（東から）



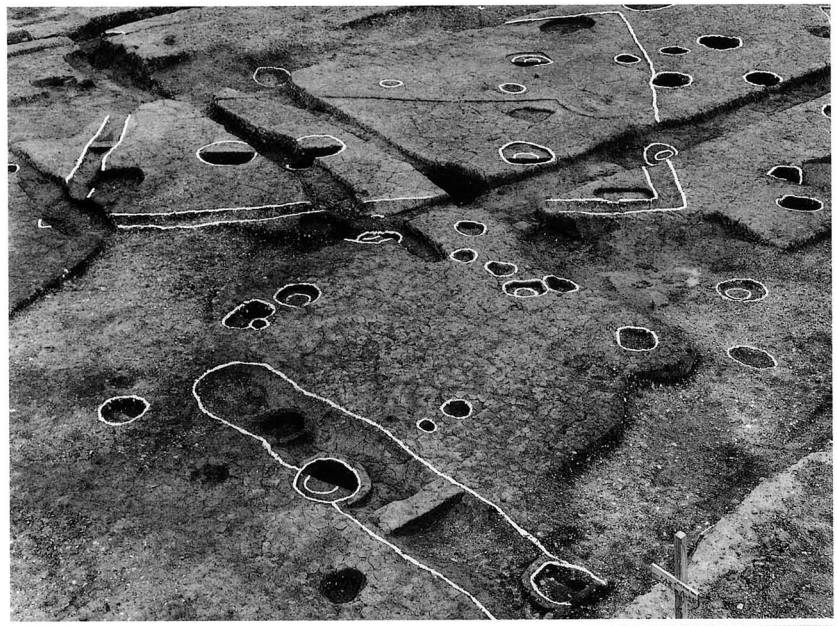
205遺物出土状況（上が北）

竪穴住居12号（北から）

竪穴住居12号（南から）



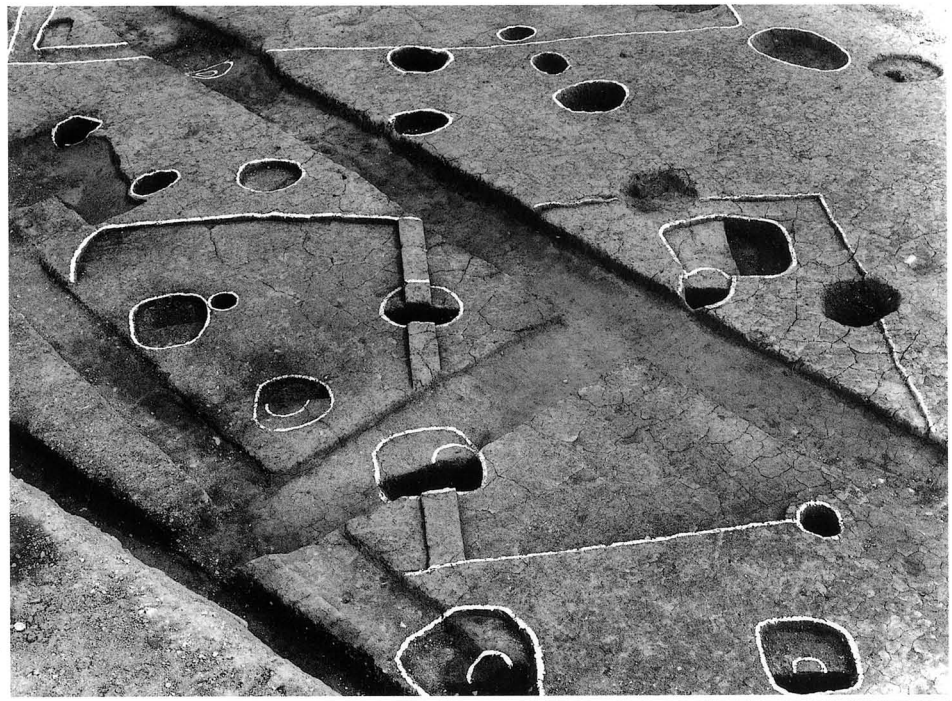
竪穴住居10号（北西から）



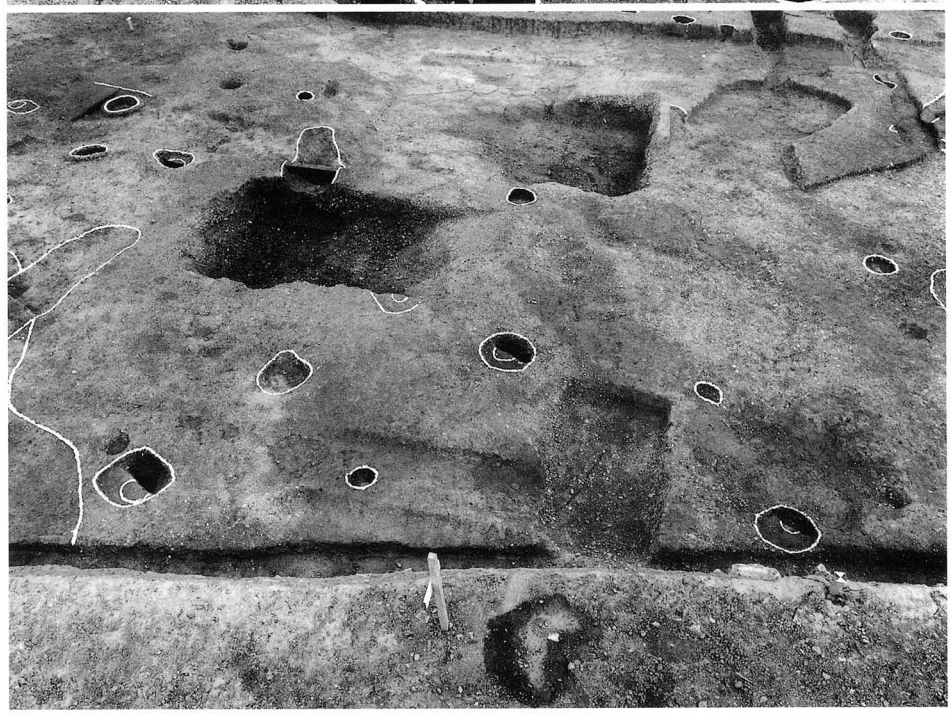
竪穴住居10号（北東から）

竪穴住居13号
竪穴住居14号
（北東から）

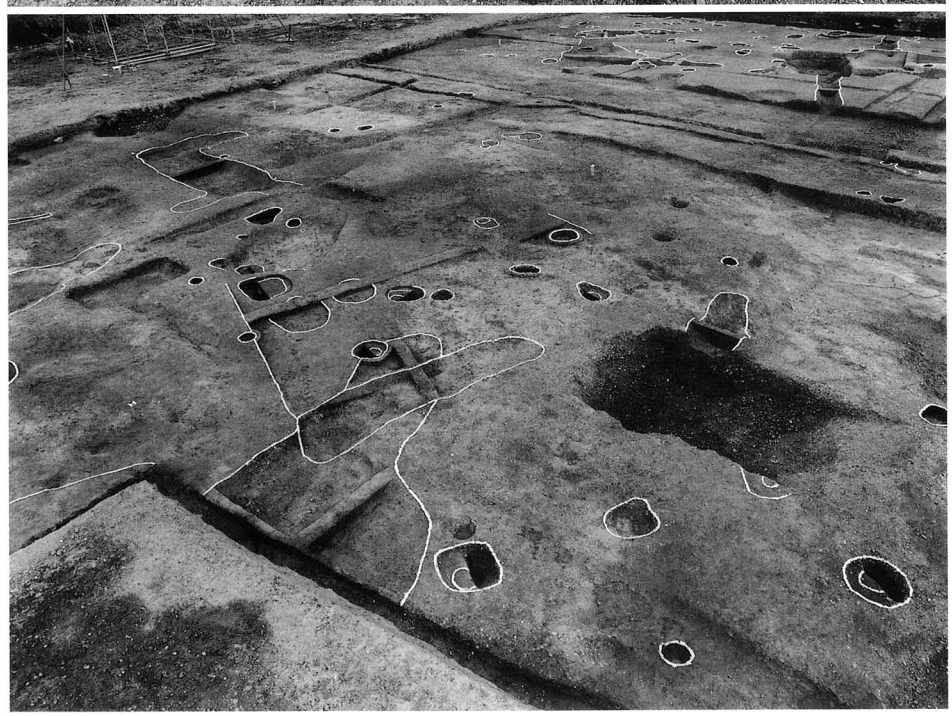
竪穴住居13号内413
遺物出土状況
（南東から）



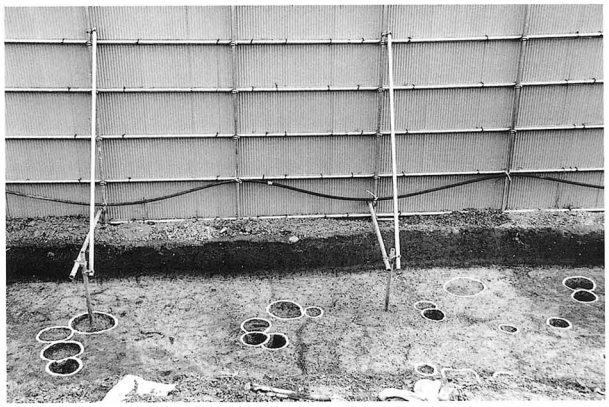
掘立柱建物36号
（北西から）



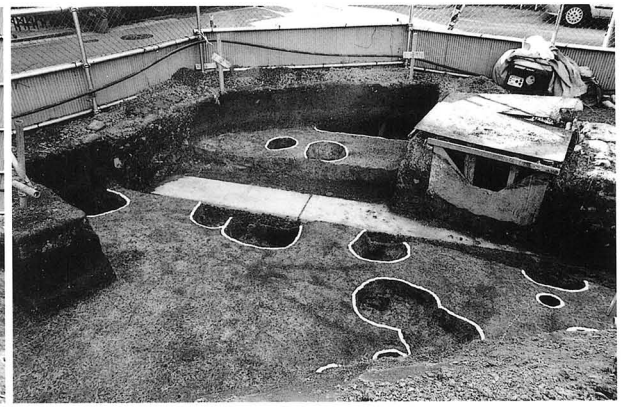
掘立柱建物38号
（北から）



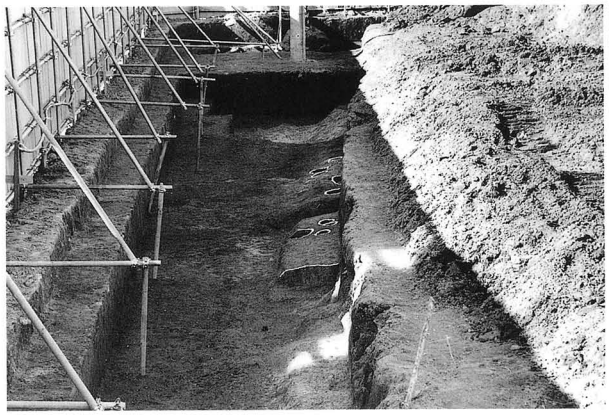
竪穴住居11号
掘立柱建物38号
（北西から）



7区（北から）

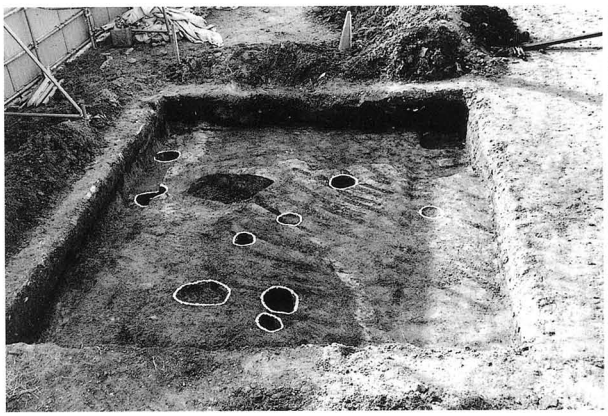


7区（東から）



8区（東から）

8区（東から）

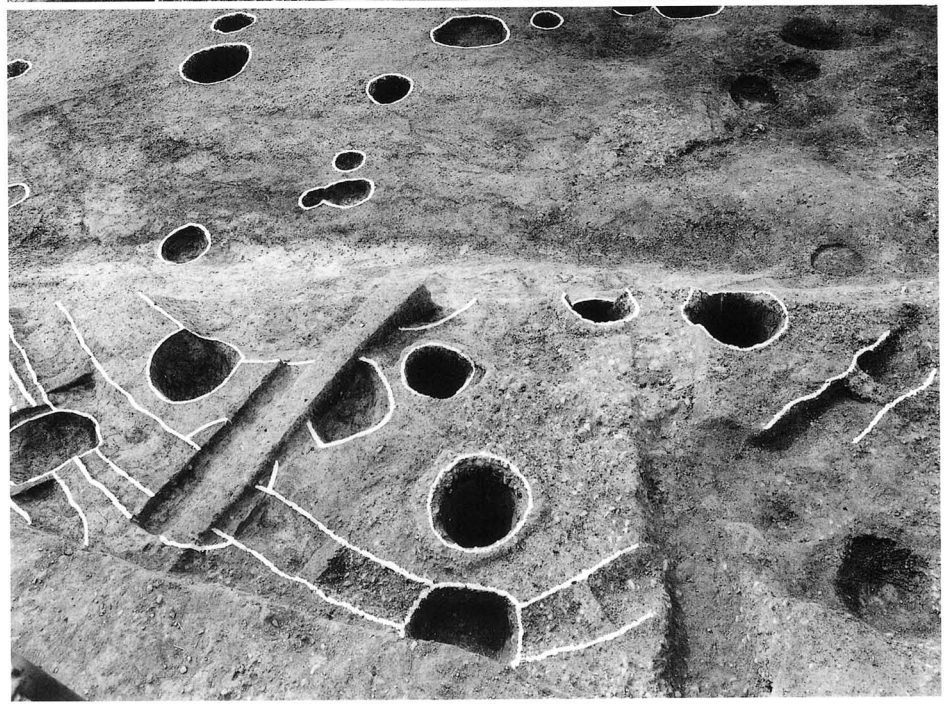


8区（東から）

9区（東から）

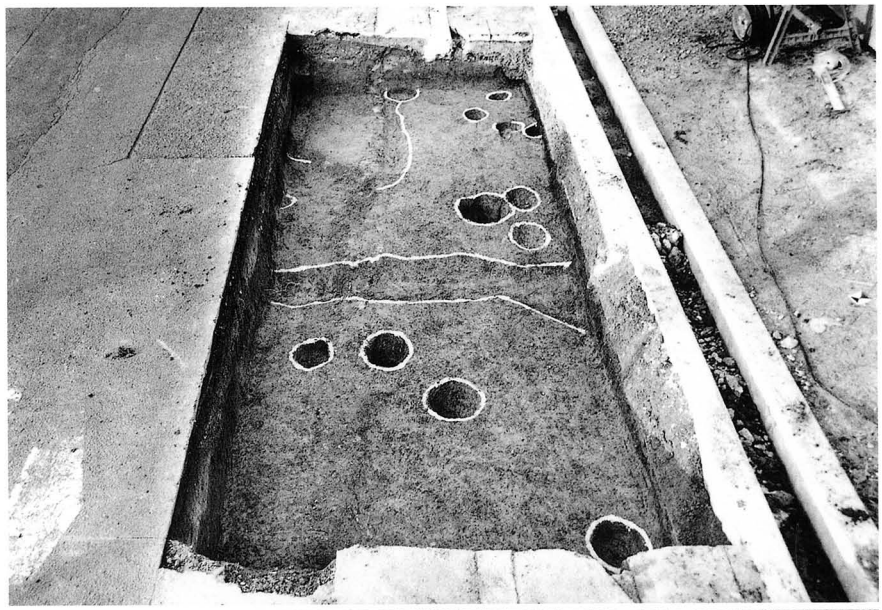
（西から）

掘立柱建物45号（東から）

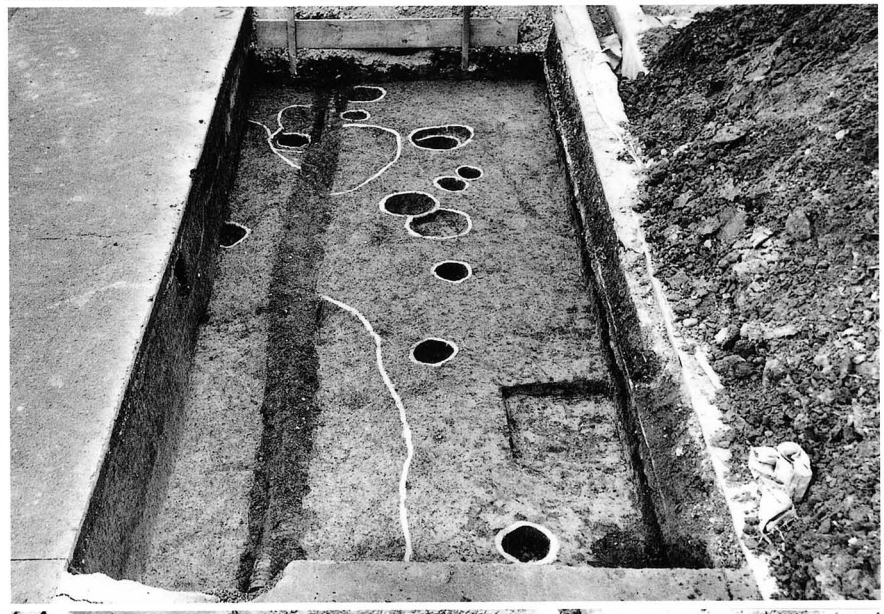


竪穴住居15号（南から）

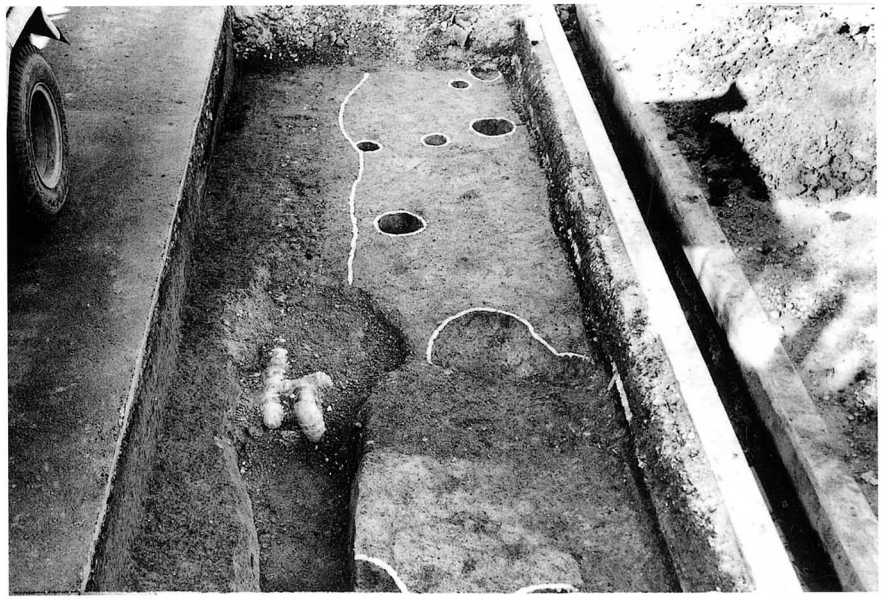
図版二三　10区全景



（南から）



（南から）



（南から）

4

9

6

10

19

12

7

4（2区、157）、6（4区、1074）、7（4区、2171）、9（5区、3）、10（5区、78）、12（6区、205）、19（4区、7号竪穴住居）

11

14

15

16

13

21

22

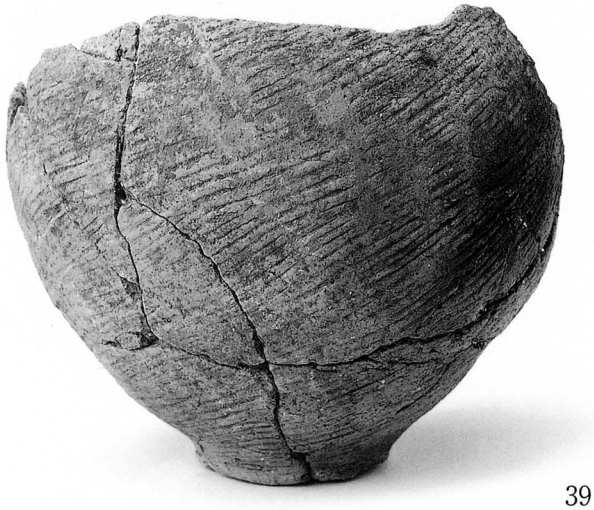
20

24

11（6区、205）、13（6区、293）、14～18（2区、4号竪穴住居）、20（5区、10号竪穴住居）、
21～24（6区、12号竪穴住居）

26

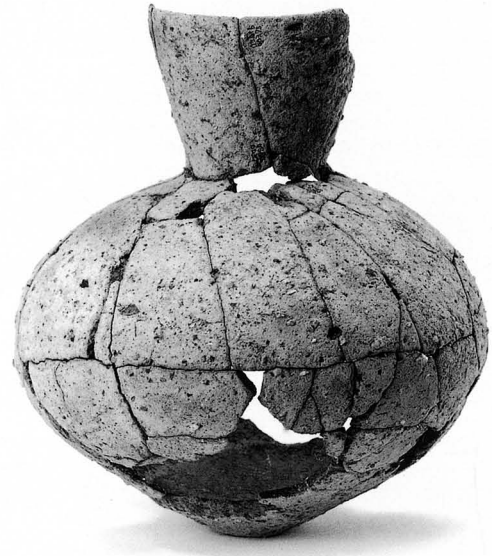
31



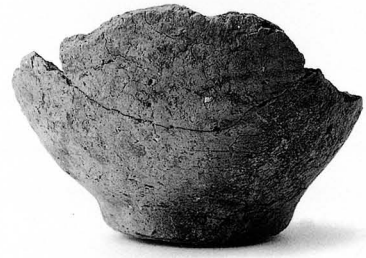
39

37

38



44



42

47

49

26（6区、12号竪穴住居）、31、37～39（6区、13号竪穴住居）、42、44（6区、14号竪穴住居）、
47、49（3区、590）

50

104

108

91

114

93

54

95

99

88

100

50（3区、727）、91（4区、31号掘立柱建物）、93（2区、175）、95（4区、1071）、99（4区、1232）、100（4区、1320）、104（4区、1494）、108（4区、1582）、114（4区、2169）、54、88（第3層）

132

132

133

133

135

135

134

134

139

139

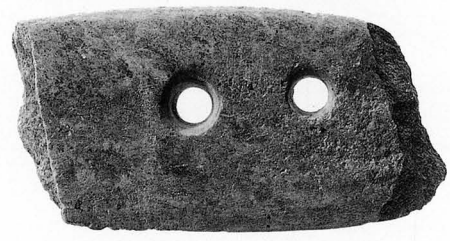
136

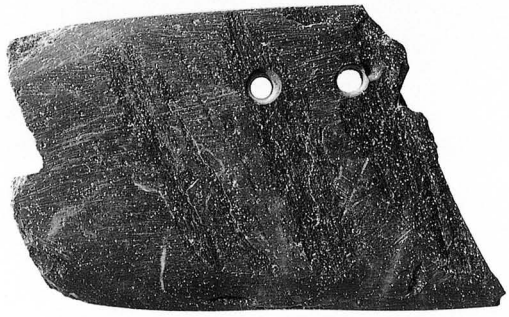
136

140

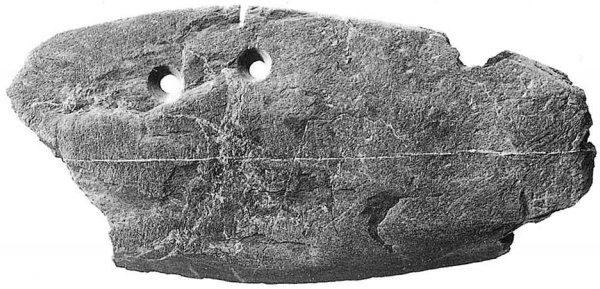
140

144


144


146

146



143

143

142

142

148

148

147

147

大阪府埋蔵文化財調査報告2004－1

招提中町遺跡・Ⅱ

発行日　2005年3月31日
発　行　大阪府教育委員会
〒540－8571
大阪市中央区大手前2丁目
TEL 06－6941－0351
印　刷　㈱近畿印刷センター
〒582－0001
柏原市本郷5丁目6－25